眉山全集

第四巻

博文館發行

眉山全集

第四巻



（明治三十六年撮影）

眉山全集

第四卷

目次

602

眉山全集

第四巻

新家庭

(一)窓の花

一

月は朧にもならず、花は姿に勝つて地に美しげな影を曳いた。日本造りの母屋に續いて、一棟前に突出した洋室の、窓は花に開放されて、高く低くヴアイオリンの音が、心行くべき此一時を、さながら歌ひ出すやうに中から起つた。春まだ早い宵の程。

マホガニーの卓子を中にして、いづれも湯上りの鮮や

かな色を、瓦斯の火影にあらはにして二人、芳子といふ若い此家の内室と、母方の從妹になる歌子といふのが、一人は樂器を、一人は歌を、節に連れて餘念もなく、芳子は何か微笑ましげに、歌子は少し上氣して微かに眼の縁を染めて、膝に持添へて居た半巾の、いつか手を離れて下に辷落ちさうになつたをも知らずに居た。

「や、味を遣るわい。ありや御秘藏の北の方だね。」

と折しも塀の外へ差掛つた、丈の高い鼠地格子の脊廣の紳士は、不圖聞耳を立てゝ、

「勿論當人は無意識で遣つて居るんだらうが、通掛りの者には些少思はせ振だね。」

「え、思はせ振？」

と異な言葉を聞咎めるやうに、連立つた黒の矢張脊廣扮裝の、稍年下なのが、持前の其男らしい凛々しげな眼を振上て言つた。相手は何か茶にしたやうに、

「いや、御秘藏に向つて、左樣な下卑た言葉は愼むべきかね。勿論これが、清元

常磐津、乃至新内などゝ言ふのぢやない。小唄浮かれ節などとは全然類を異にして居る。言ふまでもないグイと品性が高いのだ……。」
と何處かの酒の名殘らしい。猶も言捲らうとするのを、笑つて輕く
「最う止めたまへ。跡は聞かんでも可い。又例の冷かすのだらう。」
「怪しからん事を言ふ。誰が冷かすものか。苟も君の御秘藏ぢやないか。これでも少からず敬意を表して居るのだ。」
「はゝゝ、那樣敬意なら表されん方が幸福だ。第一口癖の其、御秘藏呼ばゝりが甚だ耳障りだ。何も土藏の奥へでも納込んで置きはしまいし、僕は最初から何處へも出して居る。」
「其代りに又何處へも隨いて行らつしやる。僕等は初手にや、ありや君ぢやあるまい、大方鴛鴦の精靈が、友人の小宮山に化けたんだらうと思つた位だ。はゝゝは、や、堪つたもんぢやなかつたよ。」
「ふむ、獨り者餘程羨ましかつたと見えるな。」
「はゝゝ、到頭窮した事を言出したな。いや今ぢやア少々馴れちや來たけれ

ど、あの當座は氣の毒ながら實に目も當てられなかつたよ。」

「はゝ、未だ那樣事を言つて見たいのかい。」

と互に戲れながら何時か表に小宮山とした點燈の見える、中古の冠木門の前へ出た。黑の脊廣の方の紳士は、一寸立止つて、

「何うだ。寄つて行かんかね。」

「や、有難いが併し、見せ付けられるのが恐ろしいからね。」

「餘り恐ろしがる方でもあるまい。まア一寸寄れ。え、脇屋。」

脇屋と言はれた相手の紳士は、其間に衣兜の時計を抽出して、度の強い眼鏡越しに一寸、蓋をはねて月の光に時間を見たが、

「然う。寄つても可いが何うも、御臺所の前ぢや然う毒舌も揮へんからな。」

「何も毒舌を道樂にせんでも可からうが。」

「いやこれが無いと、刺身に山葵が無いやうな心持がする。」

「はゝゝ、惡い病だ。まア兎に角寄れ。」

言ひながら先に立つて、衝と中へ入つて行つた。

二

脇屋は殘少になつた葉卷を捨てゝ、其儘跡に續いたが、庭に餘つた花の枝から、目を移して前の洋室の、瓦斯の光の華やかな、横手の窓を何心なく振仰いで、中の歌子の、火影に晴やかな横顔を不意と見た。

「や、客だね。」

「なに妻の從妹だ。君の事だ、少しも構はん。何うだい、あの中へ入つて行つては。」

と小宮山は微笑みながら振返る。

「はゝ、いよ〳〵毒舌禁止だな。可からう。割込みとしやう。」

「何故那樣下等な言葉を遣ふんだ。君は殊に處嫌はずだから驚く。」

「今更驚いたつて仕方がない。友人に持つたのを災難と思ふが可い。おい、何處へ行くのだ。」

「庭から直に廻らう。」

と脇の枝折戸を開けて先に進む。同時に曲は終りの音色を長く曳いて、何や

ら言つた芳子の聲と、歌子の笑聲が次いで聞えたが、其時中の二人も、近寄る足音を聞付けて、齊しく外へ目を注いだ。

芳子は逸早く、

「おや、」

と椅子を離れて庭に對つた窓際に差寄つた。途端に間近く、先に立つて來る良人と顔を見合せた。

「お歸り遊ばせ。まア庭から直に入らしつたんですか。」

「むゝ、今其處へ行くのだ。」

「やア、奥さん。」

と脇屋は背後から、眞黑な髭首を見せて、輕く會釋しながら、

「不時にお邪魔に來ました。なに今晩は寄る心算はなかつたのですがね、小宮山が何でも貴女の顔を見て行けといふものだから。」

「おほゝゝ、相變らずですのね。私の顔も、醜婦のモデルになら御職業の方のお役に立ちますよ。」

「いや、然う取られちや形無しだ。それぢや註釋をして上げますがね、全體小宮山が……。」

と言掛けるを、小宮山は遮つて早口に、

「おい、何を言つて居るんだい。談話は上つてからにするが可い。」

「はゝゝ、逃出すのか。然うだらう、跡を言はれちや困るだらうからな。」

「何が困るものか。那樣事はまア可い。兎に角上つてからにしやう。」

芳子は寄らず障らず、

「さア、何うぞ。」

と口を添へて、やがて身を返して、室から庭への出口の方へ迎へに行かうとした。歌子は知らぬ人の顏に、此方に控へて樣子を見て居たが、

「從姉さん。」

と傍へ寄つて小聲に、

「お客樣なら私お邪魔でしやうから、彼方へ行つて居ましやうか。」

と顏を差窺く。芳子は振返つて打消すやうに、

「いゝえ那樣遠慮の要る方ぢやないの。良人とは兄弟のやうにして居るのだから些少も構ひませんよ。無頓着で面白い方よ。それ、あの彼處に掛つて居る油繪ね、あれを描いた方よ。」

と右手の壁間に懸つて居る、見事な色彩の、河畔の夕陽の圖を指さした。

「まア、あの方が！」

と歌子は今更のやうに、ぱッちりした涼しげな眼を擧げて、繪のある方を見返つたが、思掛けぬやうに再び、

「まア。」

と言ふ。

「あれ何がまアなの。」

「でも然うなんですもの。」

「だから何が然うなんですよ。」

「おほゝゝゝ。」

「おほゝゝゝ。」

二人一度に笑出した。脇屋は、とも知らず小宮山と一處に入つて來たが、二人を見て無造作に、

「何を笑つて居ます。」

三

「なに今、貴方の事を話して居たのですよ。」

と芳子は人を知つて氣もかねずに言つた。脇屋は莞爾々々と、

「はァ惡口を、」

「はい、澤山。おほゝゝゝ。」

歌子は身を開いて、芳子の傍に引添つて居たが、流石目のあたり其人の前に少しきまりの惡い思入。顔を見合せると、愛想らしく面を和げて、優容に會釋した。

と見て芳子は、傍から口を添へて、

「私の從妹でございます。何うぞ私同樣にお心安く。」

「や、初めてお目に。」

と脇屋は進寄つて繕はぬ禮を返した。小宮山は笑ひながら、

「歌子さん、脇屋は這麼風でも美術家ですよ。御存知でしよう脇屋隆之助の名を。」

芳子が代つて脇から、

「歌子さんは最う知つて居ますよ。私が今話しましたから。」

「然うか。それは好いお手廻しだ。」

言ひながら椅子を引寄せる。脇屋は對合つて其方へ席を取つたが、

「おい、今君の言つた、美術家は可いが、這麼風とは何の事だい。」

「はゝゝ、少し穩やかでなかつたかね。併し其位の事に驚く君ぢやアあるまい。全體君は何う見ても美術家とは見えない。」

「むゝ、何に見える。」

「首だけ出して居た口にや、然うさ、山賊だね。」

「おほゝゝゝ。」

と芳子と歌子は、眼を見合せて笑出した。脇屋は心にも懸げず、同じく打笑つ

て、
「や、山賊とは酷い。はゝゝ、今夜は僕の株を君の方へ取られて了つたな。」
「取らなきや甚麽惡口を言出すか知れない。いつものやうに振廻されちや事だからと思つたからさ。歌子さんなぞは慣れないから屹度目を廻すだらう。」
「串戯ぢやない。何も知らない歌子さんは、僕が甚麽に口が惡いかと思ふだらうぢやないか。」
おほゝゝ、でも然う思つて居た方が安心でしやう。」
と芳子も弄り顔に口を挿入れた。
やッ、助太刀が出た。お仲の好い事だ。御夫婦萬歳を唱へやうか。」
「おほゝゝ、今夜は大層溫順くつて居らつしやる事。」
小宮山は窓越に、暫く庭を眺めて居たが、
「今夜は大分外が佳い。」と言つて振返つて、「何うだい、今夜は幸ひに、月がある。花がある。歌子さんも泊掛けに來て居る事だから、彼方の座敷へ行つて、皆で

何か一つ催さうぢやないか。」
「それは面白うございますね。」
と芳子は口を合せた。小宮山は目顔で指圖して、
「それぢやお前、彼方へ行つて席を拵へて、何か一寸支度してくれ。」
「はい。」
と芳子は心得顔に立上る。同時に歌子が、
「私もお手傳ひ致しまやう。」
「あれ、貴女は待つて居らつしやいよ。」
「いゝえ、動くのが好きなんですから。さア御一所に。」
と跡先に、やがて一處に室を出て行つた。脇屋は跡を見送つて、何か目に殘るものを追ふやうに見えたが、不意に、
「美人だ。」と言ふ。
「何だ。突如に。」
と小宮山は笑つて、顔を打目戍つた。

「いやさ美人だといふ事さ。」
「むゝ、併し最う主がある。」
「えッ主が?」
「むゝ、近い中に嫁付くのだ。實は其暇乞に妻の處へ遣つて來たのだ。」
「然うか。それりやア些少失望だな。」
「はゝゝ、失望といふと、何か望があつたのかい。」
「むゝ、無きにしもあらずだつたが。」
と微笑みながら、片頰を押撫でゝ
「併し矢張美人だ。」

(二) 仇矢

一

「お孃樣、今日は最う何處へも行らつしやいませんの。」

と奥の六疊の一室に、歌子が今脱替へた着物を、傍から手傳つて疊みながら、女中の八重といふ、中低ながら愛嬌のあるのが、一寸手を休めて不圖言出した。

「あゝ、最う皆廻つて了つたから。」

と歌子は片手を擧げて、落掛つた簪を挿込むと、櫛を拔いて、ほつれた鬢を搔上げながら、

「然うねえ。隨分能く出たわねえ。」

と譯もなく打笑ふ。八重は裏もなく、

「お孃樣が居らつしやらないと、私何ですか此頃は、急に淋しいやうな心持がして仕樣がありません。這麼風ぢや、彼方へお嫁でになつた跡は甚麼だらうと思ひますわ。然う言へばお孃樣とお呼申すのも最う僅かの間ですねえ。」

「まア、心細いやうな事を言ふぢやないか。先方へ行つたつてナニ、何時だつて遊びに來るわね。お前が那樣に思つておくれなら、お前に逢ふばかりに態態來るわ。」

「はア何うぞ。私樂みにしてお待申します。私も亦、御用を託にしては五月蠅いほど上りますわ。」

「屹度お出で。御馳走するわ。おほゝゝゝ。」

とそれ〳〵疊上げたのを片付ける。八重も手を貸して傍へ運んで行つたが、急に思出し顏に、

「お孃樣、私すつかり忘れて居ました。」

「え、何を。」

と打目戍る。さながら手柄のやうに、八重は調子を乘勢ませて、

「昨日春藤樣の處へお使に參りましたら、彼方へお婿樣がお見えになつて居ましたから、私他所ながらお目に掛りましたの。」

「まア、何だと思つたら、厭な、那樣……。」

八重は慌てゝ、

「いゝえ、然うぢやございませんよ。私ね、實は甚麽方かと存じて居りましたら、本當にまア御立派な、申分のない旦那樣でございましやう。私人事でないやうに嬉しかつたんですわ。」

「まア、何うして。」

「本當に恁う、胸がすくやうに思ひましたわ。外ぢやありません。私其時に、お、お孃樣は到頭、お向ふの竹井さんのお孃樣にお勝ちになすつた。と思ふと實にせい〳〵した心持になりましたの。」

「あれ何だね、勝つの負けるのなんて。」

八重は聞きも敢へず、

「まア何を仰有いますの。那麽に平素から張合つて居た方ぢやありませんか。些少ばかり身分が好いものだから、何時も此方を見下すやうにして、何彼に付けて見せ付けるやうな事をして、甚麽に厭な氣持をさせられたか知れやしません。女中までが一つになつて、好きな事を並べるのですもの。去年あ

ちらの方が先に御縁組が出來た時にも、蔭で此方の事を、緣遠いの、賣殘りだの、最う子持の處でなけりや行かれまいなんて、口から出放題の事を言つたんですもの。私一人で口惜しがつて居ましたが、今度こそ存分な復讐が出來ますわ。御身分なら、お家なら、第一旦那様が全で段違ひですわ。私嬉しまぎれに、彼處の女中のお豐さんを捉へて散々に言つて遣りました。」

と眞氣になつて言續けた。歌子は流石に、それとも言へず眉を顰めて、

「けれどもお前、餘り無暗な事を言つちや可けないぢやないか。私が吩咐けたとでも思はれちや困つて了ふ。」

「なに構ふものですか。先が先ですもの。私お蔭様で壽命が延びましたわ。」

「おほゝゝ、まア。」

言ふ時茶の室に母の聲て、

「歌や、比企さんがお出でだよ。」

「えッ、比企さん！」

と歌子の顏色は變つた。

「歌や。」

二

と續いて又母の聲。八重の手前も、耳を塞いでは居られないので歌子は返事と共に無據く立つたが、さも術なげの面持を、室を出るまでは隱されなかつた。」

比企といふのは、父の舊友の子で、早く兩親を失つて、叔父の手許に養はれて居たが、不幸な人で、其叔父にも死別れて、外に憑る處もなかつたので、一時家に來て居た事もある。それ以來獨立するやうになつてからも、殆んど親戚のやうに近しく出入りして居る。今はさる保險會社員、謙吉と言つて二十五になる。

歌子は縁を廻つて、言譯の急ぎ足に、呼ばれた茶の室の前へ出ると、心弱く先づ冷りとした。母の初枝の見るから元氣よさゝうな、未だ小皺一つ見せぬみづみづしさに引替へて、向ふに坐つて居た謙吉の、思做しか影も薄いやうに、尤も病氣だつたとは聞いて居たが、蒼く骨立つたのが急に目に立つて、掛けて居た羽織の上からも、顯はに見える肩の細りが、痛々しいやう。歌子は更に氣を打たれたが、強ひて何氣なく、入つていつもの親しげに、

「入らつしやいまし」

と少し前へ出て挨拶する。謙吉は固くなつて、心ならず視線を避けるやうに、

「はい。」

と口を重く、正的にも見ず、

「もつと早く出るのでしたが、何分寝て居たもんですから……」

「おゝ御病氣だつたさうですね。些少も知らないで居ましたの。つい今しがたでしたわ。江波さんが入らしつてお話しなすつたので、母も初めて知つたやうな事なんです。でも最うすッかり快くおなりなすつて？」

「いや充分とは行きませんがね、まア漸く恁うして出て來られる位にはなりました。」

「でもまア長くなくつて可ござんした事。然う言へばお痩せなすつたわねえ。」

と眉を寄せてぢッと見る。謙吉は淋しさうに笑つて、

「何の道好いもんぢやありませんよ。」

初枝は片脇の此爲に歌子を呼んだ、臺に載せた量高の祝物を見せて、

「歌や。お前、よくお禮を仰有い。比企さんがわざ〳〵心配して、這麼御丁寧な事をして下すつたよ。」

「まア、何うも。」

と歌子は氣の毒さうに、言知らぬ心地で丁寧に頭を下げた。謙吉は押止めて、

「何の。お禮などを仰有られては御挨拶も出來はしません。當家に對しては、這麼時こそ甚麼充分な事でもしなけりやならんのですから。」

初枝は機嫌よげに、

「いゝえ、本當に私から能くお禮を言ひます。今お言ひの事を聞かせたら良人も嘸喜ぶでしやう。比企さん、今度は貴方の番ですよ。早くねえ、恁うして祝はれるやうにして下さい。」

「私？　はゝゝゝ、私にや那樣事は有りやしません。」

「無いと言ふ事があるものですか。無くつて又濟むものぢやない。」

「いや私には別に考へがあります。」

初枝は取合はず、笑消して、
「那様事をお言ひなら、近い中に一人探して直に押付けて了ふ。
「恐らくそりやア徒勞でせう。」
「おほゝゝ、強情だ事ねえ。」
歌子は默つて只、謙吉に目を注いで居た。

三

謙吉は薄笑ひして、肉の落ちた頰の邊に猶更淋しい影を見せたが、暫くして、
「いや、全體私は初めから一人で居るやうに出來て居ますよ。親には早く別れて了ふ、たつた一人の叔父にも直に離れるやうな始末で、何處を向いても、自分の影法師より外に身に着いたものは無いやうな境遇で來たのですが、これが私の本來で、此先何處まで行つても矢張然うだらうと思つて居ますよ。」
初枝は態と言ふとばかり思つたので、聞くと笑つて了つて、
「おほゝゝゝ、何を言つてお出だか、勝手に一人で決めるにしても、那様一人決めをする事があるものですか。今の若さに何うしたのですよ。確りなさい。

大方病氣の所爲でしやう。最う些少元氣をお出しなさい。未だ鹽梅が本當に快くならないのですよ。」

「なに、こりやァ身體の加減なぞぢやァ有りません。」

「え、それぢや何なの。」

「私の宿命です。」

初枝は其言葉が解しかねたと見えて、一寸眉を寄せて、

「宿命？」

謙吉は心付いて直に言直した。

「なに、定つた廻合せなんです。」

「おほゝゝ、まア、貴方でもない。那樣ものが身に着いて誰にも有るものですか。皆自分で拵へるんですよ。それも力に及ばないといふ事でゞもあるならば、那樣心が何うかして出るかも知れないけれど、今の貴方の事なんぞは、貴方が醉興で言つてお出だとしか思はれやしません。」

「いや決して醉興ぢやありません。」

「まア、」

と初枝は呆れ顔に、思はずぢッと打目戍つてたが、

「酔興でなくつて何でしやう。何も面倒な事はないぢやありませんか。さア言へば何処にでも有ります。一人家へ入れたら、それで最う済むぢやありませんか。何を好んで独身で居る事が有るでしやう。ねえ、それが酔興でなけりや何ですえ。」

謙吉はよくも聞かぬ態で、笑つて態とらしく、

「仕方がない。それぢや矢張酔興といふ事にして置きましやう。」

初枝は押返して、

「置くばかりぢや仕様が有りません。直にも一人お貰ひなさいよ。私がお世話しますよ。」

「いや、そりやア御免を蒙りましやう。」

「何故ね。」

「折角世話をして戴いて、徒労になつちや仕様がありませんから。」

「まア、何故徒勞になるでせう。私にや何うも解らないね。」

謙吉は投げたやうに、

「仕樣がありません。心配して下さるだけが徒勞ですよ。」

初枝は詮方なげに、

「本當に何うしたといふのだらう。困り者だねえ。」

脇の歌子を見返つて、

「歌や、比企さんが那麽事をお言ひだよ。私にや譯が解らないが、お前は何う思ひだえ。」

歌子は問はれずもがなと思つたが、答へぬ譯には行かないので、

「然うですねえ。私にも解りませんわ。」

と言つたが不意と、

「何でしやう比企さんは、屹度最う決めて居る方があつて、態と那麽事を言つて居らつしやるんでしやう。」

「おほゝゝ、然うかも知れないね。比企さん、然うですかえ。」

と初枝は笑つて見返つた。

四

謙吉は莞爾ともせず、ぢろりと一目、瞳に刺すやうな光を見せて、歌子の方を尻目に掛けたが、ぶッつり、接穗もなく、

「那樣のも有るには有りました。」

「え、」

と思掛けぬ返事に、初枝は一寸言葉を躓かせたが、

「まア、誰? それは」

と興ありげに、稍〻調子付いて、

「さア、貴方の好きなのといふのは誰でしやう。」

と獨語のやうに言つて、微笑みながら小首を傾けた。謙吉は目を擧げたが、膠もなく、

「いや、それは最う死んで了ひましたよ。」

「えッ、亡くなつて…………。」

と又も、意外な言葉に目を瞬つたが、其儘首肯いて、

「あゝ何ですね、それぢや其の方に情を立てゝ、一人で居るとお言ひなんですね。」

謙吉は苦笑ひして、

「はゝゝ、なァに那樣情を立てた處で何になりましやう。先ぢや全ッきり知りもしなかつたのです。」

「え、それぢや今は最う別に心が殘つてお出といふぢやないのですか。」

「さア何ういふもんでしやうね。殘したら何うなりましやう。」

「えッ、何うなるとは？」

「いや止しましやう。今更何うした處が初まらない。這麼事を愚圖々々言つて居るのが落なんでしやう。」

初枝は最早、口を開かうともせず、其儘顏を見詰めたのみで居たが、それなり歌子に、

「ねえ、歌、比企さんは今日は餘ッ程何うかしてお出だよ。」

「然うですねえ。本當に何うなすつたんでしやう。」
謙吉は嘲けるやうに一言、
「矢張死目が近寄つたのでしやうよ。」
初枝は聲を打つて、
「まア、何をお言ひなの。串戲ぢやありませんよ。言ふことに事を缺いて那樣厭な言葉を…………。」
歌子は取支顏に衝と、
「あれ、阿母樣、比企さんは矢張御病氣の所爲で那麼事を仰有るんですよ。解つて居るぢやありませんか。何でも有りやしませんわ。」
「でもね、餘り變な事ばかりお言ひだから…………。」
謙吉も流石に身を振返つたらしく、
「や、濟みませんでした。折角身祝ひをしてお出なさる中へ、不吉の言葉は愼まんけりやならんのでした。私も這麼事をお話申しに來たのぢやないのですが、仰有る通り病氣の所爲でしやう。實は明日、醫師の勸めで轉地療養に出

ますから、お祝ひかた〳〵一寸お暇乞に出たのですよ。」
「おや然う明日、」と初枝も別に何うしたといふ事もないので、直に色を解いて、
「まア何より身體が大事ですからね、精々養生して一日も早く元の通りになつて下さい。」
歌子も連れて物優しく、
「本當にお大事になすつて下さい。今しがたのやうな心細い事を仰有ると、何だか案じられて仕樣がありませんわ。」
謙吉は面を上げて直と見た。
「えッ、歌子さんが案じて下さる？」
「はい。勿論ですわ。」
「や、御親切な事で。そればかりでも直に回復しましやう。」
と何だか鼻の先で言つて居るやうに聞えた。歌子は言知らず忌々しいやうに思つたが、色には流石見せず併し返事はしなかつた。

（三）春愁

一

歸るかと思ふと然うでもなく、談話も冴えないのに却々立たうともしない。居るほど氣を惡くするばかりなので、歌子は其中に席を外して、跡を母に任せて奥の自分の室へ入つて了つた。

ほッと息して、膝を支いて下に坐ると、身動きもせず稍々暫く、松を流れて燈籠の肩に、柔かに射す春の日影を、濟まない顔でぢッと見詰めて居たが、不意に立つて縁へ出て、室の背後に下の庭へ出やうとした。其時、恰も跡を慕つて來たやうに、

「歌子さん。」

「おや。」

と振返つて、人前だけの笑顔は見せたが、はッと思ふと、胸は時ならず、俄かに騒立つた、其處の廻縁の角に、今茶の室から、つか／＼と來た謙吉の、髪の延びた、瘠

せた、血色のない顏が衝と現はれたのであつた。

思はず、

「母は？

と開いた。謙吉は顎で一寸、

「今座敷の方へ。何ですお客です

と切れ〳〵に言つて脇へ來た。壁を隔てゝ二室ばかり、彼方の樣子は知らなかつたが、然う言へば今しがた、誰か又來たやうに思つた。母はその方へ、あ、惡い時に。と思ひながら、それとも言はれず、

「まア失禮でしたのね。些少知らなかつたもんですからお相手もしなくつて。」

謙吉は僅かに笑つて、

「なに、たつた今の事です。」

と言つたが、心ない態で、出端を惡く、

「歌子さん、私貴女に少しお談話したい事があります。」

「え、お談話？」
と素知らぬ顔で振仰いだが、何か奥に思込んで居るやうな、只ならぬ謙吉の眼色を見ると、竦然として稍退避ぐ氣味に、
「何か御用なんですか。」
と安からず聞く。
「はい、一寸。」
と室へ入つて小脇に座を取つて、
「甚だ何ですが坐つて下さい。此處で聞いて戴きましやう、」
歌子は無據く坐つたが、顔を見て、態と罪なげに笑出した。
「お談話ッて、まア何ですの。妙に改つて、何だか可笑しいわ。」
謙吉はぢッと見て、
「いや串戯ぢやありません。暫く眞面目に聞いて戴きたい。」
「おほゝゝ、ついぞない。何だか餘り變ぢやありませんか。私厭、彼方へ參りますよ。」

謙吉は言ふまでもなく押止めた。

「いや、待つて下さい。私はこれ限り再び云ふ事はない。實は最う言ふまいと思つて居たんですが、言はないでは何うにも居られないので、一言聞いて戴かうといふのです。何うぞ下に居て下さい。」

歌子は飽まで知らぬ顔で、

「何ですか私でなくつちや解らない事なんですの。」

「勿論、貴女の事ですから。」

「え、私の事？　何だらう。尚怪訝しいわ。今日は本當に貴方は餘ッ程何うかして居らつしやる。」

謙吉は膝を進めて屹となつた。

「然うです。何うかして居ます。貴女は併し其譯を知つて居らつしやる。知らない振はして居らつしやるが、能く知つて居らつしやる。」

「まア、那様無理な事を仰有つても、私にや知りやうが無いぢやありませんか。」

「いゝや、然うは言はせません。能く知つて居らつしやる。」

と言葉を急しく前に詰寄つた。

二

歌子は驚いて跡へ、思はず身を避けるやうにして、隱されぬ恐怖の色を、目顏に其儘聲を亂して

「貴方まア何うなすつたの。」

言はれてはッとした氣勢で、謙吉は我に返つて急に色を和げて、

「や、激して居るものだからつい言過しました。知らないと言はれゝば其迄で、貴女を責める處は少しも無いが、それぎりで何うする事も出來ない私の身にもなつて見て下さい。これが今日初つた事ぢやないのです。長い間に私は全で知られなかつたとは何うしても思はれない。此眼が間違つて居なければ、繰返して言ふやうですが、貴女は確かに知つて居らしつた。」

歌子は差當つて挨拶に困つた。それと言へば無情に聞える、言はねば矢張僞はらねばならぬ。見詰められて羞明しさうに、伏目になつて言淀みながら、

「でも私には、何の事ですか解りませんもの。那樣に仰有られると私何と言

つて可いのだか全く困つて了ひますわ。知るの知らないのと言つて貴方何も仰有らないで……。」

「あゝ、それぢや貴女は、私の口から言はせやうといふのですか。酷い。知つて居ながら言はせるのは餘りに酷い。殊に今貴女の身は餘所に最う定まつて居る場合、私にそれまで言はせるのは罪ぢやありませんか。」

「……。」

「歌子さん、」

と謙吉は吐息ついて、

「私は實に何年越、貴女の爲に一人胸を苦めて居ました。當の貴女にさへも笑はれるでしやうが、殆んど寢食をも忘れる位、貴女の事ばかりを思つて居たのでした。

歌子さん貴女は今迄に、それを思合はして下さる事は、一度もありませんでしたか。」

歌子は思切つて、屹と目を擧げた。

「まア貴方、那樣事を私に………。」

「え？」

「外の事とばかり思つて居しまたが、那樣お談話なら私、伺ふ事は出來ません。何うぞ最うこれぎりになすつて下さい。」

「や、貴女は此場合を全で察しちや下さらない。私は今、脇から見て居るばかりで手も出されない立場に居るのです。腹を立てやうにも立てられず、怨むにも怨まれない身といふ事を、少しは察して見て下すつても可いでしやう。」

「ですが貴女も、私に那樣お談話が出來るか出來ないか、能くお考へなすつて下さいまし。第一那樣事を伺つた上で、恁うして貴方と、たゞ二人て居ますのも、何だか背後が見られるやうな心持がします。御免下さい。私最う其事なら伺ひませんから。」

言ふ間に最う立掛けた。貴方が何う思召して居らつしやらうと、それは貴方の御勝手で、私の存じた事ぢやございません。とずッきり言はうとしたが、流石それまでは、言はず、何處やら其中にも、這麽事を言ふやうな場合になつたの

を悲しいやうに思つた。謙吉は慌たゞしく、
「や、一寸。私は未だ、全でお談話もしやしない。」
「いゝえ、私は最う……。」
と立つて擦拔けるやうに、室を跡にして緣をはた〳〵と、柱の蔭に袂の端が閃めいたと思ふと、彼方に聽て聲を高く、
「八重、八重。」
謙吉は言ふ事も知らず一人跡に取殘されて居た。

三

呼ばれて八重は臺所から、手繦を外して急がはしげに入つて來た。歌子は只謙吉を避けるばかりに、跡先もなく呼立てたので、來られて用のないのに驚いたが、圓めて片手に持つて居た手繦を見て、咄嗟に、
「おやお前、何かしてお出だつたの。」
「いえ最う濟んだのでございます。御用は？」
「いえ、なにね、一寸お前に聞かうと思つたから。誰方？座敷のお客樣は。」

「あの杉岡さんの御隱居樣でございますよ。」

「然う。お一人で。」

「はい。何か此方の御地所を借りてお家を建てるとかいふやうなお談話をしてお出でした。」

と言つて四邊を見て、

「おや。比企樣は？」

と訝がしげに聞く。歌子は何とも付かず只緣の方を指さして、

「今彼方へ行らしつたよ。」

「おや然うでございますか。私は又此處でお孃樣とお談話してお出なさる事とばかり思つて居りました。」

歌子は未だ落付かず、奥の謙吉の方に何かと氣を取られて、八重の言葉も半ばは耳に入らぬやうに、

「八重、お前用がなければ此處に居ておくれでないか。」

「はい。何か……」

「なにね。」

と流石明らさまに言ひかねて、少し行詰つたが、

「私ッきりだとね、比企さんが今度の縁談の事でね、種々な事を言つて調戯つて仕樣がないからさ。」

八重は笑つて罪もなく、

「おほゝゝ、可いぢやございませんか。先が調戯つて居らしつたら貴女も負けない氣になつて言返してお上げなされば。」

「だからさ、お前に居ておくれと言ふのだよ。」

「ほゝゝ、お味方にですか。」

「然うさ。私一人ぢや男の方には敵はないもの。」

「宜しうございます。私なら何でも言つて上げますわ。」

「本當にお前なら、比企さんが三人居ても大丈夫よ。」

「おほゝゝ、まさか。」

歌子は其間も、心ならぬ姿で、殘して來て了つた謙吉は、何をして居るのだらう

と思つた。先刻は前に居るのが心苦しいので、思はぬ無情い事を言つて座を立つて了つたが、外に言ひやうも、出やうも未だ有つたものをと人知れず悔出した。せめて此氣の毒がつて居る心を、少しでも知らせたら可かつたと思つたけれども、那樣事を私の口から何うして言はれやうと又思ふ。とつおいつ坐つて居る心地もしなかつたが、今更行く事も出來ず、無據く下に居る。

暫く其儘に經つたが、謙吉は出て來ない。八重も怪み出して、

「然う言へば比企さんは那方へ行らしつたんでしやう。」

「大方庭へでもお出なすつたんだらうよ。」

「然うでしやうか。」

と伸上つて庭の方を見廻した。途端に緣の彼方から、さながら墓の中から出て來たやうに、謙吉は其蒼白めた顏を一層蒼く、迫つた眉に、窪んだ眼を据ゑて沈返つた姿で入つて來た。

八重は吃驚して振仰いだが、久しい馴染の愛想らしく、

「まア、那方へ行つて居らつしやいましたの。」

四

言つたが耳にも入れず、中に二人の居るのも、殆んど知らぬやうに、謙吉は衝と脇を通拔けたが、室の中頃まで來ると、横向きに立つたまゝで、不意に、

「歌子さん、私歸りますから、阿母樣に宜しく後で。」

言捨てゝ直ぐに行かうとした。八重は目を圓くして、呆氣に取られたやうに脇から横顏を見詰めた。歌子は今、物を言ふのも何か氣が咎めるやうに、

「あれ、お歸りなさるの最う。」

とばかりで跡も續けられなかつたが、

「まア宜しいぢやございませんか。父も最う歸つて來ましやうから。」

と言つて不意と、這麼事を言ふだけ却つて、氣持を惡くさせはしないか。と思つて口を噤んで了つた。謙吉は見返りもせず、

「いや又……。」

と言つて詫しげに出て行つた。歌子は氣の濟まぬ顏で、跡から見送りに立つたが、これぎり謙吉は、再び最う來ないだらうと思ふと、窶れた病上りの姿も、伸

びて亂勝ちになつた蓬々とした髮も、見るほど瘦せすがれた血の氣のない面色も、犇と眼に迫るやうに覺えて、見て居る中にも氣の毒な思が、更に深く身を衝いて來るやうに思つた。一言、せめて一言、何とか言慰める言葉でも、と胸には樣々に思つたが、口には何も出ず、と見る中に、謙吉は最う玄關を降りて、餘所餘所しい、式ばかりの挨拶をして、軈て歸つて行く。

歌子は入るのも忘れて、こつ〳〵と門を出て行く淋しげな後姿を、見えずなるまでぢッと見送つて居たが、影が無くなつてからも、尚離れやうともせず、茫然として立つて居た。

「お孃樣、比企さんは何うかなすたんぢやないのですか。」

と八重は腑に落ちぬ顏を其儘に聞く。歌子は漸くに障子を引立てゝ、

「然う。餘ッ程變ねえ。」

とばかり引返して、茶の室にやがて八重と分れて、一人奧の、自分の室へ入つて行つた。

重い、壓付けられたやうな心持で投げるやうに其處へ坐込んだが、不意と脇の

机の上に目を留めてはッとした。覺えのない手紙が一通、知らぬ間に窃と載せてある。

歌子は胸を轟かして、急がはしく手に取つた。見ると謙吉が、先刻一人取殘されて居た間に書いて行つたのであつた。

驚く色と、騒ぐ心と、一つに暫く亂合つたが、何を憚つてか急に四邊を見廻して、ぽッと上氣した顏を下に、繰擴げて讀出した時、美しい手の先は少し顫へて居るやうに見えた。有合ふ紙に走り書の字體も亂勝ちに其時の有様を忍ばせるばかりで、生きて動ぐやうに、謙吉は長の歳月の、口で言はれぬ切なる思を有りの儘に書込めた。自分は最う望も何も無い。暗い穴の底へ突落されて了つたのである。今度の事にも、指さへさす事の出來ぬ身を憐れと思つて、係ういふ者があつたといふ事を、せめて記憶にだけも殘して置いてくれ。と思餘つた筆の跡。

歌子は讀終つて、暫く差俯向いた儘、身動きもせずに居た。

「けれども仕方がない。」

と稍あつて吐息ついて、私の所爲ぢやないんだもの。と強ひて思つて見たが、今の別れ際の其面影が、未だ目を離れず、前に浮んだやうに見えたので、はッと思はず立上つて、紛らすやうに窓の外を見ると、此處にも花に春の日影、色は深かつたが、歌子は見る目もなく、風に物悲しげな顏を、包みもあへず暫く居たのであつた。

(四) 戀と戀

一

「何うした。茫然して居るぢやないか。」

と小宮山は今、出勤先の會社からの歸途、用があつてつい近所まで來た序、不意と寄る氣になつて谷中の脇屋の住居を訪ねて、親しい中の隔てもなく、顏を見ると打解けて直に恁う言つた。

「や、技師長。」

と脇屋は緣先に持出した椅子に凭つて、南に遠く、根津方面、本鄕臺を見晴らす彼方を、葉卷の烟の中に暫く眺めて居たのが、聲に振返つて、挨拶代りに笑つて答へると、直に身を起して、立つて座敷へ入つて來た。

「好く來た。恰も望んで居る時に來てくれた。恁ういふ時に來てくれたのは實に可かつた。褒美を遣つても可い位だ全く。」

「何だ。何うしたのだ。甚く歡迎するぢやないか。何だか薩張解らんが。」

「はゝゝゝ、何も慌てるには及ばない。」

「なに、慌てはせんが、何か突如に言出すから。」

「むゝ、ぢや徐ろに話す。驚いちや可けない。些少不思議だよ。僕にも係ういふ事があると思ふと、自分ながら妙な心持がする。餘り珍談でもないが、參考の爲に少し聞いても可からう。」

と輪島塗の、研出し蒔繪の葉卷の箱を前に薦めて、自分も一つ取つて又燻らし初めた。小宮山は何事かと、顏を見て訝かしげに、

「何だい全體。」

脇屋は微笑みながら、

「いや、不思議さ。昨日も兄が來たから一寸話して大いに笑はれた。貴樣は全體狂氣を帶びて居るから相手にならんと言はれた。尤も僕の言ひ樣も惡かつたが、兄は彼の通りの、一切の空想を排斥する肌なんだから、全で談話にならんのだ。」

「だが何だい其本題は?」

「まア急くな、今話すから。一體這麼事を、僕のやうにべら〳〵言ふ奴も無いもんだが、僕の事で、變に内訌させて、くよ〳〵しちや居られないからな。聞いてくれ、——昨日僕は君の家へ行つた。」

「むゝ、來たが何うしたね。」

彼の時偶然に芳子さんの從妹といふ令孃に遇つた」

「其通りだ。それが？」

「や、それだよ。僕に不似合の談話だがね、結局此髭首を差上げたい氣になつたのだ。

「えッ。」

と小宮山は思はず顏を打目戍つたが、餘りに眞面目らしくない色に、勿論眞實ともせず、吹出すばかりに、

「はゝゝ、何を言ふのだ。串戲ぢやない。此方は眞面目に聞いて居るぢやないか。」

「いや、無論眞面目に聞いて貰はなくつちやならん。これでも少からず頭を

惱まして居るのだ。」
「餘り惱まして居る方でもあるまい。第一其態度ぢやァ、事實としやうにも爲る事が出來んぢやないか。」
「え、此態度？こりやァ仕方がない。今更直しやうもない。これを天に享けたんだから。」
「むゝ、何方でも可い。君の事なら大した危險はなからうから。」
脇屋は聞きも敢へず、衝と身を前に、
「いや有る。大いに有る。若し有るとすれば、君も打捨つては置かれまい。」
小宮山は笑つて相手にせず、
「なに、君の事なら僕は打捨つて置く。」
と態と冷然として言つた。脇屋は無據く、
「や、無情な男だ。まァ可い。最少し聞いてくれ。」
と膝を組直して、稍、形容を改めて何をか言出さうとした。

二

「むゝ、聞くには聞くが、それなら最少し聞かせるに足るやうに言ふが可いぢやないか。第一其上づッた調子で首を差上げるの何のと言つても、誰が聞くもんぢやない。」

と小宮山は受取れぬ顔で、未だ心にも止めず笑つて居る。

「はゝゝ、然う頭から信用されんぢや困るな。だが泣いて訴へるなどゝ言ふ事は、僕の畠にないのだから仕方が無い。これで本氣の沙汰なんだから驚ろく。」

と自ら嘲けるやうに、脇屋は其深い鬚髯の中から、罪のない笑顔を見せて言ひた。

「はゝゝ、自分で驚いて居るから世話はない。いや、其行方だから大丈夫だといふのだ。併し假に先づ、本氣の沙汰とした處で、彼女は最う、約定濟だといふ事を君は知つて居るだらう。彼の時直に話したと思つたが。」

脇屋は氣振も變へず打首肯いた。

「知つて居る。皮肉な宣告だつたよ僕に取つちや。何しろ餘り早かつたか

らな。逢つてこれはと思ふ。直に其宣告だ。其間僅かに二分間、二分間にして失戀するのは、實際早過ぎるぢやないか。」

「無常迅速だ。はゝゝ。だが君も餘りに輕卒過ぎたぢやないか。」

「いや、那樣批難を容れる餘地は無い。僕は只、それが人心微妙の消息と思つて居る。目といふ奴は、鏡といふに過ぎないけれど、併し生きて居る。目ばかりで見るのぢやないからな。可哀相に歸つてからの影響が、殆んど意想外の沙汰になつて來た。自分にも不思議に思ふほど、未だに忘れられない。弱つて頗る持てあつかつて來る。さア然うなると種々の妄念が湧いて來るのだ。」

「ふむ、何ういふ？」

「此結婚を破壞してくれやうといふ。」

「えツ。」

と小宮山は疑ひながらも稍不安らしい色で、口早に、

「本當か。」

「無論さ。」

「むゝ、然うなると只聞流しにも出來ないが、君が本來の超然主義は何うしたんだ。いつも唱へて居る獨身論は何處へ行つたんだ。突如に豹變は驚くな。」

「其方よりも此方の方が驚いて居る。自家撞着ぢや器量を下げるが、併し幸ひにね、未だ自分を忘れんだけの餘裕が有る。そこが僕一流だが、救つて強ち救はれん事はないのだ。」

小宮山は笑出した。

「何だ、驚かして置いて直にそれだ。君の事だから大方然うだらうと思つたが、そんならなに、默つて自分で救つて了ふが可いぢやないか。」

「むゝ、併し然う容易く行く位なら、何も這麼事を言出しはせんよ。」

「や、君にも似合はんな。那樣思切りの悪い男ぢやなかつたが、して見ると餘程思召が深かつたと見えるな。」

「待て。此方はそれ處ぢやない。次第に依つちや突飛な事もしかねないのだ。處で然うなつて、未だ先の何にも知らないのだから少し驚いて居る。何うだ君、一應心得の爲に、先方の今の情態を少し話して呉ないか。第一彼女は

何者の娘だい。」
「はゝゝ、君だけに何處までも變つて居るな。可し、話さう。僕の知つて居るだけ。」
「併し斷つて置くが、僕に斷念させやうと思つて、事を拵へてくれちや可かんぜ。」
「はゝゝ、詰らん注意をしたものだ。君も愚に返つたな。まア話すから聞け。」
と言葉を切つて小宮山は、少し座を替へた。

三

脇屋は膝の前の、冷め掛つた珈琲を一口、髭を押拭ふと、
「先づ其兩親から聞かう。」
「むゝ、別に奇な事もないが。」
と小宮山は前置して、其表情に富んだ眼を一寸動かしたが、
「親父は生駒直信といふ官吏上りの、瘦せた、品の好い老人だ。然うさ、最う六十を越して居るだらう。胃病で始終苦んで居るので、實際よりは餘程更けて

見える。談話好きの、頗る如才のない、一寸見ると喰ないやうだがね、其實小心な篤實な人で家ぢや、相應に氣むづかしいといふ事だが、僕の見た處では先づ好人物だね。尤も、僕も妻の關係からして知るやうになつたのだから、然う何も彼も詳しく知つて居るとは言はれんがね、別に秘密もない家の事だから、大した見違ひもない心算だ。」

と斷るやうに言つて、其儘跡を繼いで、

「若い時分から、敢て世に立つて何うしやうといふ野心もなく、身分相應に、先づ不足なく世の中を渡つた行けば可いといふ方針で來たらしいんだね。自分も此位な力量しか無いといふ事を能く自覺して居るので、老後の計なども前から能く用心して役所を退いた時には、いゝ加減財産も作つて、遊んで喰つて行かれるやうにちやんとして置いた。子供は二人、歌子の上に一人兄がある。種彥といふ陸軍少尉で、高崎の聯隊附で今彼方へ行つて居る。少し蠻カラでね、これは親父と違つて恐ろしい野心家だ。」

「むゝそれから。」

と脇屋は興ありげに跡を促した、小宮山は目顏に受けて直ぐ、

「處で母親か。これは彼の神保の母親ね、あれと同じ樣式の樂天家だ。年も位に若く見える。福々しく、能く肥つた、いつ見ても愉快らしい顏をして居る。主人公とは二十からも違ふだらうが、主人公とは反對に、殆んど信じられない全體甚麼處でも滿足する事が出來る人だから、無事で格別の波瀾のない家庭を無上の樂園と思つて、良人は好紳士で、種彥は好丈夫で、歌子は好淑女で、自分は飽までも幸福だと思込んで居る。惡氣のない罪のない婦人だ。」

「で、本尊の歌子の方は？」

と待ちかねた氣勢で聞く。小宮山は顏を見て、

「はゝゝ、大分身を入れて來たな。歌子の方は逢つて居るのだから、今更事新らしく言ふ事もないが、兎も角御存じの通りの美人、いや縹致の好いのは女に第一の武器だね。あの爲に何の位方々で持囃されたか知れない。如彼なると隨分自惚も出るのだが、併し當人には其奴を利用するやうな罪はない。尤も相應に艶飾屋でね、頗る虛榮心には富んで居るやうだがね、こりやア併し、

今の大方の若い女には有勝ちの事で、咎めて遣るのは少し可哀相な處もある。

「無論さ。那樣事は恕して遣らんけりやならない。」

「可し〳〵。君の爲に恕して置かう。處で先づ一通りの高等女學校程度の教育は受けて居る。妻を通して僕の初めて知つた時には、最う學校へは行つて居なかつたが、嗜好で番町邊の或講習會へ行つて音樂を修めて居た。ほんの餘技に遣つたんだが、や、素人にしちや却々遣る。僕の妻のやうな引搔廻してお茶を濁すんぢやない。もし專門に遣つたら豪いものになるだらうと思はれる位だ。いや音樂と言へは、其講習會さ。それから今度の結婚沙汰になつたんだから、些少そこらから念入に話さうかな。」

「むゝ、談佳境に入りさうだ。いくらでも念入にするが可い。」

「はゝ、巧く行けばお慰みだ。」

と息繼ぎの煙草を深く、ぱつとマニラの煙を吐立てた。

四

と、時も措かず、

「今歳一月の初旬其講習會でね、例年のやうに新年會をかねた演奏會が催されたと思ひたまへ。妻なども招待を受けた一人だが、大分盛會でね、いつもの顏觸以外の來賓なども見えて、番組も滯りなくいづれも上出來で、大喝采を博したさうだが、其中に出色の人が二人あつた。一人は來遊中の伊太利の神學者の娘で、これは外國人といふので注目を惹いたやうだが、併し公平に言つて、技倆は拔群であつたさうだ。一人は外ぢやない歌子だ。

いや、こりや僕ばかりの説だが、彼の人は縹致ばかりぢやない、生れながらに何處か、妙に人を惹付ける不思議な力を持つて居るね。縹致だけならナニ、彼女と雁行して行くものは、脇にいくらも有る。それ以上のも無論ある。併し如彼いふ風に多數の心を惹付ける力に至つては、僕の知つて居る處では唯も落ちる。實際肩を並べて立たうといふものは、一寸探してもないと思ふと、彼の天分を認めない譯には行かんね。早い談話が、能く妻などに伴れられて、未だ知らん處へ行く事がある。何處へ行つても屹度、歌子といふ印象を強く跡に殘さずに居た事はない。然うかと言つて別に、警句を吐くとか、奇才を示すと

か、那様事は少しもないのだ。尋常一様に、何の變つた事をもしないで、人を醉せるのだ。あればかりは外の者の容易に企及ぶべからざる處だ。と何も這麼に氣を揉んで云ふ事はないが、いや全く不思議だよ。俗に自然の愛嬌といふ事を言ふがね、何うもそればかりぢや物足りないやうに思ふ。僕の見る處ぢや君も、或はそれに遣られたんぢやないかと思ふね。現に其日も、中毒と言つちや惡いが、一人大熱の患者を出したんだ。

歌子は其日、ヴァヰオリンの獨奏を遣つたんだが、出來も尋常ぢやなかつたさうだよ。併し彼の姿が、それより先に氣を奪つたといふのは、僕ばかりの推察ぢやあるまい。何しろ彼の押出しで、婉として壇上に立つて見たまへ。手際が少々位怪しくつても、七難は聽者の方で隱してくれる。飄々として雲を行くのは、音樂ぢやなくつて目の前の天女だ。下界で見るのは惜しいと言つちや、些少大袈裟に過ぎるかも知れないが、技術以上の感動は充分に與へたさうだ。何しろ當人は例の通り罪のない方で、少しも得意がるやうな風は見せなかつたが、それだけ尚更愛を惹いたんだね、全く一日中の花形で、人氣を背負つ

て立つたさうだよ。

其中に餘興に移つて最後に會員中の素人演劇があつた。會長が飜案したとかいふ「ロメオとヂュリエット」を、燒直して日本風にしたので、舞臺を東京にして、生世話で行つて、それに幕を詰めたから、全で原作とは俤をかへて了つたさうだが、何うして、却々器用に出來て、大した不自然もなく、一寸黒人も跣と言つたやうな處もあつたさうだ。尤もこりや贔負目で見たんで、妻の言つた事だから、彼女の劇に對する鑑識から言つて、少しも當にはならんがね。

處が其劇でね、歌子は又前の奏樂以上の喝采を博した。歌子はヂュリエットの花子といふ役で、こりやア併し餘り巧妙ではなかつたらうが、外の者も皆素人だけに、比較して言へば上々の出來で、能く有勝ちなトチリもなく、無難に遣つて退けたさうだ。が、來賓の方の受けは非常なもので、歸つて妻が、那麼時にや、ベッかつこうをしても褒められたらうと言つた位だ。

其來賓の中に、先刻から瞬きもせず、ぢッと視て居た人が一人有つたんだ。」

五

「其人は法學士でね、若くつて且つ好い男だ。學校を出ると直ぐ親父の殘して行つた八九萬の財產を其儘讓受けて、同じく親父の經營して行つた印刷會社をそツくり受繼いだ。何の手を動かす事もなく、默つて坐つて居て一廉の紳士と成濟ました男だ。室賀金彌といふ、言はゞ苦勞を知らない坊ちやん上りだがね、此男が君、今度歌子の姓を替やうといふ其新郎だよ。

其日は併し、歌子は何も知らなかつた。妻も氣が附かず、歸つても別に室賀の事などは言はなかつた位で、表面は先づ何事も無かつた。それから一週間。其間室賀の方ぢや、何でも非常な熱心で、歌子の身に關した何も彼も探つさうだが、生駒の方ぢや知らないのだから、丁ど其時、親戚の相澤といふ柔術家の紹介でね、洋行歸りの齒科醫との間に歌子の緣談が起つたので、其相談の最中だつた。二十八とかで、家には外戚に當る祖父の夫婦と下に妹が三人ある。去年の秋開業したのだが、大分流行つて、助手や書生を使つて盛んに遣つて居るといふ談話だ。歌子は別に何も言はなかつたが、餘り氣の進まない樣子で、妻とは仲好だから、內々那樣やうな意を漏らしたさうだ。けれども兩親は却々

乘氣で、次第に依つたら遣つて可い位に身を入れ掛けた。室賀の方で遲かつたら、談話は進んで、形勢は何うなつたか知れなかつたんだ。

室賀はちらと其事を聞くと、非常に焦躁つて、直に手を迴して、公然と言入れて來た。

來る時にや聚合るもんで、其處へ又二口ばかり脇から言込んで來た。此の方は餘り匂はじくなかつたので、初めから物にはならなかつたが、室賀の方は媒人口ばかりでなく、充分に兩親の耳を傾けさした。何しろ本人が熱心だけに、媒人の遊說にも身が入つて兩親の方は其中に脆く落城して了つた。喰付きの好い資産と學位なぞは生駒にや惡くない餌なんで、室賀の橫槍はまんまと成功したのさ。

處で歌子だが、君の事だから明らさま言つた處で差支はあるまい。歌子は內內兩親よりも今度は進んで居た。若い學士で、金があつて男が好い、と恁ういふと冷かすやうだが、前から夢想して居た幕が急に開かれたやうな心持がしたのだらう。 兩親の前に呼出されて、お前の了簡をと言つて聞かれた時には、

矢張舊式に顏を赧くして何も言はず、御兩方さへ宜しくば、とばかりであつたさうだがね。談話が決つてから、妻には大分話したやうだ。僕は未だ、室賀の人格も性質も能く知らないのだから、何とも言ふ事は出來ないが、歌子は最う、室賀をすッかり買つて居る。媒人の春藤といふのが、演奏會からの室賀の事を話した結果かも知れないが、いつの間にか最う、熱度が高まつて居るのだ。あの鹽梅で行つたらば負けず劣らず、定めて仲の好い一對が出來るだらうと妻も言つて居る。

や、なに態と君の爲に這麼事を言ふのぢやない。併し最う、君が手を下さうといふ餘地はないのだ。君が例の物に拘泥しない流義で、一時の夢にして了つてくれる事を僕は願つて居る。それに恁ういふのも何だが、成程彼女は、一顧、いや二顧三顧の價はあるかも知れないが、全體君が悅ぶやうな性格を備へて居る婦人ぢやない。」

六

談話の腰を折るまいと思つたか、先刻から餘り口交ぜもせず、手を拱いて聞い

て居た脇屋は、其時不意と顏を上げて、

「いや、そりや聞かない方が可い。恐らく君と見る處も違ふだらうし、聞いて熱が下るといふぢやないから。」

と何か避けるやうに言つて、やがて聲を重く、

「然うか。然ういふ關係なのか。」

と一寸間を置いて、

「當人同士が然ういふ風なら、今更罪を作るでもないかな。」

小宮山は聞逃さず、直に付入つて、

「然うだ。僕は君の爲に取らないよ。此際強ひて遣らうとすると、却つて君の品位を下げるやうな事にならんとも限らんからね。僕は室賀とは何の關係もない。何時でも君の味方になる男だが、それが斯ういふのだから、笑つて最う手を退いてくれるが可い。なに君は何ういふ風にも、自分で療治が屆く人だ。」

脇屋は苦笑の形で胸を反らした儘、

ふむ、又超然主義か。可哀相に恁ういふ感情は容易に胸に湧くもんぢやない。今度は全で流星のやうに來て、流星のやうに消えて了ふのか。」

と憮然とした面持を見せたが、振直ると、少し聲を落して、

「いや白狀するがね、實はこれが二度目なんだ。」

「え。」

と小宮山は不思議さうに友の顏を見た。脇屋は言譯らしく、口元に微笑みながら、

「僕のお饒舌が、こればかりは秘密にして何も言はなかつた。僕がドレスデンに暫く居た時の事だ。こりやア今度のやうに不用意に初つたのぢやない。深く交際して、充分に知合つてから起つたのさ。ホテルの支配人の娘でね、僕が室を借りて居た宿の娘とは、非常に親しい仲で始終往復して居た。賴まれて獨逸語と、日本語を交換して教合つたのがそも〳〵で、丁ど一年ばかりの中に到頭親友以上になつて了つた。」

小宮山は目を瞬つて、

「や、君にも那樣事があつたのかい。意外だ。全く意外だ。むゝ、何うしたそれを。」

と調子を反跳ませて聞く。脇屋は頭を掉つて、

「否、詳しく言ふに忍びない。詰り人種の上の憎惡から兩親の方に烈しい故障が起つて、僕は遂に失望して巴里に向つて去つたのだ。娘は殆んど幽閉されたやうな姿で居たが、僕が歸朝の間際に、室の瓦斯管の破損からだといふ談話だつたがね、故意が偶然か知らぬ、或夜不意に瓦斯の漏洩の爲に窒息して死んで了つた。」

「然うか。那樣事があつたのか。そりや少しも知らんかつたよ。」

と小宮山も、流石に暫く言葉は無かつたが、稍あつて、

「むゝ、君の超然主義もそれからだな。」

「或は然うかも知れない。」

と言つて笑顔に紛らして、

「恁う底を割つて了ふと、いつもの獨身論が大分影護くなつて來るな。」
小宮山は氣をかへるやうに、態と快活、
「可いさ。過去を追つた處で仕方がない。此次に來る三度目ので、總を回復するさ。」
「馬鹿な、然う自由に來るものか。」
と脇屋は聞きも敢へず打消した。小宮山は打笑つて、
「併し來ないとは言へんだらう。」
脇屋は嗜めるやうに、
「那樣事を今言ふ奴が有るかい。」

（五）同胞

一

一つ散り、二つ散り、風もないのにひら〳〵と花が、松の葉の上、燈籠の肩、奇麗に掃いた地の上に、音もせず跡から散離れた。客の絶間を、未だ芽の固い槭樹の枝に集つて居た雀が、一羽銜と降りて、下を飛歩いて居たが、其花片の一つを口に啣んだと見ると、首を上げて急がはしく四邊を見て、何に驚いたか、俄かに羽音を立てゝ飛んで行つた。はら〳〵と又花が散る。夢のやうに遠く何處かの汽笛が聞える。隣家の方で戀猫の、妻を呼ぶ聲がする。

と、がらり中の室の障子を開けて、脂肪の多い日に燒けた逞ましげな顏を差出したのは、今度幸ひの公用で、昨日任地から來た歌子の兄の種彥で、今脇から歸つて一休みした處。着て居た軍服を脫替へて、自分で坐蒲團を持出して、端居にどッかり腰を下すと、振返つて、

「おい、歌さん、其處の上衣の隱囊の中に、俺の煙草が入つてるから持つて來て

くれ。」
歌子は茶の室から直に立つて來たが、言はれた卷煙草入を出して、笑ひながら、
「まア、兄さんは歸ると最う直に人を使立てるのね。」
「何だ。動泣きをするな。俺の傍に居りや從卒代りだ。おい、氣を利かして煙草盆も持つて來るんだぞ。」
「はい〳〵、兄樣に逢つちや敵はない。可いわ、構はないで逃出して了ふから。」
「はゝゝ、無精な奴だ。那樣事を言や尙用を吩附けて遣る。」
と持つて來た煙草盆を引寄せて、一服吸付けると、開放した障子の角へ、輕く脊を持たせて振返つて庭の方を見たが、
「今日は餘程暖かいな。俺は汗ッ搔だから、此位でも歩くと汗が出る。」
歌子は脇から、其赤黑く光つた額に、地の透くばかり短く苅上げた剛い濃い髮の毛を見上げて、串戲らしく、
「兄樣の汗は甚麼汗が出ますの。」
「馬鹿ッ、汗に變りがあるかい。」

「おほゝゝゝ、可笑しい事。」
「何が可笑しい。相變らずたはいも無い事を言つて居るな。あゝ咽が乾いてならん。おい、彼處に麥酒が有つたらう。」
「あら、最う飲るの。」
「可いぢやないか。偶に家へ歸つて來たのだ。何でも大いに歎待するが可い。俺などはこれでも餘り我儘を言はん方だから――。」
と言つて自分でも可笑しくなつたか、笑出した。歌子は呆れ顔に、
「まア驚いた。驚いて了つた。」
「何故。」と態とけろりとする。
「これで未だ我儘を言はないんだつて。私なんぞは昨日から呆れ通しに呆れて居るのに。」
「はゝゝ、那樣に呆れたか。此位の事で呆れちや仕樣がないな。まア那樣事は可いから早く持つて來てくれ。」
「仕方がないのね。ぢや待つて居らつしやい。」

と立つて臺所の方へ行つたが、軈て其處に、初枝と八重と、三人何かどッと笑ふ聲が聞えたと思ふと、歌子は望まれた麥酒の壜と有合せた罐詰物などを持つて入つて來た。

「や、御苦勞々々々々。何うもお前でなければ矢張夜が明けないな。」

と種彦は煙草を捨てゝ、罪もなく笑壺に入る。歌子は壜を下に栓拔きを手に取りながら、

「馬鹿におしなさい。本當に兄樣ほど自分勝手の人は有りやしない。」

「はゝゝ、然うでない。これで却々の妹思ひだよ。」

「おや、憚りさま。」

「可し、それぢや俺が、お前の身に付いて些少考へて居た事を聞かせやう。」

と滿々と注がせた洋杯を擧げて、仰いで衝と干すと、ほう、とさも心地よげに息して下に置いた。

二

「いゝえ、聞かなくつても可うござんす。何うせ兄樣は好い事は言はないの

だから。」

と歌子は昨日から、機會があれば、戲弄られて居るので、笑つて、取合はうともしなかつた。種彥は空になつた洋杯を、默つて出して又注がせながら、

「待て。俺だつて然う惡口ばかりは言はんよ。俺には一人の妹だからな。」

歌子は氣を許さず、

「厭。知つて居るわ。那樣巧い事を言つて釣寄せやうと思つたつて。」

「はゝゝ、困つた奴だ。何時迄人を疑つて居るのだ。」

「でもそりや兄樣か初め惡いんですわ。昨日ッから甚麼に人を虐めたか知れやしないんですもの。」

「なに虐めた？　體裁の惡い事を言ふな。お前などを虐めて何になる。可し、それぢや串戲を言はんから聞け。」

「本當？」

「噓を言ふもんか。」

「おほゝゝ、何だか當にならないわ。ぢやまア仕方がないから聞いて上げま

しやう。」

「何だ。恩に着せて聞く事があるか。」

と笑ひながら叱つて、洋杯を下に置くと、少し眞顏になつて、

「今朝も不意と彼處の枇杷を見て、」

と庭の片隅に、下から二股になつて、枝を縱橫に張つて居る、古い枇杷の立樹を指さして」

「いつも實の熟る時分、俺が能く彼の上へ登つて、下にお前が小さな手を擴げて、上から折つて降すのを受けた子供の時の事を思出してな、それから繋がつて種々の出來事が、續いて胸に浮んで來て妙に係う懷かしい心持がしたが、今も言つた通り俺は同胞と言つてお前一人しかない…………。」

歌子は何か異樣な思に、其凉しげな眼を睜つて、

「まア、珍らしい。兄樣が那樣優しい事を…………。」

種彥は微笑むばかりに、

「何うした。俺が這麼事を言ふのは不思議かい。」

「でも、いつもとは何だか工合が違ふから。」

「はゝゝ、まア一杯貰はう。いや俺はな、何を言つても未だ小僧だ。軍隊の外の事は何も知りはせんが、お前も今確かりせにやならん時だから、俺の思つて居る事も聞いて置いて貰はうと言ふのだ。歌さん、俺はお前に一つ註文がある。」

「註文？」

と歌子は鸚鵡返しに言つて一寸顔を見る。種彦は首肯いて、

「むゝ、俺一個人としての註文だ。世故に長けた阿父様や阿母様の言はれた事は、無論服膺して居らなければならん。俺の言ふ事は少し毛並が違つて居て、或はそれと矛盾する事が有るかも知れんが、お前も今の婦人なら、何等かの覺悟が無ければならんと思ふから、兎もあれ味はつて見てくれるが可い。」

「あら私、那樣覺悟なんて有りやしませんわ。」

「なに無いと言ふ事があるもんか。お前も土で捏ねた人形ぢやなからう。」

歌子は態とらしく、

「いゝえ人形よ。兄樣は買冠つて居るんだわ。」

種彥は一喝して、

「馬鹿め。可し、そんなら俺が魂を吹込んで遣らう。」

と地聲を大く、既色に出た酒氣を、血色の好い面に見せて前に向直つた。

三

歌子は柳に受けて何處までも、正的に立たず、あしらひ氣味に、

「おほゝゝ、大變だわ、那樣魂なんぞ入れちや。」

「何が大變だ？」

と種彥は苛々しく言つた。歌子は未だ笑ひながら、

「でも兄樣に貰つた魂にや、片手に屹度軍刀でも持つて、片手に………。」

と言掛けて顏を見て又笑掛けた。種彥は折返して、

「むゝ、何を持つて居る？」

「屹度爆裂彈を持て居るわ。おほゝゝゝ。」

「はゝゝ、俺の言ふ事だと、何でも亂暴だと思込んで居るわい。なに俺だと言

つて、平和の味は充分に知つて居る。註文と言つたつて、別にむづかしい事ぢやない。簡單に言へば生きて働けといふのだ。」

「え、何だか判じ物のやうな事を……。」

と歌子は一寸眉を集めた。種彦は首肯いて少し身を前に、

「むゝ、と言つたばかりぢや少し解るまい、俺はお前に充分に仕事をして貰ひたいのだ。女の爲る仕事はお前が知つて居る。俺は何でも積極的に存分働いてくれる事を望んで居る。阿母樣なんぞは只、溫順しく素直にといふ一點張で、甚麼場合にも自分を殺して了ふ意氣地のない女の方を喜んで居るが、俺は何うも、俺の妹なら隨分切れて貰ひたいと思つて居る。勿論向不見に何にでも差出て、跳ッ返つてくれろとは言はんが、遣る事だけは立派に、人にも押されずに遣上げて貰ひたいのだ。」

「それぢや兄樣には、いゝ加減お轉婆になつた方がお氣に入るのね。」

「むゝ、お轉婆も物によるよ。其處等に轉がつて居る上ッ調子の、空騷ぎばかり遣つて居るお轉婆になられちや堪らんが、確かりした性根が有つての上の

お轉婆なら、寧ろ其の方を希望するな。」
「だつて、そりや危險だわ。」
「なに、立派に世間に立つて行く覺悟さへ付いて居りやア危險な事は何もあるものか。」
歌子は眼を落して膝頭を見詰めて居たが、微笑みながら、
「そりやア私だつて、何も道樂に奧樣になりやしない。」
「無論さ。併しお前は何ういふ奧樣になる心算だい。」
歌子は困つたやうな顏をしたが、脇へ逸して輕く、
「だつて蛙の子は矢張蛙にしかなりやしませんわ。」
「何だ。自分で蛙にして了ふ奴があるものか。人間の子は何にでもなる。」
「然う。それぢや若しかなつたら…………。」
「なつたら何うする？」
「兄樣に又麥酒でも注いで上げるわ。おほ、おほゝゝ。」
と身を引いて、聲を高く笑出した。種彦は舌打したが、據ろ無く笑つて、

「畜生！　生意氣にも俺を馬鹿にしやがる。」
途端に臺所の方から、いつもの機嫌の好い顏で初枝は入つて來たが、と見て、茶の室を通抜けて其處へ來た。
「まア、何を笑つて居るの。」
種彥は振仰いで、無造作に、
「なに今歌子を㗭けて居たのだが。」
「ふッ、㗭けて？」
と初枝は聞咎めて、何事、と双方の顏を見る。　種彥は座興に其儘、
「處が反對に此方へ吹掛るのさ。」
と衝と手を伸ばして、壜を手に取つたが、中を透かして見て、
「やッ、最う無いのか。」

(六八) 團欒

一

其夜しめやかな雨を軒に聞いて、生駒の奥では、親子四人、直信夫婦を上座にして、歌子は種彦と、心々の春を一つに、子を思ふ親の日には、求めても無いやうに思はれて、いづれも樂しげに一室に集つた。 昨夜は種彦が、友人の近衛の士官に連れて行かれて居ず、家にも客が見えて、つい顏を揃へて緩くり話す機もなかつたのを殘多く思つて居た初枝は、其中にも滿足らしく、交る〱二人を見て、目を無くすばかりの姿で居たが、不意に良人の方へ振返つて、

「ねえ貴方、恁う遣つて傍へ置いて見ますと、何だか最う餘所へ手離して遣るのが厭になりますのね。」

と言つて又二人の方へ目を返す。 直信も此頃の心悅に、いつもの艶の惡い顏色も思做しか急に引立つて、譯もなく只ほく〱して居たが、

「はゝゝ、那樣事を言つても仕方がない。 併し種彦は格別だが、これで歌が居

なくなつたら、お前は其當座、手の内の物を取られたやうな心持がするだらうよ。」

「する處ぢやありません。當分全で氣が脱けたやうになつて了ひましやうよ。」

歌子は顔を振上げて、

「あら、那樣事を仰有ると、私離れて行きたくなくなつて來ますわ。」

種彦は少し離れて、默つて煙草を燻立てゝ居たが、不意に何を言ふかと思ふと、態と、

「可いさ。それぢや阿母さんを連れて行くさ。」

「はゝゝまア其處等だな。」

と直信は更に機嫌よく、

「いや私もな、歌の身が決つたので、これで荷を下したやうな心持だ。まアまア二人共、何の心配も掛けさせず能く遣つてくれた。私も此上の慾は、只長生をしたい許りだ。いやお前達のお蔭でな、私も何うか壽命が延びて行くやう

に思ふよ。」
初枝は脇から口を添へて、
「本當にこれからは、お前達の出世の跡を見て行くのが何よりだよ。思ふとねえ併し早いものだね。此方の年を取つて行くのは知らずに、つい此間のやうに思つて居たが、二人共最う、何時か這麼になつてお了ひだ。」
と今更のやうにぢッと見る。種彦は煙草を置いて、
「早いと言へば僕も今朝。」と歌子を一寸見て「不意と此奴の事を思つて矢張那樣氣が出た。」
初枝は急がはしく、
「あれ、何だね、此奴なんて。」
「はゝゝ、なに餘り優しい聲を掛けると癖になる。此奴で澤山ですよ。」
と戯れるやうに言つて、笑つて歌子を見返すと、
「なにね此間迄、僕が人形を踏壞したんでべそを搔いて、漸く林檎を遣つて御機嫌を直して貰つた那麼小女だつたのが、最う奥樣になつて變な高慢面をす

るのかと思ふと、一人で可笑しくつてならなかつた。や、阿母様なども、僕が大人ぶつて生意氣な事を言ふと、矢張然う思ふでしやうね。」
「何のお前、大きくおなりだとは思ふけれど、別に可笑しいと思ひはしない。」
と初枝は其儘に答へる。歌子は跡に跟いて、
「私だつて兄様が初めて士官におなりだつた時、那樣事は思ひやしませんでしたわ。立派になつたと思つて嬉しかつたわ。嘘ぢやなく頼もしいと思つてよ。」
「いや、然う言はれると、少し惡口を言ふ心算だつたの。」
と歌子は疊掛けた調子に、目を美しく直と見た。

二

「なに俺の惡口なら、」と種彦は物ともせず、「口當りは佳くなからうが、嚙締めて見ろ、屹度美味いぞ。」
「おほゝゝ私生憎く虫歯だわ。」
と歌子は逃げて了ふ。初枝は双方を見て只莞爾々々と、

「おほゝゝ、歌も却々隅には置けないね。」
種彦は引取つて直ぐ、
「何うして、それ處ぢやない。最う一人ぢやないと思つて無暗に氣が強くなつた。」
「あら、私那樣……。」
と歌子は流石に、颯と顔を赧めて俯向いた。種彦は笑ひながら、
「なに那樣も無いもんだ。いくら可憐しい顔をしても額にちやんと書いてある。」
「知りませんよ。何と書いてあつたつて可ござんすわ。」
「そりやァ可いさ。可いけれども其、わざ〳〵見せ附けるのは少し可くないな。」
「まア何時私が見せ附けて？」
「何時なんて事があるもんか。不絶だ。昨日以來幕なしだから堪るまい。」
「可ござんすよ最う……。」

「はゝゝ、種彦が又構ひ出したな。」

と直信は火影に其打開いた眉を此方へ、

「歌も此頃は、何處へ行つても一度は弄られる。併し其中が花だ。今の中にまア精々弄られるが可い。」

「可厭よ。阿父樣までが、那樣事を仰有る。人を、私玩弄ぢやありませんわ。」

「おほゝゝ、眞個にねえ。」

と初枝は目を細くして裏もなく打笑ふ。種彦は其中に、何かまぢ〳〵と、暫く前を見詰めて居るやうであつたが、不意に口を開いて、

「や、家だ。矢張何うも家に限るな。此落着いた坐り心は餘所へ行つちや兎ても得られない。阿父樣、僕は家へ歸つて來る度に然う思ひますがね。別にこれと言つて感を惹くやうな事が無くつても、其間に何とも言へん情味があるやうに始終思ふ。顏を合せて詰らない談話をして居るだけで、それで居て妙に愉快なのは家でなけりや一寸無い。僕が時偶に家へ歸つて來る所爲だらうか。それとも外の生活が、餘りに家と違つて居る所爲だらうか。

初枝は直信の言葉も待たず、
「そりやアお前、血の繋つて居るのは何うしたつて爭はれない。餘所で甚麼に好い目にお遇ひだつても、情愛といふものは別だからね。」
「然うです。これにや全く嘘がないから。」
歌子は目を上げて不意と其顏を見たが、
「兄樣は不思議だ事。私那樣事なんぞ全で考へてお出でぢやないと思つて居ましたわ。」
「はゝゝ、俺だつても木の股から出はせんからな。」と種彦は顏を和げて、「見掛けは恁うでも然うしたもんぢやない。」
「然う。それぢや最つと種々な事相談すりや好かつた。私跳付けられて了ふだらうと思つたから……。」
「何だ。那樣相談をしやうといふやうな事があるのか。」
とぢろりと見た。歌子は言葉を濁して、
「いゝえ今有るといふ譯ぢやないけれど……。」

「何を言つて居るのだ。たはいもない。」

初枝は聞きさして、稍まめ立つた調子で、

「歌や、本當にこれからは、兄樣が確かりした相談相手だよ。何でも仲を好くして憑りつ憑られつするやうに爲てくれなくつちや可けない。」

「はア、そりや仰有らないでも。」

種彥は直に崩して。

「おい、それよりか久し振で兄妹喧嘩でも初めやうぢやないか。」

と笑つて又も戲れ掛けた。

三

其處へ種彥の吩咐けた、鳳梨と麥酒などを次々〳〵に、八重が働振を見せて跡から運んで來た。直信は生得の下戶、歌子に薄茶を望んで、到來物の菓子折を開かせながら寛いで又談話を續けた。種彥は其以前から特別に許されて居る洋杯を一人占にして、來る度に上る酒量に初枝を驚かした。

しと〳〵と雨は、花に憚るやうに靜かに降つて居る。傘を翳掛けて、往還を話

しながら行く人の足音も、春の夜頃を、門の柳と一つに烟るかと思はれる。座は賑かになつて、其中に種彥の壯快な熊狩の談話が出る。直信が維新當時の滑稽な懷舊談が出る。續いて初枝が、兄妹二人の罪のない稚い折の思出を、忘れず細かに話して皆を笑はせた。

「おゝ、聞くのを忘れて居たが。」

と種彥は其時、締つた肉附のいゝ膝を我知らず輕く打つて

「彼の比企は何うしました。何時も筆まめに始終手紙を遣した男が、此二月以來薩張音信をしない。何か變つた事でも彼の男にあつたのですか。」

歌子は名を聞いてはツとした。折角いゝ鹽梅に忘れて居るものを、由ない事を言出してくれたと思つたが、止める譯にも行かず、無據く何氣ない態を裝つて居た。直信は何も知らず其儘首肯いて、

「比企か。むゝ、彼は好い都合に、會社の方も追々用ゐられるやうになつて來たが、氣の毒に病氣でな。何うも何だよ、例の肺が、到頭本物になつたやうだよ。此間まで寢て居たがな、大分快くなつたと言つて、つい四五日前に轉地療養に

出掛けたよ。家へも暇乞ひに來たが、私は折惡く留守だつた。私も相應に手を掛けた男だから何うか快くなつてくれゝば可いと思つて居る。」

「や、病氣？　そりやァ可かん。で、何處へ行つたんです。」

「最初大原へ行く、いづれ落着いたら知らせる。と初枝に言つて行つたさうだが、それぎり未だ何とも言つて遣さない。」

「然うですか。何せい可くない。肺病ぢや尚更だ。や、然う言へば比企の確か、兩親の何方かゞ肺で斃られたといふ事でしたね。」

「むゝ、親父の方が然うだつた。可哀相に早くから孤兒になつて種々苦勞をした男だが、漸くこれからといふ時になつて身體を壞して了つては仕方がない。」

歌子は何とはなし聞きづらいので、一人耳を潰すやうにして、談話の變るのを只管祈つて居たが、誰も氣の付かうやうもなく、あと思ふ中に初枝も口を入れ出した。

「いゝえ此間來た時もね、甚く氣落ちをして居るやうで、談話も冴えないし、樣

子が何だか變でね、妙に拗くれた事ばかり言つて居たよ。此方の氣の所爲か影も薄いやうでね、いつも長い事遊んで居るのが、丁ど杉岡の隱居が來て私が一寸外して居る間に、默つてフイと歸つて了つたのさ。今迄ついぞ那麼事はなかつたが、ねえ歌、あの日は餘ッ程變だつたねえ。」

歌子は慌てたが漸く、

「はア、平素とは全で違つて居ましたよ。」

と言つて不意と口を噤んで了つた。種彦は敦圄くばかりに、

「可かんな、那樣勇氣のない事ぢやア。病氣に負けるなんて弱い奴が有るもんか。」

と口を銜いて言つたが、跡から情の籠つた聲で、

「あゝ、近い中に逢つて遣りたいなア。」

と誰に言ふともなく呟いた。歌子は眼を下に、袂を膝に置いたなり、只默つて居た。

（七）逆戻り

一

「や、奥さん。」

と門を中へ玄關近くつか〳〵と來た脇屋は、横手の枝折戸越しに不圖、庭の花壇の前に立つて居た芳子の姿を見て、急に身を返して衝と庭口へ寄つた。

「おや。」

と芳子は莞爾して、向直つて優容に小腰を屈めた。脇屋は枝折戸の上から、鬚に埋つた黒い、愛嬌のある顏を突出したまゝ、

「在宅ですか。」

と例の手輕に聞く。

「はい。」

と芳子は書齋に居る良人の方へ、

「貴女脇屋さんが入らつしやいましたよ。」

と振返つて、艶のある徹る聲で呼んだ。小宮山は先刻から書齋に入込んで、づらりと膝の廻りへ取亂した書類を、何か頻りと調べて居たが、聞くと手早く片寄せて、身輕に立つて障子を引開けた。

顏を見合せて互に、

「やア。」

といふ。脇屋は飛石傳ひに靴音を立てゝ、洋室の前を横切つて傍へ來ると、不意に、

「いや安心してくれ。漸つと落付いたよ。」

「え、何が?」

「はゝゝ、例の件さ。」

言ひながら靴を脱いで上つて來た。芳子は其間に逸早く、いつもの物馴れた待遇振にそれ〳〵座を設けて聽て立つた。小宮山は友の、例の無頓着らしく、飽まで惱みを見せまじとする顏色に先づ目を止めたが、

「例の件とは、此間訪ねた時の談話の……。」

「むゝ、危なく超然主義を踏外さうとした件さ。」
と言つて臆面のない姿で笑掛けたが、
「併し相應に骨は折れたよ。」
「然うか。それぢや最う、すッかり療治が屆いたのか。」
「いや全治とは無論行かんがね、充分消毒したから、兎に角まア冷眼で見られるやうになつた。」
小宮山は尚其心を讀まうとするやうに、再びぢッと顔を見たが、
「そりや可かつた。君の事だから何うかするだらうと思つたが、口で言つたよりは熱が烈しいやうだつたから、内々實は氣遣つて居た。」
脇屋は勢ひよく、
「なに泣ッ面をするのが厭だから、何うか恁うか押附けたのさ。だが器量の惡い事は類がなからう。鮑も〳〵大鮑だからな。人の物に餘計な氣を出して御苦勞樣な馬鹿々々しくやきもきして、詰りは指を啣へて引退るなんて、此上の行止りやうは有りやしない。忌々しいから飛出して遣つた。兄の處か

ら馬を借出して、無茶苦茶に駈けさせた。落花狼藉さ。馬こそ災難だね。」

「はゝゝ君の遣りさうな事だ。何處まで行つた。」

「行先などを決めるものか。此方は只烈しい運動が欲しかつたんだ。二日ばかり殘酷に馬を攻めて、咄嗟乘潰すばかりにして漸く歸つて來たが、馬には負傷させる、兄には大眼玉、得る處は何もない。身體は併しお蔭で綿の如く疲れた。」

「むゝ、それから何うした。」

「それから恁くの體さ。泣いたつて笑つたつて相手が無いから、無據く今度は自分を乘潰す事になつた。そこで再び發心して、逆戻りに又超然主義、當人少しも有難くはないがね。」

と言つて不意と調子をかへて。

「處で今日は、實は其葬を出しに來たのだ。」

「えッ葬？」

と小宮山は聲咎めて、思はず又顏を見た。

二

「然うさ。些少類のない葬だが、」

と脇屋は說明するやうに切出したが、少しきまりの惡さうに、

「なに平ッたく言へば恁うなんだ。最期の諦めを付ける爲にね、いよ〳〵御本尊が人手に渡つて了つたといふ宣告を聞きに來たんだ。と言ふと未だ思切りを惡く、まご〳〵して居るやうに聞えるがね、白狀すれば何だか未だ頭の中に殘つて居るものが有つて、妙に恁う引掛つて工合が可くないのだ。全體往生際も惡かつたがね、亡魂め、兎角に娑婆へ未練を引いて、宙宇にふら〳〵して居る。そこで一つ引導を渡して、西方淨土へ送込まうといふのだ。掛り合ひだから差詰め君を導師にする。なに穴は僕が掘つて僕が埋めるよ。南無箆棒之墓といふのを建立するのは何うだい。」

と眞面目とも串戲とも付かず、態と瓢輕に言つて退けた。小宮山は腑に落ちぬ色で、

「だか、何う引導を渡すのだ。」

「何だ。棺桶を前に置いて、導師がまごついて居るやうな事ぢや仕様がない。なに有の儘に話してくれりや可いのだ。此間跡二日といふ事だつたから、最う結婚は濟んだのだらう。

「む〻一昨日滯りなく濟んだが………。」

「然うか。いよ〳〵最う令夫人か。さア然うなりや全くの縁無しだ。宜しい、他人の噂として聞かう。最少し詳しく話してくれ、それだけぢや未だ毒が能く廻らない。」

「や、何處まで變つて居るのだ。聞いたら氣を惡くするばかりだらうが。」

「解らないな。だからお葬式と言つたぢやないか。實は自分で其祝言の席に臨んで、此眼に明瞭と見せたかつたのだ。然うすりや立派に討死が遂げられやうといふものだ。可いから話してくれ。そりや僕の事だから少しは變つて居る。」

「ふむ、大いに皮肉だな。そんなら又聞きの事も附加へて些少並べて遣らう。式は一昨日の夜其前何か新式てといふ談話もあつたが、餘り變つた事でない

のをといふ生駒の方の希望で、矢張在來の儀式で遣つた。歌子は存外に落付いて居たよ。何しろ彼の縹致で、彼の好い恰好なんだらう。盛裝して押出した時は全く目の覺めるやうだつたよ。僕も既婚の人間だ。其も未だ一年ばかり前の事だから、同じやうに飾立つた妻の若々しい姿は、未だ記憶に新らしい。おい、作らずに言ふのだから笑つちや可かんよ。其時は內々恭悅する位美しいと思つたが、何うして比べ物になる處ぢやない。婿の得意想ふべしだ。何うだい、此位ぢや毒は廻らないかい。」

脇屋は常の面持に笑つて輕く、

「むゝ、些少ばかり廻つた。併し舌觸りは柔かだな。最少し強い處を賴みたいな。」

「いや徐々と遣らう。室賀の家は、聞いたよりは立派な住居で、一寸見ても却却手の掛つた普請だ。式は奧の二十疊の室で擧げられた。電氣燈のぱつとしたのに、端然として席に着いて居る婿殿を前に置いて、新夫人餘程鼻白んで見えたが、初々しいだけに尙美だつた。例によつて蓬萊、島臺、室賀の方の媒人

夫婦、生駒の方の媒人夫婦、雌蝶、雄蝶になつた兒供が、又馬鹿に奇麗だつた。長柄と提下を双方から兒供心に教込まれた通りを守つて、行儀よく〳〵と進寄つた。何うだ、これより詳しくしちや利過ぎるだらう。」

と言つて微笑みながら見入つた。脇屋は押返して、

「いや最つと強烈なのが可い。僕が止めてくれと言ふ位の處まで踏込んでくれ。」

と受身に強く尚も跡を促した。

三

「はゝゝゝ、それぢや談話だけじやャ追付くまい。」と小宮山は語氣をかへて、

「何うだ寧そ逢つて見ちやア。」

「なに逢つて見る？」

「むゝ談話で聞くよりは直接に見る方が無論利く。此方も口數が掛からないで濟むといふものだ。」

これなら先を越したらう。と言つた顔で打笑ふ。脇屋は色も移さず、

「逢やアそりや一も二もないさ。疑ひもなく中毒するがね、退いて考へれば又、それも餘り態が無さ過ぎるな。」

「併し只つた今君は、其目で見屆けりや、立派に討死が出來ると言つたぢやないか。」

「だから退いて考へたのさ。過ぎたるは猶及ばざるが如しか。はゝゝ。だがね、恰も虫歯の痛い處に觸つて見たい樣に、進んで逢つて見たい氣もする。機會が有りやナニ逢つても可い。」

「そりや造作もない談話だ。機會は何時でも作らうぢやないか。」

「だがそれを待つて居るのも下さらないな。再び逢つた時にや、最う中毒の必要が無い事にして置いた方が寧ろ可いな。内々歯を切るのは氣が利かないし、と言つて見せ付けられて涎を流すなどは、談話にもなるまい。」

「はゝゝ、何だか要領を得ない事になつて來たな。それぢや何うするのだ。意嚮が更に解らない。」

脇屋も流石妙な工合で居たが、其儘出直して、

「なに此處で最う埓を明けて了ひたいのだ。矢張君の手に掛る方が本人も實を言へば助かるよ。

「併し然うなると又、無暗に毒を利かせろと言ふぢやないか。此方も當事者ぢやないから、註文通りの匙加減に却々出來はせんよ。」

「ぢや可いから、跡を話してくれ。なァに正を言へば、恁う遣つて平氣で談話を聞ける位に落付いたのだから、只其落着を聞けば可いのだ。」

「それぢや今話したゞけで充分ぢやないか。跡は此方も能く知りはせんよ。其夜双方の親族同士の盃があつた、新夫婦も其席へ現はれたが、無論然うい ふ際だから愼んで、片付けても居るし、一寸姿を見せて直に行つて了つたのだから、服裝が變つたので、一寸趣が違つたのを見た位のものだ。君を惱殺させるのは、其さゞめいた席ぢやなくつて、靜かな床盃の方の一室だらう。併しそれや僕の與り知らん事だ。想像で可けりやァ甚麼事でも言つて遣る。お望みなら思切つた毒を浴せ掛けて見やう。」

「いや那樣中毒は御免蒙る。むゝ、其處等で可いといふ事にして置かうか。

丁ど其時分だらう、馬を乘離して、持つて行つてウヰスキーを呷つて、前後も知らず寢て了つたのは。疲れて居たから、幸ひに夢も見なかつたよ。」

と言つて、流石に詫びしげな影を一寸見せたが、直に笑つて、

「可し。拘泥らずに最う切上げるとしやう。これから顚倒つて大いに捌けるのだ。そして餘所ながら新夫婦の健康を祝して遣らう。二人は未だ家に居るかい。」

「いや居ない。昨日盛んな披露の宴を濟して、今日新婚旅行に出掛けた。」

「然うか。好い時候だ。樂しい旅行をして來るが可い。何うだ僕が悦んで遣りや君も心持が可からう。」

小宮山は首肯いて、

「むゝ、そりや無論可い。」

（八）別莊

一

昨日松の中の路を、東京から先發の荷物と一處に來た、お房といふ、三十餘りの物馴れた女中が、白足袋に結立ての髮の常よりは目に立つて、樹の間に近く凪渡つた春の海を前に、門へ出迎へた寮番の太平と、久し振の挨拶を交はしてから、濱手の室賀の別莊は急に眠から覺めたやうになつた。荷物が運入れられてから間もなく、大方閉込んだ儘であつた雨戸は盡く開放されて、太平の迎と共に、手の明いたのから先に立つて、お瀧お新といふ、つい目の先の高神村に居る太平の娘達、悴の嫁のお仙といふのが、いつもの手傳ひに入亂れて手襷の影箒の影のさら／＼と拭掃除やら、道具を出すやら、一時は市の立つたやうな騷ぎだつたが、軈て靜まると、室毎は整然として、主人を迎へ顏に隅々までも美しく見えた。お新といふのは、十六ばかりの、縮髮の、色も黒いが小柄の愛嬌のある娘で、前から金彌の母のお氣に入り、何時も別莊に居る間は始終來て用を足

して居る。今度もお房の手助に暫く此方に居る事になつて、今日も跡に殘つて何彼と小まめに働いて居た。

新夫婦は午後の三時頃に見える筈になつて居る。

時刻を計つて、お房は身支度して、少し早めに停車場へ迎へに行つた。

太平は臺所口の小溝の水のちよろ〳〵流れて居る傍へ出て、腦天からつるりと禿げた、銅光りの額際を日に曝して、つぶした黄雞の羽を頻りと毟つて居た。

「やア、太平の阿爺、旦那は今日來さつしやるさうだアね。」

とのッそり裏口から、負籠を脊に、白髮頭を古手拭で包んだ五十餘りの女。手甲、脚袢、草鞋穿の姿で、しよぼ〳〵した眼をして入つて來た。太平は顔を上げると、正面に日射を受けて、思はず瞬いたが、それと見て、

「おう、新家の婆樣か。好え天氣だね。」

婆さんは溝を横に、掘拔井戸の脇を廻つて傍へ來ると、覺束ない眼で太平の手元を見下して、

「太え黄雞だね。」

「むゝ、多量目方が有るだアよ。　婆樣、お前は能く精が出るだアね。　何うだい、商ひは有るかい。」

「いんね、此頃は海水にも、お客樣未だ多數寄つて來ねえし、別莊も大抵閉つてるだから、思はしい事ア餘りねえだアよ。　然う言へば、阿爺、俺今日玉子を持つて來たゞアが……。」

と賣付けたさうな口吻。　太平は下に、手を休めず、猶も毛を引きながら、

「玉子か。　遲かつたァ。　今日藪下の嚊衆が持つて來て、女中衆夥多買込んだアよ。」

「然うかね。　そりやおへねえだア。」

と失望しながら、無據く笑つた。　太平は慰め顏に、

「あに、俺又能く女中衆に言つといて遣るだァよ。　又何か持つて來るが可えだ。」

「はア何分頼みますだァよ。　正直此頃半分遊びだァからね、私得にも何にもなんねえだよ。　旦那樣今度は長く居さつしやるかね。　いつも直と歸らつし

やるから、此方等にや餘り可くねえだアよ。」
「はゝゝ、相變らず慾張つてるだな。だがなア、旦那樣も今度は、奧樣伴れてござらつしやるから、些少は長かんべいよ。」
「奧樣ッて彼の阿母樣かね。」
「うんにや、旦那樣の奧樣だアよ。何でも魂消るやうな美い女だアとよ。」
どぐるりと鳥の腹を返して足を摑上げて、傍から又毟初めた。

二

其手に連れて、はら〳〵と落ちて行く羽の、輕いのは舞立ちて、溝を越して糸遊の中へ、跡から二つ三つ水の上にも落ちて、岸の小草の影を越して靜かに流れて行く。婆さんは悠長に急には歸らうともせず、上に高く囀つて居る雲雀も、鄙の耳には其儘に聞流して、まじ〳〵と只太平の手元を見詰めながら、
「はア、那樣に魂消るやうだら、俺も拜みてえもんだ。命の洗濯するだア。」
「洗濯するッてお前、幾歳まで生きる氣で居るだア。」
と太平は小休みもなく、手を動かしながら下から弄るやうに言つた。婆さん

は顔を顰めて、
「阿爺、可哀相な事を言つたもんだ。俺お前より未だ十歳も若いよ。」
「然うか。それぢや未だ若後家だア。最う一度婿でも取るかな。」
「はゝゝ串戯者だぞ。お前は恁うして好い處の別莊番をして、息子は息子で能く稼ぐし苦勞がねえから氣も若いだア。」
「いくら若くつてもおへねえよ。氣ばかり先に立つても、身體が言ふ事を聞かねえだ。最うお迎へに間が無えからな。」
「何お前は、請合つて未だ那樣事アねえだよ、何より氣樂なのが藥だからな。そこへ行つちや俺なんざア、年中氣骨の折れねえ日はねえだ。身體ばかりなら何でもねえけんど、家の野郎には俺何條にも倦ね果てたゞア。」
「はア彌吉は未だお前を困らせて居るだかね。」
「何俺ばかりぢやねえ。家中だによ。野郎全く挺にもおへねえだア。孫が可哀相だから、俺も恁う遣つて、毎日外川から銚子へ出て、種々な物を仕入れて來ちやア、別莊や海水のお客廻りをして居るだが、それがお前何の足しにもな

るぢやねえ。」皆彼の野郎の飲代か賭代になつて了ふぢやねえか。今始つた事ぢやねえだが、阿爺俺每日泣かされて居るだアよ。」と何時か年寄の愚痴になる。太平も宥めかねて居たが、
「はて何時まで然うでも有んめえによ。彌吉も馬鹿ぢやねえ。其中には目も覺めるだア。鶴屋の親方にでも些と言つて貰つたら可かんべいに。」
「何へえ親方にや幾度言はれたか知んねえだが、野郎親方の手にもおへねえだアよ。俺が腹ア痛めた子だが、今ぢや打殺しても遣りてえやうに思ふだア。」
「困つたもんだな。だが惡い事ばかりはねえもんだよ。彌吉も仕事をすりやア、一人で二人前は働く男だア。」
言ふ時同じ裏口から、野良着のまゝで姉娘のお瀧が、ばた〳〵と小急ぎに入つて來た。
「阿爺、旦那樣未だ來さしやらねえかね。」
「おう、最うそちこち入來らつしやるだらうよ。」
「嫂樣がね、これを旦那樣のお目に掛けてくんろッて言ふて、持て來たどアが

……。」

と目笊の小奇麗なのに、松葉を下敷にして松露を手際よく盛上げたのを見せた。

「おゝ、好いものを持つて來たな。入來らしつたらお目に掛けるだから、お新に渡しといてくんろよ。」

と太平は毛を引終つて、立上りさま母屋の方へ、

「お新や、お新よう。」

と聲を高く呼ばゝつた。新家の婆は手持無沙汰の姿で居たが、荷を脊負直して、

「どら、俺もそろ／＼行かうかな。お瀧樣お前歸るなら其處迄一處に行べえよ。」

「あゝ、俺用を爲掛けて來たゞから、直に歸るだァよ。」

上に雲雀は未だ囀續けて居る。砂地に松の影を曳いた庭先から、お新は手襷掛の二の腕をあらはに、前垂を風に飄して駈けて來た。

三

「やア汝何して居たゞア」

と太平は鳥を提げたなり振向いて、思はぬ方角から出て來たのを何かなし訝る氣勢に聞く。

「俺日向に出したつた蒲團取込んで居たゞアよ。」

言ひながら近寄つて、脇に居る二人を見て一寸目禮する。太平は重ねて、

「あのなア、お瀧が旦那樣にッて家から松露持つて來たゞから、彼方へ納つて置いてくんろ。序に出刄と爼持つて來う。鳥此方で拵へるだアから。」

と外流板の前へ來て、藁火で一わたり、皮に着いた殘り毛を燒初めた。お新は其間に松露の笊を受取つて中へ入る。お瀧は油染みた差櫛を拔いて、五月蠅く下る鬢の毛を搔上げながら、

「阿爺、家へ何か用はねえだかな。」

「おゝ、隣家の儀作にな、明日飯岡へ行くだら俺賴みてえ事あるだから、一寸くら晩にでも寄つて貰ひてえと言つてくんろ。」

新屋の婆は聞きさして脇から、
「儀作樣先刻銚子へ行つたゞアよ。俺途中で遇つたゞア。」
「然うか。留守だら歸つたら言つてくんろよ。」
「あい。それぢや新屋の阿母。」
「おう、行くべえかの。」
と連立つて頓て松の徑を話しながら、村の方へ歸つて行く。お新は入代つて道具を運びながら、
「阿爺、旦那樣遲いでねえかな。俺奥樣早く見てえと思つて居るだに、何して居さつしやるだかね。」
「遲いッて、何うて來さつしやるだアに。」
「そんでも俺此樣に待つてるだアに。」
「はゝゝ、お前ばかり一人やきもきしても、先方ぢや些少も知らつしやらねえわ。」
と笑ひながら、巧みに出刃を扱つて、

「あに、奥様此土地ア、今度初めてだッて言ふだから、來しなに銚子の方、彼處此處見物して來さつしやるかも知んねえ。然うすりや未だ〳〵遲くなるだア。」

「阿爺好い事は言はねえだ。那樣に遲くつちやア俺待倦ん了ふだア。俺昨日からこれでも好い程待つて居るだアに。」

と未だ小娘の夢見るやうな眼差に、仇氣なく首を搖かして言つた。太平は微笑みながら、

「那樣に待つて居て、奥樣來さしつたら何うしやうと言ふだ。」

「あれ、何うしても可いでねえかね。」

「可いけんども何うするだよ。」

と顏を差窺く。お新は答ふる言葉なく、不意に聲を打つて、

「厭だ。俺知んねえよ。」

「はゝ、可笑しい子だぞ。や、然う言やア遲いにや遲いな。お房樣迎えに行つてから最う可なり經つたな。お新よ、何時だア。」

「三時はとうに過ぎたゞよ。」

「はてな、それぢや矢張何處かへ寄つて居さつしやるだア。」

お新は默つて暫く、俎の上を見詰めて居たが、

「阿爺、俺今度こそ旦那樣や奧樣に能く言つて、一處に東京へ伴れて行つて貰ふだアよ。」

「むゝ、そりや願つて見ねえぢやア……。」

「奧樣連れて行つてくんねえかね。去年大奧樣は、行くなら伴れて行ッて遣るッて言はしつたけんど。」

「何、能く願つたら聞いてくらッしやるだらうが、お前一人で言つて居られるかよう。」

と稍心許なさゝうに、笑ひながら其儘顔を見入つた。

四

お新は能くも聞かず、

「居られねえで何うしべえよ。俺とうから然う思つて居るだもの。」

「然うか。それぢや最う泣かねえかの。」

と太平は猶莞爾々々と、血の餘りといふ季の子だけに、いつもの愛を深く其眼も何時か溶けて行くばかりに、

「汝や氣紛れだから當になんねえだ。」

お新は口を衝いて、

「あれ、俺何時泣いたゞアよ。」

「それ、去年飯岡のお光が、東京へ奉公に出さうッて言つた時、汝何うしても厭だッて泣いたでねえかい。」

「あゝ、彼の時か……。」と流石に少し口籠りながら「でも彼の時や俺未だ子供だつたもの。」

「はゝゝ、それぢやア今は最う大人かよう。」

「然うぢやねえけんど、彼の時分は未だ能く解らなかつたゞアよ。何處へ遣られるかと思つて俺恐かつたもの。それに飯岡の叔母樣が、お新は家で我儘べえ爲て居たゞアから、何でも嚴しい家へ遣んねえぢやア爲になんねえッて言ふだもの。」

「そんでもいゝよ〳〵ッて時汝家を離れるのが厭だなんて言つちや負へねえぞ。」

「いんね、俺今度は最う言はねえだよ。　俺此頃は、行つて見たくつて最う仕様がねえだアよ。」

と何か割りない態で言つた。　太平は何時か又鳥の方へ掛りながら、

「ふむ、汝又何で急に那樣氣になつたゞアよ。」

「俺此間、東京へ行つて來た新田の龜樣に談話聞いてから、何でも行つて見てえと思つて居たゞアが、それよか喜助樣ん處のお桑樣が、四五日宿下りに來て居た時、種々な詳しい談話聞いて最う堪んなくなつたゞアよ。　お前も見たらうが、お桑樣魂消るように變つて了つたでねえかね。　歸つてから初めて逢つた時、俺何處のお孃樣が來て居るだかと思つたよ。　行儀習つて、面白え物見て、いゝ衣服着てお金貯めて來るだアから、俺何でも行くだアよ。」

「おう、汝も那樣氣が出るやうになつたかよう。」

と太平は寄る年の目に立つて長く伸びた眉を一寸動かした。　お新は乗出す

そうに、前へ進寄つて、
「阿爺、俺同じ奉公するんなら、こゝの旦那様ん處のやうな好い家へ行きてえだア。俺先度、大奥様が伴つて行つて遣らうかッて言はしつた時、何故行かなかつたかと思つて居るだアよ。」
「むゝ、汝出るといふだら、旦那様ん處へ願ふに越した事はねえだ。汝も氣い付けて能く勤めりやア、そりやア屹度目を掛けてくらつしやるだア。」
お新は聲を反跳ませて、細い、下つた眼も連れて輝くやうに、
「だから俺、今來さつしやる奥様にも可愛がられるやうに、何でもくる〳〵働くだアよ。然うして何でも一處に伴れて行つて貰ふだア。」
「はゝ、一人で最う決めて居るだ。汝は然うだらうが、家の都合もありや先様の都合も有るだから、直ぐおいそれと然うも行くめえがの、汝其氣なら、俺からも又能く旦那様に願つて遣らうよ。」
「俺皆に言つて貰ふだアよ。」
「ほう、那様に行きてえだかよ。」

と仕事を終つて、出刃を洗つて颯と水を切つたが、目を擧げて樹の間越しに、畑を縫つて彼方に蜿つて居る街道を遠く望みながら、

「何うしたゞか、えらく手間を取らつしやるのう。」

五

時に行手の眼を遮つて、二つ並んだ藁屋の此方、麥吹く風の光ると見える、柳隱れの道外れに、續いて三臺、俥の影が衝と現はれた。

「や、」

と太平は、伸上つたが、遠いので能く見え分かぬ。

「お新よう、あの俥が然うぢやねいかの。なア、俥も丁ど三臺だ。」

「おう、俺も然う思ふだアが。」

と一二間前へ駈出して、松の疎らな方から、頻りと向ふを見透して居た。

「阿爺然うだよ。先のは旦那樣で、此方へ指さして跡の奥樣に知らして居さつしやる。ほら、皆が此方向かしつたゞア。然うだよ。然うに違えねだ。」

と急にそは／＼し出して、

「さア、何うしべえよ。」

「はゝゝ、何をまご／＼して居るだア。那樣がひしよのねえ事だと、旦那樣に笑はれるぞ。さア、來さつしやる間に、此處を片付けとくべえよ。」

と道具を取入れに掛かる。お新はほッと逆上せて、何か最う落付かず、傍から急がはしく手を貸しながら、一人急込んで、

「阿爺早くしねえかよ。最う來さつしやるてねえかよ。」

「はゝゝ、騷ぐでねえ。來さしつたら可えでねえかよ。お迎えに出るばかりだア。」

「そんても俺ア……。」

「何うしたゞアよ。」

「俺胸動機打つてなんねえだよ。」

「はゝゝ、何を那樣に思込んでるだア。」

と頓て其處等の始末すると、揃つて門へ出迎へに行つた。お新は太平の傍に引添つて何か固くなつて、息を凝らして待つて居た。俥は畑に添うて直走り

に、左に折れて松の中へ、砂地を噛ませて衝と入つて來た。

金彌を先に、歌子を中に、お房を跡にして三臺、金彌は暑苦しかつたか、着て居た塵除の外套を背後に投掛けて黑の中折の帽子を淺く白く好い程に肥えたのに、濃い美しい口髭の先の跳上つたのも際立つて、切れの長い稍、釣れ加減の眼を早く、太平と顏を見合せると、笑つて揚鷹に一寸點頭いた。

同時に太平は走出して、筒、拔の何時もの聲を高く崩れるやうな笑顏を先にして、

「やア、旦那樣、えらア待つて居やアしたぞ。遲かつたアに、何處え寄つて來さしつたゞア。」

「むゝ、川口へ。」

と金彌は輕く答へて、楫の止ると共にひらりと降立つと、直に身を返して、歌子の車の脇へ立つた。

「何うだね、同じやうな田舍道で、途中は嘸退屈したらう。」

「いゝえ初めてゞすから、何處も珍らしうござんしたわ。」

人目の近いのに、少し鼻白みながら扶けられて下に降りた。
「さア、まア兎も角上らう。停車場から最少し近いと妙だがね、此俥で來る間が閉口だよ。」
「然う？　私那樣にも思ひませんでしたが……。」
「然うか。それや矢張初めての所爲だよ。」
と打連れて中へ入つて行く。お新は先刻から瞬きもせず、細い目を思ふさまに睜つて、物も言はずしげ〳〵と見詰めて居た。

(九) 眉づくり

一

座敷の前は眼の下に、一望際涯のない太平洋の波を控へて、左手に見える犬吠岬から、岩を亂して弓狀に、右手に開いた長崎の端まで、こゝ鷄明の浦の、岩と、松と、波と、眞砂を、庭に取入れた一構、歌子はそゞろ心に緣へ出て、物珍らしげに左視右視、時を移して座に返つて來さうにもしなかつた。

「おい、いつまで何を見て居るのだ。」

と金彌は笑ひながら立つて傍へ來た。

「でも餘り好い景色ですもの、私這麼處ぢやないと思つて居ましたわ。」

「はゝ、何だか先刻から無暗に珍らしがるな。昨夜寫眞で見たから最う、別に驚きもしまいと思つて居たが。」

「あら、寫眞よりは餘ッ程可ござんすわ。」

「然うか。那樣に氣に入つたか。何處でも寫眞の方が可く見える筈だが。」

「貴方は又、いくら慣れて居らつしやると言つても餘り冷淡なのね。」
「むゝ、私は別に惡いとも思はんが、それほど又好いとも思はんよ。 いくらか氣の變る處が可い位のもんだ。」
「まア何ぼ御自分の自由だつて、それぢや餘り勿體ないぢやありませんか。」
「はゝゝ、何しろ氣に入つたのは大いに可い。 此方はナニ、誰かと一處なら何處でも可いんだ。」
「あら、那樣……。」
と不意を打たれて、未だ慣れず初々しく、颯と顏を赧めて向ふへ目を逸したが、紛らすやうに、
「おや汽船が。」
と折しも前の沖合を、波を蹴立てゝ、馳せて行く汽船の影を目に入れて、
「大きな船だのに那麼近い處を……。」
と何かなしに打目戍る。 金彌も目を擧げて其儘打望んだが、
「むゝ、外國船のやうだな。 何だよ、亞米利加から此方の航路へ入つて、日本の

陸地を初めて見るのは此處なんだよ。」

「おや、それぢや日本へ歸つて來る人達は、今甚麼に懷しがつて見て居るか知れませんね。」

「然うとも。此方から能く見えないけれど、屹度皆甲板へ出て居るだらう。外の乘客だつて、殊に漫遊に來た者などは、我勝ちに雙眼鏡か何かで見て居るだらう。此處に立つて居る二人を何と思ふだらうな。」

歌子ははッとしたやうに、

「あら、私達も見られて居るんでしやうか。」

「無論さ、少し距離の利く雙眼鏡なら手に取るやうに見える。」

歌子は思はず又眼の縁を染めて、

「厭な。私入つて了ひます。」

「可いぢやないかナニ、構ふ事が有るものか。大いに見せて遣るさ。日本人にもお前のやうなのが有る、と此方は自慢して遣りたい位に思つて居る。」

「厭ですよ那樣……。入りましやうよ。」

と身を返し掛けた。金彌は尚笑ひながら、

「惜しいな。船は漸く此方の正面に近くなつて來たのに。遠いから動かないやうに見えるが、あれで相應に速力を出して居るのだ。はゝゝ逃げるのか。おい、そんなら然う言つて遣るが、」

と衝と寄つて囁くやうに、

「船よりも直ぐ右の垣根の脇を御覽。」

言はれて振返ると、傍に小高い砂山の松の根元に、通りすがりの足を止めて、漁師らしい二人連の男が、ぢッと此方を見て居るのと思はず顏を見合せた。

「あれ。」

と歌子は飛退くやうに、慌てゝ中へ引込んで了つた。

「はゝゝゝ。」

と金彌は一人面白がつて、續いて中へ入つて行く。

二

歌子は障子を小楯にして、下に敷いた座布團を斜に、漁師の方へ脊を押向けて、

婀娜いだ後姿の、美しげな襟足を際立たして居たが、金彌を見て怨じ顏に、
「貴方は餘ッ程人が惡いのね。」
金彌は未だ笑顏の儘、近く座を取つて、下の卷煙草入に手を掛けながら、振向て輕く、
「何故？」
「でも先刻から見られて居るのに、知らしちや下さらないんですもの。私些少も知らなかつたもんだから、いゝ氣になつて居たぢやありませんか。」
「なに減りはしまいし。先方だつて見たいから見て居るんだらう。那樣事を言やお前何處へも出られやせんぜ。此處等の者は少し目に立つた風俗の者に逢ふと、珍らしがつて皆手を明けて見るんだからな、お前などが通らうもんなら、それこそぞろ〳〵跟いて來るだらう。」
「まア、それぢや私何處へも出ませんわ。」
「はゝゝ、ぢやア來た甲斐が有りやしない。ナニまさかそれほどでもないがね、お前も又餘り差澁み過ぎるぢやないか。知らない田舍の者なんぞ、何でも

有りやしまい。東京ぢや演奏會や何かて相應に人中へも出て居るぢやないか。」

歌子は面映げの眼を下に、言はれて微笑みながら、

「でも其時分は未だ一人で居たんですもの。今から思ふと罪が有りませんでしたわ。私一昨日から本當に、きまりの惡い思を爲通して居るんですわ。知らない土地へ來たら些少は可からうと思つて居たのに、矢張仕樣が有りませんのね。私何故平氣で居られないでしやう。」

と眼を逸らせて、少し身をくねらせた。金彌は膝を寛ろがせて、

「併し其中が又可いのだらう。餘り厚顏しいのも趣致が無いからな。お前は然ういふ處は割に古風だ。私は最つと大膽に、誰にでも見せびらかす方かと思つた。」

「でも外の事とは違ふんですもの。」

「と言つて無暗に引込んでばかり居るのも可いもんぢやない。」

「それぢや些少稽古しましやうかね。貴方は何方が可いの。」

「然うさね。私は兩刀使ひだ。何方も可い。時に見せ付けてくれるのも亦惡くはないよ。」

「だつて人の所思もあるぢやありませんか。胸の中ぢや何う思つて居たつて。」

「なに構ふ事はない。言ふ奴には何とでも言はせるさ。自分を抑へて居るのは馬鹿な談話だ。隱して居たつて始まらない。何處へでも威張つて押出すさ。」

「まア、其氣で一處に出たら何うでしやう。」

「何うでもあるものか。當然だ。」

「おほゝゝ、其代り人が笑つたら皆貴方の所爲ですよ。」

「むゝ、那樣事なら何時でも引受けて遣る。」

「おほゝゝ、可笑しいわねえ。」

言ふ時緣の先へ、砂地を音もせず、ひた〳〵と藁草履で、外から廻つて來た太平が、來ると突如に、例の大聲て、

「旦那樣、お風呂が可うござえやァすが。」
歌子ははッと身を引いて、
「おゝ、吃驚した。おほゝゝゝ。」
「やア、何うしやアしたゞア。」
「なにお前の聲で驚いたのだよ。」
「はアて、そりや惡かつたゞアね。」
金彌は煙草を捨てゝ其儘、事もなげに、
「歌さん、一處に入らう。」
「あら。」
太平はけろりとして、顏を見上げながら、
「はア一處に入らしやるかね。」
歌子は顏を眞赤にして、傍から急がはしく、
「なに噓だよ。旦那樣は態と那麼事を仰有るのだよ。」
とちらと顏を見て又色を染めた。

三

時に次の室の襖を開けて、敷居越しに一寸手を支いたお房が、

「あの、お風呂を召しますか。お浴衣や何か彼方へ最う支度をして置きましたが。」

と言つて不圖、縁先の太平を見付けて、

「おや太平さん。お前もお知らせ申しに來たの。」

「はア、今加減見たら丁ど可かつたゞから、お前に聲を掛けて、直に此方へ廻つて來たゞアよ。」

「おや〳〵飛んだ雨花道だつたのね。おほゝゝゝ。」と振返つて座敷の二人に、

「あの宜しくば直に……。」

「むゝ、入らう。太平、久し振で流して貰はうかな。」と金彌は無造作に立つて、

「歌さん、さア行かう。」

歌子は慌てゝ、又、

「あら私は後にしますよ。」

「はゝゝ、家ん中でも那樣に羞澁むのかい。」
と言捨てゝ座敷を出て行つた。お房は跡から聲を掛けて、
「あの、お新が彼方へ參つて居りますから。」
「むゝ。」
と聞流して行く。太平も引返して直に湯殿の方へ廻つた。お房は座の取散かつたものを片寄せながら、
「奥樣、お風呂を召したら些少其處等を見て居らつしやいますか。未だ暮れるには間がございましよう。」
「然うさね。私未だ何處も知らないのだから。」
と歌子は外の方へ目を遣つて、折しも下の磯を三四人、何か口々に跳で歌ひ連れて行く里の子の影を見送つたが、振返つて
「お前は此地へは最う幾度もお出なの。」
「はい大奥樣のお供で隨分參りました。去年なぞは長い事居らつしやいましたから、私も最う此邊の事には大分明るくなりました。」

「然う。阿母様は那様に能くお出掛けなさるの。」

と何心なく聞く。お房は口を輕く、

「はい。ちよく〳〵能く入らしやいます。一體にお出好きですからね、東京のお宅に居らつしやる時でも、大抵毎日何處へかお出掛けにならない事はございません。能く那麼に行らつしやる先がある。と私共はお噂して居る位なんですの。ですから自然お交際も廣くつて、お宅に居らつしやる時も、御隱居所は大抵お客様ですの。」

「まア那様に……。」

と歌子は未だ能く知らぬ姑の上を、流石に物珍らしく其儘、談話を移して、

「全體快濶で居らつしやるのね。だから私のやうな氣の付かないものは、仕合せだと思つて居るの。」

「あれ、奧様が何でお氣の付かないお方でしやう。それは別として大奧様は全く御快濶で居らつしやいますの。私なぞも勤め好いものですからついお傍に居て、一年二年と言つて居ます中に到頭這麼古狸になつて了ひました。

私最う十年から御奉公して居ります。ですから最う自分の家のやうな氣になつて、段々我儘になるばかりで仕樣がございません。女中の古手なぞと云ふものは若い奧樣には些少敵役でございますのね。おほゝゝゝ。」と水を向けられると直ぐ、流れるやうに辯し立てた。歌子は何氣ない態に、

「いゝえ、そりや古い人に限るよ。私もこれから些少お前に習はうと思つて居るの。」

「まア私なぞに何をお習ひなさる事がありましやう。」

「然うぢやないよ。知らない事は矢張習はなくつちや仕樣がないぢやないかね。」

と歌子は膝を押向けて、重ねて何をか言出さうとした。

四

お房はぢろりと一目、見掛は一寸人の惡さうな目縁の黑ずんだ眼に歌子を見て、

「でも、それにや旦那樣が居らつしやるぢやありませんか。」

「なに那樣談話ぢやないの。」
と歌子は調子をかへて、單不圖思付いたやうに、
「あの、何かえ、家の中の事は、これまで勿論阿母樣が重になつて取計らつて居らしつたのだらうね。」
「いゝえ、大奧樣はとんと最う家の事にはお構ひなさいません。表の方は彼の執事代りの安井さんが爲すつて、お奧の方は一切まア私が致して居りました。ですから奧樣はお歸りになりますと最う、直ぐに何も彼もなさらないぢやなりません。」
「然う、それぢや嘸、樣子が知れないでどぎまぎする事だらうね。」
「なアに直に慣れてお了ひなさいますよ。多勢手が揃つて居るのですから、何をなさるまでも無いのですけれど、それでも一々何の彼のと申上げて參りますから、氣をお配りなさるのが初めの內少し御面倒ですがね。」
「それに何うしても新らしいものゝする事は勝手が違ふからねえ。全體阿母樣が傍から指圖して下さるのが一番いゝのだけれど。」

とは言つたが、然うは思つては居なかつた。流石に包ましげにしてお房の氣色を見て居ると、直に言消すやうに、

「あれ貴方、傍に付て居らしやつて、彼の此のとお指圖をなさるお姑御をお持ちなさいましたら、それこそ甚麼に御窮屈でしよう。窮屈ばかりなら可うございますけれど、那樣お方に限つて屹度お氣の練れない處があるもんです。よしんば然うでなくつて、惡氣でなくお世話好きでなさるお方にしても、何から何までお考へがしツくり合つてお出なさるといふのは、却々ございません。貴方其の方ぢや甚麼にお仕合せだか知れやしませんよ。なに少々の過失がお有りなすつても、旦那樣なら何を仰有るものですか。」

歌子は稍々訝かる氣勢に、

「まア、阿母樣は那樣にもお構ひなさらないの。」

いゝえ、お構ひなさりたくも那樣お暇がございませんもの、先達御隱居所をお建てになつてから、時偶お奥の方へ入らつしやいましても何時も十分とは下に落着いて坐つては居らつしやいません。いえね御隱居所の方にも、お客

様の時の外は大抵は居らつしやらないで、何處かお出ましになるか、でなくば團子坂の御別莊の方へ行つてお出になります。御別莊へ行らしやれば大抵三日四日はお泊りで、直ぐに歸つて入らしつた事はないのですからね。大奥樣は本當にお遊びなさるのでお暇がないのです。考へると御氣樂な御身分ですのねえ。それに旦那樣が……。」

と言掛けた途端、浴衣の上へ糸織の廣袖を重ねて、何時か湯から上つて來た金彌が、大股に衝と中へ入つて來た。

「何だ。下らない噂話をして居るな。」

あら、お早い事まア。私未だ却々だと思つたからお世話にも上らないで。」

と歌子は笑顔になつて振仰いだ。

「なにお前ぢやあるまいし。何時まで掛るものか。いゝ湯だ。入つて來い。」

お房はそれと逸早く立つて、

「奧樣お上りになつて、お召替をなさいましやう。何の召物を出して置きましやうね。」

「然うね。山繭の方でも。帯は何れにしやうかね。」
金彌は笑ひながら、
「何だ。又着更へたり何かして誰に見せるのだ。」
「可うございますよ。」
と歌子は言返して、お房の跡から次の室へ立つた。

(十) 春の海

一

お新は今、縁に立つて目の前の、うら〳〵とした日に融けて行きさうな下の濱邊を、親爺の太平が寫眞機を擔いで供に立つて金彌を先に、歌子と三人、小松隱れに打連れて行く後影を見送つて居た。砂地はきら〳〵と朝日に煌めいて、近い長崎の村居はさながらに霞立つて、浦を出て行く漁り舟の續いて十二三艘沖に遠く白帆の影を並べた。お新は其の方には目もくれず、ぢッと三人の行衞を只打目戍つて居た。

「おほゝゝ、何を那樣に茫然して見て居るの。」

とお房は不意と來掛つて脇から呼掛けた。お新は振返つて罪もなく、

「何俺、奥樣と旦那樣、餘り樣子が好いで見惚れて居たゞアよ。」

「おや、未だ那樣處に居らつしやるの。」

と言ひながら縁へ出て來た。お新は向ふへ行く三人の跡を指さして

「それ彼處へ行かつしやるだア。」
「おや眞箇にねえ。」と伸上つて奥樣は本當に、何處から見ても好いお姿して居らつしやる事。」
お新は目を輝すばかりに、
「はアお前樣も然う思ふだかね。それぢや俺ばッかりでねえだね。お房樣、俺先刻から然う思つて居たゞアが、毎年恁うして、東京から種々な衆が入つて來るが、俺未だ奥樣のやうな縹緻の好い人見た事ねえだよ。奥樣のやうなのは東京でも一寸くら無えのだらうね。」
「然うともさ。一寸くら處ぢやない。外にや有りやしないよ。お前なんぞは此方に坐つて居て見られるなんて贅澤な談話だよ。」
「あれ俺坐つちや居ねえだよ。」
「おほゝゝ、まア可いよ。おや〳〵那麼方へ行らつしやるよ。あの雀岩でもお撮影しになるのか知らん。まア太平さんの頭の能く光る事、照返しが羞明しい位だよ。おほゝゝゝ。」

「お房様悪い事言ふだ。阿父に言付けて遣るだアよ。あれ、奥様轉ばしつた。旦那様起して居さつしやる。やア何だか戯け合つて居さつしやる。お房様、旦那様はがいに奥様に優しいだね。」

お房は微笑むやうな影を一寸口元に浮べたが、

「然うさ。でも結構ぢやないかね。旦那様の優しいのは。」

「はア、そりや然うだがね、俺餘り優し過ぎると思ふだ。東京の御夫婦つてものは那麼もんか知んねえけんど、人前なんぞは些少も構はつしやらねえだね。俺の方で那麼眞似さつしやると……。」

と言掛けて流石に憚かるやうに口を噤んだ。何も露出しの田舎者の眼にも、何を見咎めたかと、お房は心可笑しく、

「那麼眞似ッて其麼事をさ。」

お新は言はず、たゞ打笑つて、

「あに何でもねえだよ。いゝ衆は種々な事さつしるだア。」

同時にお房は不圖目を返して、

おや、信玄が有る。奥様忘れて行らしつたのだよ。それとも置いて居らしつたのか知ら。」

「はア忘れて行かしつたゞ。持つて行かつしやる心算で、出掛けに種々な物入れて居さしつたゞ。」

お房は聞いて慌たゞしく、

「然う。それぢやお前追掛けて行つて、一寸お屆申して來ておくれ。」

「おう、そんぢや俺此處から直ぐ驅出して行くだアよ。」

と急いで庭下駄を穿込んで、手提を受取ると、見得もなくばた〳〵と驅出して行つた。

二

見ると、太平は波打際に三脚を立てゝ、前に突出た巨巖に向つて暗箱を据付けた。金彌は脇に、彼是と指圖しながら、

「太平、お前も今度は最うすツかり慣れたな。」

「はア道具の扱ひにかね、」と太平は器械を装置しながら、「此分だら追付け寫眞

屋をおッ始められますだよ。何うでがす此位の鹽梅ぢやア？」

「むゝ可し。跡は俺がする。」

と程よく位置を直すと、振返つて脇の眞砂を分けて咲出した花のやうに、色を集めて匂やかに立つて居る歌子に、

「さア歌さん、お前其岩の右に出て居る角の處へ立つんだ。」

「あら私那麼所へ行かれませんわ。」

と深く淺く波に喰込まれた岩の、汐は引頃で水には遠かつたが、見るから凄まじげな態に氣後れして逡巡りした。金彌は打笑つて、

「何だ弱虫だな。それぢや手を引いて遣らう。さア。」

「厭よ。何だか恐いんですもの。」

「奥樣、可恐えだら俺負ひますべえよ。」

と太平は忠義立つて口を入れた。歌子は頭を掉つて、

「あれ何も那樣事をしてまでも行く事はないわ、」と金彌に向つて、「貴方私の代りに太平をお立せなさいよ。」

「はゝ、何言はつしやるだ。俺のやうな者を何うしますべえよ。」

金彌は衝と進んで、

「可し。俺が負つて遣らう。」

「あら。」

と歌子は避けるやうに身を引いて、聲を低く口早に、

「お止しなさいよ。人が見て居るぢやありませんか。」

と折しも彼方から、三人ばかりの海苔掻の若い女が、此處を指して珍らしさうに寄つて來るのを目に止めて言つた。金彌は色も移さず、

「何だな、那樣事を。負ふのが厭なら抱いて行かう。」

「まア、貴方は…………。」

と、慌てゝ引離れて、

「那樣事をなされば私、彼方へ行つて了ひますよ。」

「奥樣、奥樣。」

と其時お新は息せきと、歌子の忘れて行つた信玄袋を手に提げて駈けて來た。

「これ忘れて行かしつたのを、今氣い付いたで……」

「おや、能く持つて來ておくれだね。」

と歌子は好に機にして駈寄つて、目顔に犒勞つて受取ると其儘、

「お新や。一寸。」

と先に立つて足早に、彼方の松山の方へと行く。お新は樣子を知らず跡を追つて、

「奥樣、何でがすよ。」

「可いから此方へお出よ。」

と歌子は跡も見ず向ふへ行く。金彌は聲を高く、

「おい、何處へ行くのだい。其方へ行つて了つちや仕樣がないぢやないか。」

「あれ奥樣旦那樣が呼ばつて居さつしやるだァに。」

とお新は振返つて立止つた。歌子は足も止めず、

「おほゝゝ、可いのだよ。」

とばかり砂山を上に、小松の簇立つた方へ來て、初めて振返つて莞爾とした。

三

金彌を只見て手を擧げて頻りに麾く。太平は例の破鐘聲て、

「奥樣、何で那樣處へ行かつしやるだア。早く來さつせえよう。」

歌子は笑つて只、持つて居た手巾を振つて見せた。お新は一人て氣遣つて、

「奥樣、何故行かつしやらねえだね。旦那樣怒らつしやると仕樣がねえだアに。」

「おほゝゝ、打捨つてお置きよ。今に此方へ入らしやるよ。」

と小脇に一つ捨石のやうに、松の根元を少し離れて、さながら佛掌薯を伏せた姿して居る岩の、手近い一角の塵を拂つて腰を掛けながら、

「お新、お前ねえ……。」

と今屆けて遣した信玄の中から、小さな手帳を出して、何をかさら〳〵と鉛筆を走らせると、紙を引裂いてお新に渡して、

「これをね、旦那樣の處へ持つて行つておくれ。そしてお前は最う直に歸つても可いよ。御苦勞だつたね。」

とばかり使に立たして遣る。お新は何の事とも覺えず、解らぬながら意を受けて其儘引返して行つた。

歌子は此方に、手巾を口に押當てた儘、ぢつと跡を見送つて居る。歌子の來ないのを見て、金彌は其中に、太平と何か話合つて居るやうに見えたが、其時來合せた先刻の海苔搔の女を、差詰め身代りに賴んだらしく、頓て其中の一人が目指した岩の上に却つて似合はしげな姿を見せた。途端にお新の、傍へ近寄つた影が見える。金彌が受取つて讀んで居るのが見える。太平がのそ〳〵と傍へ寄つて來る姿が見える。と金彌は急に笑出して、歌子の方へ振返つて首肯いて見せた。歌子は笑顔を返して其處に待つて居た。

寫眞は程もなく終つて、暫くして太平は器械を肩にしてお新と共に歸つて行く。傍に居た見物の者も思ひ〳〵に散つて、金彌は一人、此方を指して遣つて來た。

「何だ、逃出して來なくつても可いぢやないか。」

「でも餘りきまりが惡いんですもの。」

と歌子は立上つて、迎へるやうに差寄ると、

「貴方は甚麼事をなさるか知れやしませんわ。」

「何故？」

「だつて今で何もお構ひなさらないんですもの。いくら太平の前だつて遠慮がありますわ。それに那麼に、外の者も見に來て居るのに。」

「馬鹿な。詰らん隱立てをする奴が有るものか。世間を忍ぶ身なら知らん事。那樣必要が何處にある。」

「それにしても程合が有りますわ。私には那樣思切つた事は出來ませんよ。」

と言つて近くへ一寸目を遣つて、小聲に微笑みながら、

「でもねえ貴方、矢張二人ッきりの方が何うしても可いのねえ。」

「うむ、そりや惡くはないがね……。」

「あらお厭ならお止しなさいまし。」

「はゝゝ何を言つて居るのだ。」と金彌は尚機嫌よげに、「で、何處へ行くのだい。」

外に聞く人もないので、歌子は調子付いて、

「なるたけ人の居ない處へ行きましやうよ。」
「だがお前、未だ何處も知らないぢやないか。」
「知らなくつても可うござんすよ。」
「何うして？」
と振返る。歌子は又聲を低く、
「矢張二人で只居たいのですよ。」
とぽつと色を散らして、眼を下にした。

(十一)松の中

一

見上げる背後は一帶の防風林で、浦曲に長く、磯に迫つて、青松、白砂の影を遠く日に霞ませて居る。右手に見える長崎の漁村を跡に、二人は頓て、肩を並べて林の中へ入つて行つた。うら〳〵と、長閑に渡る春の日射に、松の綠もさながらに伸立つやうで時も知らず落返つては又囀つて居る雲雀も、遠く近く目白や頰白の、共音に歌を呼交はして居るのも、折に連れて更に懷かしまれる。樹の間を分けて路を外川の浦の方へ、急がぬ足を靜かに運ばせて、人交ぜもせず、思ふ二人で思ひの儘に行く、此時の二人の心地は、二人の外に知る者はない。

「貴方、こゝを行つたら何處へ出ましやう。」

と歌子は行手の盡きぬ樹立の影を打望んで言ふ。金彌は微笑むばかりに、

「何處ッて此處は道ぢや有りやしない。行く先は知れるものか。」

「あら、それぢや貴方御存知ないの。」

「然うとも、お望みだから只人の居ない處へ來たのさ。」
「でも貴方が伴れて入らしつたのぢやありませんか。那樣意地の惡い事を仰有らないで敎へて下さいよ。」
と少し甘えるやうに下から見上げた。金彌は打笑つて、
「はい、なに何方へ行つたつて實は大した事はない。此處へ入つた事はないが、外川へ出るか、高神へ出るか、大圖は知れて居る。お前が餘り好い氣になつて居るから、一寸驚かしたのさ。」
「まア人の惡い。私知らない處だけに吃驚したぢやありませんか。貴方は那樣方ぢやないと思つて居たのに。」
「ふむ、甚麼者と思つたね。」
「可うござんすよ。私何か知らで其中に御禮するわ。」
「はい、恐いな。急に讎持になつた譯だね。宜しい、闇の晩は氣を付けやうよ。」
「何ですねえ、那樣大袈裟な……。」

「でも女の一念だ。」

「まア、おほゝゝゝ。」

と裏もなく笑合つて、又先へ行く。金彌は輕く面を打つて來る風を心地よげに、

「歌さんだが恁うして居ると、甚麽心持がするね。」

「え、甚麽とは?」

と振仰ぐ、金彌は眼を見合せて、

「いえさ、可いとか惡いとか何か考へがあるだらう。」

「あら那樣事、言はなくつたつて解つて居るぢやありませんか。」

金彌は態とらしく、

「解らんよ。私は悟りが惡いから。」

「知りませんよ。那樣事仰有つて、何か又言はせて調戯はうと思つて。」

「然うぢやない。實際聞きたいのだ。私は少し了解めない事がある。」

「えッ。」

と歌子は眼を瞬つて、思はず顔を見入つたが、聲を彈ませて、

「あら、何が？」

「と大業に言ふ事もないがね……。」

「まア、何ですよ。人を驚かしてばかり居らつしやる。」

「はゝ、お前は何にでも驚くのだね。」

歌子は詰寄るやうに、

「いゝえ、それよりか今仰有つた、了解めないといふのは何ですの。」

と氣に掛けて、稍口早に言つた。

二

金彌は深い意味もなく、半ば笑掛けて、

「言つても可いが、又驚くぜ。」

と調子も自ら輕く、眼にも戯れて居るやうな影を見せた。歌子は併し聞捨てず、

「驚く位何でしやう。仰有つて下さい。氣になりますから。」

「ぢや言ふがね。實は何だ。お前の本當の心が未だ解らんのだ。」

「えッ。」

と歌子は呆れ顏に、

「まア、何うして那樣事を仰有るの。」

「はゝゝ、だから驚くと言つたのぢやないか。」

「あれ、串戲ではありませんよ。外の事とは違ひます。明瞭と仰有つて下さいまし。私の何處がお解りになりませんの。」

「何だ。那樣に眞氣になるには及ばない。只一寸言つたばかりぢやないか。」

「でも那樣お言葉が貴方のお口から出やうとは、思つて居ませんでしたもの。私口惜しいと思ひますわ。」

「何故ね。」

「然うぢやありませんか。貴方に那樣事を言はせるだけ、私の方に行屆かない處があると思ひますもの。」

金彌は不意に歌子の肩へ手を掛けて、傍へ引寄せるやうにして顏を打目戍つ

た。歌子ははッと身を引かうとしたが、放ちも遣らず、尚も引付けて

「お前は全く可憐しい處がある。なに串戯だよ。一寸氣を試いて見たのさ。今言つた事は殘らず取消す。ね、可からうそれで。」

「まア、それぢや好い加減な事を仰有つたんですか。」

と歌子は目を落して、ちらと厭な顏色を見せた。

「はゝ、怒つたか。」

「なに怒りやしませんけれどね、何だか人を玩具のやうにして居らつしやるんですもの。」

「可いぢやないか。何うせ當分は、お互に兒供になつて遊ぶんだ。」

歌子は物言はず、其儘歩を移して何か物思ふやうな眼差に、ぢッと前を見詰めて居たが、

「貴方は些少も眞面目ぢや居らつしやらないのね。」

金彌は一寸歌子を見返つたが、

「むゝ、何う眞面目ぢやない？」

「でも然う言つちや何ですけれど、始終串戲のやうな事ばッかり言つて居らつしやるんですもの、些少も身の入つたお談話はなさらないぢやありませんか。」

「むゝ、それぢやお前は、今迄些少も身を入れちや居なかつたかね。」

「あら、然うぢやありませんけれど……。」

「然うさ。然うでなくつて那樣言葉が出るものか。お前は折角此處へ來て、外の事なんぞ考へて居るから可けない。お前の身の入れ方が少し違つて居るね。」

「いえ、然うぢやないのですよ。私は……。」

と言はうとしたが直に遮られた。

「解つて居る。那樣談話をまア今から持出して來て何うするのだ。第一何の爲に二人で旅へ出たんだと思つて居る。外へ氣が散るやうぢや何うも賴もしくないな。」

「あら酷い。那樣方へ持つて行らつしやるのは餘りですわ。」

金彌は頭を掉つて、口には笑ひながら、

「然うでない。考へて見ると何うも些少冷淡だよ。」

「まア私、何うしましやう。可うございます。何とでも仰有いまし。」

と衝と引離れて、一人つか〳〵と先へ行く。金彌は見送つて態と、路を足早に横へ切れて、

「おい〳〵。那樣方へ行くと何處へ出るか知れないぜ。」

「え、」

と驚き顔に振返つて、只見て急がはしく駈戻つて、

「貴方は何にしても餘りね。」

三

其時向ふの松の中から、

「やア。」

と不意に聲を掛けて、前へ現はれた人がある。近くに見る眼の無い心算で、全で氣を許して居た歌子は、あらぬ秘密でも見られたやうに、思はずはッとして

振返ると、

「何うした。室賀君。此方へ來て居るとは知らなかつた。出し拔いたね。興津の方へ行くと言つて居たぢやないか。」

と近寄つて馴々しく言ふ。三十前の、平たい顔の、脊の低い男、錆茶色の旅行服に、植物採集用の大鞄を掛けて、薄い天神髭の下から、見事な美しい齒並を見せた。歌子は顔を見ると直ぐ此間披露の席で燕尾服で澄まし返つて居た客の一人だと思つたが、未だ言葉も交さぬ身の、心を置いて其儘脇に控へた。金彌は親しげに進寄つて、

「や、太田君か。妙な處で遇つたな。なに興津行は、都合で急に模樣替にしたんだ。別に出し拔いた譯ぢやない。此方にや御存じの別莊もあるし、かたがた便宜だからといふ母の說に從つて、到頭來たやうな次第さ。時に君は又何うして來た。」

と掛けて居る鞄に目を着けて、「はア例の道樂だね。」

「む、實は昨日佐原の同好の者に招かれて彼方へ行つたんだがね、今日の日

曜を幸ひ別に同伴も出來たもんだから此方まで伸したんだ。やいろ〳〵珍談も有るが……。」

と言掛けて跡を切つて、取敢へず歌子の方へ挨拶に來た。歌子は未だ物馴れぬ態に少し顏を赧めながら急がはしく禮を返して、言葉少なに包ましやかな挨拶した。金彌は悅ばしげに、

「いや、此處で君に遇はうとは全く思はなかつた。何處に泊つて居る。」

「萬松館にさ。此方も君が居ると知つたら早速に、驚かすのだつたが。いや併し此際邪魔が入つちや君の方ぢや大迷惑な談話だね。此處で遇つたのも恐らく百年目かも知れない。」

「なに那樣事が有るもんか。是非來てくれたまへ。大いに歡迎する。なんならこれから直ぐにでも可い。」

「はゝゝ、負惜みを言ふな。今も甚だお安くない處を拜見したから、實は聲を掛けるのも何だと思つて差控へた位だ。後で恨まれるのも甚だ氣が利かないから、お察し申してこれで最う引退るよ。」

「何だ、那樣皮肉な事を言ふもんぢやない。僕は可いが、妻が驚くよ。歌さん、此男は一體口が惡いのだから、其心算で居るが可い。」

太田は紛らすやうに手巾で顏を押拭つて、

「いや、お優しい事で。こりや何うもいよ〳〵お邪魔だね。飛んだ處へ來合せたもんだ。室賀君。其方には邪魔でも有り、此方にや又、甚だしく目の毒だから、一先づ左右へ引別れやうよ。いづれ東京へ歸つてから、御存分に見せ付けられる事にしやう。何分今は不意打で、未だ動悸が收まらない位だ。」

と嘲けるやうに笑出した。金彌は少し眞顏になつて、

「君は兎角に然う言ふ事を言つて可けない。相手は僕ばかりぢやないよ。少し氣を付けてくれんぢや困るぢやないか。」

太田は事ともせず、

「然うか。これでも頗る氣を付けて居るのだが、何にしても引退らう。や、其前に一寸知らせる事がある。今珍談と言つたのはそれだよ。」

「え、珍談？」

「むゝ、併しこれは少し令夫人の前ぢや憚る事だから……。」
と言つて袖を引いて、片脇へ伴れて行つた。

四

引かれるまゝに六七歩、彼方の松の蔭へ寄ると、太田は急に聲を潜めて、
「おい、彼の下谷に居た小久ね、君は彼女の行衛を知つて居るかい。」
「え、行衛？　何だ、突然に這麼處で……。」
と金彌は少し慌てた形容で、歌子を尻目に掛けて同じく聲を落して言つた。
歌子は聞いては惡い事だと思つて、一人先へ歩出して、少し懸離れた彼方で、其處等を眺めて居る態で待合せて居た。太田は見送りながら、
「や、令夫人却々氣が利いて居る。向ふへ外して行つたが、まさかに這麼談話とは思ふまい。はゝゝ。」
金彌は氣に、掛けるやうに、傍から促して、
「おい、那樣事よりは、今言つた何は何うしたんだい。」
「はゝゝ、妙な顔をするな。實は今並んで居る前で素破抜いて遣らうと思つ

て居たんだが、新婚早々の事で些少氣の毒だつたから手を緩めて遣つた。少し位は感謝しても可からう。」

と口に任せて底に冷笑の影を見せて言つた。金彌はもどかしげに、

「詰らん事を言つて居ずに、其行衞が何うとか言つた、その方の談話を早くせんかよ。」

「はゝゝ、急込む處が可い。何さ、彼の女が今、此方に來て居る事を知つては居まい。」

「え、何處に？」

「僕と同じ宿に泊合して居る。何うだ妙だらう。」

金彌は其顏を直と見て、

「君は逢つたのか。」

「なに逢ふもんか。僕が逢つた處で仕樣がないからね。先方で見付けなかつたから其儘にして置いた。客に連れられて昨日から來て居るんだ。僕の二つ置いて先の座敷に居る。奴何處から來たかと思つて後に女中を捉へて

聞たと思ひたまへ。」

「むゝ、すると、」

「ありや銚子の藝者ですよと言ふのだ。然うか。這麼處へ來て居るのかと思ひながら、序にそれとなく樣子を聞くと、何でも此正月頃から土地へ出て、今ぢや大分賣れるさうだよ。何うだ。目と鼻の間に來て居て、お互に知らないと言ふのも妙ぢやないか。今君の姿を見掛けた時、いや此樣子を彼女に見せたら何うだらうと思つた。」

「なアに、何うするもんか。見たら冷笑する位なもんだ。」

と金彌はそれとなく歌子の方を見返つて、距離の遠いのに落付いたらしく、向直つて艶もなく言放したが、其儘舌を強く、

「那麼動物を何も人間扱ひにする事はない。」

「おい〳〵、餘り那樣口は利かれまいぜ。一時は、大分御熱心で、動物處か、何うして人間以上に取扱つて居たぢやないか。」

「脇からは種々に見えるのさ。那麼者に重きを置いて何うするものか。所

謂賣物買物ぢやないか。」

「可し、そんなら一つ逢つて大いに嗾けて遣らうか。」

「え、」と少し聲を濁らせて「そりや驚きはせんが、併し態々那様酔興な眞似をするにも及ぶまい。」

「はゝゝ、それ見るが可い。詳しくは知らないが、何でも弱身があると言ふ事だぜ。近くに居るのだから、兎も角警戒するが可からう。」

「なに那様弱身なんぞが有るもんか。それは可いが、君、兎も角家へ來ないかね。」

と談話を直に脇へ逸らせた。

五

「むゝ、併し出直して行かう。宿に同伴も置いてあるし、最少し採集も遣らうと思つて居るから。」

と太田は有の儘に答へて、肩を滑り掛けた採集鞄の掛紐を直しながら、

「それに君達も出掛なんだらう。」

「なに此方は別に當のない散歩だから何時歸つても可いんだ。」

と金彌は仔細なげに言つて、微笑みながら、

「まさかに邪魔扱ひにはしないよ。」

「はゝゝ、言はれない先に用心したな。邪魔は無論邪魔だがね、餘り附着いてばかり居ても倦きるだらうから、偶には少し氣を拔くのも可からう。何しろ後に一寸行かう。」

「然うか。それぢやァ待つて居るから寄つてくれ。勿論わざ〳〵呼ぶほどの物は何も無いが。何うだ、其同伴といふのも一處に誘つて來ては。」

「むゝ、行くと言つたら伴れて行かう。併しこりや少し君とは畑の違つた方だからな。」

「那樣事を言つて、君の事だから、怪しい者を召連れて來て居るのぢやないか。小久の談話なんぞも、此方に來られない爲の拵へ事ぢやないか。」

「や、呆返つた邪推を遣る。那樣事を言ふと僕の代理に小久を差向けるぞ。」

「はゝゝ、ぢや兎に角後に。」

と頓て別れて、金彌は元へ、太田は歌子に一寸會釋して、横手の樹立の深い方へ入つて行つた。歌子は待倦んだ姿で、

「まあ、何を話して居らしやつたの。」

金彌は何喰はぬ顔で、其儘押並ぶと、

「なに彼の男の身に付いた、詰らん内所話さ。」

と紛らすやうに直ぐ、

「後で又來ると言つて居たよ。相應に口が惡いから、今から用心して置くが可い。」

「然うねえ。私なんぞは未だお馴染でもないのに、隨分つけ〳〵と種々な事を仰有るんですもの。先刻は甚麽にきまりが惡かつたでしやう。何ですか彼の植物學者?」

「なあにありや道樂で遣つて居るんだ。電氣の技師なんだがね、嗜好で暇さへあれば那麽事をして居る。」

「奥樣は?」

「細君は元許嫁なんだ。標致は餘り好い方ぢやないがね。氣の利いた、如才のない交際好い人だよ。歸つたら早速逢つて見るが可い。」
「然うですね。いづれ引廻して戴きましやうよ。今お幾歳なの。」
「然うさな。年は能く知らないが、歌さんよりは餘程上だ。最う子持だよ。今歳確か三歳になる。いや今は最う治つて居るが、太田が最初、結婚するのを嫌つてね、一時非常に揉めた事がある。」
「おや何うして？」
「なに外に望みを掛けて居る人が有つたんだ。太田は何でも其婦人を貰ふと言つて、今の細君の方を破談にしやうとしたんだね。處が田舍の義理堅い家の事だから、太田の兩親から眞先に怒出して、何でも一年近く紛紜して居たが、到頭往生づくめに押付けられて、元の通りに無據くなつたんだ。だから初めは細君も甚だ氣の毒の地位に居たが太田も其中に諦めたと見えて、いつか我を折つて、今ぢや最う其時の事なんぞは少しも言はんやうになつたがね、尤も細君の方も餘程怜悧で、太田が何うする事も出來ないやうに仕向けた結果

もあるのさ。」

「まア、厭な談話ね。」

と歌子は投げたやうに云つて、美しい眉を顰めた。

「何故？」

と金彌は聞咎めて訝かしさうに見返つた。

六

歌子は尚顰めた眉の影を濃く、快からぬ眼色を先に、繰返して又、

「厭ですわ那樣お談話。其奥樣の身になつて御覧なさい。然ういふ方だから口にこそ出さなかつたでしやうが、其當時は甚麼でしたらう。近い處にも那樣方があると思ふと、何だか心持が惡くなりますわ。」

金彌は何を言ふのかと、稍異樣の思をしたが、輕く流して、

「だがそりや過ぎた事だ。今時分那樣事を言出したつて本人同士も最う相手にしやしない。」

とそれなり切上げやうとした。歌子は肯かず押返して、

「でもお談話のやうぢや、太田さんの方は何う好く取つても、矢張無據く然うなつたんでしやう。私それが厭なんですわ。だつて根が拵へ物なんですもの。些少も有難かありませんわ。」

「はゝ、お前は却々執念深いね。それぢや若し、一旦何か過失があれば、お前は何處までも宥さないといふのかい。」

「あら然うぢやありませんよ。那樣お談話とは違ふぢやありませんか。」

と何か依違つて居たが、もどかしそうに肩を搖つて、

「何だか思ふやうに言へませんわ。」

「可いさ。人の事ぢやないか。隣の疝氣を何時まで荷厄介にして居ても仕樣がない。最う好い加減にして置くが可い。」

「あれ、人の事だつて可かありませんよ。ですがね、貴方、」と不意に調子をかへて、

「男の方達といふものは、一體に氣が多いものですね。」

「むゝ、併し何方が何うとも言へないのが隨分あるね、だが今の太田の談話な

んぞを其中へ入れるのは可哀相だ。初めから自分で決めたんぢやないからね。」

「でも外に何か出來てから嫌ふなんて矢張可けませんわ。何方にしても私、氣の變る人大嫌ひ。」

と聲に力を籠めて言ふ。金彌は微笑みながら「何うだそんなら私が若し變るやうな事があつたら何うする。」

「え。」

と不用意の耳に驚かされて振仰いだが、直に晴やかな笑顔を見せて、

「あら、貴方に那樣事は有りやしないわ。」

「なに無いと限るものか。何うかして魔がさしたとしたら何うする。え、お前は何う出て來る。」

と面白づくに聞く。歌子は頭から取合はぬやうに、

「お止しなさいよ。那樣事で調戯ふのは罪ですわ。」

「え、それぢや全で疑はないのか。」

「解つてるぢやありませんか。仰有らなくつても。」
「然うか。然うなると又張合が無いから、少し目の覺めるやうに氣を揉まして遣らうか。」
「あら、何ですねえ那樣……。」
と衝と寄つて顏を打目戍つて、
「貴方、私を何と思つて居らつしやるの。」
「はゝ、なに其眼付が見たかつたのさ。」
と言葉は盡きず、松も盡きず、近く浪の音は聞えるが、樹隱れて海は見えず、村手に遠く在鄕唄の、ちら〳〵見える麥の穗並を渡つて來るが、人は見えず春の日の長く、雲雀は小休みもなく囀續けて居るのであつた。

（十二）君が濱

一

其日太田は、同伴の大脇といふ獸醫と一處に別莊へ押掛けて來て、到頭金彌を誘出して銚子へ出掛けて行つたので、歌子は初めて留守居の淋しさを覺えると、離れて更に其人を思ふ心の深さを知るやうな心地がした。別莊住居の別に爲る事もなく、外に紛れる事もないので、何彼と思續けて居ると、お房は逸早くそれと見て、

「奥樣、お一人ぢや御退屈でしやうから、お新でもお伴れなすつて、今度は彼方の君ケ濱から海鹿島の方でも御見物なすつて入らつしやいまし。犬若の方とは、又變つて好い處ですよ。」

と深切顏に勸立てる。歌子は素直に、

「然うだね。行つて見やうかね。何うせ歸つて入らつしやるのは、一寸の事ぢやなからう。」

「然うですとも。夕刻とは仰有いましたけれど、事によると晩にお掛りなさるかも知れません。何しろ銚子までは此處から一里の餘ございますからね、何方にしてもお手間が取れますよ。」

「それに彼の御連中だからね、何處へ伴れられて入らつしやるか知れはしない。先刻も何だか浮いたお談話ばかりして居らつしやつたもの。」

と片頰に笑掛ける。お房は引取つて、

「おほゝゝ、ですが旦那樣が貴女を置いて何方へ行らつしやいましやう。よしんばお交際で無據く行らしつたにした處が、直に外して歸つて入らつしやるに決つて居りますわね。」

と顏を見て、笑ひながら「でも少しはお氣が揉めますかね。」

歌子は急がはしく打消して、

「あれ、那樣事を少しも思つて居やしないわ。那樣懸念があるやうな事ぢや又仕樣がありやしない。」

と何も疑はぬやうに言切つて、直に調子をかへて、

「それぢや行つて見やうかね。些少は緩くりして見て來ても可いのね。」
「可うございますとも。お飽きになるまで遊んで入らつしやいまし。若しお歸りになりましたら、直にお迎ひに上ります。」
「あれ那樣に長く行つて居やしないよ。」
と立上つて支度に掛かる。お新は呼ばれて急がはしく出て來たが、お供と聞いて手の物のやうに、
「はア、俺引張つて行くだかね。此處等の事だら、俺何でも知つて居るだアよ。奧樣それに初めて來さしつたで、何處を見ても面白がらつしやるで俺も張合があるだ。」
と勇立つて言ふ。お房は傍から稱揚立てゝ、
「其氣で御案内して上げれば奧樣もお喜びなさるよ。お前の案内なら確かなものさ。土地には詳しいし、大奧樣の御案内や何かで、度々最う慣れて居るからね。」
「奧樣足せえ續かつしやりやア、俺何處へでも行くだアよ。濱て貝でも拾は

つしやるかね。そんだら籠提げて行くだアが。」
「然う、お慰みにそれも可いだらうね。何でも奥樣のお氣に入るやうな處を方々見せてお上げ。御褒美は夥多出るからね。」
お新は正直に眼を睜つて、
「あアれ、其度褒美貰つて何うしべえよ。俺那樣物要らねえだよ。」
「おほゝゝ、まア可いから能く氣を付けて御案內してお上げ。」
と其中に支度が出來て、歌子は座に返つて來たが、お新を見ると莞爾やかに、
「お新、御苦勞だね。」
「はア行きますべえかね。」
とばかり、頓て、お房に送られて打連れて門を出た。

二

外は朝のまゝに、到らぬ果のない春の光、磯に不斷の浪の音も、さながら媚びるやうに汀を返して行く。海は更に凪いで、巖も岬も霞むばかりに見えた。歌子は空を打仰ぎながら

「まア好い日だ事。私が來てから毎日好い日ばかりが續くのねえ。」

「はア此二三日分けて好いだアよ。奧樣來さしつてから好くなつたゞから、阿爺なんぞ奧樣日和だッて言つてますだアよ。」

とお新は手籠を右に、歌子の傘を持つて赤い髮に花簪の、飾つて却つて可笑しげな姿で跡に跟いた。

「おほゝゝ、まア。」

と歌子は華やかに笑つて、其儘前へ歩出したが、松を離れて、下の海を彼方に見渡して、

「此方の海も、何時も這麼に靜かぢやないのだらうね。」

「荒れると甚太いだアよ。奧樣好い時に來さしつたゞ。そんだら今日は上の路を行かつしやるかね。」

「なに何方でも可いのだけれど、なるたけ知らない路を行かうと思ふからね。」

と左手の芝原を菫交りに松に添うて、細く通つて居る徑を望んで、

「おや、此方からも行かれるの?」

「はァ行かれますだ。矢張一つ處へ出ますだァよ。」

「それぢや此方から行かうぢやないか。」

と先に立つて、足搔を自由にきりゝと上げた、縞御召の褄を輕く、燃立つ糸遊を追ふばかりに、

「私今日は歩くわ。」

と聲も若やいで裾を捌いて行く。疎らな松の中を抜けて、處々に色を見せて居る春の小草の丘の方へ寄ると、暫くして眼の下に目指した君ケ濱の眞砂を長く、彼方海鹿島の出岬へ掛た一帶の海が颯と前に開いた。歌子は立止つて、眼もそゞろに、

「おゝ、佳い事。彼の松原の處が何とも言へないのね。此方は家がないから全て大きな庭のやうだねえ。」

と稍暫く佇立んだ儘で目を移して居る。お新は馴れて能くも見ず、義理のやうに一寸見渡したぎり、歌子を册く方に氣を取られて、

「此處を君ケ濱ッて言ひますだァよ。夏になると海水に泊つて居る衆が能

く遊びに來ますだが、今は客の少ねえ時でいくらも見えましねえだよ。此處から海ッ端へ下りて貝でも拾はつしやるかね。」

「あゝ下りて見やう。まア雲雀が能く啼く事ねえ。」

言ひつゝ、渚へと、眞砂に優しげな足跡を付けて横に下りて行つた。途端に目に入つたのは、今迄丘の蔭になつて居た方から、不意と出て來た人の影。歌子は何心なく見て、思はずはッとした樣子、能く似た姿の、もしやと胸を轟かす中に、頓て近寄つてぎよッとした。

思掛けず、其處へ來合せたのは謙吉であつた。

「おや！」

と不意の事で眼を睜つたなり、跡の言葉も出ず歌子は立止つて了つた。

歌子よりも更に驚いたのは謙吉で、顔を見合すと同時に、思はず一足、跡へ身を引いて、

「や！」

と僅かに言つたぎり、其處へ棒立ちに立つたが、面の色は見る間に變つた。

三

歌子は其態を眼に入れると、言はれず胸の迫るやうに、顔を合せるのも氣の毒の心地がしたが、場を繕ふばかりに急に笑顔を作つて前に進寄つた。

「まア謙さん、貴方何うして此方へ。」

謙吉は眞蒼になつて、異樣に眼ばかりを光らして居たが、口も思做しか戰く、やうに、

「貴方は？」

歌子は不快い顔を見せまいとして努めて、愛想らしく、

「私？ 私は彼の、此方に別莊が有りますので暫く遊びに來て居りますの。此處でお目に掛からうとは本當に思掛けないで居ました。貴方は大原の方に居らつしやるとばかり思つて居ましたから。」

「はア、大原へ行つて居ましたが、面白くないから一の宮へ來て彼處にも落付けないで成東へ來ましたが、何處へ行つても同じ事です。到頭此方まで轉移つたんですが、貴女が居ると知つたら……。や、併し最う言つた處が返らない。

はゝゝ私はわざ〳〵甚い目に逢ひに來たのですな。」
と淋しい身に浸みるやうな笑ひ方をした。歌子は眼を背けて、
「まア、那樣事を。」と脇に眼を睜つて立つて居るお新の氣をかねながら、急に調子をかへて、「あの、御病氣の方は其後何うですの。」
「え、病氣ですと。然ういふ事を貴女に聞いて戴いて何になりましやう。」
「あれ貴方、何故那樣事を仰有るの。それぢや全で……。」
と言掛けて躊躇した。謙吉は冷やかに、
「はゝゝ、なに私は、病氣などの事は考へても居ません。那樣事にかまけて居られるやうな氣樂の沙汰ぢやないのですからね、失禮ながら聞かれて却つて腹が立つやうな心持がしますよ。」
歌子は急がはしくお新の方へ振返つた。何か落付かぬ色で、早口に、
「お新、あのね、私此お方と一寸お談話をして居るからね、お前彼方へ行つて貝でも拾つて待つて居ておくれ。」
「はア、そんだら、」

とお新は此人を何者とも思ひ分かず、合點は行かぬながら深く怪むでもなく、言はれるまゝにそれなり行かうとした。と見て謙吉は衝と、

「いや、私はこれで、お別れにしやうと思ひますから……。」

「あら貴方私お談話する事があるのですよ。お新、それぢや先へ行つて居ておくれ。」

と彼方へ押遣つて振直つたが、流石に又言葉に少し思惱む。謙吉は色も直さず、

「いや、兎に角失禮しましやう。何のお談話があるのかは知りませんが私の境遇も些と考へて下さい。此上苦ませるのは餘り慘酷でしやう。」

歌子はお新の遠ざかつた影を見送りながら、眞顏にぢッと見上げて、

「貴方は御自分の事ばかり仰有つて私の事は少しも考へて下さらないのね。」

「え考へないとは？」

とぢろりと見る。歌子は詰り顏に稍聲を強く、

「貴方私に何の罪がありますの。」

謙吉は聞くと前へ進んだ。」

「むゝ、で何う仰有るんです。」

歌子は思切つて屹と、

「貴方は何う思つて居らつしやるか知りませんが、私は何も存じないで居た事を、貴方もよもや然うでないとは仰有いますまい。」

と開直る氣勢に、言葉付さへ何時か改つた。

四

「然うです。貴方の御存じない事です。」

と謙吉は猶冷やかに言つたが、屹と目を据ゑて、

「だから勝手にしろと仰有るんですか。」

「まア、いつ那樣事を申しました。」と歌子は急込んで、「其位なら何も、餘計な口數を掛けて貴方に這麼事を申しはしません。貴方は何故然う事を曲げてお取りなさるのでしやう。」

「ふむ、ぢや何うといふので？」

「謙さん、」

と歌子は又出直したやうな調子で、

「貴方、何時まで那樣心持でお出なさるのでしやう。私貴方に怨まれる覺えはないと思ひますが、然うお心の解けない處を見ますと、本當に情ないと思ひます。貴方那樣風で居らしつて、此先何うなさらうと思つて居らつしやるのです。貴方も男の方なら以前の事は薩張と、無い昔にしてお了ひなすつて、美くお交際なさらうといふお心になつて下さる事は出來ませんの。もと〳〵存じない事とは言つても、是が私から起つたとすれば、お互に長く厭な思をして居るのは寔に悲しい事だと思ひます。詰らない私のやうな者を假にも思つて下すつたのは有難いとは思ひますが、と言つてそれを何うする事も出來ないのは、貴方も能く御存知でしやう。ね、貴方お願ひですから何うぞ氣をお變へなすつて、私が何時も貴方を思つて居るやうな、淸いお友達になつて下さいまし。幼馴染の貴方と恁う、異しく仲を惡くして了ふのは、私には甚麼に辛いでしやう。此前お目に掛つた時にも此心は胸に有つたのですけれど、不意

の事で、それに……羞かしいのが一杯で、跡先もなく如彼は申しましたけれど、後には一人、いつまでも氣に掛けて居ました。私に悪い處が有つたら仰有つて下さいまし。私何のやうにもお詫申します。貴方、何うぞして氣を取直して下さる事は出來ませんの。」

と思入つては淀みもなく、眞情せめて說立てた。謙吉は物言はず、むつかしげな顏で聞きさして居たが、ぢろりと見返ると、何かせゝら笑ふやうに、

「然うしたら貴方の方には都合が可いでしやうが、私には那樣事は出來ません。のこ〳〵と何の面下げて、お交際が出來ましやう。そりや貴方からは、平氣で那樣註文も出せましやうが、いゝ面の皮な、私は而して何うなるんです。私は那樣、直に何うにでもなるやうな、淺墓な思ひやうをしたのぢやありません。貴方は未だ私の心を本當に知つては居ないのだ。」

と言つて投げ調子に、

「や、折角の思召ですけれど、私は御免を蒙りましやう。」

言はれて歌子はきりゝと眉を昂げかけて、心付いて急に取直しながら、

「それぢや貴方は私の心を些少も察しちや下さらなけりや、私の地位も全で考へちや下さらないのですね。聞いて下さい。貴方が何うなつても構はないと思へば、又言ふやうですが、何も好んで這麼事を言ひはしません。假令私が、那樣事存じません、と言つたぎりで見向きもしないでも、貴方は何うなさりやうも無いのぢやないでしやうか。貴方、私に寢覺を惡くばかりさせて、それで貴方は可いと思つて居らつしやるの。人を虐めるばかりが能ぢやありますまいが。」

謙吉は折れやうともせず、

「仕方がない。何うお思ひなさらうとそりや御勝手です。」

と顏には少しの緩みもなかつた。

五

歌子は力無げに聲を落して、

「それぢや最う貴方とは、お互に心持を惡くして、別れ〳〵になつて了ふんでしやうか。」

「然うですね。まア那樣もんでしやうよ。」と謙吉は態と鼻であしらふやうに言つた。歌子は又氣色を惡くしたが、ぢッと抑へて、

「そして貴方は、これから何うなさるの。」

「何うする。はゝゝ。」と取つて付けたやうに笑つて、「今更那樣事を聞いて何うなさるんです。私が何うならうと、恐らく貴方の知つた事ぢやありますまい。」

「まア、貴方は只人を厭がらせやうとばかりして居らつしやるのね。私も最う餘計な事を言ひますまい。貴方は何うでも最う、今思つて居らつしやる事をお忘れなさる事は出來ませんの。」

謙吉は聞きも終らず、急に舌を鋭く、

「仰有る迄もない、出來るか出來ないか能く考へて御覧なさい。私も勝手だが貴方も隨分勝手ですね。」

「然う。それぢや仕樣がありませんの。私も徒勞に種々な事を申したのね。」

と何時か嘲ち顔に、私が何う思つて居るといふ事も、全く貴方に通じないで了ふのですね。あゝ、這麼事なら、貴方の初めから何も私に知らせて下さらない方が可かつたのです。私の苦しい立場を、貴方も少しは考へて見て下すつても可いでしやうに。」

「はゝゝ、人の身體は然う御自分の勝手には行きませんよ。」

と又冷笑ふやうに言つたが、不意に調子をかへて、

「併し貴方には、仰有る通り何の罪がないのかも知れない。私が只拗くれて居るのかも知れない。殊に半病人で兎角に僻みを起し易いですからね。や、いゝ加減に別れましやう。恁うして居るほど、心持を惡くなさるばかりでしやうから。」

とばかり菅なく別れやうとした。歌子は流石に、心ならず眼を追はせて、

「貴方、そして何方に居らつしやるの。」

「え、宿ですか。別に居處などをお知らせ申す必要は無いでしやう。」

「まア貴方那樣にもお隔てなさるの？　それぢや全で仇敵同士ぢやアあり

ませんか。」

「何の道似たやうなもんでしやう。體裁ばかり作つて見せた處が、初まらんですからね。いやなに、お知らせ申した處で仕樣が有りません、私は最う此地には居ませんからね。目と鼻の先に貴方がたを置いて、默つて見て居るほどの度量はないのですから。」

「まア今何を言つても仕樣がありませんのね。何うともお心任せにして、いつか貴方のお氣の靜まる時を待ちましやう。」

「然うですか。氣長にお待ちなさるが可いでしやう。私も此身體で何うせ先は短いのですからね。」

と飽迄皮肉に言つて、其儘立直ると、

「や、失禮しました。」

と衝と別れて行つた。歌子は言ふやうもなく厭な心地に眉を顰めて跡を見送りながら、這麼事ばかりを言ふ人ではなかつたのだが、と病に窶れた弱々しげな身體を、流石又痛ましさうに、

「でも私の罪ぢやない。」

と心に繰返しながら猶も目を離さず、ぢッと見詰めて居ると、彼方も心付いたらしく、急に避けるやうに路を變へて、横手の松原の中へ入つて了つた。

（十二）袖袂

一

松を隔てゝ、樹の間を深く、路も擇まず入つて行く其姿の見えずなるまで、歌子は猶佇立んで居たが、ほッと息して、振返ると、お新は遠く汀を彼方へ、衣服の色も見分かぬ先まで進んで居る。と見て我に返つたやうに急がはしく歩出したが、興は醒果てゝ、何處へ行く氣も最う出なくなつた。

「けれども私が何うしたのぢやなし、氣の毒だけれど仕方がない。あゝ最う忘れましやう這麼事。」

と思直して足早に、裾を返してお新の傍へ急いで行つた。

謙吉は跡も見ず、紛れて松の奥へ入つたが、木立に最早我姿の、先方の眼から遮られたと思ふと、病患持つ身の言知らぬ疲れを覺えて、息を急しく立止つて、細く尖つて見えた肩を、呼吸の度に物哀れに動して居たが暫くして胸苦しさうに、かッと地に吐いた痰に交つて、深紅の糸を曳いた血の凝固が見えた。謙吉

は額を曇らせて、ぢッと其血の跡を見詰めて立つた。

謙吉は肺に患があるといふ事を深く隱して居る。東京を出る時には、病氣は最う快いと言つて居た。何處へ行つても、努めて然うでないやうに裝つて居た。自分にも亦、實際然うであるのを非常に恐れて、百方辯護して飽迄然でないと信ずるやうにして居た。けれども其後の身體の工合がいよ〳〵其方に近寄つて來るので、自分にも最う、何うにも、曲庇する力が無くなるばかりになつて來た。昨夜も其事で殆んど眠る事も出來なかつた。

あゝ、戀に破れた上に早晩此爲に斃れるのではないか。と謙吉は瞬きもせず猶見詰めて居た。茂合つた若松の木立を離れた先で、近く玫瑰の若芽を一つに、日は、心なく豐かに射しかけて居る。ひら〳〵と蝶が、不意に横手の濱菅の上を來て、羽を輕く其血の傍に近寄つたが、何に驚いたか俄かに舞上つて行つて了つた。謙吉は身動きもせず其處に立盡して居た。

其身の外は總て春、前後左右、行く處として春の心の動いて居らぬ方はない。自分は親もなく、同胞もなく、近い者は一人もなく。影より外に身に添うて居

る者はないのだ。此先何う動いて、何う消えるのだ。と思ふと何時も身を壓付けて居る底の知れぬ淋しさが、殆んど堪へられぬやうに一時に胸を襲つて來る。とむら〳〵として又、今別れた歌子の影が前に浮ぶ。はッとすると、足元の日に照らされた血汐の色が、刺すやうに眼に入つた。謙吉は急に又其處を去つた。

行く〳〵其淋しさに、身も心も引入れられるやうに、何處を通つたかをも暫く忘れて居たが、不意に近く、人の忍音に泣いて居る聲を聞付けて思はず足を止めた。砂地で足音のしないのに、先方も自分の事に夢中になつて全で聞付けなかつたらしい。見ると片脇の松の蔭に、顔は深く袖を當てゝ居るので、生際のいゝ額先より外は見えなかつたが、未だ裏若い土地の娘らしい。幹に犇と身を寄せて亂立つた銀杏返しの、がッくり根の緩んだ髷を震はせて泣入つて居た。

謙吉は今、人の事に干渉るほどの餘裕もなく暫く躊躇して居たが、流石に見かねて衝と傍へ寄つた。

「姉さん。」

と呼んで見たが、耳に入れぬか、返事もせず泣續けて居る。差寄つて稍聲高に、

「姉さん、何うしたのだい。」

娘は吃驚して急がはしく顏を上げた。

二

見ると涙に洗はれた、頬のあたりは未だ濡色に眼を擦赤めた儘の、見得も嗜みもない姿ではあつたが、目鼻立の尋常でない、鄙には似合はぬ標致に案外の思をしながら、見て居る場合ではないので、

「何うしたのだね、私は通掛りの者だが。」

と謙吉は重ねて問掛けた。娘は見ず知らずの人の前に慌てゝ所體を繕ひながら、

「何はア、何でもありましねえだよ。」

と羞かしさうに泣顏を隱して、衝と脇へ逸れやうとした。

「なに聞いて惡い事なら、強ひて聞かうとは言はないが、何を那樣に泣いて居

るんだか、差支へが無けりや話して見ちや何うだね。」と誰にも同情したく、誰にも又同情されたい、今の心の饑が不意に出て來たやうに、時の機勢で謙吉は一足踏込んで言つた。娘は直に答へず、疑ふ氣勢に見上げ見下したが、其儘伏目に、

「でも知らねえ人に……。」

と言淀んで少し身をくねらせた。

「むゝ、それぢや話せない事かね。」

「そんでも打付けに餘り厚顔しいだから……。」

と振仰いで、「お前樣何處の人だァね。」

先刻から見て居る中に、謙吉は何う心が動いたか、重ねて聲を和げて、

「私は東京から保養に來た者だが、今此處へ來掛つて、樣子を見かねて一寸聲を掛けたのだ。譯を聞いた處で、別に何う仕樣もないだらうが、此儘手を退いて了ふのも變なもんだ。出來る事なら力にもならうと思つて居る。緣も無いもんだらうが、人は相見互だ、此方から恁ういふのに、何も遠慮をするには當

らない。話すが可いぢやないか。え、全體何うしたんだい。」

といつもの樣子とは變つて、親しげに差寄つた。娘は正直に、

「甚え深切にはア、能く言つてくらしつた。俺今誰も庇つてくれる者がねえで、一人で、此處へ來て泣いて居ましたゞよ。俺其處の高神の村の者で、千代ッて言ひますだ。

と口を解きかけたが、直に投首して、

「でもお前樣、何の關係もねえ身で、譯係う〳〵だッて言つた處で、全く何うしやうも無え事だよ。知らねえ俺がのやうな者の事だから、構はねえで行つてくらつせえ。俺最う係ういふ運だと思つて、半分死身になつて諦めて居るだから。」

「だが一應話して見たら何うだ。聞かない中は何とも言へないが、存外好い運びにならないとも言へまい。」

嫁は俯向いて居た頭を下げて、

「はア、然うまで言つてくらつしやるなら、一通り話しますだよ。俺九つの歳

に最う兩親を亡して了つて、義理ある伯父御の處え引取られて、其處で育てられた者だァがね、其伯父樣に連添つて居た俺の眞の伯母樣は、俺が行くと間もなく亡くなつたて、子供も無かつたゞァから、家に俺の方の血筋の者は誰もねえだ。伯母樣生きて居た時は未だしもだつたが、それから先は全くの厄介者で、隨分種々の目に遇つて來ましたゞァ。」

「むゝ孤兒か。」

と謙吉は自分に似たやうな身の、更に哀を增すやうに、思はず顏を打目戍つたが、

「然うか。それぢや隨分、いゝ苦勞をしたらうなァ。」

「はァ、そりやァ最う、話せば噓のやうになりますだァよ。」

と言はれた言葉に調子付いて、娘は坐ろに言つた。

三

葉越しの日は心なく、塵埃に汚れた髷の上を照らし掛けて、油染みた元結や、塗の剝げた安櫛を餘り現はに見せ過ぎた、五月蠅く下る鬢の毛の、濡れた頰に幾

筋か、ぴッたり貼いたのも傷らしさうに、謙吉は猶目に止めてぢッと見る。お千代はうだ腫れた眼を下に、頓て言葉を續けて、

「何それも厭ひましねえだア。俺がのやうな厄介者であつて見りやア、邪魔にされるのも仕方がねえ事で、兎や角うそれを言立てられる身ぢやねえだアからね、俺最う何時からか覺悟して、家中の誰の氣にも出來るだけは逆らはねえやうに、何事にも虫を殺して居ますだアが、後添に來た今の伯母様ッてのが、一通りの人ぢやねえだアから、言はしつた通りいゝ苦勞しましたゞアよ。世話になつて居て惡く言つちや濟まねえだけんど、今の伯母様元は達磨なんぞして來た人で、素性を洗や隨分聞かれねえ事がありますだアよ。根が泥水飲んで來た人だけに餘所の者を逸らさねえ事は上手で、外にやア誰にも愛想が好いけれど、内にやア言ひやうのねえ我儘な、意地の惡い、變な依怙地な事ばかりする人て、伯父様でさへ時にや持餘す事がありますだ。家は饅頭屋で眞の伯母様亡くなつてから、追掛けて惡い事許り續いたに、伯父様又年甲斐もねえ道樂者で、人にや知らせねえが、段々不廻りになつて來たで、内輪は猶の事揉め

ますだア、俺も最う脊丈も伸びて來たし、內輪の身上も那樣になつて來る中で、いゝ氣で厄介になつちや居られねえだから、何とか自分で稼ぐやうにして、其內にまア今迄養つて貰つた恩返しもしてえと思つて、それも伯母樣に云ふと、曲げて聞かれて何も通らねえだアから、折を見て伯父樣に言つて見ましただア。俺それ迄は、伯父樣も一つ穴の人たア知らねえで居たゞアが、お前樣、他人ッて者は然うしたもんかね、伯父樣俺を可哀想だと思つて世話してくれたぢやねえでがすよ、眞面目な談話ア全で受付てくらつしやらねえで、育てくれた恩を枷に、俺を喰物にしやうと掛らつしやるだア。」

と訴へ顏に、惱ましげな眼を上げたが、息を繼いで、

「村の大盡の隱居で、何未だ隱居になる年ぢやアねえだが、身持が善くねえで到頭隱居させられて、家は弟子の代になつて其處から仕送られて居る身體で、それでも放蕩を止めねえで、村の衆にや厄病神のやうに言れて居る人がありますだア。伯父樣前から其人のお氣に入でね、隱居にならねえ前から贔負にされて、始終腰巾着のやうになつて、方々飮んで廻つて居たゞアが、隱居になつ

てからも矢張前のやうに出入して、其事ぢや人にも好く言はれましねえだが、午が合つて居るだアね、先方で離しもしねえけりや此方も離れねえだア、何隱居とは言ふもんの、家が大盡の事だから、何不自由ねえ事して貰つて、冥利に盡きるやうな勝手な眞似して居るだアが、其人が俺を世話してえッて言出して來たゞ。伯父樣然うなると種々徳が付く談話に成つて居たで、其事ア跡で知つたゞアが、外に伯母樣と、俺が事で內々相談して居た其方は急に止めて、此方へ取掛つた間際だつたゞ。だから俺がの言ふ事なんぞ初ッ端から最う耳にも入れねえだ。お千代、有難え事だぞ。手前なんぞ倒さに立つても出來ねえ眞似好きに出來るだア。直にも行けッて、有頂天になつて言はつしやるのでねえか。俺吃驚して了つたゞア。何條してまア那樣事出來やうよ。身震ひして厭だッて言つたゞア。」

四

「するとお前樣伯父樣甚え腹立で、何だ。一人で育つて來たやうに、好きな事吐かしやアがる。行かねえたッて遣らねえで置くもんか。汝、何うするか見

ろツて、さアそれからツてもの、俺片時最う苛責まれねえで居た事はねえだアよ。伯母樣は言ふ迄もねえ。伯父樣と一つになつて威したり賺したり、手を替へちやア責立てるだ。何と言はれたつて、何うされたつて肯れる事ぢやねえだから、俺頭掉通して何でも厭だツて強情突張つて居るだ。けんどもそれで手を引いて了ふやうな伯父樣や伯母樣ぢやねえ。此先未だ甚麽になつて來るだか知れましねえだよ。そんでなくても家ぢや饅頭屋止めて了つて、厭でねえか、今度達磨茶屋初めるだツて言ふだ。よしや此處を切拔けた處で、俺何にされるだか知れたもんぢやありましねえだア。

何條にも仕樣がねえだから、家を出やうと思つて、外に行き處もねえけんど、放して出してくんろツて言つたゞアが、何としてまア素直に出してくれますべえよ。餓鬼の時から散々世話ア燒かして、今になつて汝が勝手に那樣事を口にも出された義理か。恩知らずめ。俺を何と思つてるだアツて、伯父樣目え剝いて掛つて來るだ。何でも出るツて言ふだら、家へ引取つた日から今迄の、汝に掛けた雜用を目の前に並べて出ろツて憑うだア。俺何も伯父樣ん處へ

身い賣られて來たぢやねえだけんど、伯父樣全で其氣で居るだ。俺足掻も取れねえて、毎日泣かされてばかり居ますだアよ。

今日もお前樣、伯父樣其隱居を引張出して、何處かで飲んで來た歸りに家へ連込んで下へも置かねえやうに、伯母樣と二人して御機嫌取つて居たゞア。其中に又酒を出し初めるだ。然うでなくても、蟲が好かねえ人だから、俺顏見るのも厭だで、外して何處かへ隱れやうとすると、直と伯母樣に捉まへられて、無理に前へ伴れて行かれて、厭でならねえ酌させられたゞ。立たうッたつて立たせはしねえ。隱居は好い氣になつて、聞きたくもねえ串戲口利いて、俺に盃なんぞさすぢやねえか。苦しい思してぢッと我慢して居ると、其中に伯父樣も伯母樣も言ひ合はしたやうに不意と何處かへ行つて了つたゞ。俺はッと思つて慌てゝ逃げやうとすると、隱居が押へて最う動かさねえだ。何だ。何處へ行く。まア下に居ろ。談話有るだからッて言ふだ。あれ、一寸、直に來ますだアからッて、振切つて行かうとすると、強情張るでねえ。溫順しく斯うして居ろよ。何も然う嫌つたもんぢやねえでねえかッて、舌ッたるい事を言つ

て寄つて來たと思ふと、不意に手え捉まへて引寄せるでねえか。俺飛上つて我鳴つたゞア。すると性懲もなく、笑ひながら取つて押へやうとするだ。俺夢中になつて、何處を打つたか無茶苦茶で顔を一つ打撲くと、あッと言つて手を離したで、いきなり突離して室を飛出して、若し伯父樣に見付からうもんなら、直に又引戻されるだらうと思つたから、裏口から駈出して此方へ逃げて來ましたゞアよ。けれども是で治つたぢやねえ。今日の場はまア逃負せても、此先何うなるだか知れましねえだ。俺最う仕樣がねえだから、これから突走つて、何處かへ行つて了はうと思つて居るけれど、と言つて憑つて行く先もなし、路用も持つて居ねえのだから、何うする事も出來ましねえだ。俺本當にまア何うしたら可いだかと、思案にあぐねて一人泣いて居ましたゞアよ。」

五

聞きさして、謙吉は再びお千代を打目戍つた。お千代は流石に、それと明らさまに言出せもしなかつたが、差當つて頼もしい心入を見せてくれた人に、許されたらば取縋つても救を求めたさうな、さも憑りなげの眼差に、氣をかねなが

ら竊と見る。謙吉は誘はれたやうに、

「可哀相にそれぢや全で憑りがないのだな。見掛けて默つちや居られん。可し、差出た談話だが、私が何とか法の附くやうにして遣らう。」

「えッ、お前樣が。」

と我にもあらずお千代は顏を振上げたが、稍口籠つて、

「でも俺何の由緣もねえだに、お前樣そりや、親切づくに見かねて言つてくらつしやるがだけんど、俺然うかッて厚顏しくまアお前樣に……。」

と内には何と思つても、馴染もない人の前をかねて心ならず退避いた。謙吉は心地よげに打笑つて、

「はゝ、那麼遠慮が要るものか。此場に立てば、私でなくても誰でもする事だ。何うせ今保養中の、別に用がない身體だから、詰らなく遊んで暮すよりは、何か人の爲にするとなりや、私も實甚だ心持が好いのだ。」

「はア、それだからお前樣、俺がのやうな這麼者を……。」

謙吉は手眞似に制して、

最う那様事は言はないが可い。それよりは肝腎のお前の處置だ。處で差當りお前は何うする心算で居る？」

問はれてお千代は今更のやうに又途胸を突いて、

「はア俺何うするッて、好い考へは出ましねえだア。俺途方にくれて居ますだア。」

と又おろ〳〵する。謙吉は事もなげに、

「なに何う言つたつて道の付かない事はない。併し私が見ず知らずの者で、突如に其中へ飛込んで行くといふのも少し妙でないから、一應誰か、最う些少關係の深い者に口を利いて貰ふ方が可からう。お前に誰か心當りはないかね。」

「有りましねえだよ。有りやア恁うまで心配打ちもしましねえだが、俺がやうな者に然う立入つて、世話燒いてくれる人は一人も居ましねえだよ。」

「むゝ、そんなら村で誰が、此人の言ふ事なら、お前の伯父様も聞入れやうと思ふやうな人はないか。」

「外の事なら知んねえが、矢張有りましねえだよ。些少やそッとで又人の言ふ事聞くやうな伯父様ぢやねえだァからね。法が盡きますだァよ本當に。」

と心細げに目を落す。謙吉は押返して、

「村で勢力のあるのは甚麼人達だ。」

「え、勢力？」

謙吉は心付いて言直した。

「なにさ。何だ。村の頭立つた人達さ。其中でも物の解りさうな人が可い。

「何かね。其人に口利かせやうッて言はつしやるだかね。」

「いや、私が一つ其人に逢つて話して遣らうと思つて居る。なァに案じないが可い。人が無けりや直接に私が當つて遣る。何とか安心の付く事には乾度する。」

と何か其中に成案の付いたらしく、お千代に力を付けて、急に保護者のやうに身を入れて掛つた。

(十四) 庭端れ

一

湯殿の硝子越しに見ると、亭々とした庭の松の、四株五株前に迫つたのが、半ばは軒に遮ぎられて、緑を掛けた下枝の片端が幹を離れて、浮模様のやうに眼を掠める。濱邊は低く障子の下に隱れて、海は窓から直に續いて居るやうに、波を疊んで晴れた空に華やかな影を見せて居る。お新が今小まめに流して行つた跡湯槽に心地よく肌膚を浸しながら、歌子は一人遠く彼方の波の上を行く帆影を眼に入れて、あゝ此處でなければ、這麼事は出來ぬと不圖思つた。紛れて其儘に暫く何も忘れて居たが、坐ろに今日の出來事を思出すと、途でゆくりなく遇つた謙吉の事が、生憎くに思ふまいとする胸を不意に又襲つて來た。地獄で佛といふ事を言ふが、極樂で鬼に遇つたやうに、歌子は我にもあらず、麗かな日に心掛りな一抹の雲翳を望んだやうな心地がした。と思寄らぬ此事が長く胸の蟠屈になつて殘りはしないかと思つた。

「彼の人は本當に甚麼氣で居るのだらう。今になつても那麼で居ちや、これからだつて思遣られる。私が何うする事も出來はしないけれど、然うかと言つて只知らない顔をして居られるだらうか……。

自分の知らない事、と言つて了へば其迄ぢやあるが、事が矢張自分から起つて、自分の爲に那麼にもなり、此先又甚麼にもなるのかと思ふと、人知れぬ心苦しさの、いつまでも身を離れぬ思がする。

「這麼時には何うしたら可いのだらう。先刻の彼の様子ぢや私が何を言つたつて肯きはしない。言へば言ふほど、僻み切つた那麼事ばかり言つて、私でなけりや誰でも怒つて了ふ。本當に何故這麼厭な事が出來たのだらう。」

と眉を顰めて稍暫く、ぢつと一つ處を見詰めて居たが、外に仕様がないとすれば、彼の人はそりや自分の勝手で何うなつても、せめては私の氣の濟むだけの事はしたいと思つた。とつおいつ考へて居るやうに見えたが、不意に眼を動かして然うだ、兄から能く言つて貰はう。兄なら屹度一思に好い終局を見せてくれるに違ひない。氣質こそ違つちや居るが兄と彼の人とは隔てた仲お

やなし、談話も一番爲好いのだから、彼の人の爲にも可い。然うだ。兄に頼もう。とそれに決めて、やつと明處へ出て來たやうに、安心してホッとすると、初めて長く入り過ぎて居たのに氣が付いて、逆上せて櫻色になつた肌膚を外へ、急がはしく槽を出た。途端に上り口の戸を押開けて、お新が何か息急しく、

「奥樣、俺惡い事をしましたゞア。」

と落付かずおど〳〵して居る。歌子は何事と振返つて、

「おや、何うしたの。」

「俺今甚え粗忽して、奥樣の香水の壜打壞し了ッたゞアよ。最う上らしやる時分だと思つて、鏡臺ん處へ持つて行かうと思つてつい落し了ッたゞ。生憎敷居ん處へ打付かつたで、壜形無しに壞して香水皆打撒け了ッたゞアよ。」

歌子は失笑して、

「おほゝゝ、何だねえ。お前の見脈が甚いから私は何事が起つたかと思つたよ。」

「そんでも甚え高價え物だッてお房樣に聞いて居たゞアから、俺何うしべえ

と思つて飛んで來たどアか……。」
「おほゝゝゝ、正直だ事。なに可いよ。未だ代りがあるのだから。」
と笑つて上り湯を浴びて上つて來た。

二

お新は色も直さず、赦されたのも氣が付かぬ態で、
「俺そんでも濟まねえだから……。」
「あれ、未だ那樣事を言つて居るの。」
と歌子は打消すやうに、心地よげの笑顔を向けて、
「最う可いと言つてるぢやないか。那樣事氣におしでないよ。私は何とも思つて居はしないから。」
「え、」とお新は目を瞬つて、「奧樣、そんぢや無償で勘辨してくらつしやるがだかねえ。本當だかね。有難うごぜえますだ。俺本當に何うしべえかと思ひましたどアよ。阿爺やお房樣に、甚麼に又叱られる事だかと思つて、俺泣きてえやうになりましたどア。」

「まア、それぱかりの事を、那樣に氣の毒に思つてくれるだけで私は澤山だよ。お前のやうに思つておくれだと、私何されても可いと思ふわ。」

と言つて出て居る浴衣を掛けて、彼方の化粧の室へ行かうとして、振返つて更に優しげに、

「あのね、何だよ。お房や何かゞ又詰らない事を言ふと可けないからね、壜は私が壞したと言つて置くからお前は知らない顏をしてお出で。」

「あれまア、そんぢや俺……。」

「可いよ。私が承知して居るから然うしてお置き。然うすりや何でもなくなつて了ふぢやないかね。」

「はア、けんども餘りな事で俺濟みましねえだア。」

「おほゝゝ、濟むの濟まないのッて、那麽大した事ぢやありやしない。」

と言捨てゝ衝と向ふへ行く。お新は跡を追つて、續いて化粧の室へ入つて來ると、頓て鏡臺の前へ坐つた歌子の脇へ來ていきなり手を支いた。

「奧樣、俺何て言つて可いか解りましねえだ。有難うごぜえます。俺恩に着

て忘れましねだアよ。」

「まア、厭だねえ這麼事を。餘り大業で私挨拶に困るぢやないか。最うお止しよ。何か外の用でもして忘れてお了ひ。おや〱壞れた壜の碎片を、這麼處に大事さうに集めてあるよ。彼方へ持つて行つて捨てゝお了ひな。」

「でも那樣奇麗な物を勿體ねえから、何うかなんねえかと思つて……。」

「最う仕樣が有りやしないよ。いゝえ私も粗忽しいから隨分能く壞すのよ。本當に何とも思つて居やしないから、最う氣に掛けないやうにおし。」

「奧樣、本當に好い方だア。俺奧樣の爲だら甚麼事でもしますだアよ。」

「おほゝゝ、お前此位の事で那樣事言つちや、最少し大きな事だつたら何するの。」

「いんね、俺の有難がるのは、此事柄ぢやありましねえ。俺奧樣の心持を、嘘でねえ心底から嬉しいと思ひますだア。初めて來さしつた時から、いゝ奧樣だとは思つて居ましたけんど、今日といふ今日しみ〲と然う思ひましたゞアよ。俺最う奧樣能うく解りましたゞ。奧樣、俺が甚麼に思つて居るだか、俺

かこれからの仕打を能く見てくれせえまし。」

と僞りならず、思込んだ顔の色、歌子は稍呆れるやうな心地がしたが、流石に斥けるやうもなく、

「まア、這麼事を然う言つてくれゝば、私も甚麼に嬉しいか知れないよ。」

と衣服を替へて、頓て座敷へ出た。

三

山蘭御召の一枚小袖に、幽谷織の帯を高く、未だ初々しい若奥様の、何處にも華やかな影を見せて、ほのめく湯上りの色を現はに、褄を流して座に返つて來ると、お房は待受けたやうに、傍から迎立てゝ、

「お上り遊ばせ。お風呂は如何でございました。」

「好いお湯だつた事。歩いて疲勞れた跡の所爲か、さば〳〵として本當に好い心持よ。」

「然うでございますか。それは可うございましたね。はいお茶を。」

「おや、有難う。」

と出してくれた小さな粟田燒の湯吞を手に取つた。長い日脚も、其中に傾き初めて、庭には松の影を橫に、海は色めき立つて、遠く金茶に霞込んだ沖合を、白帆は皆橫日に染返されて歸つて行く。見るともなしに歌子は下の磯の出汐に連れて巖を越して來る波の、碎けて散る態を暫く眺めて居たが、不意と眼を返して、

「お房、何時だらうね最う。」

と坐ろに聞く。お房も何心なく、

「左樣でございますね。最う直五時になりましやう。」

「然う。」

とばかり跡を言殘して、又眼を逸らせた。お房は見て微笑みながら、

「あの、旦那樣でございますか。」

「え。」と歌子は少し慌てた氣味で、「なに那樣事ぢやないんだよ。」

「あれ、何もお隱し遊ばさなくつても可うございます。本當にお待遠でございましやう。でも最うそちこちお歸りでございなしやうよ。」

歌子はきまりを悪く、お房の眼を避けるやうにして、
「まア、那樣先潛りの事を‥‥。私何もお歸りの事を言つて居やしないぢやないかね。」
お房は一人了解顏に、笑つて能くも聞かず、
「可うございます。存じて居りますよ。なに旦那樣の方でも貴方がお待遊ばして居らつしやるのを御存じですから、彼方は御如才なく好い程に切上げて、屹度早めに歸つて居らつしやいますよ。」
「まア可いぢやないかね、那樣事は。何方だつて彼方の御都合だわね。」
「おや、それぢや甚麼にお遲くなつても可いと仰有いますの？」
「でもそりや仕方がないぢやないかね。」
と態と然り氣なく言ふ。お房は惡狡しげに、
「まア、私奧樣は那樣方ぢやないと思つて居ました。」
「え、何故？」
「でもそれぢや、何ですか御情愛がないやうに聞えますもの。」

「あら那樣……。」と顏を赧くして、「そりや私だつて、早く歸つて入らつしやるに越した事はないけれど……」

「おほゝゝゝ、それ御覧なさいまし。到頭白狀なさいました」

「まア、何を白狀して？」

「いゝえ、最う何と仰有つても可けません。先刻から待切つて居らつしやるのに、態と那麼事を言つて居らつしやるんですもの。お待遠なのは、併し御無理はございません。これだけお傍を離れて居らつしやるのは、嫁らしつてから初めてゞございましやう。」

「知らない最う。お前は調戯つてばかり居るのだから。」

と衝と立つて、逃げるやうに庭へ出て了つた。

跡を打目戍られる氣がして、其儘見も返らず、横目にけざやかな後姿を、すらすらと前の姫垣に近く、輕く薄小豆の裾を打つて芝を踏んで行く。

四

垣は腰より低く、庭は下の濱より一段高處にあるので、浦は一目に眞砂の影も

遮ぎるものはない。歌子はお房の眼を免れるばかりに、座敷を跡にして、庭外れの海に向つて腰掛を並べた方へ衝と出たが、同時に、

「あら！」

と俄かに勇立つて垣越しに下の路を見下した。すると例の冴えた聞好げの聲で、

「や、見付かつたか。はゝゝ。」

と濱手へ降りて行く庭口を、笑つて足早に登つて來た。金彌は前の、砂の深い松原に車を捨てゝ、斜に近路を其處へ來たのであつた。

「裏から窃と歸つて驚かして遣らうと思つたが、其處に居ちや何にもならなかつたな。何うした。待つたらう。」

と我物ながら未だ珍らしさうに、扮裝の變つた歌子の若々しい姿をぢッと見る。歌子は小走りに、ひた〳〵と傍へ近く、

「でも思つたより早うござんしたわ。私晩になるかと思つて先刻から甚麽にか最う……。」

と言掛けてお房に聞かれるのを憚つたか、一寸座敷の方を振返つて、
「貴方、私最う一人で待つて居るのは厭ですよ。」
「何故？」
「でも今日一日何うしやうかと思ひましたもの。終結にや焦躁ツたくなつて寧そ迎へに行かうかと思つた位でしたわ。本當に、這麽思をする位なら出して上げるんぢやなかつたと思ひましたわ。」
「はゝ、那樣に待つたか。此方も實は那麽事ぢやないかと思つたから、中途で外して逃出して來たんだ。二人共今夜東京へ歸る筈なんだが、彼の勢ぢや泊りかねないからな、逃出すにも甚く骨が折れたよ。いや飛んだお付合ひさ。」
と帽子を取つて、酒の名殘の稍、汗染んだ額を手巾で押拭つた。
「でも彼の御連中ぢや嘸面白うござんしたらう。」
「ふむ、なに例の如くだ。別に變つた事もない。」
途端に彼方の室から、不意と首を差伸べたお房は、
「おや。」

と慌たゞしく縁へ出て、遠くから手を支いて、
「お歸り遊ばせ。まア何處から入つてお出遊ばしたの。些少も存じないで居りました。」
「む丶下から來た。」
と金彌は眼て一寸點頭いて、其儘步寄らうとした。歌子は足を止めて此方に、
「貴方、一寸。」
「え、何だ。」
と振返る。歌子は踵を返して、前に並んだ腰掛の傍へ來て持つて居た手巾で塵を拂ひながら、振仰いで眼の汐を濃く、
「此方へ入らつしやいよ。私少しお談話がありますの。」
金彌は不審らしく、
「なに談話がある？　ふむ甚麼？」
と近寄つて傍へ腰を掛けた。歌子は引添つて近く膝を押並べて、何か思ありげに、

「私ね今日一人だつたもんですから、種々な事を考へましたの。お歸りになつたら聞いて戴かうと思つて居ましたから。」

「然うか。そりや面白からう。」

「あら、面白いか何だか知れはしませんわ。なにね、家でお話申しても可いんですけれど、お房や何かに聞かれるのも何ですからね。」

と半ば呟くやうに笑を含んで顔を差寄せた。

五

「何だ人に聞かせたくない？　ぢや何か秘密の事かい。」

と金彌は未だ醉心地、近く身を寄せて、艶に婀娜いだ歌子の横顔を、掛構ひもなく飽かず見る。歌子は流石氣のさすやうに、眼を逸らせながら、

「いゝえ、那樣秘密といふやうな事ぢやないんですけれど……。」

「はゝゝ、又例のきまりが何うのなんて言ふんだらう。いつまで那樣事を氣にして居るのだ。お前のやうな事を言つて居た日にや、第一恁うして相接いて居る事も出來ない譯だ。」

「まあ今に慣れますよ。」
と歌子は言譯らしく言つたが、其儘微笑みながら、
「でも二人の事は、二人の外に誰も知らなくつても可いと思ひますわ。」
「むゝ、そりや何も態々吹聽して廻るにも及ぶまいが、お前のやうに隱さなくつて可い事までも隱すには當らない。」
「あれ何も隱しやしませんけれど、女の癖に厚顏しいと思ふと、つい氣が引けて然うは行きませんもの。私のは仕方がないんですけれど、貴方は又餘りぱつぱとなさり過ぎますわ。」
「なに仕方がない事があるものか。何の後暗い事があるのぢやなし。誰に耻ぢて、誰に憚るんだ。馬鹿な談話だ。」
「そりや然う言つて了へば然うですけれど……、止しましやう、言つたつて出來ないものは仕樣がありませんわ。まアこれから稽古して些少押を強くしましやうよ。おほゝゝゝ。」
「全體羞澁み過ぎるから其位で丁度可くなるだらう。尤もいゝ氣になつて

無暗に押を強くされても驚くが。」
「いゝえ、貴方の丁ど可いと仰有る位が、私にや大變なのですから、那樣お氣遣ひは些少も要りませんわ。」
「いや、そりや請合はれないよ。最初は誰でも猫を冠つて居る。お前も今の處ぢや、正味は知れないからね。」
歌子は串戯とは思ひながら、聞流されず、急に顔を振上げた。
「あら、酷い。貴方那樣風に私を思つて居らつしやるの。」
「さア、何とも知れんね。」
と金彌は只笑つて居る。歌子は眼を退いて、
「可うござんす。貴方が那樣事を仰有れば、私も本當の事は言はないから。」
「え、本當とは？」
「何でしやうかね。お解りにならなければ何處ぞでお聞きなさいまし。」
と態と横を向く、金彌は物ともせず、
「はゝゝゝ、何か些少紛糾つて來たね。これも景物だ。妙々。」

と一人輿に入つて脇から眺めて居たが、不意に態とらしい聲を上げて、
「やア、お前の脊中に疵があるね。」
「あら、」
と歌子は顏を赧くして、急に飛退くやうに立上つた。
「厭な、貴方何を御覧なさるの。」
「でも眼に入つたのだから仕方があるまい。いや那樣物を脊負つて居やうとは知らなかつた。全體幾個あるのだい。」
「知りませんよ。那樣に幾個もあつて堪るもんですか。這麼鵝掌風位ののが只一つあるのを那樣に仰々しく仰有るんですもの。」
と見て怨めしげに、
「本當に厭な方だつちや有りやしない。」

六

金彌は其態を又面白さうに聲を上げて笑出した。歌子は物言はず衝と傍を離れて、金彌の今入つて來た庭口の方へ行掛けた。

「はゝゝ、大いに其拗ねた處だな。おい、何處へ行くんだい。」

「何處へ行つても可うございますよ。」

「はゝゝ、御機嫌斜めならずか。どれ、煙草にでもしやうかな。」

と袂を探つて蜥蜴皮の葉巻入を出して、一本引拔いてぱッと燐寸を擦つた。歌子は構はず降口の段を下へ、足に任せてとん〳〵と行く。金彌は笑ひながら振り向いて、

「おい、其方へ行くと蛇が居るぞ。」

「蛇！」

「むゝ、中段の麥門冬の脇に蜷局を卷いて居る。」

「嘘を。未だ今時分。」

「嘘なら行つて見るが可い。下の路には生醉も居る。何でも無頼漢のやうだ。今堤下の處をぶら〳〵して居た。はゝゝ、一人で行けるなら行つて見ろ。」

「まア。」

と流石に下を見て思はず立止つたが、急に引返して又傍へ來た。

「はゝゝ、矢張歸つて來たな。」
「だつて那麼事を言つて威かすぢやありませんか。貴方は何故那樣に人をお虐めなさるの。」
「人聞きの惡い。誰が虐めるものか。お前一人でまご〳〵して居るんだ。そりや可いが話掛けた事は何うしたんだい。何だか立消えになつて了つたぢやないか。」
「でも貴方が傍から種々な事を仰有るんですもの。談話をする間がないぢやありませんか。」
「然うか。それぢや改めて聞くとしやう。何だい其、私に聞いて貰ひたいとか言ふのは。」
と葉卷を口から離して膝を押向けた。歌子は話心を惡く、
「あら可笑しいぢやありませんか。何だか最う氣が脫けて了つて變ですわ。」
「だが聞きかけて聞かないのは、尙變だ。ぢや成べく交ッ返へさないから話すが可い。何だい。」

「然うですね。それやアね、聞て戴きたい事は澤山にあるんですけれどね、貴方が又冷かすと可けないから、成るたけ那樣事のないやうなのを擇つて言ましやう。貴方私ねえ、此地の方は好い加減に句切を付けて、少し早めに東京へ歸らうかと思ひますの。尤も貴方次第ぢやありますけれども……。」

と何時か眞顏になつた。金彌は一寸眼を上げたが、

「むゝ、それぢや最う飽きたか。」

歌子は急はしく、

「あれ然うぢやありませんよ。飽きる處ですか。此地にや何時まで居たつて飽きはしませんけれどね。」

と言つて不意と口を噤んだ。金彌は訝かしげに、

「怪訝しいな。それぢや何うしたんだ。」

「私遊んで居るのが急に惜しくなつて來ましたの。」

「何故惜しい。遊べる時に遊んで置なくつて仕樣があるものか。歸るのは何時でも歸れる。第一今那樣氣を出す時ぢやなからうと思ふが、私には少し

解らないね。」

「然うでしやうか。聞いて下さい。私今日這麼氣が出ましたのよ。」

と歌子は頓て言はうとした談話の口を切出した。

七

時に彼方の岩の端に、投網を提げて突立つた男がある。寄せて來る波を見澄して、颯と一打、肱に掛けた網を打込むと、波はどッと岩を越して、胸から下を水浸しにして綱を手繰て居る。此方の磯には、小娘交りに嗅衆儕輩が三四人、小雲や紫海苔を手分して採つて居る。歌子は其方を指さして、

「御覧なさい。彼の人達は皆遊んぢや居りません。私達が何にもしないで居る中に、外の者は皆働いて居ます。今日もね、一人で餘り待遠しかつたもんですから、お新を伴れて海鹿島の方へ行つて見ましたが、あのそれ直ぐ脇に石を切出して居る處がありましやう。私彼處で、急がしさうな鏨の音や、傍から車に積では馬に曳かせて行く大勢の人達が汗だらけになつて働いて居るのを見て、つくづく然う思つて此方に立つて居ますとね、沖に漁獵をして居る人

も、下を荷を擔ついで通る人も、何處にも手を明けて居るものはありません。歸りに彼の畑に沿いた路を來ると、野良に出て居るものも、路で遇ふ者も、仕事を持つて居ない者はないぢやありませんか。何だか皆には世間があつて、此方には無いやうな氣がしますとね、急に東京の方が戀しくなつて來ましたの。」

金彌は一人葉卷を相手に、時々微笑みながら聞いて居たが、煙草を手に移すと、高笑して、

「はゝゝ何の事だ。だから今も言つたぢやないか。遊ぶ爲に來て居るのだもの、遊んで居るのは當前だ。遊ぶと言ふと聞えが惡いが、私達は決して無意味に遊んで居るのぢやない。歌さんだつて、二人が何の爲に暫く世間を離れて此地へ來て居るか位の事は知つて居るだらう。」

「はア、そりや知つて居ますけれど…………。」

「知つて居りや何も言ふ事はないぢやないか、花の時分にや、花の氣持で通さなくつちや可けない。今から實の事を考へるのは些少早からう。それともお前、恁うして居るのが厭なのかい。」

「あら厭だなんて、那樣事が有るもんですか。私はそりやア、いつまで恁うして居たつて厭ぢやありませんけれど………。」

と何か言淀む。金彌は猶笑ひながら、

「何だか更に解らないね。それぢや何故歸りたいやうな事を言出したのだ。」

「いゝえ、私ね、なるたけなら冗に送る日を少くしやうと思つたもんですから。私本當に今日種々質實な事を考へたんですよ。」

「むゝ、那樣事を考へる時は未だ外にある。第一冗な日と思つて居るのが間違ひだ。それとも冗と思ふなら今から直に歸つても可い。」

歌子は吃驚したやうな顏を振上げて、

「あら私那樣心算で言つたのぢやありませんわ。」

「それとも一人先へ歸さうか。」

「まア那樣……。貴方それぢや人を困らせるといふものぢやありませんか。」

「それぢや何うすりや可いのだい。」

「え。」

と歌子は答に一寸躊躇つたが、紛らすやうに、

「何うと言つて、そりや貴方の可い方が矢張可うござんすわ。」

「や、逃げたな。そりや可けない。本當の事を言つて見るが可い。」

「あら、本當の事ッて外に有りやしませんわ。」

「なに無い事があるもんか。さア、言はないと承知しない。」

と笑つて膝を突付けた。

八

歌子は其表情に富んだ、切の長い眼を下に、言譯らしく片頰に微笑みながら、

「でも無いものは仕様がないぢやありませんか。」

「何だ。それぢや何が何だか解らなくなつて了ふ。全體何うしたといふのだい。」

と金彌は重ねて問返した。歌子は顏を上げて、

「そんなら御安心なさるやうに、思つて居るだけを言ひましやう。なに今日、お歸りを待つて居る中にね、一人で爲る事がなくなつて餘りくさ〳〵したも

んですから、つい那樣氣が出るやうになつたのかも知れませんよ。それにね、一體に意地の惡いもんで、冬になると夏が可くなるやうに、餘り暇だとつい忙がしい目に遇つて見たくなる、那樣氣紛れから來たのかも知れません。でも先刻なんぞは最う浮りしちや居られないやうな氣になつて、跡から突付かれる樣な心持がしましたの。此地に憖うして居るのはそりや可うござんすけれど、同じなら爲るだけの事をして、そして偶に來て見たら尚可らうなんて、那樣事を思つたもんですから、つい今のやうな事を言出したんですよ。」

「然うか。それぢや那樣事でまァ可いとしやう。處でお前に一つ註文がある。」

「え、註文？」

と歌子は一寸眉を動かした。金彌は首肯いて輕く、

「むゝ、お前の心持は略察したが、私は今那樣方へ脇目を觸つて貰らひたくないのだ。那樣事に取掛るには未だいくらも時がある。先は長い談話だ。何も慌てるには及ぶまい。今の中は私と居る處を、お前の家として外に何も考

へなくつても可いのだ。こゝだつて人の家ぢやない。隅から隅まで自分の物ぢやないか。少しも居心を悪くする事は無い譯だ。え然うだらう。」

「はア、そりや私だつて……………。」

「いやそれよりか何故最つと現在の事に身を入れないのだ。構はず言へば、遠慮なしに夢中になつて貰ひたい位なんだ。折角の蜜月ぢやないか。後に二人の甚麼紀念になると思ふ。お前は此位の事で最う充分なのかね。」

と裏問ふ氣勢に顏を見る。歌子は其儘には言はず、

「だつてそりや甚麼事でも、上を言つた日には限りはありませんわ。」

「ぢや最うこれて澤山なのかい。」

「けれどもそりやア…………。」「おほゝゝゝ、可笑しいわ。」

「何も可笑しい事があるものか。お前は何うか知らないけれど私は此位の事ぢや却々滿足しない。」

「まア、それぢや貴方の望んで居らつしやるだけをお聞かせなさいまし。私にも稽古になつて可いわ。私は今の處何が何なんですか本當には全で解つ

て居はしないんですもの。貴方に教つたら又甚麼氣になるかも知れません。貴方、甚麼事を思つて居らつしやるの。」

「いや、私が何う思つたつて、當の相手に其氣張が無かつた日にや、談話にはなりやしない。」

「ですから仰有つて下さりや何でも出しますわ。」

「え、出す？　屹度出すね。」

と態とらしく念を押した。歌子は何かは知らなかつたが、調子に連れて息を強く、

「はア、そりやア出しますわ。」

（十五）苧環

一

其夜別荘の松を籠めて、華やかに映す火影を綾に、さゞめき立つた一室の中から"Home! Sweet home!"の歌が坐ろ心の歌子の花の唇を洩れた時、幾町離れた萬松館の客室に、思はぬお千代の事から其日の汽車の時間を奪られて了つた謙吉は心ならず足を止められて、座敷に一人、淋しげな影を壁に映して居た。樹立に堰かれ、風に縺れて、歌子のヴアイリオンの音は此處まで聞えなかつたが、胸は生憎に、鋭く深く其やうな事を思はせる。謙吉は今になつて、なまじお千代の事に餘計な干渉をしたのを忌々しいやうに思つた。彼の時直に此處を去つたら、と何かなしに只苛々する。

「馬鹿な、俺は何うかして居たのだな。何だ知りもしない田舎娘を、二度と又遇ふ事が有るか無いか知れもせんのに。や併し俺は何で那麼に力を盡して遣つたのだらう。」

とあれから村の世話好きの和尚や、駐在所の巡査などを味方にした事を思出した。すべてそれが餘りに突飛な物好きな仕方のやうに思はれた。

「ちよッ、實に下らん事をしたものだ。」

と故もなく心惡い思をしたが、同時に不圖、未だ目に殘つて居るお千代の俤を思浮べた。彼の嫖緻を、然るべく磨いて、所謂垢脱けがする位にしたら、甚麼光を放つだらうかなどゝ思つた。と俄かに、

「いや、それ處ぢやない、那樣今悠長な場合ぢやないのだ。」

と元の身に返ると、さながら堤を切つたやうに、押へる力もなく、歌子の事に又逆戻りした。

と、近頃心持を惡く往來する熱が、いつもの時刻より早く又身を襲つて來た。片手に額を押へて、暫く其處に俯向込んで居たが、頓てむくりと頭を擧げて、窪んだ眼をきらりとさせると、急がはしく手を鳴らした。番の女中は、お廣といふ、上總出の、色の淺黑い、鹿のやうな顏をした瘦せた女であつたが、呼ばれて小走りに廊下を駈けて來た。

「お呼びになりまして。」
「むゝ、麥酒を持つて來てくれ。」
「はい。」
と言つたが驚いた顏をして、
「あの、御酒を召上るのですか。まア、入らしつてから些少も飲りませんから私お嫌ひなのかと思つて居ましたよ。」
と愛想笑をする。謙吉は舌打して、
「可いから早く持つて來い。ちよッ、何を愚圖々々して居る。」
と叱付けるやうに言ふ。お廣は更に驚いて、
「あの麥酒だけで宜しうございますか。」
「むゝ、何か喰ふ物を少し。」
「何に致しましやう。」
「何でも可い。見繕つて來い。急いで早くして來て呉れ。」
お廣は畏まつて退いたが、まア、何を怒つて居るんだらう。餘ッ程變り者だよ。

人を馬鹿にして居る。と憤々して足音を立てゝ行つた。

待つたが、扨急に來ない。謙吉は重ねて舌打して、烈しく又手を鳴らした。

と暫く時を置いて、お廣が空手でぬッくりと來た。

「何うした。未だ持つて來んのか。」

「はい只今。」

「ちよッ、何をして居るのだ。」

と浴せ掛ける。お廣は振交して輕く、

「あの何でございます。今表へ貴方を訪ねて來た人がございますが……。」

二

謙吉は出端を叩かれたやうに、急に叱言を飲込みながら、少し慌てた氣味で、

「なに、訪ねて來た者がある？　え、甚麽人が。」

と早口に聞く。謙吉は若しやと思つた。來る筈はないが若し、室田の方から使でも來たのではないか、と我にもあらず胸を騷がせて急に向直つた。お廣は可笑しさを怺へて、態と氣を持たせるやうに、

「若い女の方ですよ。」

「え、何と言つて。」

「貴方に是非お目に掛りたいと言つて。」

「何だ。何處から來たんだ。」

お廣は意地を惡く、

「お逢ひになつたら解るでしやう。」

「何を。」

と謙吉は氣色ばむ。途端に庭先から廻つたと見えて、障子越しに緣の外から、

「もし、旦那樣。」

と不意にお千代の聲がした。謙吉は振返つて急がはしく障子を引開けた。

「やツ、お前か。」

「はア今彼方の女中衆に、此室だつて敎へられたで、庭から直に廻つて來ましただアよ。居てくらつしやれば可いと思つて來たゞアが、好い鹽梅にまアお目に掛れましたゞア。」

と先刻と同じ繕はぬ扮裝で、何んの見得もなく室の火光を浴びて縁に直と身を寄せた。

お廣は此方に、謙吉を見て嘲り顔に、

「おほゝゝゝ、お解りになりましたらう。」

「むゝ仕様のない奴だ。何故然うと初めッから明瞭言はんのだ。」

「おほゝゝゝ。」

と聲高に笑つて、頓て逃げて行つて了つた。謙吉は振返つてお千代に、

「お前何うして來たんだい。何か家で又面倒な事でも言出したのかい。まア、兎も角上がるが可い。」

「はア有難うごぜえます。何上んねえでも此處で可いでがすよ。」

「なに同じ事だ。其處ぢや談話も出來ない、遠慮なしに入つて來るが可い。」

「そんぢや上つても可いだかね。」

とおづ〳〵と室へ入つて、隅に身を小さくして畏まつた。謙吉はぢろ〳〵と見て何か意を得ぬやうに、

「處で何うして來たのだね。何か又起つたぢやないかね。」
と重ねて問掛けた。お千代は振仰いで、
「何家の方は、旦那樣初め皆の衆の骨折で、今ん處ぢや晝間掛合つてくらしつたやうに、談話がまァおッ付いて居ますだァよ。方丈樣隱居の方へも本家の方も能く話してくらしつたで、彼方でもまァ、當分は手も出されめえと俺も思ひますだァ。伯父樣も伯母樣も、無據しに、納得して、腹ぢや甚麼に思つてるだか知んねえけんど、差當つて荒え事も未だ言ひしましねえだァ。罷違つた時の始末に付いても、旦那樣も方丈樣も能く言つて下らしつたで、お蔭樣で俺も甚え先の心配はしなくなるやうになりましたゞァ。」
「むゝ、それぢや何うして此方へ來たのだね。」
「俺、お禮言ひに來ましたゞァよ。掛り合ひもねえ旦那樣に飛んでもねえまァ多大え世話になつて、あれなりぢや濟まねえと思つて來ましたゞァ。明日は早く發たつしやるッて言ふだから、今夜の中にと思つて來ましたゞァよ。」
と言つて少し躊躇つたが、何か思入つた調子で、

「それに俺、折入つて旦那樣にお願がありますだァ。」

三

謙吉は此、別に何の緣故もない娘と、再び顏を合す事が有らうとは思つて居なかつた。今も今、餘計な世話をしたやうにさへ思つた矢先、何か又折入つて賴む事があるといふ。二人の間の何事かに又繋がれやうとするのを、人知れず謙吉は不思議のやうに思つた。夜目には更に見優りのする面差を、心に止めて折目成つたが、膝を進めて、

「むゝ、私にかね。」

「はァ旦那樣に、今から願つて置きてえと思ひましたで……。」

とお千代は問はれる儘に答へたが、急に居住を直して、べたり、と前に手を支きながら、

「自分の事ばッかに氣い奪られて、俺未だお禮も言はねえで居ましたゞ。旦那樣今度の事にやァ、甚え御造作になりまして、俺何て言つて可いだか解りましねえだァ。知らつしやる通りの身で、何する事も出來ましねえ。せめてお

禮の印ばッかにも、何かと彼是思ひましたけんど、先刻もお金惠んでくらしつたやうな身分で、自由な事にも行きましねえのを察してくらしつて、惡く思はねえでくらつしやいまし。」

謙吉は聞きも敢へず、

「何だ。那樣事をされちや却つて此方が迷惑する。決して那樣心配をしちやならん。それよりか其、頼みといふのは甚麼事だね。」

「有難うごぜえます。然う言つてくらつしやる程猶の事濟まねえやうに思ひますだァ。其上に又お願ひをするなんて、何條にも厚顏しくつて言惡い事だけんど、俺外に誰と言つて憑る人もねえだで、見掛けて又お縋り申しますだァ。腹ァ立てねえて聞いてくらつしやるかね。」

と遠慮勝に竊と見上げる。謙吉は打笑つて、

「はゝゝ、誰が腹を立る奴があるものか。兎も角頼みを言つて見るが可い。私も明日は發つて行く身體で、又此土地へ來るか來ないか知れんのだから、長く何うするといふ事は出來ないが、差當たつて出來る事なら何んでもして遣

らうぢやないか。」

と晝程の意氣込は無かつたが、つい相手に惹かれて言つた。お千代は一筋に、

「はア、能く言つてくらしつたゞア。何お願ッて言ふのは、今が今ッて言ふのぢアありましねえ。俺も折角、旦那樣や外の衆が斯うして事を收めてくらしつたのを、無にしちやア又濟みましねえだア。だが旦那樣、伯父樣、伯母樣は、外の手前もあるだで、一時を此儘にしても置きましやうけんど、兎ても長保ちはしめえと思ひますだ。方丈樣其中に、俺を何處かへ緣付けて身體固めさせるッて言はつしやるけんど、何條して伯父樣が素直に手放してくれましやうかよ。先い行つてこれ、何うなる事だと思ふと、疑深えか知んねえが、俺も用心しねえぢや居られましねえだアよ。」

「むゝ、で何うしやうと言ふのだね。」

「俺村に居ちや兎ても負へねえと思ひますだア。仕樣が無くなつたゞら、お貰申したお金路用にして、彼家を突走つて了はうと思ひますだアよ。」

と火影に眼を輝かすと、優しく曳いた眉の間に思込んだ影を屹と見せた。謙

吉はぢッと見て、

「で、何處へ行く？」

「行くだら東京へ出やうと思ひますだ。　俺旦那樣に願ふのは其時の事だァが……。」

と眼を擧げて氣遣はしげに、顏色を窺つた。

四

其儘言葉を躓かせて、言惡くさうに頓て目を落すと、

「そんだが緣もねえ旦那樣に、いゝ氣になつて餘りだと思ふと、一寸くら打出す譯にも行きましねえだァ。」

と何か氣を置いて、跡を言ひかねて居る。　謙吉は大圖を察して、一言助けて遣る心持で、

「むゝ、何だらう。　樣子を知らないから、私を憑つて來やうと言ふのだらう。」

お千代は氣色を見て直ぐ聲に連れて、

「はァ、それてがすよ。　何方を向いても知らねえ土地だし、突掛けて何處へ行

くッて先もねえだァから、濟まねえけれど旦那樣に、御厄介を掛けてえと思ひますだアが、何を言ふにも今日初めて遇つたばッかで、俺が口からは、餘り厚顏しくつて能く言切れましねえだア。」

と力を籠めて言つて又、

「今此方へ來る途中も、跡から其事を考へちやア、一人で氣い揉んで來ましただア。旦那樣聞いてくらつしやるだらうか。厭だッて若し言はしつたら、俺何うする事も出來ねえだが、那麼まア親切な旦那樣の事だから、一概に跳ねて了はッしやりもしめえ。何うかして好い返事してくらつしやるやうにと、そればッかを念掛けて來ましたゞアが、もし旦那樣、お願ひでござりますだ。憑りのねえ者を可哀相だと思はしつて、濟みましねえが應と言はしつてくれせえまし。俺本當に助かりますだア。」

と聲音に思込んで、繕ひもなく言續けた。謙吉は別に深くも思はず、輕く受けて首肯きながら、

「むゝ、そりやアなに、無據い場合で出て來るやうな事があつたら、又相談にも

乘つて遣らうが、併し出て來るにしても、あの方丈には打明けて能く相談をしてから來るが可い。決して輕躁みな事をしてはならんぜ。」

「はア俺もそりやア、出來るだけの辛抱はしますだアよ。何條にもなんねえッて迄は、おッ堪へて居ますだアよ。」

「なに方丈も其儘にして置く事はない。存外案じるほどの事もなくつて濟むかも知れないさ。私も方丈の方へは別に能く話してあるのだから成るべく取越苦勞などはしないで居るが可い。」

「種々と有難うごぜえますだア。何うかと思つて來ましたどアが、快く聞いてくらしつたで、これで最う心配は要りましねえだア。これも旦那樣のお蔭てがす。有難うごぜえますだアよ。」

と重ねて又頭を下げたが、何か未だ言殘した事が有るやうに暫くもぢ〳〵して氣をかねながら、

「旦那樣、俺最一つ願つて置く事が有りますだアが……。」

「え。」

と謙吉は振向いて、一寸目を瞬つた。お千代は又俯向いて、

「今言つたやうな事で、俺若し東京へ出るにしても、俺がやうな者は行けばまア奉公口でも、探して何處かへ住込まねえぢやなんねえだアが、其處でがすよ。出來る事なら俺、旦那樣ん處で使つて貰ひてえだアが、俺がやうな者でも置いてくらつしやるだらうかね。俺旦那樣ん處で使はれるだら甚麽仕事でも厭ひましねえだアが、旦那樣、こりやア俺が心からのお願でごぜえますだア。」

と心一つに聲を打つて、さも割なげに說立てた。

五

謙吉はぢッと其顏を見詰めて居たが、思入つたお千代の眼差に出遇ふと、急に唇を開いて、

「むゝ、お前の望なら居て見るが可い。お前の一人位は置けない事もないから、此方にや別に差支はないが、併し私を餘り立派な者と思ふと間違ふから、其心算で居るが可い。私は彼地ぢや詰らん事をして居る者で、大した世話は勿論出來はせんが、お前はそれでも可いのかね。」

お千代は意外な面持で、

「あれ、俺此上に旦那樣に世話ア掛けて何うしべえよ。俺別に身に着いた藝もねえで、臺處の隅へでも置いて貰つて、飯炊く位の事しか出來ましねえだ。俺只の奉公さして貰ひますだアよ。」

「だが奉公口なら外に好い處は未だ幾等もある。そりや又其時に何とか世話をして遣らうよ。兎に角來てから先の事は安心するが可い。」

「いんね俺何う好いとッて、外の處へ行きたくはありましねえだ。俺旦那樣ん處に奉公してえだアよ。」

「むゝ何うして？」

「俺旦那樣のやうな人、御主人に持ちてえだア。旦那樣承知せえしてくらッしやれば、俺一生でも搆ひましねえだア。」

と飾り氣もなく思ふ儘を、眼色に見せて眞直に言つた。謙吉は眉を低く、物思ふやうに眼を動かしたが、頓て調子をかへて、

「然うか。はゝゝ、えらい見立に與つたのだな。いや然ういふ人に來て貰へ

ば、淋しい私の家にも少しは色が付いて來るかも知れない。お前は知るまいが、東京の私の家といふのは、田舍のやうな淋しい處で、私は其處に、聾の傭婆と二人ッ限りで暮して居るのだ。」

「あれ、そんぢや未だ奥樣あらッしやらねぇだかね。」

謙吉は我にもあらず、

「なに那樣者があるものか。」

「はッて、何うしてだァね。」

とお千代は何も知らず言つた。謙吉は急がはしく、

「那樣事はまァ何うでも可い。お前は併し、然うかと言つて無暗に駈出して來はしまいね。」

と口から出任せに言つて外へ紛らした。お千代は氣も付かず、

「はァ俺正直に言やァ、今から直にも出て了ひてえだけんど……。」

「一人で勝手な事は必ずしてはならない。可いかね、先刻言つた事は。」

「はァそりや最う能く了解んで居ますだァ。何にしてもまァ旦那樣聞いて

くらつしつたで、俺今夜ッから最う枕ア高くして寢られますだア。這麼嬉しい事アありましねえだアよ。」

「や妙なものだな。詰らん事をそれほどに思はれるのは何ういふのだらう。お前ぁ孤兒だとか言つたな。今迄が全く思遣られる。女ぢや尚更心細かつたらう。私もお前のやうに、親も同胞もない身體だ。それはかりなら未だしもだが……。」

と言掛けて不圖心付いて、急に聲を高く、

「はゝゝ、何を言つて居るのだ。今夜は少し何うかして居るわ。」

とばかり後を言はずに了つた。お千代は其中に、何をか又思續けて居るやうであつたが、不意に身を進めて、

「もし、旦那樣。」

と言葉を押へられぬやうに、調子を強めて言つた。

六

「何だ。」

と謙吉は何時の間にか、歌子の事に又氣を奪られて居たので、夢から呼覺まされたやうに急がはしく顏を振向けた。お千代は我知らず又身を進めて、

「旦那樣何て言はしやるか知んねえが、俺末始終、村で暮して行く氣は最う有りましねえだよ。」

「え。」

と謙吉は稍、意外の面色で、其儘顏を打目戍りながら、

「何故無いのだ。兎もあれお前の故郷ぢやないか。誰しも故郷に優る處は有りやしまい。お前の年で、殊に未だ何處へも出た事の無い身で、男なら又格別だが、そりや少し先走つた談話だな。それぢやお前は、出た限り最う歸らない心算で居るのかい。」

「はア、歸りましねえだアよ。出たら最期と思つて居ますだア。眞實の事でがす。二度と振向いて見やうとも思ひましねえだ。俺最う他國の土になる氣で居ますだアよ。」

「むゝ、何うして又た然うまで決めたのだね。」

「何俺が身ぢや決めるまでもねえでがすよ。村で生れたからにや、故郷には遠へねえけんど、親も同胞も親類もねえ一人法師で、物心付いてから此方、厭な思ばかりして來ましたゞもの、這麼處に居るよりは、何處でも好いた處へ行つて、何條にもして身を立てるやうにしてえと思ひますだア。」

「して何う身を立てる？」

「そんだから俺、旦那樣に願つて置きましたゞア。一生奉公さしてくらッしやりやア、其上の願はねえだけんど、然うも行くめえから、何とか其中に、旦那樣に指圖して貰つて身の振方を付けてえと思ひますだアが、もし、俺がやうなもんでも、これでも一生懸命になつたゞら、何とか仕法の付かねえもんでも無かんべえかと思ひますだアが、ねえ、那樣もんぢやねえだらうかね。」

とぢッと見る。謙吉は首肯いて、

「むゝ、そりや無論無い事はない。」

お千代は重ねて聲を深く、

「それにしても俺、旦那樣が憑りだアて、厚顏しいけんど何條にも頼ますだア

よ。俺東京へ出るとッて、旦那樣若し居さつしやらなきやァ彼地へ行かうとは思ひましねえだァ。」

「那樣事を言つて私が、實際甚麽者だが能く知りはしまいが。」

「あれ、俺最う能うく知つて居ますだァよ。それでなくつて何しに這麽事願ひに來ますべえよ。」

「むゝ。」

と謙吉は手を拱いて何をか考込んだ。途端に廊下の障子を押開いて、お廣が敷居越しに膝を支いて、

「あのお誂へになりましたものは何う致しましやう。」

「むゝ、最少し後にしてくれ。」

お千代は其中に身繕ひして、

「俺も最う行きますべえよ。」

謙吉は振返つて一寸外を見たが、

「や、月があるな。私も一寸出やう。お前を送りながら其處迄一所に行かう

よ。」

「はア、何處かへ行かつしやるかね。」

謙吉は立上つて、未だ其處に二人をぢろ〳〵見て居たお廣に、

「おい、一寸又出て來るよ。」

「おや。」

「何がおやだ。」

「なに此方の事ですよ。おほゝゝゝ。」

謙吉は構はずお千代の方へ振返つて、

「さア、出掛けやう。」

(十六) 宵の月

一

朧に遠く松を霞めて、月は八日目頃の手弱な光を投掛けて居た。裏の林の中を、村へと通ふ路へ來ると、風は吹絶えて、磯打つ波の音も春に消込んだやうに背後の樹立に何時か隔てられて了つた。林を越して、月に煙つて遠く連つた麥の畑が見える。中の街道をちらほらと人が行く。愛宕の山は西に小高く夜の色を掛けて、北勢子あたりの村居の影が下に微かに見えた。お千代も謙吉も、暫く一語もなく、肩を並べて松の中を辿つて行つた。夜は靜かで四邊はそよともせず、折々寢鳥の人の氣勢に驚いて立つ外には、さく〳〵と砂を踏んで行く二人の足音が、只聞えるばかりである。

「旦那樣、何處さ行かつしやるだアね。」

と林を離れるとお千代は不意と聞いた。謙吉は前も見ず、何か捗らぬ足取で歩いて居たが、聞かれて少し慌てた氣勢て、

「私か、私は只散歩に出て來たのだ。兎も角其處まで送つて行かう。」
「あれ、旦那樣に送つて貰ふなんて、那樣勿體ねえ事して貰つちや濟みましねえだア。」
「なに、そればかりぢやない。お前に少し談話もあるのだ。」
「え、談話がね？」
とお千代は聞咎めて顏を振向けた。
「むゝ。」と謙吉は態とらしく微笑みながら、「宿で言つた口上とは違つて居るから、お前は少し驚くかも知れないが、私は急に氣が變つたんだ。」
お千代は何事とも思分かず、只眼を睜つて、
「はア何だね。」
謙吉は顏を打目戍るばかりに、
「何うだ、私が今、お前を東京へ伴れて行くと言つたら。」
「えッ。」
「お前は先刻言つたやうに、矢張悅んで來るかね。」

お千代は眼を輝かして、思はず向き直つて衝と寄つたが、
「えツ、旦那樣、そ、そりや本當だかね。」
「私が然ういふのに嘘も本當もあるものか。お前が可ければ伴れて行かうぢやないか。」
「あれまア、俺何て言つて可いだか。旦那樣、俺然うなつたら最う、這麼嬉しい事はねえだ。直に駈出すと言ちやア惡いだらうと思つて、先刻も甚麼にか遠慮して居たゞアが、俺本當は最う片時も家に居たくはなかつたゞ。俺其上の願はねえだけんど、それにしても旦那樣は、何うして那樣氣にならしつたゞかね。」
「お前の談話を聞いてからさ。何の道先刻言つたやうな氣なら、望みの立つやうに何とかしやうと思つたからだ。」
「はア、そんぢや只俺が爲に……。」
「いや、然うばかりぢやない。私はお前を傍へ置きたくなつたのだ。お前には未だ譯は言はないが、私の淋しい心を少しは忘れたいと思つたからだ。お

前は只奉公すると言つたが、私は家に客にして置く。お前の身を立てるやうな修業も出來るだけはさせて遣る。私は併し醉興でするのぢやない。お前が少しばかりの事に感じてくれた禮心に世話をして遣るのだ。

お千代は驚いて急がしはく、

「あれ、俺那樣まア……。」

謙吉は笑つて遮ぎるやうに、

「まア可い。兎も角私に任せるが可い。や、然うとなりや今夜方丈に遇つて談話をして置かにやならないな。」

と横手の田甫路の方へ足を向けた。

二

お千代は遲れて跡から、小走りに來て傍へ寄ると、引止めるやうに聲を走らせて、

「旦那樣、家の方の事だら、俺が一人でしますすべえよ。」

「え、一人でとは?」

と謙吉は訝かしげに振向いた。お千代は思ふ儘を、一息に其處へ、

「俺、旦那様に最う、此上の迷惑掛けたくねえと思ひますだア。表向きに掛合はしつた日にやア、伯父様何だ彼だッて苦情言出して來るに決つて居ますだア。相手が旦那様だと甚麼强請事又しねえとも限りましねえ。それよか俺が一人の了簡で出る事にした方が、談話が未だ付け好いと思ひますだアが。何伯父様だつて、俺が身體を全々自分の物にする事ア、出來る譯のもんぢやねえと思ひますだアから、義理は義理で何時か立てるとして、覺悟決めて掛りやア恐い事はねえでがすよ。旦那様まア、知らねえ振で居てくらッせえ。俺一人て何とかして見ますだアよ。」

と思入つて言葉を續けた。謙吉は微笑みながら、

「それや伯父様といふのが如彼いふ人だから、お前も然う思ふだらうが、併し私の方から默つて只お前を引取る譯には行かない。なに面倒な事になりさうなら、それに應じた又手段もある。兎もあれ方丈に相談だけはして置かう。」

と言つて一寸言葉を切つたが、

「然うさ。私は外の事で氣が立つて居たから、全で跡先も考へずに居たが、お前を直に伴れて行くといふ譯にや行かないかも知れない。矢張跡から來るやうな事になるだらう。」

「然うでがすよ。そんだから俺一人の了簡でするッて言ひましたゞア。」

「いや道は何とか付けなきやならない。兎に角談話を決めて置かうから、お前も一處に來るが可い。」

と西に蜿つた月下の路を、伴れて又歩出したが、不意と冴々した、心地よげな調子で

「妙だ。恁うして歩くと、何だか他人でないやうな心持がする。お互に顔も知らなかつたものが、何うして恁ういふ事になつたのだらう。」

「はア俺も、全く不思議な事だと思ひますだア。死んだ兩親でも、引合せてくれたゞかと俺然う思つて居ますだアよ。」

とお千代は更に力を籠めた聲音で言つた。

「あの時遇はなかつたら、全くそれッきりだッたのだ。」

「そんだから俺、夕方内所でお墓へ行つて來ましたゞアよ。」

いふ時不意に、

「やア、お千代さアか。」

と通掛つた頰冠の若者が、月に見透して向ふから聲を掛けた。

「誰だね。源さアかい。何處え行くだね。」

「はいゝ、言はれねえ處だい。お前は？」

と近寄つたが、不意と謙吉を見て、驚いたやうに足を止めて、

「今晚は。」

と何か狼狽いた樣子で、匆々に彼方に行過ぎたが、何と思つたか、少し離れると態と聞えよがしに、節を可笑しく、

「迷はしやんすな他國の人に、

末は烏の泣別れ。」

唄は容赦もなく二人の上に響渡つた。お千代は顏を染返して、

「厭だ。何を間違へて居るがだらう。」

三

「はゝ、お前の縹緻が好いから那麼事を言はれるのだ。」

と謙吉は何時になく輕躁いで、今は何事をも面白く聞くやうに、笑つてお千代を見返つた。お千代は更に顏を紅くして、

「あれ、何言はつしやるだア。」

と急に身を離して、月に羞かしさうな額を、慌てゝ蔭にして俯向いたが、呟くやうに、

「那麼無躾な唄なんか我鳴られて、俺旦那樣怒らしつたかと思つたゞアに。」

「はゝ、那麼者に怒つた所で仕方がない。いや、私は全で其事は考へなかつたが、此先何うかして間違が出來ないとも限らんね。」

「え間違がね？」

謙吉は半ば戯れて、

「む、お前も若ければ私も若い。何ういふ機勢で甚麼事になるか、先の事は今から解るまいぢやないか。お前も浮りしちや居られない。ひよッとして

私に、那樣心が出たとしたらお前は何うするね。」
お千代ははッと色を動したやうであつたが、顏を見て直に笑出した。
「あれ、串戲言はしつたつて負へましねえだ。旦那樣に那樣事あつて何うしますべえよ。」
「だが串戲でなかつたら何うする。」
「何だね。未だ構はつしやる。何うするのしねえと言つて、俺がのやうなもんを旦那樣が當事もねえ、誰が本當にしますべえよ。第一まァ分際から違ひますだァ。這麼者を最う、弄らつしやるのは止してくらつせえよ。」
「はゝ、何うしても本當にしないか。然う串戲に思はれるやうぢやァ、未だ言樣が足りないと見えるな。むゝ、何うしたら本當にする。」
「俺最う知りましねえだよ。」
「はゝゝ、困つたな。」
と坐心に打伴れて行く。謙吉は暫くの間、病氣の事も、歌子の事も、今行く先の事も、忘れて居た。何か知らず俄かに元氣付いて、物言ふ聲音にも自ら彈力の

付いたやうに、足も身も輕々と先に進立つたが、
「私は今恁ういふ事を思つた。お前にや少し氣の毒だが私は差當つて、何うしても忘れて了ひたい事が一つあるのだ。それでお前を、これから何處か知らない土地へ連れて行く。其處で當分二人で、世間から全で離れて暮して見たら何うだらうと思つたのだ。尤も金のある內だが、何うだね、隨分變つた事が出來さうぢやないか。併しこりや私の方の勝手を言つた談話で、お前の爲に些少も考へたのぢやない。勿論實際出來やうとも思つちや居ないが、儘になるなら那樣事もして見たいと思ふよ。」
お千代は何の事か能く解らなかつたが、素直に受けて何心なく、
「そんだら其處へ行かしつたら可いでねえかね。旦那樣居さつしやる處だら俺何處でも可いだアよ。」
「え、それぢや何も言はず來てくれるのかい。」
「はア、俺憑りに思ふ人外にや最う有りましねえだもの。」
「むゝ、私は又お前が氣味を惡がりはしないかと思つた。」

「あれ、何しに那樣事思ひますべえよ。」

と言つて不意に立止つて、

「もし、其方へ行かしつちやァ山へ入つて了ひますだァ。」

謙吉は笑つて足早に引返して來た。

「や、談話に浮かれてつい氣が付かなかつた。」

（十七）水莖

一

宵の葡萄酒が未だ餘熱のやうに頭に殘つて、金彌はうッとりと、傍の柑橘や林檎の香を夢のやうに覺えながら、いつか眠氣がさして來たので、讀みさした雜誌を伏せて、腹這になつて居た身を横に、葉卷を取つて火を移したが、首を差伸して次の室へ、

「歌さん、未だ手紙を書いて居るのかい。」

と差窺くやうに目を遣つた。歌子は今の程、芳子や母や兄の許から、今日午後の便で來た手紙の返事を書く爲に、立つて次の室の机の前へ行つたが、それなり未だ其處に坐込んで居た。

「はい。いゝえ。」

「濟んだのかい。」

「はア。」

「ぢや何をして居るんだ。」
「いゝ事よ。」
「何だい。」
「いゝのよ。最う些少ですから待つて居らつしやいよ。」
と何か一人與ありげな樣子。金彌は伸上つたが、襖の蔭になつて能く見えないので、頓てむく〳〵と起きて來た。見ると歌子は、手紙を疾うに書終つて、小形の手帳樣のものに頻りと日記らしい筆を走らせて居た。
「何だ。日記を記けて居るのか。」
と金彌は立つた儘で脇から見下した。
「あら。」
と歌子は慌てゝ手を、書いたものゝ上へ伏せて、
「入らつしちや可けませんよ。」
「何故？　可いぢやないか。」
と笑ひながらいふ。歌子は押隔てるやうに、くるりと向直つて、

「可けませんよ。彼方へ行つて居らつしやいッてば。」
「何だ。まア見せるが可い。」
と近寄つて來る。歌子は仰山らしく、
「あらッ。」
と急がはしく疊んで懷へ隱して了つた。
「はゝゝ、何を那樣に大騷ぎして隱すんだ。お見せ。何だか長ッたらしく書いてあつたぢやないか。」
と面白づくに見やうとする。歌子は身を後へ、上から懷を押へながら、
「可うござんすよ。まア彼方へ行らつしやいよ。」
「何故那樣に隱すんだい。」
「だつて何んですもの。」
「何だよ。」
「種々な何が書いてあるんですもの。」
「だから何がさ。」

と畳掛ける、歌子は答へかねて、其儘笑顔を下に、火影に差明しさうな眼差を見せたが、

「だつて種々な、きまりの悪い事が書いてあるんですもの。」

「だが私に何も隠す事はないだらう。」

「厭。私誰にだつて見せやしませんわ。」

「ぢや私にも見せないのか。」

「はい。見せません。貴方に見られやうもんなら、それこそ甚麽に譃戯はれるか知れませんもの。」

「那様に秘密にして居るもんなら尚の事面白い。是非見やう。」

「あら。」

と後退りして既浮腰に、

「私逃げて行きますよ。」

「ふむ、何處まで。」

歌子は背後の柱際へ身を寄せて、

「おほゝゝゝ、東京まで。」

二

金彌は又追はうともせず、葉卷を指に挾んだ儘、笑つて、其處に座を取つて、

「はゝゝ、那樣にも隱したいのか。ぢや強ひて見やうとは言はんから、まア下へ坐るが可い。」

「あら、那樣事仰有つて油斷させるのぢやなくつて？」

と歌子は調子を若く、笑顏に冴えた眼色を前に、未だ用心した身の構へで居る。

金彌は冷笑ふやうに、

「馬鹿な、何時まで那樣物に拘泥つて居るものか。なに、見なくつても大概知れたもんだ。碌な事は屹度書いてありやしない。」

「然うですとも。だからお目に掛けないのですよ。那樣に知つて居らつしやるのに、無理に見やうとなさるんですもの。」

と漸う〳〵座に着いて、

「人の厭がるのが面白いもんだから、態と那麼に見やうとなすつたのね。貴

方は餘ッ程質が惡いわ。」
金彌は口にした煙を深く、
「だが全體隱すのは可くないよ。」
「だつて女にや嗜みといふものもありますもの。」
「え、ぢや何かい。嗜みを忘れたやうな事が書いてあるのかい。」
「あら然うぢやありませんけれど……何方にしても最う御覽なさらないのなら可いぢやありませんか。本當に詰らないもんですよ。貴方の目からは兒供の寢言よりも最つと埒のないもんですよ。」
「はゝゝ、大層又詰らないものにしやうと思つて骨を折るぢやないか。なに大概知れて居るとは言つたが強ち見ないとは限らないよ。」
「あら未だ那樣……厭ですよ又蒔直し。」
と微笑みながら直と見る。金彌は煙草を止めて稍身を前に、
「だがね、お互の中に少しでも秘密のあるといふ事は何うも面白くない。可いぢやないか謔戯はれやうが笑はれやうが、外の者なら知らん事、お前相手を

誰だと思つて居るのだ。」

「何ですね。ぢや矢張御覧なさらうと仰有るの！」

「まア然うさ。」

と濟ました顔で居る。歌子は扱ひかねた姿で、

「仕様がないのね。秘密の何のッて那様事仰有られちや私困りますわ。那様罪の深いもんぢや有りやしませんよ。私疑はれるのは何だから、貴方に那様お氣が本當にお有りなさるなら、羞かしい位には替へられないから寧そお目に掛けますわ。」

「可し。さアお見せ。」

と乘入つたやうに直に手を差出した。

「あら、計略だわ矢張。」

「何だ。土壇場に直つて未だ愚圖々々して居るのか。何うせ見られるものなら、仕様がないぢやないか。まア念晴じに兎も角見せるが可い。」

歌子は詮なさゝうに、

「まア、何うしても出さなきやならないんですの。ぢやお約束して置きますがね、貴方屹度笑ひッこなしですよ。」

「むゝ可し。さア出すが可い。」

「あら那様にお急きなさらなくつても出しますよ。」

と澁々ながら頓て出して見せた。金彌は待構へて直ぐ手に取つて、

「はゝゝ、漸つとの事で手に入れた。さア最う此方のものだぞ。どれ。」

と早速ながら中を繰開けて見た。

三

見ると薄葉の罫紙を五六十枚綴合せたのに、女の持ちさうな美しい絹表紙を掛けた小形の手帳で、心ゆかしいホワイトローズの薫が深く染込んで居た。筆を最初生家の生駒の家を離れた時から起して、人に見せやうとは思つて居なかつたから、字體にも文致にも、別に意を用ゐてない。總てを有の儘に其新らしい生活に乘出して來てからの、自分のさま〴〵の感情を作らず飾らず、思ふ儘に書續けて、彼是最う手帳の半ば迄も進んで居た。金彌は次々に好奇の

眼を走らせて下にも置かず讀繼いて行つたが、
「ふむ、大分細ッかいな。こりや思つたより餘程面白い。成程默つて只羞澁んで居る時にも、這麼種々の事を考へて居たのかい。」
歌子は無據しに見せは見せたものゝ、流石に人知れぬ胸の中を、餘りに露骨に書連ねてあるので、あらはに素肌を其處へ曝されて居るやうに、一人術なげの態で手を束ねて居たが、默つて待つて居られず、中途に跡を遮つて、
「あれ最う可いぢやありませんか。先は同じやうな事ばかりですよ。此方へお遣しなさいよ。」
と手を伸して取返さうとした。金彌は素早く身をかはせて、片手で押退けながら、
「何だな。何うせ見せたもんなら殘らず見せるが可い。まア其方へ行つて居ろ。」
と猶も目を離さず讀續けたが、
「や、此處に私の事が特別に書いてある。妙々、はゝゝ、飛んだ觀察錄だ。」

「あれ那樣處を御覽なすつては仕樣が有りませんよ。私貴方のお氣が濟むだけに見せたんですもの那樣に詳しく御覽なすつちや厭になつて了ひますわ。よう、最う返して下さいッてば。」

「はゝゝ、まア待てよ。最う直だ。」

「本當に仕樣がない事ね。」

と投げるやうに言つて机の前に歸ると、其儘紛らすやうに、有合ふ紙に譯もない徒書して居た。金彌は何時か又腹這になつて、葉卷を相手に、先刻の眠氣も忘れた姿で後を讀んで居たが、やがて其中に眼を通して了ふと、何が氣に入つたか、滿足らしい笑顏を見せて其儘起上つた。

「はゝゝ待遠だつたか。さア返すぞ。」

「あら、那樣に見てお了ひなすつたもの最う要りはしませんわ。」

「いやお蔭で好い慰みをしたよ。今日は未だ晝前しか書いてないぢやないか、後を書くが可い、又見て遣らう。」

「厭ですよ。御覽なさるなら最う書きはしませんよ。這麼物最う燒いて捨

て、了ふから可い。」

「はゝ、何を下らない事を言つて居るのだ。」

と譯もない態を笑つたが、其儘調子をかへて、

「お前前から這麼細ッかい日記をつけて居るのかい。」

「いゝえ今度初めてゞすよ。それも此地へ來てからですわ。餘り用がないもんですから、不意と思立つてしましたの。」

と言つて、少し躊躇つて居たが、

「貴方、私お願がありますがね。此中の事を最う言出しッこなしですよ。貴方讀んで御承知なすつて居らしつたらそれで可いでしやう。ね、それでないと私……………。」

と後を濁して、未だ極りの惡さうに美しい眼を俯向かせた。

四

金彌は笑つて取合はず、傍から威すやうに、

「はゝ、、那樣事を言つて居ると、誰かにそれを見せて遣るぞ。」

「あれ。」
と歌子は慌てゝ日記を手に取ると、脇の手文庫の奥深く直に藏込んで、
「本當に、貴方のやうな意地の悪い方は有りやしない。」
と文庫を背後へ押遣つて怨じ顔に呟いた。金彌は一人面白さうに、
「ふむ、然ういふ事は日記にや書いてなかつたな。」
「知りませんよ。」
「はゝゝゝ。」
と立つて元の座へ返つて、持つて居た葉卷を置くと、
「おい、チヨコレートでも淹れて貰はうか。」
と膝を崩した儘で、片手を後ざまに支いて、未だ開放してある縁の外を一寸眺めたが、直に眼を返して、手近のネーヴル柑橘を毟り出した。歌子は其間に机の上の始末して、言はれた飲料の支度にと立つたが、頓て準備して其處へ入つて來ると顔を見合せて、今の名殘の、未だ羞かしさうな影を前に、
「本當に飛んだものを見られて了つて、私何だか未だ極りが悪くつて仕様が

ありませんわ。」

「何故？可いぢやないか。全體あれだけの正味を、殘らず前に言つてくれた方が可いのだ。」

「あら那麼事を……。」

金彌は出されたチョコレートの茶碗を引寄せて、匙を執つて掻廻しながら、

「だから書いたもので補つたのだから可いぢやないか。串戯除けてあれだけ私を信じてくれりや澤山だ。實を言ふと私はそれほどには思つて居なかつたよ。」

「え。」と歌子は聞咎めて急がはしく、「ぢや何うお思ひなすつて？」

金彌は笑つて輕く、

「實は最つとたはいの無い事に思つて居たのだ。其處は潔く謝罪るよ。お詫に一つブローチでも買ふかな。」

「まア。」

「いや本當に買ふよ。」

あら私、那樣事を些少も思つて居やしませんわ。何だか可笑しい事。」
「何故？」
「だつて思ひも付かない事になるんですもの。」
「何だ。貰ひ惜みをする奴があるものか。請つて買つて貰ふよりは甚麼に器量が可いか知れない。」
歌子は微笑ましげに、振の長い袂を膝に、意味もなく打返して、
「私那樣事をして下さるよりは、貴方が何時までも今のやうで居て下さる方が可いわ。」
「然うか。そりや安上りだ。ぢや要らないのかい。」
「あら要らないッて譯ぢやありませんけれど。」
「何の事だ。はゝゝ。」
「おほゝゝ。」
言はねど二人胸の融合ふやうに、時の移るのも忘れて居た。松を隔てゝ幾町越した彼方には、今宿へ歸つて來た謙吉が、座に着いたかと思ふと、又急がはし

く立つて、何時か一人濱へ出て物思はしげに彷徨つて居たのも、固より知らうやうもなく、春の夜の燈火を中に、眉に授け眼に答へて、心の影を猶追ふのであつた。

新家庭 前編終

新家庭後篇

(一)音訪

一

「旦様、何うでしやう這麼鹽梅で。」

と横手を仕切つた建仁寺垣に添うて、椎の古木の物寂びた姿を見せて居る下に、昨日買込んだ鞍馬の据石を、手下の若い者と二人出入の庭師の源五郎といふが、先刻から頻りと位置を取つて、彼方此方置直しては首を傾げて居たが、漸くの事で意に叶つたらしく、主人の直信に來て貰つて、脇から共々打眺めたが、

「ねえ、心持此方へ逃して見たんですが、この方がぐいと坐りが可いぢやございませんか。」

「むゝ、この方が餘程可い。些少ばかりの事で甚く違ふもんだな。」

と直信は着流しの儘、素足に庭下駄を穿込んで、手を背後にして前に立つたが、二足三足跡へ退つて又左視右視、

「何うだい。右の肩が未だ少し歪んで居るやうだが。」

「左樣さ。一息未だ上つて可うございますね。」と向ふに立つて居る若い者に、「おい、此方ッ肩を上げるんだ。最う少し前へのめらして、可し。其處で一寸極めといてくれ。旦那、此處い等で何うでしやう。」

「むゝ、可からう。」

源五郎は脇に立つて、又一度念入りに見直したが、

「可い處ですね。」

と首肯いたやうに言つて、直に鍬を取つて若い者に手傳つた。其儘直信も近く寄つて、

「何うだ。何か下草でも點綴ふかな。何が可からう。」

「左樣さ。姫熊のやうな物が可いてしやう。お孃樣が居らつしやるッて言ふと、例の又牡丹をと仰有る處ですが。はゝゝ。」

直信も打笑つて、

「違ひない。いや此處に有つた花壇を壞して了つたから、今度來たら定めて叱言を言ふ事だらう。」

源五郎は手を休めず、連りと土を押平しながら、

「お孃樣と申せば、其後は愈〻お睦ましい事で。」

「むゝ好い鹽梅に納つて、私も大安心よ。此間まで夫婦で別莊の方へ行つて居たが、出序に今度水戸から松島の方へ廻つて歸つて來るさうだよ。」

「へえ、松島えね。水入らずで御遊山ですかい。洒落れて居ますな。いゝ人は好きな事をしますね。此方輩の嚊と來ちやア、明くる日最う襷掛で、鼻の先へ鍋墨を付けて働かなくちやあならないんですが、違つたもんですさア。」

「はゝゝ、なにあれも此頃の流行でな。」

「然うださうですね。此頃ぢや旦那方の方は、同棲になると直く雄雌で、」

と言掛けて急に氣が付いて、

「や、御免なすつて何うも粗忽しいもんですから、つい粗略な口の利きやうを

しまして、へゝゝ。」と頭を搔きながら、

「何か其お揃ひで旅に出るんだッて談話ですな。いやそれで可笑しい事がありましたよ。」

と紛らすやうに、

「私の近所に、なに那樣事をする柄ぢやないんです、村の役場の詰らない仕事をして居る者なんですが、それが今度一人まア貰つたと思召せ。若いし、兩方が生意氣なんで、見やう見眞似に路用を工面して、早速手を引かれて、いそ〳〵とまア出掛けたもんです。いやこれがお談話ですよ。」と調子に乘つて何時か手をお留守にして此方へ打向つた。

二

「何でも祝言が濟むと直ぐ出發たんですね。箱根へ押出す事になつて居たんですが、夜に掛つて、向ふへ行つて餘り遲くなつても不自由だらうッて言ふんで、其晩は大森で泊る事にして汽車を降りたと思召せ。其處まではまア無事だッたんですが、何しろ祝言の席で最う暗くなつて居たんですから、相應に

最う遅くなり掛けて居たんでしやう。時刻が時刻で、それに二人の風體が、餘ッ程又變だッたんでしやうよ。宿まで曳いて行つた車夫に、てッきり駈落者と思はれて了つたんです。」

と言つて氣が付いて、又仕事に掛つた。直信は好い程に聞流して、

「ふむ、飛んだ事だ。何うしたそれから。」

源五郎は一息して、

「其又車夫ッて言ふのが、質の可くない奴でね、此奴アいゝ鳥が掛つたとでも思つたのでしやう。弱身へ付込んで、思ふさまいたぶつて遣らうッて言ふんで、相棒と二人して、(へえ、車は二臺だッたんです)。何時の間にか相談を決めて居たんですね。約束の宿へは行かないで、飛んでもない處へ引張つて行つたと思召せ。

此方は知らないから好い氣になつて、着いたら何う彼うなんて、うは〳〵した氣で乘かつて居ると、暗くつて能く解らないけれど、路の樣子が段々變になつて來るんでしやう。これはと氣か付いた時分にや最う、淋しい人ッ氣のない

處へ曳込まれて居たんです。其處でお定りの出幕になつたんですが、何分相手が惡いので、到頭若干か捲上げられて、其處へぽいと置いて行かれて了つたんです。お婿さん甚く怒つたさうですが、何しろ其處に然うしちや居られない、兎も角人の居る方へ出てからでなきや仕樣がないので、無據く氣の利かない形で引返したんですが、其中に夜は更けて來る、暗さは暗し、案內を知らない土地と來て居るんですから、いや最うさん〳〵で、それでも何うかして漸つと驛へ出て來た時にや、何處も彼處も最う寢て了つたといふ始末なんです。」

「いや氣の毒な、えらい目に遇つたのだな。」

「いえ、なに平常餘り柄にもない大口を利き過ぎるもんですから、私等ア却つて氣味がいゝ位に思つて居ますよ。いえ、未だそればかりぢやないんです。災難と言や災難ですが、皮肉なもんで、驛へ出て來る途中で生憎又降出したもんです。其奴も小降なら未だ可かつたんですが、然も又どしや降になつて了つたんです。然うなつちや花嫁も何もあつたもんぢやない。いや最う形無し

になつて宿屋へ轉がり込んだんですがね其雨に當てられたんですか、明くる日になると大熱で、先へも行れなくなつて其處から到頭歸つて了つたぢやありませんか。折角の箱根行も、それッきりおぢやんになつて何の事はない酷い目に遇ひに出掛けたやうな事になつて了つたんです。はゝゝ、這麽のも有りますよ。」

「何だ。笑ひ事ぢやない。可哀相に折角樂みにして出た當人同士になつて見るが可い。」

「へえ、まアそりやア然うですが、全體が餘り生意氣なんで、知つてる者は皆笑ふんでさア。まア損な人さね。」

と鍬を置いて前へ廻つて、

「ぢやア下草を點粧ひますかね。」

と聞く。途端に彼方の緣先から八重が、

「植木屋さん、お茶をお上りなさい。此處へ置きますよ。」

「へえ、有難う。」と此方の二人。八重は盆を置くと一寸手を支いて、

「旦那様、あの、比企さんがお出になりました。」

三

謙吉は茶の室に最う、初枝と何か話込んで居た。此前轉地療養に出た當時から、來る度に謙吉の様子の變るのに、少からず驚かされた初枝は、此日も亦、來るから意外の思をさせられた。

「まア、何うしたんだらう。謙さん、大變な元氣ぢやありませんか。全て人が違つて了つたやうですよ。」

「はゝ、然うですかい。自分ぢや氣が付かないが、併し然う見られるだけでも可いですな。」

と活々とした眼を向けた、苅立ての髪も際立つて、思做しか血色も冴え〴〵しく、眞新らしい春季服に、氣が付けば胸の金鏈も鈕も針も皆新らしい、初枝は更に又目を止めて、

「今日は大層お艶飾ですね。上から下まで殘らず新らしいのね。」

「はア、なに別に作立てる氣もないのですが、身に着けて居る物ばかりぢやな

く、これから何も彼も新らしくしやうと思つて居ますから。」

と勢よく言つて、不意と、

「時に私家を轉しましたよ。」

「おや何處へ？」

「前の家は餘り淋しくつて、何分陰氣で堪らんでしたから、今度はずッと賑やかな處をと思ましてね、幸ひ神田の小川町に氣の利いた好い處が有りましたから、早速買受けて昨日越しましたよ。」

え、買つてお出なの？」

と初枝は又眼を睜る。謙吉は微笑みながら

「は、少しばかり餘つた金が出來ましたから。」

「まア、何時の間にね。」

「はゝ、私にしちや少し早過ぎましたかね。」

「それよりはまア何をなすつたの。」

「なに一寸手品を遣つて見たのですよ。」

言ふ時直信が其處へ入つて來た。と見て謙吉は急に居住を直して、
「や、これは。」
とばかり頭を下げる。直信は機嫌よく、
「や、好く來た。何うした、一寸見えなかつたな。何うだ、其後身體の工合は？」
答も待たず、初枝は直に引取つて、
「何うして、それ處ぢやないんですの。病氣も何も飛んで行つて了ひさうな元氣なんですよ。今一寸聞いたんですが、今度神田へ好い家をお買ひだつて。」
「然うか。そりやアいゝ勢だ。ふむ、何か此頃に好い事でもあつたのか。」
「はい、なに少しばかり。」
「ほう、甚麼事が？」
と煙管を取上げる。謙吉は言葉に連れて、
「なに實は、今度少し思立つた事がありましてね、一つ大改革をして遣らうと決心したのが起りなんです。今度の事は何もそれに關係して出て來たのぢやないのです。言はゞ、其飛沫に一寸手を出して見たのです。いや、病氣の所

爲ですか、近頃何ですか先が急がれて來ましてね、氣ばかり燥つて全く仕樣がないですよ。私前から少し心掛けて居る事がありましてね、ちよい〳〵外の仕事をしては少しばかり貯蓄して居たのですが、其金が一時不用になつて了つたのです。徒に費つて了はうかとも思つたのですが、何うせ要らんもんだからと言ふ腹で歸つて早々、運試しに株を遣つて見たんです。や、貴方にはお叱りを受けるかも知れませんが、」と言葉を切つて一寸顔を見上げた。

四

直信は一寸苦い顔をしたが、

「むゝ、まア濟んだ事なら仕方が無い。で、何うしたのだ。」

と跡を聞く。謙吉は氣に掛けた色もなく、直に言葉を繼いで、

「處が僥倖にも、此間の、彼の無法に狂つた相場の中へ飛込んだのでしやう。馬鹿々々しく又當つたもんで、左樣さ、彼是一週間ばかり、賣つたり買つたりして居る中に、實際盲蛇に遣つたのが、嘘のやうに調子好く行つたですな。尤も資金が資金ですから、無論驚くやうな額にやならなかつたんですが、それでも

五萬ばかり泡沫錢がまァ手に入つたのです。」
「え、五萬ね？」と初枝は呆れ顔に、「まァ。」
とばかり今更のやうに又目を瞬つて、
「謙さん、そりや大變だね。」
謙吉は事もなげに、
「なに餘り自慢の出來た事でもありませんよ。實の處正當に働いて取つたのぢやないのですからね。」
「だつて何にしても可いぢやないかね。」
「はァ、そりや少しは自由が利きますからね。併しもと〳〵私の本意ぢやないのですから、此上深入をしまいと思ひましてね、それッきり相場の方は奇麗に手を洗つて了ひました。」
直信は煙管を拂いて、大きく首肯きながら、
「む〻、其事だ。當ると兎角其上の慾が出て、得て深入をしたがるものだが、兎もあれそりや好い事をした。いや、外れりや外れるでな、取返さうと又焦燥り

立つ、何方にしても好い事はない。筋は何うでも折角身に着いたものだから、何うかそれを實のある事に用ひて貰ひたいな。總別恁ういふ事で手に入れた金は、何うも貴く思はれんものだが、其邊は注意して餘り冗な事にして了はんやうにするが可い。」

と老人らしい忠告をする。謙吉は言はれるまでもないやうに、

「いや、私も其心算で、丁ど外に考へて居た事がありましたから、幸ひこれを利用する事にしましてね、今度いよ〳〵商賣を初めますよ。」

「そりや可からう。して何を遣るね。」

「雜貨を遣ります。御存じの丸尾に居た時分の手心もありますから。」

「ぢや會社の方はね？」

と初枝は脇から聞く。謙吉は振向きさま、

「止めましたよ。彼方も大分優待はしてくれましたが、全然自分のものでない以上、存分自由な事は出來ませんからね。」

「そして何ですかい。其神田の家で店をお出しなの？」

「いや、商店は別に置く心算で、今其計畫中で居ます。今度南米から歸つて來た友人が一人ありますが、事によると其男と二人で遣るかも知れません。」

「まア、何にしても結構ですね。謙さんが那樣になれば、私共も甚麼に嬉しいか知れませんよ、ねえ貴方。」

と良人の方へ振返る。

「然うとも。」と直信は調子を強めて、「いや、確り巧く遣つてくれ。」

「は、充分に一つ働いて見ます。私も今迄とは全で違つた行方をして見る心算です。」

とはきとした聲音で言つたが、

「これで命さへ長ければ、未だ爲る仕事はあるのですが。」と不意と言つて聲を掠らせた。

五

聞いて初枝も、直信も同時に、齊しく不安の目を謙吉の上に注いだ。謙吉は自分で言つて、何だかはッとしたやうで、弱身を見せまいとして直さま、

「はゝゝゝ、いや、慾には限りが無いもんですよ。」

と別に意味もないやうに言紛らした。初枝も氣は打たしたが、態と元氣らしく、

「まア何をお言ひなの。今の若さに壽命の事なんぞ、餘りお手廻しが好過ぎて御挨拶が出來ないのね。おほゝゝゝ、」

謙吉も共に笑つて、

「や、大きに然うです。今持出す談話ぢやないですな。不意の收穫で些少血迷つたのかも知れませんよ。はゝゝ。」

「おほゝゝ、何とも知れないのね。」

直信も異様には思つたが、なまじ病氣の事など言出して、氣を挫かせるのもと、其儘談話をかへて、

「お前然ういふ事になれば尚、是非一人貰はなけりやならん必要があるな。」

「え、」

と謙吉は不意を打たれて、急に瞬きしながら、

「妻ですか。」
「む丶何うだな。早速一人見付けたら可からう。お前に其氣があるなら私も及ぶ限り一つ骨を折つても見やうと思ふが。」
「は、有難うござりますが、」
と謙吉は漸く胸を落付けたらしく、調子も元に返つて、
「妻よりは事業の方が先ですから。」
「いや事業は事業だが、その方も心掛けて置いて遲い事はなからう。」
「なに妻などは何時でも貰へましやう。私は今の處、未だ全で其考もありませんから、いづれ其中といふ事に願つて置きましやう。」
直信はぢッと其顏を打目戍つたが、
「お前何か望があるのかな。」
「は、無いでも無いですが。」
「む丶。」と直信は膝を進めて、尚も顏を見入るばかりに、
「何か知らんが、私とお前との間に。包まず話してくれたら何うだな。」

謙吉は乾と振仰いだが、直に砕けて、

「いやなに、未だ熟考した事ぢやないので。それに付いては、別にお談話をしやうと思ふ時もありますから、其節とくと又聞いて戴きましやう。」

「然うか。然ういふ事なら強ひては聞かないが、併し兎も角考へて置くが可らう。」

「はい、いづれ又御意見も伺ひましやう。」

初枝は口を噤んで、交る〲二人の顔を見較べて居たが、

「謙さん、先達は何か、貴方の望んで居た方が亡くなつたやうなお談話でしたね。」

謙吉はけろりとして、

「はア、那様事が有りましたかな。」

「おや、それぢや好い加減な事を仰有つたの。まア人が悪い！」

直信は聞咎めて初枝に、

「何だ。前に最う那様な話をした事があるのか。」

「はい。有りました。其時にも随分勸めたんですがね、種々の事を言つて到頭逃げてお了ひだつたんです。」

と謙吉を打見遣つて、

「何でも謙さんは餘ッ程お好みがむづかしんですよ。」

「むゝ、或は然うかも知れんな。」

と二人は何も知らぬ。謙吉はそれとなく目を止めて居たが、今は其時でないとでも思つたか、遂に何も言はなかつた。

(二) 新宅

一

夕暮近く謙吉は車を驅つて歸つて來た。家は雜沓した町を少し入つて、若葉の影を塀越しに、門から五六間、兩側に植並べた常盤木の中を、右にゆかしげな玄關先を見せた、付々しい住居であつた。久しく使つて居た耳の遠い傭婆は、此處へ移つて來ると共に暇を取らせたが、望外の慰勞金に目を丸くして、引越にも悴を連れて手傳に來て、腰の痛むのも忘れて働いて居た。替つて來たのはお清といふ十七ばかりの仲働と、お松といふ五歳上の臺所をする女中、謙吉は何にも氣を使つて、道具までも大方は新らしくした。

「おい、お千代は何うした。」

と部屋着を着更へて座に着くと、謙吉は四邊を見廻してお清に問掛けた。お清は留守に訪ねて來た人の名刺やら、葉書や封書などを手に持ちながら見上げて言譯らしく、

「はい、あの物置の方の掃除をしてお出になります。」

「なに掃除を？」

と謙吉は眉を顰めて、稍聲を險しく、

「何故那樣事をさせるのだ。手が無ければ仕方がないが、お前達は手を明けて居てお千代を使ふといふ事はない。」

お清は未だ能く馴れない主人に、言はれてどぎまぎして、

「いゝえ、お止め申したんですけれど、強てなさると仰有るもんですから……。」

「然うか。ぢや行つて呼んで來い。」

「はい。」

とお清は取敢へず持つて居た名刺と手紙を出して、そこ／＼に取次いだ用を言つて、直に立つて行つた。謙吉は葉書を先に、頓て信書の封を切つて何か長長と書込んであるのを、傍から跡を追つて讀んで行つた。と暫くして、聞慣れた、訛りの取れぬ聲で、

「旦那樣、歸らしつたゞかね。」

とお千代は襷を外しながら入つて來た。謙吉は眼を擧げて、
「おゝ、來たか。お前何故物置なんぞ掃除して居るのだ。」
「そんでも餘り汚くなつて居たゞアから。」
とお千代は罪もなく答へた。謙吉は手紙を措いて、
「いや、那樣事はお前の役ぢやない、外に人が居るぢやないか。お前は自分だけの事をして居れば可いのだ。」
「でも勿體ねえ。俺お客樣に來だぢやありましねえだに。」
「いゝや、お前は私の指圖通りにして居れば可いのだ。お前の爲る事は未だいくらもある。お前は田舍に居た時分の氣は捨てゝ了はなくつちや可けない。」
「はア、けんども俺、それやぢア餘り冥利に盡きるだアて……。」
「併し私が好んで爲るなら可いぢやないか。默つて私に任せて置くが可い。然う言へばお前、何故那樣扮裝をして居るのだ。今朝出來て來たのを何故着ない、」

お千代は驚いて眼を瞠つた。

「あれ彼衣をまア平素に着るだかね。」

「勿論さ。」

「俺まア何うしますべえよ。那樣甚え事になつて、俺全體何しますだアよ。」

謙吉は只打笑つた。

「はゝゝ、お前はこれから一つ生れ變るのだ。」

「え、生れ變るだね？」とお千代は更に眼を瞠つて、訝かしげに謙吉を打目戍つた。

二

「然うだ。これからお前を拵直すのだからな。」

と謙吉は一人興ありげに言つたが、お千代の未だ怪訝な顔色をして居るのを見ると、

「なに拵直すと言つて、然う又何も彼も註文通りに行くものぢやないから、まア追々と遣つて行かうが、私も折角引受けて世話をする事になつたんだから、

一つ出來るだけ耻かしくないものに仕立上げやうと思ふのだ。お前は最う此處の家の人になつた氣で、詰らん氣兼などをして居ちや可けない。私も思切つて肩を入れるから、お前も其心算で、これから先を心掛けてくれなけりや可かんよ。」

お千代は直に答へやうともせず、先刻から振仰いだ儘で、

「俺、そんで何うなりますだアね。」

謙吉は其瘠せた頰に、心地よげな微笑を浮べて、

「お前の奮發次第で何うにでもなれる。甚麼希望でも出すが可い。私は何處までも跡押をして遣らう。」

「あれ、那樣事言はしつても、自體が俺がのやうな者、何う轉んだつて仕樣がありますべえかよ。」

「はゝゝ、お前は何も知らないな。默つてまア見て居るが可い。」

「けんども俺、」とお千代は未だ落着かぬ態に、「旦那樣に那樣甚え事して貰つちやア、何條にも濟みましねえだア。俺奉公さして貰ふべえと思つて來ました

だもの。」

「那樣事は何うても可いさ。私は初めから恁う考へて居たのだ、餘計な遠慮をしちや却つて心持を惡くする、他人と思はず、急に血緣の者が出來たと思ふが可い。」

「あれ勿體ねえ。俺最う何て言つて可いだか知りましねえだ。旦那樣、何とした事でまア俺のやうな者に、然うまで身を入れさつしやるだかね。」

と何か思入つて聞く、謙吉は只輕く、

「なに私は、那樣仰々しい事にや思つて居ない。此方と同じやうな、親も緣類もない身を可哀相だと思つたからだ。不圖した事で餘計な金が出來たのはお前にも幸で、銚子で考へたよりは自由が利くといふものだから、私もお前の爲に內々悅んで居る。」

と言つて膝の前の、封書に一寸目を遣て、

「おゝ、然う言へば高神の方丈の處から今手紙が來た。」

「あれ、家の變つた事最う知つて居さつしやるだかね。」

「むゝ、前に知らして遣つたから能く知つて居る。いや方丈なか〳〵巧く遣つて、すツかり最う談話を付けてくれた。此間金を少し送つて遣つたが、お前、伯父の方の手は切れたから安心するが可い。お前が何うしやうと最う何とも言つて來はしない。」

お千代は重ね〴〵の、禮も能く言はれぬ態で、物も言はず、何時が眼を濕ませながら、

「まア何から何まで。俺何うしたら此御恩を返されますだか。」

「はゝゝ、何を言ふのだ。私は那樣恩返しなぞを望む男ぢやない。まア可い。兎も角着更へて來い。」

「はアそんぢや一寸くら……。」

と頓て立上つたが、跡から思餘つて不意に、

「俺本當に、何てえ幸福者だか。」

謙吉は其態を、更に心地よげに打見遣つたが、

「何だ。那樣事言つて居ないで早くするが可い。」

とばかり前に讀殘した手紙を手に取つた。

三

入替つて枝折戸の中へ、一昨日雇入れた車夫の佐吉といふのが、働振に庭へ水を打ちに來た。勝手口では、今朝から湯殿の修繕に來て居た大工が、今歸つて行くと見えてお松に挨拶して頓て出て行く樣であつた。途端に室の置時計が、冴かに三十分の時を打つた。と程もなく、未だ着こなしの、何處にも田舍離れのした處はないが、流石に見違へるやうになつて、お千代は少し物羞かしげな氣勢で入つて來た。

謙吉は見て意を得たやうに、

「おゝ、それで可い。それで少しお孃樣らしくなつた。」

お千代は眼を避けて、

「あれ、那樣事言はつしやると、俺顏上げられましねえだ。這麽絹布物着付けねえだで、全で身體に着いちや居ましねえだア。」

「はゝゝ、何を那樣に恐々着て居るんだ。いゝ氣になつて最つと澄まして居

るが可いぢやないか。那樣扮裝位に負けて何うするのだ。」

「そんでも何うにもなりましねえだもの。傍から氣い咎めるて仕樣が無えでがすよ。俺今迄に餘所の厄介になり通して居たゞから、新しい物て未だ着た事もねえだに……。」

謙吉は嗜めるやうに打消して、態と勵ますやうに、

「何だ、詰らん事を最う言つて居るな。これから自由に新しいものを着せて遣る。那樣事で引けを取らしはせん。思切つて嬌飾れるが可い。女は見得ばかりでなく、姿を佳くしなけりやならんものだ。出來るだけは飾立つて、持つて生れた標致を好くする事だ。」

「そんでも程がありますだア、」

「むゝ、だがお前は其程よりも卑下して居るから可けない。家の者にしたからには、此方の思ふだけお前を奇麗にする。お前が併し厭だと言ふのなら仕方はないが。」

と微笑みながら顏を見る。お千代は正直に聞くと急がはしく、

「あれ、厭だなんて。身に餘つた這麼事してくらしつて、厭だッて者何處に有りますべえよ。俺ア只餘り勿體ねえ事だと思ひますだアで……。」

「可し。そんなら此方次第にするが可い。そればかりぢや無い。私はこれから一つお前を教育する。正則に遣つて行くにや少し遲れたから、何か速成の一番好い仕方でお前を修業させやうと思つて居る。お前も其氣で人に負けないやうにな、勵んで何でも習込むやうにしてくれ。」

「はア、有難え事で、そんだら俺に何か仕込んでくらつしやるだかね。旦那樣、何だつて這麼者に然う心配打つてくらつしやるだか。習へますとも。はア。俺最う夜の目寢ねえでも習つて見ますだア。恁うまで引立つてくらつしやるのを、何條して戻いてなりましやうかよ。俺此御恩決して徒にはしねえだア。」

と胸に溢れた儘を、聲音に籠めてさも熱心に言つた。謙吉は快く首肯いて、

「むゝ、其氣込で遣つてくれりや尚更だ。なに思込みや何でも出來る。私もこれから一つ、身體の續くだけ働いて見る心算だから、道は違ふがお前も充分

に奮發して見るが可い。」

とばかり勢よく言つたが、眼を優しく、振向いて晴やかに、

「おゝ、飯を了つたら散歩に出やう。今日はお前の知らない處へ伴れて行つて遣らうよ。」とさながら實の妹に向つて言ふやうな調子で言つた。

(三) 従姉

一

軒の若葉の影を映して、奥へ一筋、鏡のやうに艶々とした縁先を、此家の名物の執事頭の藥罐と、眉間の黒子を押物にした安井老人が、例の猫背に据首といふ形で、紋の黄ばんだ古羽織の後姿を見せて、今こつ〳〵と通つた。と跡から小間使のお秋といふ、十五ばかりの小作りなのが、輕い足音を立てゝ駈けて來たが、直に追付くと、

「御免なさいまし。」

と言捨てに衝と通拔けて、奥の歌子の居室へ入つて行つた。

老人は二つ三つ瞬きして、變な顔で後影を見たが、いつか又据首になつて、同じやうな足取で頓て行過ぎた。

と間も置かず、中から駈出すやうに、歌子の華やかな姿が現れたが、お秋の今來た方を急ぎ足に、通ひの中の室を横に切つて直に玄關へ出た。

「あら！」

と立迎へさま、零れるやうな笑顔を向けて、

「まア、能くねえ。」

下の敷臺の前には、一昨日歌子の歸つた事を聞いて、今訪ねて來た芳子の、何か遣物らしい包を車夫に持たせて、裝立つた美しい姿で立つて居た。

歌子は取敢へず延いて座敷へ通して、女同士の言葉も多く、一別後の挨拶などに何彼と事長かつたが、其中にも嬉しさうに一人いそ〱として、

「本當に能く來て下すつたわねえ。私の方から上らなけりやならなかつたのを、貴女にや何時も先を越されて了ふのねえ。」

芳子も懷かしさうな笑顔に見るから打解けて、

「いゝえ私は又、中々急にお傍が離れられまいと思つて、態とお察申して來たのよ。」

「あら最う那樣…………。」

と歌子は顏を赧めながら、

「厭ですよ貴女、最う一月の餘にもなるのよ。」

「然う言へば大層お長かつたのね。嘸まア種々何でしたらうねえ。」

「あれ又那樣……。いゝねえ、出た序だからと言つて、方々廻つて來たもんですから、つい遲くなつたんですよ。」

「結構ぢやありませんか。自由に遊んで居らしつても構はないだけお羨ましいわ。私なんぞは小宮山が彼の通りの忙しい身體だもんですから、たつた五日しか出ちや居られませんでしたわ。それも漸う〳〵の事でそれだけ明けられたんですもの。旅へ行つたつて矢張仕事を持つて行つて居るんでしやう。些少もおち〳〵しちや居なかつたんですよ。」

「でも其方が却つて可うござんすわ。何處へ行つたつて珍らしいのは四五日の內ですもの、跡は一つ事ばかりで、結局には退屈して了つて仕樣がありやしませんわ。」

「まア、矢張不足を仰有るのね。私のはそればかりぢやないの。小宮山は又些少も構つちやくれないんですもの。私なんぞは傍に居るんだか居ないん

だか、全で知らないやうな風で居るぢやありませんか。」
「あら巧い事を。嘘だわ。小宮山さんが那樣事はありやしませんわ。」
「おほゝゝ、貴女はそりや御自分に引較べて然う思ふのよ。貴女の方のは然うぢやないのね。」
「あら、何うして？」
と歌子は又鼻白む、芳子は猶打笑ましく、
「いゝえ、私は知つて居ますよ。」
と態とらしく顏を差覗いた。

二

「まア、那樣いゝ加減な事を。」
と隔てのない從姉だけに、歌子に未だ心安く、
「厭よ。貴女は只人を調戲つて悅んで居らつしやるのね。酷いわ。貴女だつて一度は這麼時があつたのに、餘り察しが無さ過ぎるわ。」
と稍怨じ顏に言ふ。芳子は免さうともせず尚笑掛けて、

「おや、何うしたら可いでしやう。私怒られるやうな事は言はなかつた心算だのに。」

「あら何も怒りやしませんよ。」

「でも察しが無さ過ぎるの何のツて。おほゝゝ。全體其這麼時といふのは甚麼時？」

「知りませんよ。私厭最う！」

「おほゝゝゝ。」

と裏もなく笑つたが、其儘調子をかへて、

「あの今日は室賀さんは？」

「は、未だ歸つて來ませんの。」

「然う。そりや生憎でしたのね。私小宮山の言付で一寸お目に掛つて行かうと思つて居ましたのに。」

と何か殘惜しさうに言ふ。歌子は顏を上げて、

「おや何か御用？」

「いえ、なにね、此頃にお二人をお招申したいから、御都合の好い日を聞いて來てくれと言はれたもんですからね。」と言つて附加へるやうに、「それに私は私で、成丈幾度もお目に掛つて、早く最つとお馴染になつて置かうと思ひますから。」

歌子は一寸色を動かして、

「まア私共の爲に、那樣事して戴いちや本當にお氣の毒樣ね。」

「あれ、那樣事を仰有られるやうな準備は何もしはしませんよ。御懇意を重ねるのが主なんですから、別に何にもしない心算て居ますの、本當にお手輕なんですからね、只ほんのお談話に入らして下さる位にお思ひでなくつちや可けないの。」

「いゝえ、それだつて何ですわ。」

「おほゝゝ何も彼もありやしませんよ。」

「でも入らしつて下さるでしやうね。」

「はア、そりやア最う悦んで上りますわ。」

「歸りましたら早速話しましやうよ。」

「何うぞ宜しく。」と言つて元氣よく「ぢや其用は最う濟んだのね、さア最う些少貴女の方のお談を伺ひましやう。」

「あら、お談話ッて何？」

「其後のお談話ですよ。貴女何にも仰有らないぢやありませんか。私になら些少位聞かせたつて可いでしやう。」

と顏を見る。歌子は眼を落して、紛らすやうに打笑みながら、

「だつて何も、お談話するやうな事はないんですもの。」

「まア、無いの本當に？」

と態と呆れたやうに言ふ。歌子は流石に氣に咎めて、

「え、」

と思はず聞返す、芳子は眼を追つて、

「可うござんす。たんとお隱しなさいまし。那樣筈ぢやなかつたのね。貴方、餘所の方になると、那樣に最う分隔てなさるの？」

「あら！」
「第一お約束が違ふぢやありませんか。前に貴女と種々お談話したのを最う忘れたの？」
と押返して言ふ。歌子は能くも聞かず、術なさうに眉を動かして、
「貴女何も知つて居らつしやる癖に、那樣に、最うお虐めなさるもんぢやありませんよ。」

三

「おほゝゝ、那樣にお厭ぢや仕樣がないのね。」
とばかり強ひても言はず、芳子は尚笑ましげに、つく〳〵歌子の、若い婀娜いた姿を打目戍つて居たが、
「羨ましい事、私も最う一遍貴女のやうな時代になつて見たいわ。」
と坐ろに言ふ。歌子は振仰いで急がはしく、
「あら那樣、時代だなんて、一昔も前のやうな事を仰有るのね。」
「いゝえ一昔處ぢやないの、私は二昔も前のやうに思ひますわ。」

「まア！何うして？」

と不思議さうに眼を瞬る。芳子は其態を憐む氣勢に、

「今に解りますよ。本當に樂しいと思ふのは一年とは續いちや居ませんからね、そして二度とは最う那樣時は來やしませんよ。貴女も今の中に出來るだけ好い思をしてお置きなさいまし。」

と何か思ありげに跡を言殘す。歌子は更に訝かしげに、

「まア何の事それ？　私には能く解らないわ。」

「おほゝゝゝ、だから今に解ると言つたのですよ。何處のも大抵は然うですからね。でも貴女の方のは、私共のやうなのとは違ふのですから、然うとも一概には言はれませんけれどね………。」

「あら何が違ふの？　私尚解らなくなるばかりだわ。」

「でも貴女は一通りぢやない何ですから。」

「だから何てすよ。」

「あの、戀女房て居らつしやるから。」

「まア、厭な！」

と歌子は我にもあらず色を染めて、稍々早口に、

「いゝえ那樣事は別にしてね、私本當に貴女の仰有つた事が能く解らないわ。貴女それぢや何か不足に思つて居らつしやる事がお有りなさるの。」

「いゝえ、家の事は貴女も知つて居らつしやる通りですもの。私の方から不足に思ふ事はありやしませんわ。貴女思違ひをして居らつしやる。那樣お談話ぢやないんですよ。」

「まア何だらう。貴女那樣事言つてないで話して下さいよ。何だか焦燥ッたくなるわ。」

「おほゝゝ、いゝえね、私なぞは最う結婚の當座のやうな氣にはなれないと言ふのですよ。強ちお互に珍らしくなくなつて了つて、段々缺點が見えるといふ那樣事からぢやないんですよ。自分ながら何故這麼になるだらうと思ふ位なのよ。私ばかりぢやなく、小宮山が矢張然うなんでしやう。つい此間も小宮山と、二人でそれを言つた事があつたんですよ。到頭小宮山も、仕方がな

い、これが當前だ、我々が年を取つたのだ、と言つて了ひましたがね……。」

歌子は言はれるほど猶了解めず、美しげな眉を集めて、

「あれ今ッから那樣事言つて何うなさるの。貴女のお談話は全で判じ物のやうなのねえ。」

「然う。ぢや時節が來たら判じて御覽なさいよ。」尤も人に依つて行方が違ひますからね。閑だから這麼事を考へて居ると思つて、此間も或奥樣にそれを話しましたらばね、貴女方は世帶の苦勞がないから、那樣暢氣な事を考へて居らつしやるッて、頭から冷かされて了ひましたもの。本當は暢氣の沙汰ぢやないんですけれどね。」

と何時か眞顏になつて居た。歌子は眼を動かすのみで、

「まア、私には未だ解らないわ。」

とばかり顏を打目戍るのであつた。

四

芳子は逸早く氣をかへて、颯と色を直すと、直に晴やかな笑顏を見せて、

「おほゝゝ、何うしましやう。私でもない。詰らない事を言ひましたのね。這麼事は今お談話をする時ぢやありませんわ。解らないのが可いのですよ。一生解らずに居らつしやい。貴女は屹度然うですよ。それに又越した事はありませんからね。おほゝゝ、最う止しましやうよ本當に。」

「あら、それぢや解らず了ひになつて了ふの？」

と歌子は物足らぬ氣勢に、

「私何にも知らないんですからね、先に立つて能く教へて下さらなくつちや仕樣が有りませんわ。本當よ。これから何うして行つたら一番可いのだか、全で見當も何も付いちや居ないんですもの。」

「いゝえ、そりやお互樣よ。私なんぞは這麼で居て、矢張未だ其日任せで毎日只胡麻化して居るんですもの。何が何だか半分は夢のやうなのよ。」

「まア貴方から那樣事言つて了つちや……。」

「でも然うなんですもの。まア可いぢやありませんか。何うにかこれでもなつて行くもんですよ。」

と談話をかへるやうに、急に膝を進めて、何か思出し顔に少し聲を低く、
「それは然うと私、貴女に逢つたらお談話しやうと思つて居た事があるの。」
歌子は前の事に未だ心は殘つて居たが、言はれる儘に、
「え何？」
と聞く、芳子は微笑みながら顏を差寄せて、
「少し可笑しな事なんですよ。貴女ほら、此家へお出の前に私の方へ暇乞に入らしつた時、晩になつて小宮山と一處に遊びに來た方があつたでしやう？それ、あの脇屋さんといふ、」
「はア、あの油繪をなさる………。」
「然うよ。あの方がね、おほゝゝ何だか可笑しいわ。」
「あれ、何が可笑しいの？」
「いゝえね、まア兎も角言つて了ひましやう、あの方がね、あの時貴女を見初めたの。」
「あら、」

と歌子は思掛けぬ事ではッとしたが、騒ぐ胸を抑へるやうにして、稍聲を險しく、

「まア、何を仰有るの。」

芳子は急がはしく、

「いゝえ、本當なんですよ。でもね、如彼いふ淡泊した構はない方なんでしやう。此方のお談話を聞いて奇麗に諦めてね、最う那樣事なしに、機を見て美しく交際つて見たいと言つてお出なの。逢つて御存じでしやうが、一體が餘ッ程變つた方ですからね、私にだつて何も彼も言つて了ふんぢやありませんか。今度逢つたら彼の方の口から直接に聞いて御覽なさい。そりやお談話するやうぢやない、本當に可笑しいんですよ。だつて餘り構はなさ過ぎるんですもの。」

「まア那樣方があるでしやうか。私厭だわ。何ほ何だつて可笑しいぢやありませんか。」

「だつて有るんだから仕樣がないぢやありませんか。」

「でも可笑しいわ。」

「おほゝゝゝ、そりや可笑しくない事はありませんけれどね。」

とばかり不意と眼を見合せたが、若い同士の、言合はしたやうに一度に、

「おほゝゝゝゝ。」

(四) 火影

一

茶の室にはお房が今、火鉢の前に流れた火を直して炭を加足して居た。更けるに早い夜の最う十二時に近く、主人の留守を、上の電燈の影も何か淋しさうに、二室離れた女中部屋には、お秋と今一人のお加代といふのが、眠さうな顔で差向ひに、休み〳〵自分のらしい縫物をして居た。

「お秋さん、最う何時だらう。」

と顔を上げて欠伸交りに、お加代は倦怠さうに背を伸して、

「大層お歸りが遲いぢやないかね。」

「本當にね最うお歸りになりさうなもんだがね。」

とお秋は針を數へて、裁縫を終ひながら、

「晝間は然うでもないけれど、夜になつてお奥がお留守だと、何だか恁う淋しいもんだね。」

「でも長尻のお客樣で、いつまでも寢られないより未だ可いわ。」
「然うさ動かないだけもね。」
「おほゝゝ、餘りお動きなさりもしないけれど。」
「憚りさま。そりや誰かの事だよ。」
「おや誰の事だらう。私やお秋さんの事とばかり思つて居たのに。」
「いゝえ、そりやアね、確かお加代さんといふ、然うね、御標致は中位だけれど、大變お口の可い、此頃に牛乳屋の内儀さんになつて、牛のお尻を洗つて遣るんだツて言ふ……」
「澤山よ、最う好い加減におし。」
と加代は聲を揚げて、傍の物指を取つて打つて掛る。お秋は素早く身を退いて、
「おほゝゝゝ、でも然うなんだもの。」
お加代は苦笑ひして、
「お前さんは本當に、年に似合はないませた口を利くのね。其鹽梅で押して

行つたら甚麼者になるだらう。お房さんが呆れたのも無理はないわ。」

「はい〳〵、私は何うせ小まッちやくれてございます。何になるもんですか。御心配には及びませんよ。御奉公を濟したら長屋へ歸つて、金棒を曳いて歩きますよ。」

「あれだもの、本當に驚いて了ふ。何でも勝手におやりなさい。どれ、お茶でも戴いて來やう。」

と立つて次の室へ出たが、何心なく中を見て、

「おや。」

と立止つて、振返りさま、

「お秋さん、一寸來て御覧よ。」

「何うしたの。」

とお秋は直に立つて來た。其處の大きな角火鉢を中に置いて、今度初奉公のお新と、古くから臺所を働いて居るお鎌といふのが、いつの間にか正體もなく寢込んで居た。

「まア、おほゝゝゝ。」

お新は其聲に吃驚して跳起きた。慌てゝ眼を擦りながら、

「あゝ、俺何にも知らなかつただゞア。」

お鎌もはッと眼を開いて、肥つた身體をむッくり上げて半は起掛けた。お秋は衝と寄つて、

「おほゝゝ、お鎌さん何うしたんだね。最う夜明けだよ。」

「えッ夜明ね！」

とお新は正直に眼を圓くする。二人は其態を又可笑しがつて笑出した。途端に茶の室の掛時計が高く十二時を打つ。暫くして奥からお房の聲で、

「お前さん達は最うお休なさいよ。」

二

時も措かず、許しを幸に婢共は、式ばかりの挨拶を先に、やがて皆寢て了つた。お房は一わたり戸締りを見廻つて、再び茶の室へ入つて來たが、流石一人の影を侘びしく、跡から柱の時計を眺めては、主人の歸りを待暮して居た。

「本當に、何うなすつたんだらう。」
と果は口にも出して、表に氣を配つては、行過ぎる車の音にも二度ばかり欺されたが、稍あつて彼方に、今度こそそれらしい音が近寄つたので、耳を欹てるより早く乘出すと、果して門を勢ひよく、續いて二臺がらがらと入つて來た。
「お歸り！」
と次いで車夫の清造の聲、お房は言ふまでもなく出迎へに立つた。
程もあらせず、話しながら中の通ひの室を、此方の電燈の光を浴びて、車の上で眠つたらしい金彌の稍疲れた顔と、夜目には更に際立つた歌子のけざやかな姿を前にして、お房の光つた丸髷の影が見えたが、頓て跡先に奥へ通つて行つた。
「あゝ、疲勞れた事。」
と歌子は先に下へ、稍しどけない姿に、流石我家の、心安げに座を取つたが、
「おや最う一時になるのねえ。」
「はい、餘りお遲いので、何うかなすつたんぢやないかと終局にはお案じ申し

ました。あの今迄彼方でございましたか。」
とお房は双方の顔を見る。歌子は輕く首肯いて、
「はア、彼方なの。いゝえね、私は何度も立ちかけたんだけれど、何でも歸さないッて、無理に止められたんでね。太田さんは又甚い惡止めをなさるんだもの。でも皆さんが藝人で、そりや可笑しかつたわ。ねえ貴方。」
と良人の方へ振返る。金彌は袴を脇へ脱捨てゝ、お房の差出す座蒲團に、其儘膝を崩して寛ぐと、
「ふむ、皆相應に道樂者だからな。」
「え、道樂者？」
と歌子は異樣に眼を動かしたが、お房の前を憚つたらしく、直に氣をかへ、
「私那麼お座敷へ出たのは初めてゞすよ。」
金彌は打笑つて、
「然うか些少驚いたかい。」
「はア、少し。」

と跡を言はず、片頬に笑掛て口を噤んで了つた。金彌は見て裏問ふやうに

「で何う思つたい？」

と面白づくに聞く。歌子は俯向いたまゝ、

「私種々に思ひましたわ。それに……。」

と言掛けたが、急にお房の方へ振返つて、

「おゝ、最う遲いから房を休ませましやう。然う言へば、阿母様は？」

と聞く、お房は思出し顔に、

「おゝ、申上げるのをつい忘れて居りました。先程お供に參つた勇吉が歸りまして、御別莊の方へお廻りになつたと申して參りました。又二三日お泊りださうでございます。」

「おや、然う」

とばかり多く言はず、良人を一寸見て直に眉を落したが、心付いて然り氣なく、

「御苦勞だつたね。着物は恁うして置いて可いから、お前は先へお休み。」

「はい、それでは。」

とお房は頓て、臥床其外總ての準備の出來て居る由を言つて、室へ退つて行く。
歌子は後影を見送つて、稍あつて向直ると、不意に、
「貴方、お眠くなくつて?」
と少し改つて、
「私少しお談話したい事がありますの。」

三

更行くまゝに、四邊は森として、窓に近い風の囁きも手に取るやうに、動かぬ影は底を入れて、夜の色を尚深くして居る。 金彌は目を上げて輕く、
「何だ。 改つて?」
歌子は良人の氣色を先づ讀むやうに、それとはなしに顏を見返したが、微笑みながら、
「いえ私、今夜少し聞いた事があるもんですから‥‥」
「むゝ、何を?」
歌子は再び顏を打目戍つて、

「貴方の事ですよ」

「え、私の事と？」金彌は一寸色を動かして、喫掛けた葉巻を下に、「誰に聞いた？」

「太田さんの奥さんに。」

「ふむ、何だか先刻、二人で長い事話して居たが、それぢや私の何か噂をした居たのだね。」

「いゝえ貴方の事ばかりぢやありませんよ。以前の種々なお談話が出て、それから貴方の事になつたんですがね、少し思掛けなかつたお談話だつたもんですから、私根問ひして飛んだ内所話をつい聞いて了ひましたの。私貴方には那樣事が無いと思つて居たら……。」

金彌は逸早く、それと察したらしかつたが、面に見せず、態と蔑すやうに、

「何だ。女の噂談話なんてものは碌な事ぢやない。以前の詰らん事を何か大袈裟に話されたのだらう。お前は又正直に聞いて居るもんだから、面白づくに種々言つたに違ひない。彼の人は座興に隨分好い加減な事を言ふ人だから。」

「あら貴方。那樣事を言つてお逃げなさるのは酷いわ。」

「なに逃げるものか。然う言ふなら聞いて遣るから、言つて見るが可い。」

歌子は胸に思ふ事はさま〴〵に有つたが、流石未だ明らさまに言ふことを憚かるやうに、

「何だか其御樣子ぢや、本當に能くお聞きなさりさうもないのね。」と稍調子をかへて、「私知らなかつたんですけれど、貴方は隨分お道樂をなすつた方ださうですね。」

と思切つて口を切つた。金彌は最早驚かず、直に笑消して、

「那樣事だらうと思つた。今頃那樣跡も殘つて居ない事を洗立てして何うするんだ。はゝゝゝ騷いでくれたつて最う張合がない。何とか言譯をするやうな時分なら未だ面白いが、疾うに消えて了つた事で此方は思出すにも骨が折れる位だ。全體何う話されたか知らないが、噂は兎角大きくなり勝の者だからな。何か棒ほどにして振廻されたに相違ない。彼の人も相應に人が惡いからね、お前を焚付けて置いて蔭で笑つて居るのだ、はゝゝ、お前でもない、

私を信じて居ないから、那様事に動かされてつい人に付入られるのだ。」と何かなしに言黑めて了はうとした。歌子は思ふに違つた方へ入つて行かれるのを、胸には飽足らず惱ましげに、

「あれ、那様事をお聞申すのぢやありませんよ。私だつてそりや彼の奥様の前ぢや、笑つて聞流して居ましたわ。」

「はゝゝ、私の前ぢや然うは可かないか。」

歌子は心ならず其儘笑顏を作つて、

「でも貴方は未だ那様方の事は全でお談話がなかつたのね。いつか仰有つた事とは些少違つて居ますのね。」

と態と面を和げて言つた。

四

金彌はチラと、目顏に怪しげな影を見せたが、振直つて直ぐ笑出した。

「はゝゝ、串戯ぢやない。それとこれとが一につになるものか、那様下らん事に氣を遣はないやうに、お前も最少し自分を重んじてくれなきや困る。私は

那麼者を人間並には思つて居ない。一時の眞箇の悪戯だよ。何の事はない通りの屋臺へ寄つて、洒落に煮込のお田か何かを喰つたやうな者だ。一々那様のを詮議立されて堪るものか。殊に最う過去つて了つた事ぢやないか。最うい丶加減にするが可い。」

と手にした葉卷を捨てゝ、

「あゝ、咽喉が乾いてならん。最一つ茶を貰はうか。

歌子は言はれる儘に注いで差出しながら、

でも其、何ぼ屋臺のものにした處が、其時は矢張味美しいと思つて召上つたんでしやう。」

と又笑顔を作つた。金彌は茶碗を下に、

「はゝゝ、私は屋臺のものを喰つて生きちや居ないよ。私の餌食は最少し良い心算だ。那様馬鹿々々しい事に、何時までも相手になつて居るのは御免だ。おい、餘計な事を言ふと愛想をつかされるぞ。

と言つて、それとなく氣を試いた。歌子は進まぬながら調子を好く、

「あら、それぢや最う言はれませんの。おほゝゝ、私何だか胡麻化されて了つたやうに聞えますわ。」

「何だ。未だ嫉いて居るのか。」

「まア、那樣事を。貴方は態と那樣事を仰有つて、何も言はせないやうになさるんでしやうけれど、口に言はないだつて胸に持つて居たら、矢張いゝお心持はなさらないでしやう。」

金彌は片手を背後に、微笑みながら髭を捻上げて、

「むゝ、そりやしないとも。」

「それなら氣の濟むやうに、何も言はせたら可いぢやありませんか。」

「はゝゝ、飛んだ事だ。其方の氣の濟むまで並べられて堪るものか。」

「あれ、誰が那樣に並べると言ひましたよ。でも何でしやう貴方。」

と少し躊躇つて、

「私は這麼者ですけれど、何だか不安心のやうな氣を起させるのは貴方の罪でしやう。」

「はア大分お堅いな。」
と金彌は冷かし顔に、
「其調子でちく／＼と來られちや遣切れたもんぢやない。まア可い。お說は何れ伺ふから大抵で切を付けてくれ。全體何うすれば可いのだい。」
「何うすればツて、私然う仰有られると却つて困りますわ。」
「可し。兎も角私が謝罪らう。今後若し然ういふ事が有つたら、其時大いに羽拂きをするが可い。」
「然う。屹度？」
「念を押すにや及ばない。」
「おほゝゝ、何だか當にならないわ。」
「何故？」
「でも太田さんの奧樣も然うお言ひでしたもの。」
「ふむ、女といふのは仕方がないもんだな。」
と欠伸しながら、

「どれ寝やうかな。」

とばかり立つて、室を先へ出て行つた。歌子は何も言殘したが、今に限つた事でもないと思返して、つい其儘にして了つた。

(五) 新客

一

一日過ぎて土曜の夜、小川町の停留場で、本所行の電車を降りた若い二人連の士官が、別れて一人は三田行に乘替へ、一人は脇の商店の小僧に、何か聞合せて衝と向ふへ行つた。其時背後から不意に、

「や、生駒君、」

恰も家へ歸つて來る途中車で通合せた謙吉は、先に見付けて聲を掛けた。種彥は振返ると其儘、逸早く軍帽の下から、鋭く光る眼を擧げたが、

「おゝ。」とばかりつか〳〵と來て、「丁ど可かつた。今君を訪ねて行く處だ。其處の商店で聞合せたが能く知れんでな、番地を尋ねて好い加減に來た處なんだ。」

「然うかね。そりや好い處で遇つた。取敢へず御案內しやう。なに新前の小成金なんぞ、誰も知りはせんよ。はゝゝ。殊に此方は普通のとは少し毛色

が違つて居るからな、近所でも何者だか未だ能く知らん位だ。」

と車を降りて押並ぶと

「好く來てくれた。いつ此地へ出て來られたね。」

「昨日來たよ。や、僕も今度此地の隊附になつたから、大いに又舊情を溫めやうと思つて來た。」

「や、そりや尚更だ。此間手紙でも然う言つたが、僕も一つ生れ變つた處を見て貰ひたいと思つて居た處だ。」

「むゝ、然う言へば大分樣子から變つて來たな。」

と微笑みながら謙吉の外目にも著しい美々しげな扮裝を眼に入れたが、

「家でも一寸噂を聞いた。何か豪い元氣ぢやないか。」

「はゝゝ、根が凡人だからね、少し調子が好いと直に圖に乘るのさ。少々實は面目ない次第だ。」

と自分で嘲けるやうに言つた。種彥は一寸其橫顏を見たが、

「だが此間の手紙ぢあア、萬更然うばかりでもないやうだつたが。」

謙吉は首肯いて、

「むゝ、そりや少しは覺悟もないのぢやないがね、結果を見せない中は空な談話だからね。飾立つて言つた處が始まらんと思つて居る。今の處ぢや何も金の光だ。事に依ると此儘で下らん俗物になりきつて了ふかも知れんよ。」

「何だか少し意味が解らんな。」

「はゝ、まア追々と話さう、其處だよ。」

と頓て近付いた我家の方を指さして、

「何うだね。出來星の成上りにしちや穩やかな方だらう、尤も高の知れた事で、碌な眞似も出來はしないが。」

種彥は一わたり構へを見て、

「いや、却々好い家だ、僕は住居などの事を能くは知らんが、何か隨分手の掛つた家のやうだな。」

「むゝ、これでも先の持主は大分注意して建てたのだ。」

「然うだらう、此方のやうな野蠻人にも何處か奥床しく見えるからな。」

と打連れて中へ入つた。と見てばら〱と出迎へた女中の、いづれも初めての顔の中に、少し離れて手を支いたお千代の、流石に立優れて目に立つた姿を、種彦は思はず眼に止めたが、座敷へ通ると直に問掛けた。

「君、何だ彼の女は?」

二

「彼女か。」

と謙吉は騒ぐ色もなく、笑つて見返しながら、

「君には何と見えるね。」

「何だ、解る位なら聞くものか、君には別に如彼いふ親戚もないやうに思つて居たが。」

と種彦は氣もかねずつけ〱と言つた。謙吉は、尚も打笑みながら、

「無論親戚でも何でもない。」

「ふむ、ぢや何ういふのだ、前に何の談話もなかつたから、一寸恠う妙に思つたよ。」

「はゝ、餘計な推測をしやしなかつたか。なに彼女は此間田舍で拾つたんだ。と言ふと何か棄兒のやうだがね、實は孤兒で、憑りのない可哀相な身の上だから、引受けて世話をして遣らうと思つて此方へ引取つたのさ。道樂と言へば、道樂だが、實は彼女を一つ素晴しいものに仕立上げて遣らうと思つて居るのだ。勿論本人次第の事で、此方の註文通りに行つてくれるか何うかは知れんがね、何うせ肩を入れて遣るなら、此方の力の及ぶだけは助けやうと思つて居る、うまく行つてくれりやァ僕も大いに心持が可いからね」

と何時か調子付いて言續けた、種彥はそれとなく樣子に目を付けて居たが、

「ふむ、そして結局何うしやうといふのだね。」

「え、何うするとは？」

種彥は微笑みながら、

「只それだけにしちや君が餘りに俠客過ぎるぢやないか。」

「はゝ、それだから困る、今も餘計な推測をしやせんかと言つたぢやないか、婦人と言ふと、直に其處へ持つて來るから何うも談話にならんよ、實際何の他

意もないのだ、それでなくつて又恁ういふ風にして傍へ置かれるものか。改めて斷るのも變だが其點は全く潔白だよ。」

「いやそりやア疑はれるな。然うだからと言つて、何も傍に置かれんと言ふ事は有るまい。單に好意で世話をするといふには、相手が少し美人過ぎるな。」

「ふむ、なに疑ふなら疑ふさ。此方に疚しい處がないから少しも驚かんね。解る時には全然解る事だから。」

と取合はぬ態で言つた。種彦は押返して、

「併し何の緣故も無いものを、一寸考へると餘り肩を入れ過ぎるやうにも思はれる。」

謙吉は首肯いて、直に答へやうとしたが、急に思返した姿で、

「はゝ、下らなく辯解するにも及ばんが、醉興とでも何とでも考へて置いて貰はう。それでも腑に落ちなければ、本人を紹介せるから直接に聞いて見るが可い。いや、それは可いが、久し振だから一つ大いに御馳走しやうかね。」

「むゝ、その方は遠慮をせんから、何か充分に願はう、僕一流で多々益々辨じ

るから。」

「いや然う言はれると少し困るがね。」

「なに困る事はなからう。此方は來る時から其覺悟で居るのだ。今夜は飲倒し且つ喰倒す。」

と態と磊落に言つて、不意に調子をかへて、

「それに少し話す事もある。」

「なに話す事が。」

「む丶、妹の事で。」

と輕く言つて一寸顏を見た。謙吉は色を變たか、流石に落付いて、

「歌子さんの？　ふむ何だね。」

と左あらぬ體に問返した

三

種彦は氣色を見て、態と調子を輕く、

「なに然う改つて言ふほどの事でもない。まア緩り話さう、時に自由だが一

つ着る物を貸して貰はうか。恁ういふ無遠慮の席ぢやア、服は矢張窮屈で可かんよ。」

言ひながら上衣を脱掛けた。謙吉は快く、

「お易い御用だ。早く言つてくれりや可かつたに。」

と取敢へずお清を呼んで、袷に帶などを揃へさせた。種彥は無造作に、直さま取つて着更へながら、

「はゝ、何分軀幹が大きいから、全で小兒の衣服を着たやうだ。」

と短い行丈を笑ひながら、ぐるぐると手任せに帶を巻付けて、其儘膝を崩して座に着いた。と間も置かず、手の掛つた仕出しの料理が早く席に現はれた。

「や、酒か。酒と言へば近來馬鹿に强くなつたぜ。」

「然うか。ぢや早速お手並を拜見しやう。生憎氣の利いた酌が無いが、お好みならナニ呼寄せても可い。」

「はゝゝ、大分責掛けるな。なに那樣者は無用だ。今夜は君と大いに飲む心算だから。」

と逸早く盃を擧げて、

「君は併し其の相手は些少迷惑の方だらう。」

「いや敢て辭さないよ、此頃上戸仲間にも隨分立交るからね。」

「ふむ、そりや大分變つたな。」

「變つたとも、最う以前の比企は何處かへ飛んで行つて了つたんだ。」

「むゝ、酒ばかりでなく。」と首肯くやうに、「先刻から見て居る處何うも其やうだ。可いな。君の爲に祝して可い。君の消極主義を能く攻撃したもんだが、最う其必要も無くなつたやうだな。」

「然うさね。宗旨が殆んど最う變つて了つたからね。」

と言つて何氣ない面色で、

「時に何か歌子さんの事で談話が有るとか言つたが。」

種彦は盃を置いて、更に打解けた姿で前に押直つたが、

「むゝ、なにね、妹が此間、例の旅行の歸りに僕の方へ寄つてね、僕に賴んで行つたもんだから一寸言出したんだが、なに女の事だから、下らん事を氣に掛けて

居るんだ。でも何か一人で心配して居るから、ぢや兎も角能く傳へて遣らうと言つて置いたのさ。」

と言葉を切つて、微笑みながら調子をかへて、

「妹は何を間違へて居るのか、今度の結婚に就いて君が非常に腹を立てゝ居るやうに思つて居るのだ。恐らく君が何か一寸串戯でも言つたのを、妹は本氣にして了つたのぢやないかと僕は思つて居るが……。」

「むゝ、それで、」

と謙吉は騒ぐ胸を押沈めて跡を促した、種彦は尚も心を置かぬ樣に、

「いや、君と僕との間だ。恁ういふ內輪同士で、別に體面も隔意も有つた譯のもんぢやないから、何も腹藏なく話してくれた方が可い。君は何か妹に言つた事でも有るのかね。」

と稍ゝ廻つて來た酒に紛らして、笑つて問掛けた。

四

謙吉は不意に膝を打つて笑出した。

「はゝゝ、や、そりや飛んだ事だ。僕は全で覺えが無いが、全體何から那樣疑が來たのかね。」

と思掛けぬ面色で俺までしら〴〵しい言樣をした。種彦は意外の答に思はず言葉を止めて、

「え。」

とばかり顏を打目戍つたが、胸に逸早く何をか思廻らすと、急に調子をかへて、

「然うか。僕も或は那樣事ぢやないかと思つた。歌の奴、何か穿違へて下らん思過しをして居るのだな。それぢや何も言ふ事はない。君には却つて詫をせにやならんな。」

「なに我々の間に那樣事があるものか。兎も角併し思違ひがあるのは可くないから。何とか其疑ひを解く事にしやうよ。」

種彦は附入るやうに、聞くと齋しく膝を進めて、

「むゝ、そりや僕からも願ひたい。彼奴眞面目に心配して居るから、其中に逢つて能く話して遣つてくれんかね。なに當人も、何うか以前の謙さんのやう

に、何も殘らんやうにして美しく交際ひたいと言つて居るのだから、然うしてくれゝば甚麽に悦ぶか知れんよ。」

謙吉はいと易げに、猶豫もせず直に首肯いて、

「そりや何時でも可い。早速逢つて笑つて了はうよ。僕にした處が、那樣風に思はれて居るは多少迷惑でもあるからな。」

「はゝ、大いに然うだ。お蔭で僕も馬鹿な使の役を承はつたのだ。併し彼奴の事だから腹を立てんで、何うかまア可いやうに賴むよ。」

と引直つて、又盃を手に取ると、惡黠しげにぢろ〳〵と見て微笑みながら、

「處で談話は前の美人に戻るが、果して君が言つた通りだとすれば、次第に依つては僕にくれても可いのだな。」

と一つ調戯つて見る氣が出た。謙吉は不意を打たれた姿で、一寸周章てたやうに見えたが、直に取直つて、

「ふむ、そりや樣子次第で進上しても可い。併し彼の儘ぢや仕方がない。充分作上げてから、改めて見て貰はう。」

「はゝゝ、氣の長い談話だな。それまで手を空しくして待つて居るのか。何うだ其前に相談が出來ないか。」

「いや相談にも何も、今はカラ山出しで兎ても談話にはなりやアせん。何しろ未製品の中に賣出す事は出來んよ。僕はね、彼女に就いちや係ふいふ道樂を持つて居る。充分研磨を掛けて社交の舞臺に出した上は、一人や二人の候補者ぢや仕樣がない。少くとも十人位な望手に競走させる位の者にしたいと思つて居るのだ。」

「ふむ、其時に候補を爭へといふのか。僕も其時分にや大いに又發展する心算だから、面白くない事はないがな、併し鼻の先に控へて居て只待つて居るのも下らんな。何うだ今から地盤を作つて置くのは？」

と笑ひながら言ふ。謙吉も同じく笑つて、

「はゝゝ、大分氣に入つたと見えるな。今の中から然ういふ人が出て來るやうぢや彼女の前途も中々頼もしいな」

「まア兎も角も此處へ呼んでくれ。」

と酒興を枷に、半ば好奇心で謙吉を促したが、舌を縺らして、

「おい呼んでくれるか。」

「むゝ、お目には掛けるが、實際の山出しだから驚いては可かんよ。」

とばかり身を返して柱の電鈴を押した。

（六八）こゝろ

一

軒に低い釣燈籠の灯が、ほのかに庭の布置を見せて、高塀一重に町を隔てた夜の趣を語つて居る。萩の若葉の影を濃く、松の差枝を上に流した、鉢前近い居室の中に、謙吉は今、後を約して好い機嫌で種彥の歸つて行つた跡、一人茶を呼んで醉を拂つて居る中にも、何か安からぬ面色で、稍々暫く眉を顰めて居たが、頓て颯と氣色を直すと、急に振返つて、

「千代、千代。」

と聲を高く呼んだ。

「はい。」

と二室ばかり先に聲がして、お千代は直に立つて其處へ入つて來た。謙吉は何氣ない態に、

「お前明日の支度は最う出來て居るのかい、朝一番て行くのだから、なるたけ

忘れ物のないやうに、今夜の中に手廻しをして、置くが可いぜ。」

「はい最う殘らず整然として置きましたゞア。」

とお千代は氣を付けて言葉の訛を直さうとして、臆病らしく調子を亂して言つた。謙吉は其儘首肯いて、

「然うか。そりや可かつた。一日でも旅へ出ると、何か一品忘れても非常に都合が惡いものだ。何は、駒井さんは、五時に來ると言つたが、寢坊して起されたりなんかしちや氣が利かんぞ。」

駒井といふのは、お千代を敎育する爲に、特に毎日通つて貰つて居る女敎師の一人で、今度其人に三日ばかり閑暇が出來たのを幸ひ、謙吉の立案で、お千代の修學旅行と言つたやうな事をかねて、近縣を遊覽して來やうといふ談話が出來たのである。

「あれ、俺……」

とお千代は言ひかけて、氣が付いて

「私、朝起ぢや誰にも負けましねえだよ。」

「はゝ、いや先刻の客が早く歸つてくれたから可かつたが、お前の明日の邪魔になりはせんかと思つて、初めは一寸氣遣つたよ。」

「はア、あのお客樣、未だ〳〵歸らつしやりはしまいと思つて居ましたら、何だか急に歸つて行かしつたぢやありましねえかね。」

「むゝ、あの男は何時も思立つと直ぐ歸るのだからね。いや、然う言へばお前彼の男を何と思つたね？」

と不意と聞いた。お千代は何の心もなく、

「別に何といふ事も有りましねえ。がいに……、あの大層威勢のいゝ人だと思ひましたゞ。」

「何うだ。氣に入つたかい。」

と重ねて微笑みながら聞く。お千代は罪もなく、

「氣に入つたつて何うしましやうよ。」

謙吉は戯れるやうに首を掉つて、

「然うでない。彼の男がお前を嫁にくれんかと言つたよ。」

「あれ、何言はしやるだァ。」
とお千代は慌てゝ眼を避けたが、一圖に串戲にして、取合ふ風もなく、
「那樣取つて付けたやうな事、誰が本當にしましやうかよ。」
「はゝゝ、いや眞實なんだ。だからお前が何う思ふと言つて聞いたのだ。」
と少し身を前に、顏を差窺くやうにして、尙も打笑みながら、
「え、正直何う思ふね。」
と再び問返した。

二

お千代は振仰いだ眼を下に、暫く物も言はずに居たが、頓て僅かに顏を上げると、不意に、
「何う思ふッて俺……私那樣事知りましねえだよ。私那樣氣全で有りましねえだもの。」
とばかり問には答へやうともしなかつた。謙吉は押返して、
「なに無いといふ事があるものか。隱すには及ばない。思つて居る事は何

でも言つて了ふが可い。お前が若し可いと思ふなら、私も其心算で又骨を折つて遣る。」

と故と言つた。お千代は急がはしく、

「あれ、何うしましやう。那樣思ひも付かねえ事になつちや、本當に困つて了ひますだアよ。私何時可いッて言ひましたゞア。」

「はゝゝ、それぢや厭だと言ふのか。」

「はい。那樣談話なら私厭でがす。當事もない、何處へだつて私、嫁入なんてしましねえだよ。」

と調子を強めて言つた。謙吉は又笑つて、

「むゝ、それぢや何うするのだ。」

お千代は言知らず、物思はしげに謙吉を見上げたが、其眼を直に逸らせて、

「旦那樣許してさへくらつしやりやア、私一生此處へ置いて戴きますだアよ。」

謙吉は一寸眉を動かしたが、ぢッと視て、

「そして何うする。」

「そして私に出來る事で、何か御恩返しがしたいと思ひますだア。這麽者でも何かの手助けは出來やうと思ひますだから。」

「む丶、其志は嬉しいが、那樣事してお前は何うして身を立てるのだ。

「あれ、私なんぞ何うなつたッて……。」

謙吉は聞敢へず聲を打つて、

「いや、そりやア可かん。それぢや此方の骨を折つた甲斐が無くなつて了ふ。お前を那樣にして家へ埋めて了ふやうな事にして何うなるものか。お前も那樣詰らない氣は決して出さんが可い。何日かも然う言つたぢやないか。何でも可いから飽まで世間へ乘出す氣組で確かり遣れ。力の及ぶ限りは跡押をして遣るから。」

お千代は俯向いて、何か言ひかねたやうに、暫く依違つて居たが、

「はい其事は、私も知つちや居りますけんど……。仰有るやうに世間へ出たい氣は何うにも未だ出ましねえから……。」

「だから奮發して出さなくつちや可かんよ。」

「旦那様、」

とそれには答へず、顔を上げると、我にもあらず思込んだ聲音で、

「一つ事言ふやうですけれど、此處を離れて私何處へも行きたくねえでがすよ。」

「はゝゝ仕樣が無いな。まア可い。何も今行くといふのぢやないから、お前が最少し解るやうになつてから又能く話さうよ。」

「あれ、其事なら、今だつても私に解らねえ事は有りましねえだよ。然う言つたら又叱られるか知りましねえが、私お腹の中ぢや最う決めて居ますだよ。」

「え、何う？」

と謙吉は聞咎めて又目を止めた。お千代は聲を深く、

「私甚麼に言はれても、旦那様の影には最う離れまいと思つて居ますだア。」

「え、」と謙吉は氣色ばんて、「そりや又何うといふのだ。」

と口早に言つて急に身を進めた。

三

町を壓して電車の響が、絶間もなく彼方に入亂れて聞える。隣家の季娘の長唄も何時か止むで、何やら聞取れぬ話聲が、四五本並んだ塀際の檜葉を洩れて來る。夜は其中に移つて、燈籠の灯も薄れ氣味に、夏を知らせ顔の地蟲の聲が、細い南天の根元に起つた。お千代は最早躊躇はず、思入つた聲音を其儘。

「外でない旦那樣なら、譯を言つたら屹度置いてくらッしやると私は思つて居ますだ。」と微笑みながら、「若しかして追出されても、門を最う退くまいと思つて居ますだアよ。」

謙吉は尙安からぬ面色に、

「だが何故那樣にしても居たいといふのだね。」

お千代は多く言はず、

「でも旦那樣のやうな方、外には最う有りましねえだもの。」

とばかり眼を下にした。謙吉は瞬きもせず見詰めて居たが、何時か言知らぬ心地を胸に、思はず吐息をつくと、急に口を重く、

「いやお前は私を人並の者に思つちや可けない。恁うして上邊こそ、元氣よ

く愉快らしくはして居るが、其實身體にも心にも、人の知らない深い傷を持つて居るのだ。」

お千代は驚き顏に、

「えツ、傷と言つて甚麼まァ、

と我にもあらず眼を瞬る。謙吉は淋しげに笑つて、

「はゝゝ、最う言つても返らない。癒す事の出來ない傷だ。一時は何うなつて了ふかとも思つたが、急に氣をかへて、負けて居まい、挫けて了ふまい、仆れるまでも立つて行かうと決心してから生變つた心算で、何にも先を取つて事を遣出したのだが、今度の新らしい仕事に手を出したのも、實はお前を世話をして居るのも、一つにはそれに紛れて胸の苦みを忘れやう爲で、私の身の納まりには此先何の明處も有りはせんのだ。私は一人で生れて、一人で只死んで行くのだ。」

と言葉に連れて底の知れぬ憂愁を、現はに面に見せて言つた。お千代は尚更に顏を打目戍るばかりて、

「けんども何うして那様事が……。」

謙吉は猶、今の言葉の跡を繼いで、

「だからお前は自分を犧牲にして私のやうなものに、長く隨いて居るには決して及ばない。若い、先の長い、甚麽運でも攫む事の出來る身體を、むざ〳〵と詰らん事にしてなるものか。お前は何處までも、私の望んで居るやうな立派な者になつてくれ。それが私には何よりの慰めだ。」

と言つて重ねて、物佗びしげに、

「淋しい私の生涯にも、せめて一つは花のやうな物が欲しいぢやないか。そしてお前に望むのは、私の死んだ時にな、他人の心持でなく泣いて貰ひたいのだ。私には那樣妹のやうな者も一人もないのだ。はゝ、飛んだ地金をつい言出したな。」

千代は言ふ事も知らず、眼をのみ只動かして居たが、

「あれ、最う那樣悲しい事を言つてくらつしやいますな。能くは解りましねえが、然うまで言はつしやるからにやア、甚え心配事持つて居さつしやるだに、

もし私のやうな者ぢやアそれを何うする事も出來ましねえだか』と言敢へず銜と身を進めて、私旦那樣の爲になら、甚麽事をしても厭ひましねえだか‥‥。」

と一圖に思込んだ眼を輝かして言つた。

四

謙吉は眼に止めておッと思入つた其顏を見詰めた儘で、暫く物も言はずに居た。あゝ、此女は今、自分が若し世界の果へ行くと言つても、默つて隨いて來るだらうと思つた。火影に映えて、優しく煙る眉のかゝり、思を集めた眼眸の、さながら秋の星のやうなも、時に連れて眼に刻まれるやうな心地がしたが、物に紛らして窃かに吐息ついて、

「むゝ、お前の好意は喜んで受ける。お前が居るので、私も何れほど慰められるか知れんのだ。なにお前の案じてくれるほど、今ぢや最う苦しいとも思つて居ない。言はゞこれでも男の端くれだ。生きて居る中は何にでも堪へられる。最う可い。然う心配をしてくれんでも可い。」

と流石に笑顔を見せて、

「たゞ是からは、お互に何彼と助合ふさ。二人揃つて、外に身寄も何も無い身だ。兄にもなれば妹にもならうぢやないか。はゝゝ、仲好くしやうなア。」

言はれてお千代は心苦しげに、

「あれ、然う言つてくらつしやると又、私勿體なくつて仕様が有りましねえだア。」

謙吉は打消すばかりに、

「何が勿體ない、お前は兎角に那様事を言つて可けない。自分を最う詰らん者に思ふ事は止めなけりや可かん。那様氣位のない事ぢや、中々豪くなる事は出來ないぞ。」

「そんでも私、今のやうに旦那様と一つ列の者のやうに言はつしやると、何條にも氣が濟みましねえだもの。」

「何だ。未だ言ふのか。それだから可かんと言ふのだ。何日かも話したと思つたが、お前は最う此處の家で生れた者と思つて了へ。些少は我儘もして

見る位の氣を出すやうにしろ。」
「てゝ那樣事をまア……。」
ちよッ仕樣がない奴だ。」と笑つて叱るやうに
「可し、何うしても其氣になれなけりや、最う家へは置いて遣らんぞ。」
お千代は言葉も知らず、一筋に只感激したやうに、眼をさへ濕ませて、
「はア、勿體ねえ事て……」
「何だ、又言ふ。」
「そんでもこれはッかりは仕樣がありましねえもの。」
謙吉は快よく笑つて、
「はゝゝ、口癖になつて了つたのだ。これからは氣を付けるが可い。二度と言ふと承知しないぞ。」
「はい。」
「可し。それぢや最う明日があるから好い加減に寢るが可い。あゝ、詰らん事を言つて餘計な氣を揉ませたな。私の事は何日か又話す時がある。那樣

事は打捨つて置いて、お前は何處までも自分の修業の方を、氣を散らさず一心に遣てくれ。」

「はい、はい、私は只有難えといふより外にはねえですよ。」

「なに、これしきの事を。」

と何時か額の曇をも消して、其儘、前に打向つたが、併しそれも少時の間で、お千代の頓て立つた後は、知る者もない一室の中に、寢室を餘所にして長く、障子に燈火の影を映して居たのであつた。

(七) 兄妹

一

「兄さん、何にしましやうね?」

と眼顔に罪のない嬌は見えても、最う昨日の妹のやうでない。何處にか奥様らしい落付いた風の見えるのを、今訪ねて來た種彦は、骨肉の眼から興ありげに眺めながら、

「え、何を?」

と向直つて親しげに聞く。歌子は華やかに、

「おほゝゝゝ、御馳走をですよ。」

「然うか。俺は相變らずだ。喰へるものなら何でも喰ふ。併し同じくは味美い方が可いな。」

「あら那樣まづい物なんか上げやしませんわ。」

「何うだか。お前の見繕ひぢや甚麽物が出るか知れたもんぢやない。」

「まア酷い。那樣事を言ふなら最う何にも上げやしないわ。」

と元氣よく立つて衝と室を出て行つたが、頓て急がはしく引返して來ると、傍へ近く、心を置かず座を取つて、頰に殘した微笑を其儘、

「兄さん、今日は緩りして居らしつても可いのでしやう。」

と顏を差窺くやうにして言ふ。種彥は輕く首肯いて、

「むゝ、だが室賀君の歸りは遲くないのか。」

「いゝえ、今日は何處へも廻らないと言つて出ましたから、そちこち最う間も有りますまい。」

「然うか。俺も折角來たもんだから、逢つて行かれりやそれに越した事はない。」

と奇麗に剃つた鬚の跡を、意味もなく押撫でながら、

「處で何うだい。お前は家の事には最うすッかり慣れたかね。」

「はい、まア何うやら恁うやら。」

と歌子は好い程に答へた。種彥は微笑みながら、

「ふむ、そりや思つたより早かつた。此間二人で高崎へ寄つた時の樣子ぢや、未だ〳〵まゝ事の最中で、全で何も解るまいと思つて居たが。」

「あら、なんぼ私だつて、那樣に何時までも兒供ぢやありませんわ。」

「はゝゝ、いッぱし最う大人の氣で居るから可い。那樣口上が出るやうぢや未だ危ないもんだ。」

「まア、何が危ないの。」

「何でも危ないさ。足元も危なけりや手元も危ない。默つて坐らして置きや知れまいが、何か事でもあつて見ろ。直に最う狽狽くに決まつて居る。」

歌子は不平らしく、

「あれ、那樣事を仰有つたつて、兄さんは此家へ來てからの私の事は、何にも御存じないぢやありませんか。私だつて餘所の家へ來りや何時まで家に居る時のやうな氣ぢや居ませんわ、貴方の思つて居らつしやるのとは、些少はこれでも違つて居ますよ。物に依つちやア、私より兄さんの方が兒供ですわ。」

「はゝゝ、や、豪い事を言ふ。今から其鼻息ぢや、最少し經つたら大變だらう。」

と笑ひながら言つて、跡から不意に、
「おゝ、此間お前に頼まれた比企の件は、俺が昨夜行つて逢つて來たよ。」
「え、比企さんに？」
と歌子は聞くと共に笑顔を消して、時ならず氣色ばんだ面色に、
「そして彼の、頼んだ事を話して下すつて？」
と顔を見詰めて、思はず聲を反跳ませた。

二

歌子の思ふやうにもなく、種彦はけろりとして、
「いや、話さなかつたよ。」
と手もなく言捨てるやうにして、膝の前の煙草盆を引寄せた。歌子は急込んだ形で、
「あれ、那麼に頼んで置いたのに兄さんでもない、それぢや全で話して下さらなかつたの。」
と怨めしげにぢッと見る。種彦は打笑つて、

「なに其爲に出掛けて行つたのだからな、切出す事は切出したのさ。處が比企は全で初めから揉消して了つた。」

歌子は眼を睜つて、

「え、揉消したと言つて何う？」

「いや少しも覺えが無いと言ふのだ。何から那樣思違ひが出たのだらう、と全で佯恍けて了つて居るのだ。」

「まア。」

と歌子は呆れ顏に、二の句も繼がず眼をのみ動かして居たが、

「それぢや蔭へ廻つて只私を虐めやうとするのか知ら。那麼置手紙までして種々な事を言つて置きながら、今更覺えがないなんて那樣事を……。」

と俯向いて、何やら考込んだ。種彦は喫餘した煙草を棄てゝ、

「いや彼の男は、彼如見えて隨分自尊心の強い男だから、いくら親密の仲でも、俺の前て弱い音が吹けなかつたのかも知れないが、お前も生家から聞いたらう彼の男も相場で當つてから、全で人が違つて來たからな、今では最う好い加

減忘れて居るかも知れないよ。少くともお前の心配して居るやうな氣分ぢや居ないやうだ。俺も事を圓く納めやうと思つたから、それぢや一度逢つて能く話して遣つてくれと言つたら、二つ返事で何時でも逢はうと言つたよ。」

「まア、本當に？」

「無論さ。いやそれに、」と片頰に微笑みながら「こりあ俺の邪推かも知れないが、比企は最う二度目のへ掛つて居る。」

歌子は急がはしく顏を上げて、

「えッ、二度目？」

「むゝ、何だか妙な若い美しい女を家へ連れて來て居るよ。」

「だつてそれだけぢや何だか知れやしませんわ。」

「處が其世話の仕方が一通りぢやないのだ。何でも田舍に孤兒のやうで居たのを連れて來たのだと言つて居たが、一寸見ると何處かの令孃のやうな風をさせて、出來るだけ素晴らしいものにさせるのだと言つて、三人ばかり特別に敎師を呼んで家で敎育して居るよ。那樣別に緣故もない者に、何で然う深

く肩を入れるのだらう。俺には何うしてもお前の身代りとしか思はれなかつた。」

「まア。」

とばかり歌子は口を噤んだが、胸には少からず呆れて、半ば、殆んど信ぜられぬやうに思つた。眞實とすれば、自他の爲には結句幸ひではあるが、直に心を移されるやうな、那樣淺墓な思はれやうをした人の爲に、那麼餘計な心配をした、と思ふと、何か知らず忌々しいやうに、其儘物も言はずに居たが、心付いて眼を擧げると、種彥と顏を見合せて、思はず苦笑ひしながら、

「男といふものは那樣ものですかねえ。」

三

「何故？　可いぢやないか。」と種彥は平氣な顏で、「詰りお前の手が脫けるのぢやないか。俺は却つて好い都合だと思つて居る。」

「あれ其事ぢやありませんよ。」と歌子は進まぬ色に、其儘眼を落して、「私那樣、直に氣の變るやうな人だと知つて居たら、何も本氣になつて詰らなく跡を案

じなくつても可かつたと思ひますとね、自分でも氣を遣つたり、兄さんまで頼んだりしたのが、何だか馬鹿々々しいやうでならないぢやありませんか。兄さんは初めから打遣つて置けと仰有つたけれど、でも比企さんの彼時の樣子ぢや、本當に甚麼になるか知れやしなかつたんですもの。餘りだわ。だから男ッてものは那樣者かと思ひましたの。私何だか全で狐に魅まれたやうな心持がしますよ。」

種彦は打笑つて、態と戯れるやうに、

「はゝゝ、それぢや何かい。お前は何時までも執念深く思はれて居たかつたのかい。」

「あら那樣……。人を、好い加減になさいよ。」

「いや何とも知れんよ。女にや然ういふのが幾個もあるからな。」

「まア隨分だ事。兄さんなんぞは、女の事なんか知りもしない癖に。」

種彦は事ともせず、

「はゝゝ、何ぼ俺が女に近寄らんからと言つて、知りもしない癖にとは些少酷

いな。」

「おほゝゝゝ、それぢや何か那樣經驗でもあつて？」

「馬鹿を言へ。俺には大望がある。那樣下らん事に氣を止めて何うするんだ。其位な事を知るに經驗も何も要るものか。」

「そら那樣風に女を馬鹿にして居る方に、女の事は矢張解りやしませんわ。」

「なアに、俺に解らない事なら、解つたつて何うせ役に立たない事だ。」

「まア驚いた事！」

「何が？」

「おほゝゝ、可うござんすよ。それは可ござんすけれど、比企さんのは本當にお談話の通りなんでしやうか。」

と未だ腑に落ちぬやうに、前を見詰めたなりぢッと何をか考へて居た。種彦は一寸眉を動かしたが、振直つて稍、調子を強く、

「何だ、未だ拘泥つて居るのか。そりや何方にしろさ、比企がお前の案じたやうで無くさへなればそれで可いのぢやないか。」

「はア、それは然うですけれどね……。」
と歌子は跡を濁して、何か言淀んだ姿で居たが、
「いゝえ比企さんの事ばかりぢやなく、私此頃は人の心なんてものは當にならないもんぢやないと思ひますの。」

「え？　妙な事を。」
と種彦は聞咎めて顏を見返しながら、
「比企は別として、何か未だ那樣事でも有るのかい。」
「はア。兄さんだから話しますがね、良人が矢張然うなんですもの。」
「なにッ、室賀君が？」
と種彦は眼を光らせたが、屹と面を起して、さながら叱付けるやうに、
「何を言ふ。串戯ではないぞ。お前は然ういふ事を輕々しく言つて可いと思つて居るか。」
と態と聲を勵まして言つた。歌子は押返して、
「でも然うなんだから仕樣がないぢやありませんか。」

「むゝ、ぢや譯を聞かう。」
と種彦は許さぬ色に衝と身を進めた。

四

烈しく言つた心算ではなかつたらうが、屹と向直つた種彦の面には、流石兵器を命にして居る男の、兄ながらも馴れ難い、返事次第で大事にもなりかねない色が見えたので、歌子は今更に由ない事を口走つたとも思つたが、外でない骨肉の仲、言つて惡かつたにした處で、内輪同士で濟む事と強ひて隱さうともせず、顏を見返して、
「兄さん、貴方は私を何處までも幸福だと思つて居らつしやるのでしやう?」
種彦は聞きも終らず、
「勿論さ。又然うなつた以上、然うでなけりやならんぢやないか。」
歌子は何か言患つた姿で、言葉を一寸躓かせたが、其儘首肯いて、
「然うです。私の我儘かも知れません。これが世間で言ふ幸福といふものかも知れませんけれど、來て見ますとね、思つて居たのとは違つて居ますのね。」

「何だ。那樣事から兎や角う言つて居るのか。」
と種彥は嘲けるばかりに、
「そりや當前の事だ。お前が世間見ずのお孃樣で、勝手に想像した通りであつて堪るものか。違つて居る處が可いのだ。其爲に人間が一枚上つて行くのだ。立派な修業ぢやないか。俺なんざ、却つて喜ぶな。」
「まア、兄さんは氣樂な事を言つて居らつしやるのね。なんぼ私だつて那樣、蟲の好い想像ばかりして來たのぢや有りませんわ。親の傍に居る時とは、一つにならない位の覺悟は初から爲て居ましたわ。」
「はゝ、怪しいもんだ。今のやうな事を言出すやうぢや、覺悟と言つた處で知れたもんだ。」
「でもそれとは事が違ひますもの。兄さんは意味を取違へて居らつしやる。」
「むゝ、何う？」
とぢろりと見る。歌子は眼を落して、
「いゝえね、外の事なら何ですけれど、私肝心の室賀を疑ふやうになつたのは、

可い事ぢやないと思ひますの。」
「そりやア可かん。良人を疑ふなどゝ言ふのは有るまじき事だ。併し言出すからには何かあるのだらう。むゝ何うして那樣氣を出すやうになつた。」
「でも室賀は私を欺して居るんですもの。私室賀の本當の心が解らなくなつて來ましたわ。私何ですか玩具にされて居るやうな氣がしますもの。私本當に、恁うして居て全く不安心で仕樣がありませんわ。」
「むゝ聞捨てにならん事を言ふな。お前の地位で口外すべき事ぢやないと思ふが、お前は又下らん事に柄をすげて餘計な思過しをして居るのぢやないか。俺には然うとか思はれんな。つい此間逢つた時あれほど室賀君を信じて居たお前が、急に那樣事を言ふのは解らんぢやないか。」
歌子は餘儀なさゝうに微笑みながら、
「でも彼の時は何も知らなかつたんですもの。」
種彥は思付いたやうに、不意と、
「何かい。室賀君が道樂でもやるのかい。」

「はア。それも有りますわ。」

「はゝゝ、串戯ぢやない。それが素なんだらう。おい、嫉妬喧嘩の飛沫は御免だぜ。」

歌子は急がはしく、

「あら、然うぢやありませんよ。最少し眞面目になつて聞いて下さいよ。嘘でも何んもないんですから。」

と顏を見詰めるやうにして、更に身を進めた。

五

「いゝえそれはね、至らない私のやうなものでも、今の世間で、表向は兎に角にして、男の貞操などゝいふ事を、眞面目に考へて居られる奥樣が幾個あるだらう位の事は能く知つて居ます。室賀が又交際の上からも、さう／＼品性の事ばかり言つて居られない場合も隨分あるでしやう。些少やそつとの道樂をする事などを私は決して兎や角う言はうとは思ひません。よし外で何をしやうと、室賀の心さへ確りして居てくれゝば、這麼談話を兄さんにだつてしや

じませんけれど、室賀は自分の妻も當座の女も全て一つにして居るんですもの。私が偶にそれを言つても、頭から串戯にして取合はうともしないんです。私室賀には、眞面目な氣が本當にあるんだか何うだかと思ひますよ。

「はゝゝ、そりや室賀君が若いからだ。」と種彦は事もなげに、「と言つて俺は猶若いけれど、那樣事は打捨つて置いたつて時が來るわ。夫婦といふものが一時のものでない以上、那樣餘計な事を氣に掛けんで、お前の勤める處を屹と勤めるが可いぢやないか。」

歌子は聞敢へず、聲を返して、

「でも肝心の土臺が確かりして居ないぢや、それこそ砂の上の家に住んで居るやうなものぢやありませんか。」

と振仰いでぢッと見る。種彦は尚笑つて、

「いや、大袈裟な事を言ふな。なに室賀君だつて解らんぢやなし、お前の言ふ程の事が有るものか。俺はお前の言ふ事を殘らず信ずる譯には行かない。」

「あら、兄さんはそれだから私頼もしくないわ。」

「止せ〳〵。最う好い加減にしろ、いつまでも那樣事ばかり並べて居ると叱付けるぞ。俺は全體泣事めいた事を聞いて居るのは嫌ひだ。折角來た俺を最少し好い心持にさせろ。俺は今日は妹に逢ひに來たのぢやない、室賀の奥樣に逢ひに來たのだ。」

歌子は無據しに、

「まア、仕樣がない事。それぢや今日は兄さんぢやなくつてお客樣なの？」

「然うとも。」と串戲らしく、「お客樣實は御吹聽の御馳走を待ちかねて居る。大抵最う出て來る時分たらう。おい、全體此煙草盆と出がらしの咖啡で何時迄置く心算なんだい。」

「あら、那樣出がらしの咖啡なんぞ上げやしませんわ。相變らずお口が惡いのね。第一御馳走の催促するなんて那樣行儀の惡いお客樣が有りますかよ。」

「はゝゝ、何でも可い。咽から手が出さうになつて來た。恁うなると飲まなけりや談話が出來ないよ。」

「まア、厄介ねえ。」

と立上らうとした。途端に用意の會席膳を捧げて、お秋を先にお新が續いて入つて來た。種彦は振返りさま、

「や、來たか。はゝゝ。恁う直ぐ來るんだつたら、餘計な事を言ふのぢやなかつた。」

「おほゝゝ、仰有らなくつても此方ぢや知つて居ますよ。」

「はゝゝ、飛んだ復讐を遣るな。」

と膝を崩して膳の方へ押直つたが、

「然う言へば室賀君は最う歸りさうなものだな。」と時計を抽出して、只見て微笑みながら、

「何ぢやないか。先刻の談話の方へでも廻つたんぢやないか。」

歌子は一寸お秋の方を見返つて、其儘何方付かず、

「さア、何うですかね。」

（八）涼味

一

「おい何處へ行くのだ。」

と車の上から聲を掛けた。我家に近い路の角を、颯と乘越さうとして不圖、横手の小路から來た脇屋の姿を眼に入れて、小宮山は急がはしく車を停めさせて、乘出すやうに上から身を振向けた。梅雨明けの最うぢり／＼と暑い中を持つては居たが傘もさゝず、パナマの帽を前のめりに、西日を廂に避けて、脇屋は今傍の花屋の、古風に未だ門に柳の立つて居る下を衝と來たが、呼ばれて振仰ぐと、

「や、」

とばかり近くつか／＼と寄つて、

「今歸りかい。實はこれから君の方へ廻らうと思つて居た處だ。」

「然うか。そりや丁ど可かつた。ぢや一處に行かう。」

と其儘車を降りて、車夫を先に歸して軈て親しげに肩を並べて歩出した。

「何か此方へ用でもあつて來たのかい。」

「むゝ、なについ此先へ引越して來たものがあつてね。其家へ一寸訪ねて行つた歸りなんだ。いや今日は途中で能く人に邂逅す日だ。何に遇つたよ。例の室賀の新夫人に遇つたよ。」

「ふむ、何處で？」

「家を出ると直ぐに遇つた。先は車だつたがね、いや相變らず美にして艶なるもんだ。僕だから可いやうなもんの、時々恁う見せ付けられるのは頗る目の毒だね。」

「はゝ、那樣事を言ふやうぢや、未だ悟り切らんと見えるね。其時の君の態度が見たかつたね。」

「なに其處へ行つちや平氣なものだ。向ふで會釋したから此方も會釋して別れたまでだが、其處は矢張凡夫だからな。別に負惜みをするにも當らないから言ふが、胸の中は少し穩やかでなかつたよ。」

と例の罪のない笑顔の中から言つた。小宮山は打笑つて、

「ふむ、君でも矢張然うかなア。」

脇屋は投げるやうな調子で、

「仕方がない、我々は地を這つて居る動物だから。」

と言つて聲を切つて、

「併し僕は、何う地を替へても、彼の爲に竊かに祝福を祈つて遣る、其處だけが少し變つて居るだらう。」

「むゝ、君の變つて居るのはそればかりぢやないが、それぢや若し彼の家庭の少し面白くない事を聞いたら何うするね。」

「え、」

と脇屋は聞咎めて急に振向いた。

「何だ。那樣何か面白くない談話でも有るのかい。」

「むゝ少しばかり。」

と言つて近く我家の門を眼に入れて、

「や、最う家へ來た。まア兎も角入つてから話さう。」

と先に立つて中へ入つた。芳子は車夫の報知で最う玄關に待つて居た。脇屋は何時もの無造作に、跡から衝と進んで、

「奥さん又惡口を言ひに來ましたよ。」

芳子は愛想をよく、

「まア好く入らつしやいました。實は貴方が最う入らつしやるだらうと思つて……。」

「はア、何うなすつた。」

「澤山お饒舌の稽古をして置きました。おほゝゝゝ。」

「や、然う用心をされて居ちや堪らない。」

と笑ひながら靴を脱いで上込んだ。

二

花に自由な家なので、座敷にも書齋にも、見事な盛花が活々とした鮮やかな色を見せて居る。簾に築庭の風を呼んで、交趾の水盤に加茂の水石などを點粧

つた處など、見渡す何處にも涼しさうな影が動いて居る。小宮山の家へ行つて心持の好いのは、隅から隅まで何時來ても整然として居る事で、芳子は留守居の間、如何なる時に主人が歸つて來ても、甚麼又臨時の客が見えても少しも驚かぬ用意を屹度して居る。慣れては居るが、脇屋は今更に四邊を見廻して出された紅革の蒲團の上に寛ぎながら、

「や、相變らず居心の好いやうに能く手が屆いて居る、貴女を前に置いて恁う言つちや何だが、貴女は此點だけでも良妻の價値がある。」

「まア厭です事、何を仰有るんですねえ。」

と芳子は紛らすやうに笑つて、

「那樣に煽動てゝ下さると、それこそ小宮山は良妻の中毒をして了ひますよ。」

「いや全くだ。」と小宮山は傍から直ぐ、「それでなくとも段々増長して仕樣がないのに、那樣白い齒を見せられて堪るものか、家ん中の此位な始末をするんで良妻なら、少し氣の利いた仲動は皆良妻だ。君、那樣事を言ふが、彼方の押入の襖を一枚開けて見たまへ。去年の引解物が未だ山の如くに積んである。」

芳子は聞きも敢へず、

「あれ、何時私が那樣事をして置きましたよ。串戯ぢやありません。知らない方は本當になさるぢやありませんか。」

脇屋は笑ひながら手を擧げて、

「おい〳〵來早々夫婦喧嘩は驚くぜ。第一暑苦しくつて堪らない。最少し涼しい處を願ひたいな。譽めて惡けりや地金の惡口をいくらでも進上するよ。」

「おほゝゝ、そろ〳〵最う交ッ返しが始まりましたね、いゝえ貴方には澤山譽めて戴かなけりやなりません。」

「はア、何故ね。」

「平素の罪滅しに。」

「や、貴女も中々お口が達者になりましたね。」

「はいお仕込みて。おほゝゝゝ。」

と頓て立つて奥へ行く。脇屋は薦められた奈良團扇を、煽ぐともなく玩具に

しながら、

「いや兎や角う言ふもんの、外から歸つて來た時だけは女房持に限る。有ると無いとは、霄壤の差があるな。僕の家などの檢束のない事と言つたら、實に話にもならんからな。」

小宮山は顏を見て微笑みながら、

「急に何を感じたんだ。那樣事を言ふなら貰ふが可いぢやないか。」

「馬鹿な、それとは談話が違ふ。それ位な事にかへて、貰へるものか。」

「はゝゝ、それぢや矢張自業自得だ。何とも言ふ事は出來ないな。」

「まア〳〵その方へは餘り深く立入らんが可い。お互に何も知つて居るのだから可いとして、處で何だ、外で聞きさした室賀の方の一條は何ういふのだね。」

「むゝあれか。然う聞く處を見ると、何處か矢張氣に掛けて居ると見えるな。や、御親切な事だ。」

と少し弄り氣味。脇屋は併し氣振も變へず、首肯きさまに、

「親切、無論親切さ。少々篦棒の親切だが、併し何でも可い。僕には僕の行き方がある。さア聞かう。」

とばかり膝を押進めた。

三

小宮山は歸つて來ると、いつも息繼のやうに嗜好の紅茶を喫る。芳烈なコニャックの一杯を點じたのを、前に引寄せて銜と干すと、初めて自分の身體に返つたやうな心持がする。今も芳子が傍近く置いて行つた、出雲燒の折衷茶碗を片手に、仰いて一つ傾けると、膝を押直して頓て徐ろに、

「恁ういふ事は全體餘り言ふべき事ぢやない。人の非を擧げるのは何にしろ好ましくないが、君だから構はず話すとして、ザッと聞いたゞけを言はう。」

脇屋は聞敢へず打消すやうに、

「なに那樣遠慮が要るもんか。例の臭い物に蓋の外國流は好い事もある代には甚だ厭な事もある。殊に僕のやうな明けッ放し屋には惡氣取のやうに見えて變な心持がする。可いから何も彼も打撒けるさ」

「はゝゝ、まア好い加減に遣らう。いや、今になつて室賀の家の事を兎や角う言ふと、此方も其當時の不穿鑿の譏を免かれないが、事が決つてから僕などは通知を受けた方で、や、那樣事は何うでも可い。詰る處行屆かなかつたのさ。君を前に置いて言ふ譯ぢやないが、今更僕は一方に君のやうな人の有るのは殊に惜しく思ふよ。」

「何だ。那樣事を言つたつて仕方が無いぢやないか。始まらない談話は止してくれ。」

「むゝ、それや無論始まらないさ。始まらないけれどつい言つて見たくなるぢやないか。僕も案外だつたが、室賀の家は然樣事を思はせるほど頗る清潔でないのだ。」

「ふむ、何う？」

「驚くのは家中が皆道樂者なんだ。可くはないが室賀自身は未だしもとして、彼家の女が皆それなんだから亂暴ぢやないか。第一に阿母が然うなんだ。それから妹が然うなんだ、血統か育ちか知らないが、何も那樣事に氣を揃へ

てくれなくつても可いぢやないか。」

脇屋も流石に少し變な顔をして、思はず眉を顰めながら、

「むゝ、女ぢや少し驚くな。何かい、妹が有るのかい。僕は初めて聞くが。」

「いや僕も今度初めて聞いたんだ。家には疾うに寄付けなくなつて、今は居處も定らんやうな始末で、談話にならん亂暴な生活をして居るさうだがね、これが十七から男狂ひを始めて、掛るだけの迷惑を家に掛けたんださうだ。三年ばかり出たり入つたり。引戻されちや飛出して居たのが、到頭甚い墮落をして了つて、流石に家でも最う構付けないやうになつたのだと言ふがね、然ういふ妹だから有るとも言へなかつたらうし、室賀も最う無い者のやうに思つて居るのだらう。天性で然うなのかは知らないが、僕は何うやら家庭が作つたんぢやないかと思ふよ。そりや無論一概には言へないがね。其妹といふのは全ッきり知らんのだし。其間に又甚麼事情が有つたかも知らんのだから。」

「むゝ、で其阿母といふのは？」

小宮山は首肯いて其儘、

「今の未亡人さ。此の方は僕も逢つて知つて居る。色の白い、能く肥つた、最う五十以上だらうが、未だ小皺一つない婦人だ。女にしちや活達過ぎるやうな、何にも頓着しない風だが、女といふ事にすら無頓着で、素行の修つてくれないのは困るぢやないか。」

と膝の前の茶碗に手を掛けたが、空になつて居るのに氣が付いて又下に置いた。

四

其儘脇の葉卷を取つて火を移して、直に談話の跡を繼いだ。

「所謂下世話にね、飲む賭つ買ふといふ事を言ふ。これを其婦人の身で遣るのだから何うだい。尤も今の堂々たる紳士にも大分遣るのはあるがね、女で三拍子揃つて居るなどゝいふのは、多少の地位がある者に餘り有る圖ぢやない、流石にそりや分際だけに自暴な眞似はしないが、其中で一番盛なのは花牌ださうだ。隱居所で遣る。別莊で遣る。殆んど寧日がないさうで、合間には

其役者買、氣儘放題な生活をして居るのだ。」
「や。面白いな。」
と脇屋は聞きさして不意に聲を掛けた。小宮山は眼を上げて、
「え、何が面白い？」
脇屋は獨合點の態と調子を强めて、
「いや面白いよ。女だけに尙面白い。然ういふ女が時々飛出してくれないと、今の文明攻めの生活に疲れ切つて、手も足も出なくなつた人間の目を覺ます事は出來ないよ。談話で聞いたゞけで詳しくは知らんが、何うも其常規に拘らん處が可いな。」
小宮山は笑ひながらも眉を顰めて、
「那樣奇矯な事を此處へ持出してくれちや困る。いくら面白くつても實際然ういふ者を自分の家に持合はして見たまへ。いくら君にしても驚くだらう。」
「驚くけれど矢張面白いさ。」

「はゝゝ、驚くだけ未だ殊勝だな。それは可いが、然ういふ、阿母に、肝心の室賀が又、今度初めて聞いたんだが昔からの道樂者で、新婚の當座はまア珍らしいので暫く足を拔いて居たが、そろ〳〵最う遣出したさうなんだ。其中で眞面目なのは歌子一人だらう。これが又娘時代の空想を一々實行して行かうと、口ぢや言はないがね、胸に充分希望を持つて掛つて居るのだから勢ひ滿足に行く筈はない。歌子も此頃ぢや初めの樣子とは、大分違つて來たやうだよ。歌子の兄などは、却つて、なに無事の家庭ぢや味ひが無い。其間に處して行つて仕上たのでなくつちや妙でないと言つて居るが、實際當人の身になつちや隨分心持の好くない事もあるだらうと思ふのだ。」と別に取立てゝは言はず概略を談話した。脇屋は注意して聞いては居たが、頓て思の外に手輕く、

「然うか。それだけならナニ別に驚く事もないぢやないか。道樂といふと何か罪惡のやうだが、今の社會の情態で道樂位の事に驚いたつて仕樣がない。なァに道樂をしないものが急に遣出したのなら又譯が違ふが、道樂者が道樂をするのは驚くに足らない。飯の菜好みと一般で、飯は飯て矢張喰つて居る

よ。那樣事はそれこそ何うにかなつて行くものだ。」
「ふむ、併し道樂者にも種々あるからな。」
「有つた處で高は知れて居る。」
「君は又甚く樂觀するぢやないか。」
脇屋は意味もなく頰のあたりを押撫で、、
「いや僕はもつと面倒な事情でもあると思つたから。」
小宮山は押返して、
「だがね、一家の者が皆自由行動を執つて居るやうな仕末ぢや、家庭の面白味が何の位減殺されるか位の事は、他からも想像が出來るぢやないか。」
と稍眞顏に相手を打目戍つた。

五

脇屋は靜かに眼を動かしたのみ、重ねて事もなげに、
「なにそれも程度問題さ。何處の家庭にだつて、自分の影の附纏つて居ない處があるものか。聞きやうに依つちや最高度にも聞えるが、遣りやうに依つ

ちや最低度にも下げられる、室賀は兎も角も紳士ぢやないか。」
「いや紳士といふ言葉が、人を賊する事の甚だしいには驚く。今の日本で紳士道などゝいふ事が、嚴格の意味で充分に行はれて居ると思ふのかい。」
と小宮山は未だ實立つて言ふ。脇屋は打笑つて、
「なァに何處の國へ行つたつて、大した變りがあるものか。上ッ面こそ奇麗事で惡く取澄して居るが、裏手へ廻つて少し注意して横斷面を見て見たまへ。隨分構はない僕のやうなものでも、鼻を撮んで引下がらなけりやならない事だらけぢやないか。」
「そりや弊害を言つた日にや限りはない。文明が古くなつて來るほど積弊には堪へんからな。那樣事は措いてさ、君は室賀の家庭を何う思ふよ。」
「別に何うとも思はんよ。これまで諸方で似たやうな談話を能く聞くから、僕の耳は最う大抵の事ぢや驚かんよ。僕は只室賀の新夫婦に、お互に浮世の鹽を最つと踏むが可いと言つて遣りたい。要するに戀女房て然も相惚れだといふのぢやないか。」

小宮山は何と思つたか急に笑出した。

「はゝゝ、何だか腑に落ちなくなつて來たぞ。君は先刻歌子の爲に祝福を祀つて遣ると言つたな」

脇屋は氣振も變へず、見るから平然とした顏で、

「むゝ、言つたが何うした？」

「いや其人の挨拶として先刻からの冷淡さ加減は何うだい。何の彼のと言ふけれども、其實矢張忌々しいのが手傳つて居るのぢやないか。何うとも御勝手、僕の關せざる處と言つたやうな口吻が大分見えるな。」

脇屋は膝を打つて、

「はゝ、いや御推察は忝けないが、少し的が違つたよ。勿論僕も木の股から出て來たのぢやない。嗔恚の焔も相應には燃したがね、當節炭代が高直なんで、火種は疾うに消して了つたよ。僕の動かないのが不足かも知らないが、僕は願くば最つと大きく動きたいな。今日途中で見た樣子ぢや、新夫人の顏色にも別に憂愁の雲は掛つて居なかつた。」

いふ時室へ入つて來た芳子に
「ねえ奥さん。然うぢやありませんか。」
「え、」
と芳子は不意を打たれて、微笑みながら口早に、
「何でございますの？」
「なアにね、此處のお二人は何時もお睦じくつて結構だと言つて居るのですよ。」
「おほゝゝ、まア御挨拶です事。」
とばかりに小宮山の方へ打向つて、
「あのお風呂が宜しうございますが、何うでしやうお客様と一處にお召しなすつては？」
「可からう何うだい君。」
と小宮山は振返る。脇屋は言下に、
「む、結構。」

二人やがて打連れて湯殿へ立つた。跡は時の間に奇麗に片付けられて、次の座敷には、晩餐の卓子が最う逸早く支度されて居た。

（九）歌子

一

「貴方、先刻太田さんが見えましたよ。」

と歌子は今歸つて來た金彌に、跡から茶を運んで、傍を慕ふやうに書齋へ入つて來た。金彌は煙草を片手に、今朝讀殘した新聞に目を通して居たが、其儘顏を上げて、

「然うか。又誘出しに來たのだらう。」

「おほゝゝ、私も然うだと思ひましたから、歸りは遲くなりますと言つて上げましたわ。」

と言つて竊と顏を見た。金彌は笑ひながら叱るやうに、

「酷い事をする。那樣勝手に客を取扱ふといふ事があるかい。實際又何の用で來たか解らんぢやあないか。」

「いゝえ用はないと仰有いましたよ。それに違ひはありませんわ。私偶に

は可いと思つて態と言ひましたの、貴方のお氣を察しなかつたのは惡うござんしたけれど。」

と少し針を持つて言ふ。金彌は苦笑ひして、茶碗を取上げながら、

「はゝゝ、厭な事を言ふなよ。」

「でも然うでしやう。」

「そりや何とも知れんがね。」

「それ御覽なさいな。私ね貴方のお氣の濟むやうにして居ると限りがありませんから、これからは些少嚴しく言はうと思つて居ますの。」

「ふむ、何う嚴しく？」

「おほゝゝ、私角を見せますよ。」

「面白いな。お前の角なら是非拜見したい。なんなら此處で一つ見せて貰らうか。いや一つぢやない。二つだ。」

「あれ串戯ぢやありませんよ。口には出さないでも、私が甚麼氣で居るか貴方だつてそりや御存じでしやう。」

と稍眞顏になる。金彌は併し眞面目に相手にならうともせず、
「や、大分鼻息が荒いな。其勢ぢや中々油斷がならない。此方も少し用心して掛からうよ。お前も段々女房染みて來たな。」
と言つて直に談話を逸して、
「時に阿母樣は？」
「未だお留守ですの。」
「矢張團子坂かい。」
「はア。先刻電話で、今夜もお泊りだといふ御傳言でした。」
「然うか、能く御精が出る事だ、いくら用が無いと言つて此頃はのべつぢやないか。能く飽きずに遣つて居られるな。」
「貴方、何故何とも仰有らないの？」
「え、何を？」
と一寸目を睜る。歌子は押返して、
「いゝえ阿母樣にさ。些少言つてお上げなすつた方が可いかと思ひますの。」

金彌は微笑みながら、

「むゝ、それを聞くやうなら疾うに言つて居るさ。若い時働いた埋合せに、少し氣儘な事をする。誰のお世話にもならないと言つて。自分で分けて置いた財産で、自由に自分の事をして居るのだから、脇から何うしたつて仕方は無い。強ひて詰らん眞似をして、餘計な事を外へ知らすのも拙いからな。」

「でもお慰みも餘り嵩じると……。」

「まア可い。阿母も相應に、如才なく、然う尻尾を出すやうな事をしちや居ないよ。お前は未だ能く知るまいが。何うしてあれで中々苦勞人だからな。」

「でも……。」

と歌子は未だ濟まぬ顏、金彌は能くも聞かず、冠せて一口に、

「何だ。未だ拘泥つて居るのかい。」

と打消すやうに言つた。途端に電話が掛つて、一しきり電鈴の音が高く彼方に響渡る。

二

電話は金彌の同窓の、中田といふ銀行員の名で掛つて來たので、それとお秋の取次を、金彌は聞くと直ぐ立つて行つたが、頓て引返して來た足音で、歌子は最う金彌の家に居ない事を悟つた。果然、入つて來ると、

「おい、着物を出してくれ。中田から急に呼びに來た。車の支度を直にな。」

「はい。」

と歌子は素直に立つて、茶の室のお房に、車の準備を吩附けると、歸つて奥の一室で、まめ／＼しく金彌の身の廻りの世話をした。

「中田さん何の御用？」

「何だか知らんが急に相談したい事があるッて言つて來た。」

「へえ、何でしやう？」

「何だか行つて見にや解らんな。」

と素知らぬ顔で、傍から支度して居たが、氣がさしたか不意と見て、

「何だ。何を笑つて居るのだ。」

「あら、何も笑やしませんわ。」

「ふむ、お前疑つて居るな。」

歌子は佯恍けて、顔を見上げながら、

「おや。疑ふやうな事がありますの？」

金彌は態とらしく聲を揚げて笑つた。

「はゝゝ、止せ。那樣事を言つたつて仕方があるものか。」

と支度を終つて茶の室へ出て來ると、歌子の出した烟草入を取つて、車を待つて居る間に葉巻の烟を味つた。歌子は大凡は察しながら、流石それなりにもせず、

「貴方、お歸りは何時？」

と聞く、金彌は澄したもので、

「解らんよ、用次第だ。」

「まア、それぢや張合が無いぢやありませんか。貴方のお心算だけでも、言つて居らしつて下すつたつて可いぢやありませんか。」

「はゝゝ、何だか出る前から最う怨みッぽいな。馬鹿な、俺の勝手で行きは

しまいし。」

「だつて貴方の御挨拶が餘りなんですもの。跡で言譯をなさるとも、何とか外に仰有りやうが有るだらうと思ひますわ。」

「ふむ、氣休めか。氣休めならいくらでも言つて遣る。」

「まア何ですね、那樣斷りを先に言ふ人が有るもんですか。貴方はそれぢや、此方も待つて居ませんから御勝手になさいと言つた方が可いの？」

「お前は又言ひたいのかい那樣事を。」

「あれ言ひたい位なら最う前に言つて居ますよ。」

金彌は急にたしなめるやうに、

「おい〳〵、俺は用があつて出るのだぜ、全體何處へ行くと思つて居るのだ。歸るの待つのなんて、何の爲に那樣事を言はなけりやならないのだい。」

歌子は顏を見て笑つた。其儘、調子をかへて、

「大層立派な口をお利きなさるのね。」

「え。」

「覺えて居らつしやい。」
「何を？」
「おほゝゝ、可うござんすよ。お出先に詰らない事は最う申しません。御機嫌よく行つて居らつしやいましよ。」
「はいゝ、何だか少し氣味が惡いな。可し、歸つてから聞かう。」
言ふ時お房が敷居越しに、
「お車が宜しうございます。」
「然うか。」
と金彌は直に立つた。

三

金彌が出て行くと入違ひに、歌子の爲には恰も其場を慰めに來たやうに、思掛けず芳子が訪ねて來た。
今送出したばかりの事で、歌子もお房も、お秋も、お新も例の名物の安井老人も未だ玄關に皆居流れて居る。

「あらまア。」

と歌子は思はず聲を先に進寄る。芳子もそれと見て、急に車を降りて駈寄るやうに來た。

「好くまア入らしつた事。」

「はァなに御近所まで一寸用があつて來ましたから。」

「然う。何にしても好く……さア何うぞ。」

並居る人々に會釋して、頓て延かれて座敷へ通る。南の開放した葭戸に近く、暫くして差向ひに、內輪同士の寛いだ座を取ると、芳子は最う餘事を措いて、

「貴女、室賀さんは今日もお出掛けなのね。」

と直ぐに言ふ。歌子は芳子の前ながら、何か身に過失でもあるやうに、妙にきまりの惡い心地で、

「はァ、貴女と一足違ひに。」

とばかり跡を消して了つた。芳子はとも知らず、

「然うでしたね。此方へ入る時に、車で彼方らへ居らつしやる後影を見まし

たから、餘ッ程聲を掛けて、少し憎まれ口でも言つて上げやうと思ひましたが、ね間も離れて居たし、それに私から那樣事を言つて、却つて角が立つてもと思つてそれなりにして入つて來ましたが、全體此頃甚麼樣子なの？」

と氣遣はしげに目を擧げる。歌子は猶言淀みながら、

「甚麼ッて私、出先の事は能く知らないのですから……。」

「矢張出てばかりお出なの？」

「はア、それは隨分。」

「先より尚烈しく？」

「はア、相應に。」

「困るわねえそれぢや。」

と言ひさして眉を顰めたが、跡を返して、

「そして貴女には甚麼事を言つて居て？」

歌子は微笑みながら、

「何だか好い加減な事を言つて胡魔化してばかり居るの？

「然う。まさか本當の事も言はれないてしやうからね。」
歌子は未だ言はうとして言ひ敢へず、何か躊躇つて居る姿で居たが、不意に、
「芳子さん、」
と呼掛けると、目を下に、稍調子強く、
「私室賀の出掛ける事なんぞは、何とも思つて居やしませんわ、」
「えッ、」
と芳子は一寸目を瞬つた。歌子は直に跡を追つて、
「只ね、室賀が、それはそれとして掛つてくれゝばと思ひますの。」
芳子は聞いて齒痒いやうに、
「まア、貴女は諦めが可い事ね。私なんぞは那樣覺えがありませんから、自分が然ういふ場に臨んだら、又甚麽考になるか知りませんけれど。私は那樣事で濟ましちや居らませんわ。」
と膝を押進めて、
「貴女私實は今日、其事で此方へ上つたのよ。」

とばかり顔を打目戍つた。

四

「え、其事とは？」

と歌子は何とも付かず問返した。芳子は實志立つて、

「いゝえ私共がね、脇から口を出すといふのも何ですけれども、能く御様子を伺つて何なら室賀さんに、それとなく私共から言つて上げるやうにしたら何うだかと思つてね、實は御近所の用を託けにして上つたの。」

「まア御親切に能く。」

と歌子は取敢へず答へたが、直には心を言はず、調子をかへて、

「何ですか、小宮山さんは那様に心配して居て下さるの？」

「はア、貴女が未だ世間慣れない身體で、一人で若し苦んで居るやうぢや、默つて見て居られないと言つて。」

「然う。有難い事。貴女から能くお禮を言つて下さい。いえ其事ぢやァね、何かの拍子て生家の兄とも話した事があつたのですけれど、兄は全て取合は

うともしないで、何だ、齒牙に掛けるに足らん事だ、お前が確かりして居ればそれで可いのだ、と一口に言つて了ひましたがね、そりや兄のやうな考へぢや然うでしやうけれど、女ぢや又然うばかりでも居られませんからねえ。」

芳子は頻りに首肯いて、

「然うですとも。だから私も蔭ながら氣を揉んで居るの。恁うして置いたんぢや、貴女もそれだけ安心が出來ないと言ふもんですから、今の中にね、出來るなら私共で何うかしやうと思ひますの。」

「はア、其御親切は有難うございますけれど、然うかと言つて今、外から口を利いて下さるといふほどの事にもなつて居ませんし、貴女と私とは恁ういふ間ですけれど、室賀にや又いくらか隔てもあるといふものですから、ならう事なら私、室賀と私だけで事を收めて了ひたいと思つて居ますの。」

　そりやそれに越した事は有りやしませんわ。けれども貴女御自分だけで巧く然う出來て？」

と氣遣はしげにぢッと見る。歌子も胸には流石躊躇ひながら、隱して態と、

「なに私には、室賀の精神さへ解つてくれりや可いのですから、那樣にむづかしいとは思つて居ませんの。けれども私で可けなかつた場合には、夫こそ貴女にも願はないぢアならないわ。」

「はア、そりや最う何のやうにも手はお貸申しますけれど、なんなら那樣場合の來ないやうにしたいのねえ。」

「私何うしても然うしますよ。」

「出來るなら本當に然うなさいよ。」

歌子は術なさうに一人眉を顰めて、

「厭ねえ。這麽お談話をするなんて何うしたのでしやう。」

「本當に室賀さんは、那樣方ぢやないと思つて居ましたが、私には何うしても未だ解らないわ。」

歌子は付けたやうに微笑みながら、

「だつて私にも解らないのですもの。」

「困るわねえ何にしても。」

「でも私も浮りして居たのねえ。私此間ッからつく〴〵考へましたわ。」
と何か思ありげに言ふ。芳子は聞咎めて、
「え、甚麼事を？」
と思はず眼を走らせた。

五

「言ひましやうか。」
と歌子は前置して、ひたと顔を打目戍つたが、思入つた音色に重く、
「私ねえ、今になつて是迄の事を考へると、自分の爲たことゝいふものは何も無くつて、全で最う人任せにして來たのですねえ。生家に居た時は兩親任せ、何も彼も兩親次第で、私は只兩親の言ふなりになつて居たのでした。此家へ來てからは又良人任せ、室賀の心次第で動いて居るばかりで私は全で器械の人形も同じ事だと思ひますわ。と言ふと何だか、勝手に我儘が出來ないからといふやうにも聞えますが私は餘り自分の了簡なしなのに驚いて了ひましたの。せめてねえ、自分の兩親の手を離れて、これから世間に立たうといふ時

に、確かりした、自分の了簡が付いて居たら未だしもだッたんですが、今から思ふと肝心の結婚すら、全で上の空だつたんですもの。深い考へもなく縁組して、深い考へもなく嫁付いて、半分夢のやうな事をして來たんですから、今になつて若し、心に染まない事が出來たら、それは皆自分の罪だと思ひますわ。自分の過失は自分で救はなければならないのですけど……。」

と言つて不意と言葉を止めた。芳子は流石年上の、一日多い經驗を持つて居るだけに、歌子の心は直に解いたが、今水を向ける時ぢやないと思つて、態と押へるやうに、

「貴女併しそりやァ可けないわ。親に附き良人に附くのは貴女當前ぢやありませんか。」

歌子は急がはしく顏を上げて、

「けれども貴女。昔と今とは違ひますもの。」

「違つたつて道は一つですわ。女は何處までも女で通さなければなりませんよ。それは兎に角にして、貴女は今迄を惡いと思ふ事は些少もありません

わ。室賀さんこそ可くないけれど。」

「おほゝゝ、そりや身贔負かも知れないわ。いゝえ私も、少し今迄で解りましたからね、最う餘り浮りしちや居ない心算ですの。これからは最う、確り浮世に喰付いて、一日でも徒な日を送るまいと思ひますの。室賀にも言ふ事は言ひますし、家の事も先に立つて思通りにして行かうと思ひますわ。」

と深く決心したらしい色を見せて言つた。芳子は調子付いて、

「可い事。貴女が然ういふ方へ氣を向けて下さるだらうとは思はなかつたわ。私貴女が負けてお了ひなさるだらうと思つたの。」

「だつて負けて了つちや、這麼で何時までも居なけりやなりませんもの。それこそ兄なんぞには甚麼に見下げられるか知れませんわ。」

「おほゝゝ、貴女は見掛けよりは餘ッ程勝氣なのねえ。」

「あら、那樣事は有りやしませんけれど、」

と稍鼻白む氣勢に急がはしく眼を逸したが、

「でも蔭で泣いて居るよりは可いでしやう。」

「はア。其氣で何でもなさいよ。私餘所ながらお手傳ひするわ。」
「何うぞ。」
と輕く頭を下げて嫣然したが、急に氣が付いたやうに、
「然う言へば自分の事ばかりにかまけて、何のお構ひもしなかつたのね。貴女、今日は緩り遊んで行つて下さいな。」
「いえ、然うしても居られないけれど……。」
「あら、可うござんすよ。」
と顔には何時か生氣が見えて、眼も活々と美しげに輝いた。未だ裏若い眉の影。

(十) 夕月

一

主人の歸るを待つて、楠の大食卓の上には、種々の食器が、色を集め、形を集めて、鮮やかな電燈の光に美しげな影を見せて居た。一雨過ぎた庭の樹々は、葉毎に涼しげな雫を揮つて、逸早く吹散つた雲の跡は宛がら拭上げたやうな空にほのかな夕月の影が、夢のやうに浮いて見えた。お孃樣と婢達に呼ばれるのも、何時か耳に慣れて、最早心咎めもせぬまでに、お千代は此幾月かの間に、樣子から、言葉付から、自分にも氣を盡した効を見せて、全で見違へた人になつて了つた。端居に近く、浴衣に着替へた襟元を、冷々と吹入る風に心地よげに、團扇も忘れたまゝで、何心なく庭を眺めて居ると、

「お孃樣。」

と不意に傍へ、何か可笑しさを堪へるやうな風で、急がはしげに來た仲働のお清が、

「飛んだ事をお知らせ申しましやうか。」
と顔をぢろ〳〵見て、今にも笑出しさうに言出した。
「え、何を？」
とお千代は振返つて、訝しげに眼を上げた。
「貴女の事。」
「私の？　まア何？」
「おほゝゝ、本當に可笑いんですよ。」
「あれ、一人で了解んでばかり居たつて解らないわ。何だかお話しな。」
「でも餘りなんですもの。」
と未だ言はず只笑つて居る。お千代は稍腹立たしげに、
「何だね、それぢや何しに來たの？」
お清は慌てゝ詫入るやうに、
「あら、然うぢやございませんよ。だつて先が餘り氣が知れないんですからツイ何でしたの。」

「だから一人で承知して居ないで、早く言つてお了ひな。」

「はい申しますよ、ですけれど貴女お腹をお立てなすつや可けませんよ。」

「厭だね。可笑しいだの腹を立てるだのッて、お前何を言つて居るの？」

「いゝえね、恁うなんですよ。あの毎日家へ來ます牛乳屋ね、何でも苦學生とかで、彼如して乳を配つちや何處かの學校へ通つてるんださうですがね。お孃樣時々御覽なすつて御存じでしやう？」

お千代は輕く首肯いて、

「あゝ知つて居るわ。彼の人が何うしたの？」

「いゝえ何うした處ぢやないんですよ。未だ那麼事をして居る身體で、それに然う言つちや何ですけれど彼の甚い顏で、まア何ういふ氣なんでしやう、何時の間にかお孃樣を何ですッて、あのお見染め申したんですつて。」

お千代は驚いてはッと、俄かに色を變へたが、それなり屹として、

「まア厭な、お前何を言ふの？」

「ですから飛んだ事と申したじやありませんか。私も呆れて了ひましたの、

何でも此間ッから空罎を下げて來る度にお松さんを捉まへて、毎日其事ばかり言つて行くさうですが、それが又本當に馬鹿々々しくつて私今彼方でお松さんに聞いてお腹の皮を縒つて了ひましたの。え、申しましやうか。」

と差窺く。お千代はきッぱりと、

「いゝえ、那樣談話はこれッきりにして頂戴。私最う聞かないから其心算で。」

と態と容を改めて、切口上で言つた。

二

お清は勿論、何の深い考もなく、一時の座興に只言出しただけなので、お千代の案外な嚴しい色に氣を呑まれて、驚いて罪のない眼を瞬つたが、當の外れた手持無沙汰に、

「あれ、お氣に障りましたの？」

お千代は未だ色を解かず、

「障るにも障らないにも、那麼談話を私にするといふ事がありますかよ。」

（はい。」

「松にも然う言つて、これぎり決して最う那樣者に取合はないやうに、能く話して頂戴。」

お清は何か叱られでもしたやうに、顏を俯向かせて、

「はい、何うも濟みませんでした。」

「なに別に謝罪る事もないけれど、いくら私が賤しい者でも、恁うして義兄が私の身に付いて一通りでない心配をしてくれて居る中で、假にも落度が有つちや私言譯が無いと思ふの。ねえ、然うぢやないか。」

とぢッと見る。お清は答へる處も知らず、

「御免なさいまし。ツイ氣が付きませんで…………。」

と固くなつて下に手を支いた。お千代も長くは追はず、其儘氣色を直して、「おほゝゝ、那樣に詫びなくつても可いよ。只これから氣を付けておくれ。」

「はい。」

お千代はそれなり、談話をかへやうとして不意と氣が付いたやうに、

「おや、お前何時の間に髮をお結ひなの？」
「はい先刻一寸手がすきました時。」
「然う。大層能く出來た事。お前は髮が良いから何に結つても引立つのねえ。」
「あら、何うしましやう。那麼事仰有ると穴へ入りたくなりますわ。先刻なんぞは此お蔭で伊勢屋の若い者に酷い事を言はれたんですもの。」
と今の不首尾を取返す心算か、妙に媚びるやうな調子で言つた。お千代は何心なく、
「おや甚麼事を？」
「いえ何ぼ私でも腹が立ちましたの。先刻丁ど結つて了つたばかりで、油になつた手を洗ひに臺所へ出て來た拍子に、伊勢屋が炭を持つて參りましてねひよいと私を見て、やアすばらしく結へましたね、全で猿芝居のお輕のやうだ。と言つて小面を憎く、げらげら笑ふぢやありませんか。」
「まア口の惡い。おほゝゝゝ。」

途端に颯と門を入る車の音。お千代は逸早く耳を立てゝ、

「おや、お歸りだよ。」

「然うでございますね。」

同時に立つて、二人急ぎ足に室を出て行つた。暫くして、近く珍らしく、酒氣に先を拂はせて顏を眞紅にして入つて來た謙吉は、提げて居た鞄をいきなり抛出すと、お千代が差出した座蒲團をも待たず、どッかり下へ投げるやうに腰を落して、

「おい、水を一杯。」

お千代は物珍らしさうに、傍から見上げ見下ろして、

「おほゝゝ、まあ大層御機嫌です事。今日は何邊へ行らしつたの？」

「むゝ、今話すが水は？」

「はい、あのアイスクリームが有りますが。」

「いや水が可い。おいお千代お前に實は話すことがあるんだ。」

「え」

とお千代は振仰いたが、言はれた水を取りに取敢へず立つた。

三

水を持つて歸つて來ると、謙吉の姿か見えぬ。おや、と見廻す彼方に、緣へ出て來た氣勢がして手水鉢の柄杓が頓てから〳〵と鳴る。

「お水が參りましたよ。」

とお千代は室越しに聲を掛けた。

「然うか。」

と中へ入つて來たが、其儘隣室の六疊へ通つて、

「おい、此方へ持つて來てくれ。序に着替へて了はう。」

「はい。」

とお千代は直に立つて、盆の儘で前へ持つて來た。謙吉は立ちながら手を伸ばして、洋杯を取つて一息に干した。

それなり盆に返すと、さも心地よさゝうに、

「あゝ、これで漸つと息をついた。や、今日は何時になく醉つたよ。尤も少し

度を過したんだが。」

「まア何うして又那樣に召上つたんでしやう。」

と持つて居た盆を片寄せて、お千代は着物の世話に脇へ廻つて來た。謙吉は早く上衣を脫掛けて、

「なに今日歸りに、久し振で醫者の處へ寄つたんだ。お前も逢つて知つて居る例の高梨の處へさ。俺の病氣も、元氣で無理に押付けた所爲か、それとも彼の當時の養生の可かつた所爲か、何だか此頃ぢや案外に好い工合で、藥も何時の間にか止めて了つた位にはなつたが、實際何うといふ鹽梅かと思つて、今日寄つて能く診て貰つたんだ。まア悅んでくれ。すツかり癒くなつたとは可かんが何うか固つて了つたやうで、此先用心さへして居れば再發はしまいといふ事だ。」

「まア、そりや何よりぢやありせんか。それぢや其お祝ひに何處ぞで？」

謙吉は作笑ひして、

「なに然ういふ譯ぢやない。飮んだな高梨を引張出して行つて飮んだが、實

は酒で紛らしたい事があつてツイ過して了つたんだ。」

と言つて直ぐ、調子をかへて口早に、

「や、俺も身體が持つとなれば、爲る仕事が、無暗に出て來る。店の方も先づ思通りに行つたし、何だか先が何も彼も賴母しくなつて來た。恁ういふ時には雀が鷹の藝をしかねないのだ。此處を外さずに一息又伸さうと思ふよ。」

とは言つたが平素に變つて、何か胸に綾があるやうに、不意と跡を消して了つた。お千代は只酒の爲とばかり思つて、

「然うですね。まア何にしてもお目出度い事で、好いお談話を聞くほど私も甚麼にか好い心持でしやう。然う言へばアノお風呂は？」

「濟んだ。」

「御飯も？」

「むゝ。」

と着更へて頓て立直ると、

「何を彼室へ置いた鞄を遣してくれ。」

と受取つて居室へ行きかけて、一寸立止つて何か躊躇つて居たが、

「いや、矢張今夜言つて置かう。」

とばかり振返つて、

「お千代、其方の用が濟んだら跡で一寸來てくれ。」

「はい、私はなに直ぐにでも。」

「な、なに急ぐのぢやないから、跡で可いのだ。」

と謙吉はそぐはぬ答へ方をして、それなり衝と居室へ入つて行つた。

四

何かは知らず、談話があるといふ事を二度までも聞かされた。さして仔細のない事なら、其場で言つて下さつても可い譯を、わざ〳〵彼方で仰有るといふのは甚麼事なんだらう。とお千代は別に思當る事もないので徒勞になつた晩の膳立を、お清と兩人して片付けながらも、何彼と胸に解きかねて、跡をそこそこに居室へ入つて來た。

見ると謙吉は、喫みさしの埃及烟草を脇の灰皿に差置いたまゝ、徒に烟の立つ

て行くのを殆んど知らず顔に、ぢッと眼近の萩の葉に動く月の影を見詰めて居た。醉の名殘は、打見にも未だそれと見えたが、顏は何時か引締つて、眉根に見せた深皺にも、お千代には何か只ならぬ態に思はれた。

入つたが見向きもされぬので、妙に接穗のない心地はしたが、其儘差寄つて、

「あの、御用のあるやうな事を仰有いましたが……。」

とさりげなく、笑顏を作つて言つた。謙吉は驚いて急に振向いて、

「おゝ、何時の間に來たんだ。」

と流石に笑ひながら、

「はゝゝゝ、些少も知らんかつたよ。」

「おほゝゝ、何ですか大層考込んで居らつしやるやうでしたわ。あの、御用は?」

と重ねて言つた。謙吉は首肯いて、

「むゝ、」

とばかり、前に押直つたが、煙草を取らうとして、何時の間にか殘少なに燼つて

了つたのに心付いて、新らしく又吸付けながら、

「や。談話と言つて實は面目ない事なんだが……」。

と苦笑ひして、不意と又氣をかへたやうに、

「なに今日始まつた事ぢやない。此間ッから言はうと思つて居たんだが。餘り俺の意久地のないやうなのが癪に觸るから、一つウンと堪へて見たが、いや何うにもならん。殘念ながら俺の力には及ばなくなつた。此分で押して行つたら、お前を何うするか解らなくなる。それぢや俺の最初の覺悟に疵を付けて了ふやうなものだ。俺は那樣穢なびれた考でお前を世話したのぢやない。誰に濟まないより先に第一自分に濟まない事がある。いづれにしろ、何うかしなければならなくなつて來た。お前に話すといふのは其事だ。那樣這麼の欝塊があるので、今日もツイ飲んだんだ。醉つては居るが、正氣を決して失つちや居ない。其心算で能く聞いてくれ。」

と調子が何時か強くなる。お千代は瞬きもせず、先刻から顔を見詰めて居たが、

「まア、何の事ですのそれは？」

と言つたが、胸を轟かした。謙吉は尚身を進めて、

「むゝ、只然うばかり言つたんぢや解るまい。兎もあれお前は今迄に、俺の思つた通り、いや思つたよりも最つと以上に何も彼も能く勵んで遣つてくれた。俺はお前の根氣の強いのに蔭ながら驚いて居る。俺よりも駒井なぞは尚驚いて居る。お前は彼の當座全で寢なかつたぢやないか。お前が此四五ヶ月の間に、これだけの成績を擧げてくれたも、彼の遣方ぢや俺は決して不思議ぢやないと思ふ。俺は其點ぢや鼻が高い。先を思つても實に好い心持だが……

……。」

と言掛けて、さも惱ましげに眉を寄せた。

五

恰も其時、外を流して來た連彈の新内が、筋向ふの車宿に呼込まれて、月の軒下に得意らしい明烏を二段語出した。道を行く一人二人が、物數寄に足を止めて聞いて居る。謙吉は又調子をかへて、

「俺はお前を、折角恁うして物にしかけて來た。此上尚何處までも、前から言つて居るやうに思通りの立派な者にして、世間へ出して見たいと思つて居る。自分の口から言ふのも可笑しいが、最初から親切づくで遣出した事だ。俺も男づく、飽くまで親切一方で、お前の面倒を見て行きたいぢやないか。それが何うだ。言ふのも實にきまりの惡い談話だが、自分で自分を裏切るやうな、情ない根性をお前に持つやうになつて來た。人には兎も角、當のお前にもまア兎も角としても、俺は自分に對して實に面目次第もないと思つて居る。」

と言つて不意と顏を見た。お千代は先刻から、膝の上に手を重ねたまゝ差俯向いて、物をも言はず談話を聞澄まして、全で身動きもせずに居る。謙吉は我にもあらず、怪しく氣を打たれたやうな心地がしたが、これで濟まされる事ぢやないので、其儘言葉を繼いで、

「俺は思切つて何も打明けて言ふが、全體此事は、最初お前を銚子で知つた時から、自分ぢや全で然うとは思つて居なかつたが、最う其氣があつたのかも知れない。厭ぢやないか。親切ごかしに、それぢやお前を勾引したも同然だ。

俺は那樣男ぢやない心算で居るんだが、實際今になつちや何とも言ふ事が出來ない。俺は如何にもそれが業腹なんだ。忌々しくつて堪らないが、併しそれが當の自分ぢやないか。何と言つて可いか、實に解らない談話だ。けれども這麼氣が假にも出て居る中は未だ可いのだ。恁うして置いた日にや、俺は甚麼事をするか解らなくなる。那樣事なんざ全で構ひもしなくなつて了ふのは最う見えて居る。白狀するが現に昨日も、俺は一時最う這麼氣になつた。お前は俺の物だ。俺の自由にするのに何の差支がある。厭も應もあるものか。俺が恁うと思へば、お前は然うしなけれりやならんのだ。邪が非でも俺の物にする。俺が摑んだものをナニ離すものか、と何うだ。恁うまで逆上せ切つて來たぢやないか。」

と言續けたが、急に語氣を落して、稍口を重く、

「いや併し。そりや一時の事だ。俺は決してお前の自由意思を束縛するやうな事はしない、假令へば俺に甚麼義理があらうとも、義理は義理だ。お前はお前で行かなければならんのだ。うつかり詰らない義理に引かされて、心に

もなく自分を捨てゝ掛るやうな事をしちや、一生取返しの出來ないやうな事になつて了ふ。お前は今大事の身體だ。何處までも確りして、お前の了簡を立てゝ行かなければならない。憖ひの義理などに決して引かされちやならない。くれ〴〵もそりやお前に能く言つて置く。」

お千代は未だ俯向いたまゝ返事もせずに居る。彼方庭越しに撥音のみが冴えて、近い洋服屋の夜業の縫機の音が時に縺れて聞える。

六

四邊の町の聲の、小休みもなく賑やかなのにかへて、談話の途切れた間の、こゝの一室は水を打つたやうに、消えがての蚊遣の烟が、中に暫く立迷ふばかりで居た。お千代は俯向いたきりで未だ何も言はぬ。謙吉は振直つて更に、

「處でお前を恁うしやうと思ふのだ。」

と言葉を切つて、それとなく顏を見ながら、

「何分お前を傍に置いた日にや今も言つた通り、自分でも請合はれない、俺は甚麽事をするか解らないのだ。だから一時お前を駒井の方へ預けやうと思

ふ。お前は彼方で今迄通りの學課を專心に續けて行つてくれ。萬事は此方で總ての世話をする。お前に不自由は決してさせない。俺も其中には、確り自分を抑付て、二度と動搖かない工夫を立派にして見やう。なに出來ん事があるものか　俺は一度未だ甚い難場をも潜つて、何うにか立場を見付けて了つた。驚きはせんよ。俺は屹度此處を切拔けて見せる。はゝゝ、全體お前とは、兄になり妹になる約束があつたんぢやないか。」

と自分を嘲けるやうに、付けたやうな笑ひ方をしたが、

「なァお千代、兎も角一時、然うして駒井の方へ行つて居てくれ。弱いやうだがそれだけは宥して貰ひたい。併しまァ這麼事は、誰にも聞かされる事ぢやない。二人の中に何うか伏せて置いてくれ。それは可いが何うだ、今迄言つた事は解つてくれたかい。」

とばかりおッと打目戍つた。お千代は未だ顏を上げず、息も止めて了つたやうに、口を噤んで何も言はなかつた。

「え、不承知かい？」

と謙吉は促すやうに言つた。

お千代は僅かに眼を動かしたが、見るまでもなく直に伏せて、

「でも私、那樣お談話とは全で思つて居ませんでしたから……。」

「むゝ、で、何うなんだ。」

「何うと言つて、何う御返事をしたら可いでしやう。」

と強ひて笑顔を作らうとしたが、其間に口元で消えて、見られる眼を厭ふやうに尚深く俯向いた。謙吉は聲を和げて、

「何も構ふ事はない。お前の思ふ通りを言つてくれた方が可い。俺とお前の間で、何の氣を置く事があるものか。俺も隱さずに何も言つて了つたのだ。お前も包まず聞かしてくれるが可いぢやないか。好からうが惡からうが、那樣遠慮の要らない事は、俺の平素でも能く解つて居るだらう。」

「はい、それは。」

「それぢや可いぢやないか。外に誰も居やしない。何でも勝手に言ふが可い。馬鹿な奴だとも見下げた男だとも、俺は何と言はれてもそれは受けて遣

る。」

「まア、那様事を。何ぼ私が物を知らないからと言つて……。」

と稍口が解れた。謙吉は付入つて直ぐ、

「いや俺は構はんよ。だから何も言つてくれるが可いぢやないか。」

「はい、申しましやう。申しますけれど、」

と火影を差明しく顔を背けて言難さうに、

「でも私、何と言つて可いか存じませんものを。」

七

謙吉は今更のやうに、近優りするお千代の面色の、事に觸れて美しく動く濃かな影を眼に止めて、又醉返す心地しながら、

「はゝ、何だ、那樣事言つて居た日にや何時まで經つても埒が明かない。あれほど構はんからと言つて居るぢやないか。」

「はい。」

とお千代も漸く氣を落付たらしく、

「それぢや思切つて申しましやう。私は先刻からのお言葉を、一人てお怨めしく思つて居りました。」

「えツ、」

と謙吉は稍ゝ色を變へて、屹と眼を注いだが、其儘急がはしく、

「むゝ、何うして？」

と押返して言ふ。お千代は流石に未だ、まともに面は向けられなかつたが、低いながらも思入つた聲音て、

「貴方は御自分で何も彼も決めてお了ひなすつて、私が何う思ふなんといふ事は、全でお考へなすつちや下さいませんのね。」

「いや、そりやア可けない。今度の事は俺が一人で勝手に仕出かしたんだからな。」

お千代は尙ほ其前髮の蔭に深く、

「でも然うで無かつたら何うなさいますの？」

「え、」

お千代は最う言ふだけを言つて、了はうと思つた。せめて自分の心が通じるだけも、と思入つて人知れず氣を勵まして、

「貴方は先刻、私に何處までも、自分の了簡を立てゝ行けと仰有いました。私お談話の中に、勝手なやうですけれど私は、私は最う決めて了ひました。お許容が無かつたら其迄ですが……。」

「むゝ、何う決めたい？」

「私あの……。」と思切つても流石に言淀んで、我にもあらず顏を染返したが、「私お傍を離れまいと思つて居ります。」

「えッ、それぢやお前は？」

お千代は更に顏を紅くした。前にも居られない思ひをしたが、僅かの隙を、精一杯に、

「私の此事は今始まつた事ぢやございません。前の前からの事でございます……。御免下さいまし。跡は最う存じませんから。」

と末を早口に、言ふなり不意と立上つたが、身を返して場を外して了はうとし

た。謙吉は忙がはしく、

「待て。一寸。」

お千代は足も止めず、

「あれ、最う何うぞ……。」

とばかり顔も見せず、物に追はれるやうに逃げて行つて了つた。

茶の室へ來ると出合頭に、

「まア、お孃樣。」

とお清は吃驚して身を退いた。はッとして立止ると、此方へ來かけたのか、前にお清の立つて居る姿が初めて眼に入つた。慌てゝ色を繕ひながら、

「おや、つい下を向いて居たもんだから……。」

「まア、私何うなすつたのかと思ひましたよ。私今お風呂を伺はうと思つて參りました。」

「然う。それぢや直に使はうよ。」

と今は何處も隱れ場所。お千代は跡先もなく、逃れて湯殿の方へ急ぎ足に行

つた。

跡に謙吉は、一人手を拱いたまゝで居たが、急に立つて、月の庭面を、稍暫く彼方此方とさまよつて居た。

（十一）朝靄

一

いつもの時刻に謙吉は勢よく起きて、いつもの冷水浴に直ぐ、閨を跡にして湯殿へ立つて來た。家の者は最う先に起きて持場に働いて居る。お清は茶の室に、お松は臺所に、車夫の佐吉は門の內外を最う掃いて了つて庭へ入つて行つた。自鳴琴入の枕時計が、お千代の寢室で鳴出したのを聞流して、衝と茶の室を通拔けると、と見てお清が急がはしく手襷を外して、

「お早うございます。」

と丁寧に手を支いた。謙吉は緣先から、

「むゝ、好い天氣だな。水は？」

「はい、最う佐吉さんが。」

「然うか。早かつたな。」

言捨てゝ緣傳ひに、近く押並んで居る佐吉の手造りの朝顏に眼を洗ひながら、

其儘湯殿へ廻つて行つた。
一浴して心地よげに、鏡の前に髮を直して頓て出て來た時には、寐室は疾うに片付いて、お清は最う茶の室へ歸つて居た。謙吉は物を探すやうな眼色で、

「千代は？」

と不意に聞いた。お清は何の氣も付かず、

「はい、未だお目覺めになりませんの。おほゝゝ、今朝は何日もになくお寐つて居らつしやいます。」

謙吉は一寸目を動かしたが、何喰はぬ顏で笑ひながら、

「何うしたんだな。可い加減に起して遣るが可い。」

「でも偶の事でございますもの。なに最う其方此方お目覺めでございましやうよ。」

「ふむ、寢坊して笑はれるのも餘り可いもんぢやないからな。」

と言捨に、煙草の箱と新聞を摑んで、いつものやうに庭の東屋の方へ行きかけたが、居室を通りしなに不圖足を止めて隔ての襖を押開けて、何か心可笑しげ

に、お千代の寐室を竊と差窺いた。

お千代は疾うに目を覺まして居た。朝の光を蚊帳越しに、小搔卷の華やかなのも、雪のやうな肌に照映へて、寐亂れ髮に塗枕の艶に嬌めいた姿を其儘、見られやうとは思ひもしなかつたので、物懷しさの色を露はに、ぱつちりした眼を見開いて、一人夢を追つて居たが、不意に襖を開けられて、はッとして眼を走らせた途端、其處に立つた謙吉の姿を見ると、俄かに度を失つて、見る間に顏を紅のやうに、慌てゝ搔卷を上にあげて、すつぽり髮までを隱して了つた。謙吉は立つたなり、ぢッと見て人知れず打笑つたが靜かに身を跡へ、元のまゝに襖を閉切つて、何も言はず、家を外に頓て庭へ降りて行つた。

お千代は未だ騷ぐ胸を押へたまゝで耳を欹てゝ居たが、其間に足音の遠くなつたのに初めてほつとして、汗になつた額を見せたが、物羞かしげに眼を漂はせて、身を返したが起きも上らず、其儘俯伏せになつて、額を枕に押付けて了つた。

暫くすると又足音が聞えた、お千代は譯もなく又はッとした。

「お孃樣。」
と外にお清の聲。お千代は返事もせずに靜まり返つて居た。
「もしお孃樣。」
とお清は中へ入つて來た。

二

襖を開けると、颯と吹入れた風が、横さまに中の蚊帳へ靡いて、下に美しげな綠を走らせる。お清は敷居際に、膝を支いて何心なく差覗いたが、お千代の變つた寢姿を眼に入れると、
「おや何うかなさいましたのでございますか。」
と氣遣はしげに眼を瞬る、お千代は答へる空もなかつたが、流石に紛らして、
「なに先刻から、何だか頭痛がしてならなかつたもんだから。」
と未だ額を押付けた儘で言ふ。お清は正直に眉を顰めて、
「おや、そりやァ可けませんのね。何うなすつたんでしやう。餘ッ程お痛みになりますの?」

「いゝえ那様に甚くはないんだけれど、何だか氣分が勝れないもんだから……
……。」
「まア、然うでしたの、私は又いつになく、寐過して居らしやるとばかり思つたもんですから、お起し申さうと思つて參りましたの。それぢやまア靜かにしてお寐つて居らつした方が可うございませう。」
「なに、別に大した事でもないんだから、少しゝたら起きましやうよ。まア些少の間恁うして置いて頂戴。」
「はい、何方でもお心持次第で。まア餘り御無理をなさいませんやうに。」
と何も疑はず頓て退つて行つた。お千代は再び息をついたが、元に返ると何を思浮べたか、人目のない中にも羞かしさうに、急に顏を赧くして、初々しく枕にひたと又隱れて了つた。
時は其中に移つて行く。此室ばかり、未だ殘してある雨戶を洩れて、朝日の光が既射込んで來た。前の庭を近く進んで來た佐吉の箒の音が、いつか遠くなつて彼方に謙吉と何か話して居るのが聞える。隣家の兒が朝每に振る鐵啞

鈴の、勇ましげな掛聲が不意に起る。納豆賣、唐辛賣、自轉車の鈴、電車の響、人の聲、物の聲、傍から呼覺すやうに朝の活動の聲が耳を襲つて來る。此羞かしい日をお千代は何うしやうと思つた。

寤と起きて見たけれど、立つて着物を改める勇氣はない。亂れた襟を掻合せて、胸を押へて俯向いて了つた。

と襖の外から、

「お孃樣。あの、牛乳は此方へ持つて參りましやうか。」

と又お清の聲、お千代は其聲に促されたやうに、

「いゝえ。最う起きるから。」

と思切つて蚊帳を揚げて出た。お清は突と寄つて襖を押開いた。

「おや、最うはツきりなさいましたの？」

お千代は背後向きに眼を避けて、衣桁の着物に手を掛けながら、

「あゝ、未だ少し何だけれど……。」

「然うでございますか。でもお起きになれる程なら結構でございます。却

つて又起きてお了ひなすつた方が快濶なさいますかも知れませんよ。」と立つて縁の雨戸を繰開けた途端に障子へぱつと映す光を受けて壁の照身鏡に近く立つて居たお千代は、思はず傍を飛退いて慌たゞしく我姿に顔を背けた。お清は障子の外に空を眺めて罪もなく、

「今日も又暑くなりさうだ事。」

三

柱に餘り、軒に餘つて、隙間もなく鼈甲蔦の葉艶を射返して風にそよめいて居る東屋に、謙吉は讀みさしの新聞の上に頰杖して、未だ濡色の、しとりとした前の庭を眺めて横に腰掛けて居た、爽やかな朝の空氣は、冷々と襟元を掠めて、流れるやうに下の茂合つた秋草の中へ消込んで行く涼しげに立つた梧桐の廣葉の蔭に、雀の三番子が親に伴れられて枝を飛交つて居る。只一息に伸びたやうに、脇に四五株の芭蕉が朝露に競立つて居る。輕く烟草の烟を立てゝ、謙吉は稍暫く、夏の朝の優れた心地を味つて居た。

謙吉は靜に昨夜からの出來事を思返した。是迄甞て經驗のない、さながら心

行くばかりの今の思を、自分ながら意想外に覺えながらも、一方には又自分の心の定まらぬに驚かれるやうな思もした。謙吉は今、迫つた溪流を跡にして俄かに大洋へ乘出して來た心地がした。下らぬ事に拘泥して、强ひて自分の本意を枉げた此間からの自分の愚を今更のやうに嘲けるばかり、有るほどの不平も不滿も、未だ根を深く張つて居るとさへ思つて居た胸の怨毒も、殆んど拭去られたやうに容易く忘られて來た。我にもあらず、滿身に何か新らしい生命を吹込まれたやうに、新らしい勇氣、新らしい信念、新らしい活力などが起り一々彈力を持つて、打てば響くばかりに內に充滿ちて居るかと思はれる。謙吉は立つて軒を離れて、華やかな日に霽れ上つて行く靄の中から、果もなく薄藍を漲らして行く空合を力ある眼に振仰いでぢッと見た。吁、神の側には光がある。

「俺は實際、今迄戀といふものを知らなかつたのだ。」

暫く前を往返りして居たが、再び中へ入つて、朝毎に此處へお千代が鹽梅して持つて來る珈琲と牛乳を待つて居た。

寢室の雨戸が開いたので、お千代の起きた事を知つて居る、來るか。と又新聞を手に取つたが、それなり影も見せず、暫くしてお清が代つて盆を捧げて來た。
謙吉はそれと心に微笑みながら、
「何うした千代は？」
と素知らぬ顏で聞く。お清は淑やかに
「はい。お目覺めにはなりましたが、何ですかお加減が少し惡いと仰有つて居らつしやいます。」
「然うか。起きて居るなら兎に角來いと言つてくれ。」
「畏まりました。」
と頓て引返して行く。謙吉は跡に、珈琲を手に取りながら、何か珍しいものでも待つかのやうに、坐ろ心に興を覺えて待つて居た。
と、長い事間を置いて、漸くの事でチラと横手の物蔭に、僅かに姿を見せたかと思ふと、端なく謙吉と、顏を見合せて、慌てゝ脇へ隱れて了つた。
謙吉は見て笑ひながら、

「おい何をして居るのだ。」

「……。」

お千代は其處へ居竦んで了つたやうになつた。

「千代。」

と謙吉は再び聲を掛けた。お千代は尙更に身を縮めて下を向いたまゝて立つて居る。謙吉は衝と腰掛を離れて、つか〳〵其處へ近寄つた。

四

「あれ、」

とお千代は今更のやうに、思はず低い叫び聲を立てゝ、跡へ飛退くと、身を飜へして彼方へ避けやうとした。

「何だ何の眞似だ。」

と謙吉は行手に塞がつて、未だ前の笑顏のまゝ

「まア來るが可い。」

と衝と身を寄せて、お千代の引退けた手をむづと把つた。お千代は更に慌て

て、

「あれ、誰か見ると可けませんよ。」

「はゝゝ、見たら何うなんだ。」

と放ちもやらず、其手を引寄せて脇へ抱へるやうに近く押並んで、笑つて東屋へ引立てゝ行つた。お千代は尚も見る眼を憚つて、急がはしく其處等を見廻しながら、

「あれ參りますから最う……。」

と其中にも離れやうとする。謙吉は猶犇と寄せて、

「なに今になつて何うするんだ。いつまで那樣風で居たつて仕樣が有るものか。」

「でも……。」

「可いさ。何も言ふな。」

と其儘伴れて中へ入つた。お千代は何時ものやうに、中の丸卓を挾んで頓て差向ひにはなつたが、昨日の隔てのなかつた態は何處へやら、眼も上げられず

身をくねらせて、物も言はぬに赧くなつて顔を背けて居る。謙吉は見下して微笑みながら、

「何うしたい未だ那樣にきまりが惡いのかい。」

「存じませんよ。だつて私、自分にも何うする事も出來ないんですもの。」

「それぢや何故最初言つた通り、默つて駒井の方へ行かなかつたのだ。」

「あら。」

とお千代は思の外の事を聞くやうに、不意に氣色ばんで思はず顏を上げた。

謙吉は態とらしく

「お前後悔して居るのかい。」

「まア那樣事を貴方……。」

と急に口を噤んだが、俯向くと最う涙組むばかりになつた。謙吉は氣色を見て急がはしく、

「はゝゝ、串戯だよ。然う無氣になつてくれちや困る。いや併しお前に對しちや、何だか氣の毒の事をしたやうに思はれるもんだからツイ言つたのだ。

全體お前にや俺より以上の好い相手を見付けさせる心算で居たんだが、恁うなつちや最うそれも出來ないぢやないか。」

「ですけれども私、那樣事を些少も望んぢや居ませんでした。それは貴方が御勝手にお決めなすつたので、私は最う……。」

と言敢へず又顏を隱した。謙吉は首肯いて、快く、

「むゝ何にしても恁うなつた以上、何處までも結果を好くしなけりやならない。お前には濟まない氣はするが、自分だけの勝手を言へば、俺は實に好い事をしたと思つて居る。俺の今迄は全く附元氣で遣つて來たのだが、今こそ眞の元氣が沸いて來た心持がする、俺の了簡の新らしい据ゑ處の出來たのは、全くお前のお蔭だと思つて居る。」

「あれ。何うして私が那樣事を……。」

とお千代は意を解きかねて何彼なしに打消した。謙吉は首を掉つて、獨り調子を強く、

「いや然うぢやない。まア見て居るが可い。」

とばかり眼を輝かして言つた。

五

途端に庭下駄の音を輕く刻足に裾を打たせて、飛石傳ひにちよこ〳〵と來たお清が、

「あの、生駒さんがお入來でございます。」

謙吉は振向きさま、

「え、生駒が？　何うしたんだ。大層早く。」

言ひながら立上つて、

「まア兎も角座敷へ。」

と吩附けて其儘席を離れた。同時に庭境の枝折戸に近く、がちりと佩劍の物に觸れた音がしたと思ふと、心易立てに旣つか〳〵と其處へ廻つて來た種彥が、外から見越して逸早く聲を掛けた。

「やア、其方か。」

と直に枝折戸を押開けて、庭を横に此方へ近寄つた。お清は母屋へ引返して

行つた中途に、それと見て道を開いて、脇に小腰を屈めて立迎へた。お千代は人知れず眼を走らしたが、衝と立つて謙吉の傍へ近く、耳に付いて囁くやうに、

「貴方、彼の事を今仰有つちや厭ですよ。」

と尻眼に種彦の方を盗むやうに見て、聲を潜めて急がはしげに言つた。謙吉は打笑つて、

「なに構ふものか。」

「あら、それぢや私……。」

と言敢へず又色を染めて、慌てゝ場を外さうとした。謙吉は素知らぬ顔で、斜に卓子の上に掛つたお千代の片袖を、默つて肱で押へて脇を向いて居た。お千代は更に色を返して、

「あれ貴方……。」

と爭つて居る間に、種彦は最う其處へ來た。片手に佩劍の柄を握つて、日に燒けた逞ましい顔を莞爾々々と、

「何うだ。早いので驚いたらう。」

謙吉も笑顔に迎へて、

「むゝ、何うしたんだい。まア此方へ。今座敷の方を支度させるから。」

と延いて東屋の中へ入つた。お千代は無據しに包ましやかな挨拶したが、濟むと最う逃支度して突如、

「あの、それぢや私、彼方のお支度を……。」

と言捨てゝ跡も見ず、何も言はれぬ先に引離れて下へ袂を返して駈出して行つた。謙吉は最う强ひても止めず、笑つて跡を見送つて、それなり前に押直つた。種彦はかなぐるやうに、軍帽を脱つて卓子の上へ置くと、劍を横にどかりと脇へ腰を下して、

「いや、今日は大失敗さ。今朝或別莊へ、僕の柄になく蓮見物に招待されたと思ひたまへ。僕が蓮なんぞ見た處が仕樣のない談話だが、折角好意で呼れたもんだから兎も角出掛けたんだ。で、まア先方へ行くと、いや僕などが偶に行きや那樣もんだよ。未だ挨拶もろく〳〵濟まん中に主人公が急病で打倒れたぢやないか。何も滅茶々々さ。此方も構はんで何うか。と言つて種々歎

待してくれたけれど、其中で落付いて居られるものか。自慢の河鹿を序に聞かせるといふのだつたが、無論それ處ぢやない。早々にして飛出して了つた。先も氣の毒だが、此方も餘り可いもんぢやない。早いのは其所爲なんだ。日曜だから何か緣起直しでも遣らうと思つて一寸寄つた。」

「然うか。そりや丁ど可かつた。僕には幸ひ心祝がある。早速祝盃を擧げて貰はう。」

と謙吉は元氣よく言つた。種彥は一寸眉を動かしたが、

「祝盃？　そりや何時でも可いな。だが全體何の祝だね。」

とばかり顏を打目戍た。

六

謙吉は其活々とした眼色を前に、見るから心地よげの笑顏を返した。

「外ぢやないが所謂破鍋に綴蓋といふのが出來さうなんだ。」

「え、」

と種彥は前の卓子の上に肱を持たせて、少し身を乘出しながら、

「むゝ縁談か。そりや何よりの談話だ。して何處から來るんだ。」
「いや、それが意外な事でね、君などにも笑はれるだらうと思ふが、無論覺悟の前だ。誰にも面は隱さん心算で居る。」
と稍ゝ氣が立つた調子で、續いて跡を言掛けた。種彦は脇から遮つて、
「待ちたまへ。何だか獨合點で薩張解らんが、那樣辯解のやうな事は跡廻しにして、肝心の談話の方を先へ聞うぢやないか。」
謙吉は高笑ひした。
「はゝゝ、這麼言譯をするだけ未だ氣が引けて居ると見えるな。ナニ君が本人を知つて居なければ言ひもせんが。」
「何だ、僕が知つて居る？　ふむ、そりや些少奇異しいな。」
と眼を瞬かせたが、其儘口元に微笑みながら、
「解つた。然うか。成程それぢや少し言譯も要るだらう。先達の口上もあつたのだからな。はゝゝ、道理で先刻お千代孃の樣子が甚く妙だつたよ。や、僕も察しの惡い男だ。併しそれなら何も今わざ〳〵發表するにも及ばんぢ

やないか。」
「何故」
「何故も何もあるものか。今改めて言はなくつても、最初から最う知れて居る談話だ。尤も何時までしらを切つて居るのが苦しいので、此處で降服するといふのなら格別だが。」
と弄り氣味に笑掛けた。謙吉はめげやうともせず、
「はゝゝ、一度はそれを言はれるだらうと思つたから、今も一寸言譯を仕掛けたんだ。實際は然うぢやなかつたんだが、今更それを言つた處が君は信じまいな。」
「むゝ、先づ信じないだらう。」
と打笑ふ。謙吉は首肯いて、
「それぢや勝手に然う思はせやう。實は那樣事に最う、強ひて自分を潔よくした處で、何れだけの眞打があるかと思つて、疾うに一笑に付して居るんだ。それよりか僕は今、こゝで初めて何うか人らしい家庭を作れるといふ事で、そ

れ以外は最う何も忘れて居る。家庭と言へば、僕には物心を覺えてから、實際家庭といふものが無かつたのだ。子供心にも、世間が羨ましかつたよ。人が羨ましかつたよ。いつか一度は、と種々な空想も抱いて見た。世間へ出てからも始終其事が主になつて、それから總てを割出して行つた。けちな考だつたが、此春一身上に變動が起つた時まで、只圓滿な家庭を作らうといふばかりでこつ〳〵と働いて居た。不意の病氣も手傳つたが、豫期して居た事が齟齬してからは、那樣考は全で捨てゝ了つて、自分の仕事一つで何も踏除いて行く覺悟で居た。這麼事にならうとは全く思つちや居なかつたのだ。」

と何時か眞顔になつて、聲音も知らず鋭くなつて行く。種彥は其時不圖、歌子の事を思浮べたが、流石色には見せず、尚も耳を傾けて居た。

七

風は梧桐の葉を戰がせて、二人の中を靜かに吹拔けて行つた。見上げる軒の、照葉の蔦の芽先を外れて、朝日の前に鮮やかな、眼近の空に五位鷺の、羽音の聞えるばかりの上を横切つて行く。點けざしの煙草も忘れて、談話に身を入れ

て居た謙吉は、其時不意に氣をかへたやうに、

「まアそれはそれとして、兎に角君何でも可いから僕の㤀うなつたのを祝つてくれ。工合が變だつたら、盲目になつて只祝つてくれ。僕は祝はれるだけの事を今後に屹度して見せる心算だ。」

種彦は笑つて輕く、

「はゝゝ、何も那樣に氣にするには及ばない。無論言はれなくても祝して遣る。思立つたら躊躇する事はないさ。進んでどしどし遣るが可い。ふむ、併し大分氣に入つたと見えるな。」

「何が？」

「いや君の見立てがさ。何か知らんが恐ろしい鼻息が荒いぢやないか。」

謙吉は流石に少し氣を打たれたが、直に笑つて、

「いや實を言へば、何分初めてだけに目が眩んだ形もある。㤀う云ふ時に來合せた君は、有難迷惑な裾分を喰つて、飛んだ交際に種々の事を聞かされる。然う思ふと少し氣の毒だが、僕の事だからまア我慢をしてくれるだらう。」

「何の。那樣事を氣に掛けるやうな僕ぢやない。構はんで甚麼事でも言ふが可い。僕は面白く聞いて居たよ。」

と言つて不意にけろりとして、

「で、何時結婚する？」

「え、」

と謙吉は油斷を突かれて、思はず一寸退避いだが、

「そりやア未だ決らんがね……。」

「ぢや約束だけといふのか。」

謙吉は其間に立直して、微笑みながら、

「や、君も中々息をつかせないな。それには僕も、今遣つて居る事業を最少し發展させて、兎も角一段落を付けてからといふ希望も、あるし、千代の方も、今の處ぢや未製品だから、變則ながら今の學課を最少し續けさせて、これも或程度まで進んだ處でと思つて居るのだから、未だ急には事は運ぶまいよ。」

「然うか。僕は知らんが然ういふ中も亦樂みなもんだらうな。可し。君も

先刻の意氣込ぢや、これから尚確かりした歩調で進む事が出來るのだらう。君の爲に實際祝して可いのだ。何うだ何處かへ押出さうか。暑くならん中に出て、涼しい處で先刻言つた祝盃といふ事にしちや何うだ。僕も其席で、僕一流の祝意を表して遣らう。」

「むゝ出るのも可いな。君の好きな處へ行かう。」

「伴れて行くか、お千代孃も。」

「はゝゝ、いや僕も然うまで厚顏しくはないよ。」

「いや、僕は那樣事に頓着する男ぢやない。可し。それぢや僕が引張つて行かう。」

「なに、行くものか。先刻もきまりを惡がつて此處を逃出して行つた位だ。」

「可かんな。那樣勇氣のない事ぢやア。」

と劍を突いて立上つたが、二三歩外へ出て、庭を眺めながら、

「今日は何か、一つ奇拔な事をして遣りたいな。」

と誰に言ふともなく言つて、何時もの健やかな色を前に、不圖上を打仰いだ。

（二十）塀の外

一

門の電燈は差出た練塀に遮ぎられて、此處は夜の影を深く、中の家居も樹々の枝に隱れて、話聲さへ能くは聞えぬ、横手の室賀の通用口の前を、往きつ返りつ、中へ入りかねた風情で、尙去りやらず佇立んで居た若い女があつた。何か知らず、餘所目を憚かる氣勢で、人を避け、車を避け、暗い蔭の方に顏を背けて、其度毎に怪しまれぬやうに、急に路を歩出して先刻から幾人かを遣過した。夜に紛れて、來てから最う暫くになる。

と、不意に中から足音が聞えて、頓や此方へ近くなると、待つて居た其處の引戶が、開いて、お秋が片手に、今出しに行くと見える葉書と封書を持込んで衝と外へ現はれた。樣子を窺つて此方に待掛けて居た女は、蔭から屹と眼を付けたが、其間に燈火の映す方へ出たお秋の、見知らぬ顏なのに何か思直した樣子で、其儘動かず、歸つて來るのを待つて居た。

ポストは直ぐ傍なので、お秋は待つ間もなく歸つて來た。と蔭から小走りに出た前の女は、稍急込んだ聲を先に、

「もし、」

と呼掛けてひた〳〵と寄ると、

「貴女室賀さんのお女中？」

お秋は吃驚して急に立止つた。眼を圓くして見上げ見下しながら、不意を打れた變な調子で、

「はい……何でございますの。」

女は人摺れのした馴々しい樣子で、

「あの、お宅にお房さんといふ女中が未だ居りましやうか。」

「はい居りますが……。」

とお秋は未だ眼を睜つたまゝで居る。女は聞くと齊しく、思はず聲に出したやうに、

「居りますの？　まア可かつた事。それぢやアノ、濟みませんけれどお房さ

んにね折入つて頼みたい事があつて訪ねて來たものがあるから、一寸顔を貸してくれるやうにと言つて下さいませんか。」

お秋は未だ人柄の了解めぬながら、

「あゝ然うでございますか。宜しうございます。直に申しましやう。アノ此方へお入んなさいましな。」

「はア、有難うございますが、此處の方が勝手ですから。」

と言つて手早く銀貨を紙に捻つて、

「眞個のお印ですよ。貴女に。」

と手に取らせた。お秋は慌てゝ引退つて、

「まア、何う致しまして、こればかりの事に那樣事して戴いては……。」

女は笑つて輕く、

「あれ可いんですよ。默つて取つて置いて頂戴よ。」

と尙辭退するのを無理に押付けて、近々と親しげに、

「ね、ぢや待つて居ますから何うぞ。」

と押遣るやうにした。お秋は無據に、

「本當に濟みませんです事。はい、それぢやお房さんに直ぐ。」

と行掛けたが急に心付いて、

「アノ、お名前は何と仰有いますの。」

女は一寸狼狽いたが、直に取直して、

「はア、なに、お房さんを驚かして遣りたいんですから、何とも仰有らずに呼んで下さいな。」

と何氣ない態で言つた。お秋は妙には思つたが、それなり押しても言はず、

「はい、それぢや、」

とばかり急いで中へ入つて行つた。

二

其足音の奥へ消込むと共に、外の女は急に樣子を變へた。暗い中にも際立つばかり身を引締めて、ひたと塀際に寄添つたまゝ、今かと此方に待構へて居る。

と、程もあらせず、中から急がはしげに、お房は怪訝な顏で衝と立現はれた。差

當つて心當りもない、殊に名乘りもせず呼出しに來た人の、誰と合點の行かず夜目に透して尙訝かしげに、

「何方？」

と先づ聲を掛けた。女は駈寄るやうに傍へ來ると、いきなり、

「房や、私だよ。」

「え、」

とお房は更に驚いた顏を差寄せた。女は稍羞かしげに、小聲ながら急がはしく、

「あれ、私だといふのに、お前最うお忘れなの。」

お房は悸として思はず、

「まア、お孃樣。」

「あれ靜かに。」

と口早に制して、其儘衝と寄つてお房の肩に手を掛けた。

「房や、何も言はないでね、後生だから私の賴む事を一通り聞いておくれ。お

前の外には最う眞面目になつて私に取合つてくれる人はないのだからね。此處へも來られる譯ぢやないのだけれど、お前に逢はうばかりに恁うして無理に來たの。以前が以前だから、又何を言ひに來たかと、お思ひだらうが、私も今度といふ今度は身に染みて心を入替へる氣になつたのだから、勝手なやうだけれど可哀相だとも思つてねえ、耳を貸しておくれでないかえ。」

お房は未だ靜まらぬ胸を、兎角に抑へて氣を取るばかりに、

「まア勿體ない。私に何の那樣御遠慮が要るものですか。貴女のお爲になら甚麼事でも致します。私でお役に立つ事なら何なりとも仰有つて下さいまし。」

と言ひながらも眼を休めず、跡からぢろ〳〵と見て、

「本當に私何方かと思ひましよ。それにしても貴女まア那邊に居らつしやいましたの？」

「はア、それも話すけれどね、此處ぢや何だから、お前氣の毒だけれど奧へ行つて、何とか拵へて一時間ばかり暇を貰つて來ておくれでないか。何處か一寸

目に立たない家へ寄つて能く話したいから。」

「はい、それは何うとも致しましやうけれど……。」

女は投げたやうな調子で

「本當に、罰が當つて、自分の家へ來ても入る事が出來ないやうになつて了つて。」

と言つて淋しさうに笑つた。お房は不意に顔を上げて、

「貴女、寧、恁うなすつたら何うでしやう。未だ詳しくは承はりませんが、わざわざ此處へ入らしつたので、大抵はお心も解つて居ります。跡は私が何のやうにも致しますから、今の處そりやお入難いでしやうけれど、思切つて家へお入りなすつては？」

「あれ、何ぼ何でも私が……。」

手が動いたので、嵌めて居た指環が薄暗い中できらりと光る。持添へて居た手巾の香水の薫が颯と立つ。着物の衣擦れの音に扮裝の悪からぬを訝りながら、お房は重ねて説立てるやうに、

「いえ然うなさいましよ。お奥でもそりや一時の御立腹はあるでしようが外の方ぢやございませんもの。私お引受申しますから然うなさいまし。」とばかり顔を打目戍つた。

三

女は容易に從ふ色もなく、跡へ身を退いて、

「あれお前、一人でいくらお前が承知してくれたつて、御母様や兄様が、それて赦して下さるのぢやなし私が又いくら厚顏しくつても、お前が然う言つてくれるからと言つて、のめ〳〵入つて行かれた義理ぢやないぢやないか。そりやいくら入りたくつたつて、許容の出ない中に那樣事は出來やしないわ。お前が私の身になつても然うだらうが。」

お房は聞敢へず押返して、

「はい、それは最う、改めてお詫をなすつてからといふ思召は能く解つて居りますが、恁うして折角入らつしやいましたものを、貴女内でなさるのも、外でなさるのも同じ事ぢやございませんか。ですから私が、譯の解らないものにな

つて、無理に貴女をお引入申した事に致すのでございます。何でも私の落度にして、私が勝手に然うした事にしたら宜しいてはございませんか。なに口ぢや甚麼に仰有つても、貴女がお歸遊ばしたとお聞なすつたら、お奥ぢや甚麼にお喜びてしやう、それに、」

と言掛けて不圖心付いて、

「貴女、此方へ奥樣のお出遊ばしたのを御存じてございますか。」

「いゝえ全で。」

と女は初耳の、はッと氣色を動かして、

「まア然うなの。それぢや尚更だわ。」

「あれ然うお取りなすつちや可けませんよ。其奥樣も、初めは貴女の事を御存じなくつて居らつしやいましたが、いつかお聞きなすつて、大層御心配をなすつてね、能く私にも、貴女のお出の先が解つて居れば、御自分で行らしつて、割つてお談話をして伴れて來て上げたいと言つて居らつしやるのですもの。貴女にはそりや喜んでお逢ひになりますわ。御情愛の深いお方でございま

すよ。お詫をなさるなら私、奥様に言つて戴くのが、貴女の此後のお爲かとも思ひます。」

「まア、だつて私……。」

と口を切つたが、直ぐ言直して、

「なに、そりやアね、私も今更、人並に羞かしがられる身體ぢやなし、此方へ來るにやそれだけの覺悟もあつて來たのだから、最う惡びれる氣は些少もないけれど、未だ逢つた事も見た事もない嫂樣に、突如に那樣事をお前……。」

「だつて貴女、外ぢやないお内々の事ぢやございませんか。奥樣も此方へ居らしやれば、貴女とは何處までも御姉妹ですもの。それに那麽に御心配して居らつしやるのですものを、却つて那樣お隔てなさるのをお恨みなさるでしやうよ。なに私が可いやうに致しますよ。まア私の部屋までも入らつしやいまし。お奥ぢや今、皆お留守でございます。奥樣も夕方から御近所まで一寸御用達に出て行らつしやいました、彼方で又能くお談話も承はりましやう。兎に角もまア入らつしやいまし。」

「でも默つて中へ……。」

「あれ可いぢやございませんか。何も私にお任せなすつて。」

「だつて私には出來ないよ。」

「まア那樣事を仰有らずに。」

と押問答の其時向ふの曲り角へ、ふらりと提燈の燈火が見えて、お新を供に何心なく其處へ歸つて來る歌子の影が、夜目にも美しげな姿を拔いて、頓て此方へ近寄つた。

四

「奧樣。」

「おや。」

と歌子は立止つた。女ははツとして、思はず立竦みに、燈光を避けて急に顏を影にした。其物越のあだめいて、粧らぬ中にも色を飾つた扮裝の好みも着こなしも、何處やら素人離れのした姿を、歌子は眼に止めてぢツと見る。言はねどお新も、小脇に提燈を提げたまゝ、思はず怪訝の眼を睜る。お房は驅寄つて

急がはしく、歌子の耳に就いて手短かに概略を囁いた。

「あら。」

と歌子は聲に出して、驚く色を隱しも敢へず再び眼を返したが、咄嗟に前後を思定めて、つゝッと急ぎ足に傍へ寄つた。

「まア、貴女は光子さんで居らしつたの。」

と先の立場を思遣つて、態と氣を置かせぬやうに、さも親しげに聲を掛けた。

女はちらと眼を擧げたきり、直に俯向いて、見るから極りを惡さうに、丁寧な會釋しながら、

「本當に、お目に掛かれるのぢやないのですけれど……。」

歌子は聞敢へず、

「あれ、何ですねえ那樣事を。貴女、私には未だ何にもなさりはしないぢやありませんか。まア何にしても能く歸て來て下すつた事。今房にも一寸伺ひましたよ。私も先度から、甚麼にお目に掛りたくつて居たでしやう。お話申したい事も大變にあるんですよ。まア兎も角も家へ入らしやいまし。」

お房は嬉しさうに、直に尾に随いて脇から、

「お孃樣。それ御覧なさいまし。私が申した通りでございましやう。さア、思切つて入らつしやいまし。跡は何うとも致しますよ。恁うして居らつしつては、却つて餘所の目に立つやうなものぢやございませんか。」

歌子も更に口を添へて、

「然う。誰かに見られても何ですわ。まア何よりお相識かた〴〵私の方へ入らつしやいましなね。」

と割りなげに言ふ。光子も流石に、好意を深く悦びながらも、

「はい、御深切は本當に有難うございますけれど、貴女も御存じの、家でも寄せ付けず、私も最う寄付けない身になつて居るのですから、母なり兄なりの聲掛りがありません中は、何ぼ私にしても餘り我儘過ぎますから。」

と又押返した。歌子は態と笑掛けて、尚も隔てのない調子で、

「可うござんすわ。そしたら二人でお叱言を受けやうぢやありませんか。それでもお氣に濟まなかつたら、今夜は私だけのお客になつて下さいまし。

さア、御案内をしましやうよ。」

と行掛けたが、光子が若し、外の者の手前をかねる事もと、不圖思つて、

「房や、私の勝手な計ひにして、直に奧へと思ふからね、お前彼方へ廻つて庭口を開けておくれな。新や、お前は此處から直にお入り。」

と二人を先に歸して、表の門の方へ、足を向けながら振返つて、

「さア貴女。」

「あれ、私は……。」

「まア、何ですねえ。最う那樣事仰有らないで。」

と手を把らぬばかりに再び否ませず、強ひて導いて中へ引入れた。

（十三）まなざし

一

暫くして、奥の小座敷に三人、光子は心ならず中に引据ゑられて、久し振で歸つて來た生の家の、見るから樣子の變つたにも、長く眼を止めても居られず、映榮える電燈の影を術なさうに、いゝ加減人には摺れて、物を物とも思はなくなつた身にも、流石場合で、急に昔の光子に返つた心地で照れて一人固くなつて居た。歌子もお房も火影の下に、今更のやうに光子の姿に眼を付けた。以前を知つて居るお房は、殊に其變りやうに驚きながらも、それとは言はれず脇に控へた。歌子の胸の中には、少からず咎める節はあつたが、義理ある仲の思入れを深く、何處までも氣を詰めさせまいとして、

「貴女、飛んだお目に掛りやうをしましたがね、最う何ですよ、他人のやうな隔をなすつちや可けませんよ。及ばずながら甚麼御相談にも乘りましやう。氣は利きませんけれどね、最う何にもなしに仲を能くしやうじやありません

か。」

と愛想らしく微笑みながら、尚親しげな調子で言つた。光子も其上を最早躊躇はず、言知らず思入つた聲音で、

「本當に何と申して可いのですか。お厚情には私お禮の申様もありません。兄に繋がつて居ればと言つて、最う妹とも言はれなくなつた私を、人がましい這麼お取扱をして下さるだけでも、私は本當に申様がないのでございます。假令逢はないで追返してお了ひなすつても、私は何とも言ふ事が出來ない身體で居るのですものを。」

歌子は押止めるやうに、

「あれ最う、其事はお止しなさいましよ。私本當にお目に掛りたくつて居ましたの。房も知つて居ますが、私の方からお訪申しても、と能く言暮して居たのですよ。」

「はア、然うださうで、先刻房も其事を申して居りました。貴女のやうな方を持合せたのは、本當に私の仕合せでございます。御存知ぢやないでしやうが

私は最う眞面目な人には、全で見捨てられて了つて居るのです。一度や二度の事ぢやないのですから、何處へ行つたつて相手にしてくれる人は最うありはしません。それをまア、何うお思ひなすつて下すつたのですか這麼‥‥。」

歌子は再び遮つた。

「なに貴女、濟んだ事は仕方がありません。先があるぢやありませんか。貴女のお心一つで何うでもなるのですわ。過ぎた事は最う見ない事になさいましよ。」

と輕く笑ひながら、

「それにしても今夜、如彼いふ都合で、私ばかりが先にお目に掛れたのも、矢張縁が深いのでしやうね。恁う言つちや何ですけれど、蟲の好く方は、初めて見た時から最う知れますのねえ。おほゝゝゝ、本當ですよ貴女。」

光子は眼を見合せたが、流石に笑掛けて、

「まア、巧い事を‥‥。」

「あれ貴女、お疑ひなさるの。」

「いえ、那樣事はありませんけれど……」
「おほゝゝ、貴女は併し御迷惑かも知れませんのね。」
と眼をあやに打目戍る。

二

「まア、飛んだ事を。」
と光子は言下に打消したが、眼色を先に胸を言はせて、ぢッと膝頭を見詰めたまゝ。
旋て、半ば聲を曇らし氣味に、
「本當に私のやうなものを、何うして那樣に思召して下さるのでしやう。」
歌子を微笑みながら輕く、
「だつて姉妹ぢやありませんか。」
「え、那樣にも……。」
「でも然うぢやありませんか。お氣には入らないか知れませんけれど、私は何處までもそれで通しますわ。お厭でも不精して戴かなけりや少し困りま

すが。」

と打笑ふ。光子は眞顏に聲を打たせて、

「最う何にも申しません。有難うございます。此先甚麼事になりましても私今夜の貴女の事は決して忘れません。」

歌子は其態を傷らしさうに、

「まア、私これといふ事も未だ爲やしませんのに。那樣に仰有つちやそれこそ却つて困りますわ。ねえ房や、然うぢやないかね。」

と脇のお房の方へ振返る。お房は頭を掉つて稍身を前に、

「いゝえ私も、お孃樣に代つてお禮を申します。能く恁うなすつて下さいました。惡いお顏はして下さるまいとは前から思つて居ましたが、恁うまでお氣を通して下さるだらうとは本當に思ひませんでした。お孃樣も甚麼にかお心強く思召すでしやう。」

「まア、此位な事で那樣に祭られて了つては仕樣がないのね。私馬鹿だから煽動に乘つて了ふわ。おほゝゝゝ。」

と譯もなく笑つたが、不圖又心付いて光子に、

「光子さん、貴方何ですよ。いくら私の方が這樣だからと言つて、今夜の今の事で、打付に仰有れないやうな事もお有りなさるなら、其間こゝを外して居ましやうから、跡で房に能く仰有いまし。私に決して御遠慮は要りません。」

光子は急がはしく、

「いゝえ私、貴女には最う何も申します。負つたら抱かれやうで、厚顏しく御親切に甘えやうと思つて了ひました。本當に最う、無理に願つても聞いて戴かうと思つて居りますなの。」

まア、然うして下されば、這麼心でも尙通じたといふもんで、甚麼に私も張合がありましやう。ぢや、最う構はず何も仰有いまし。出來るだけのお力には屹度なりましよう。何方にしても私、貴女は最う歸りッきりにして了ひますよ。」

と元氣よく言放つ。光子は聞くと又眼を下に、色を落して、

「はい。けれども其には、餘り身を落し過ぎましたから……。」

「え。」

と歌子も流石に躊躇つたが、氣をかへて調子よく、

「なに、それはそれですはね。却つて先の奮發の種にもなりますわ。可うござんす。貴女が居ないと仰有つても、私がお歸し申しませんから。」

光子は押返して、

「いゝえ、そりや、貴女が未だ能く私の今の身を御存じないからです。貴女私が今何をして居ると思つて居らしやいますの？」

と色を讀むやうに不意と眼を擧げた。

三

歌子は人を好げに、美しげな笑顔を向けて、

「まア那樣事は可いぢやありませんか。私何うとも思つて居はしませんわ。只ね、前から逢ひたいと思つて居た光子さんが歸つて來て下すつたと思つて居ますの。外に何も仰有らなくつても、それで最う可いぢやありませんか。」

「でも、それで濟むやうな事ぢやありませんもの。御親切は解つて居ります

が、這麼に待遇つて下さると、自分で氣が咎めてなりません。貴女、私は今日まで、お談話にならない事をして居たのですよ。」

と思定めて、光子は能と明瞭と言切つた。歌子は急がはしく、

「あれ、何うでもそれを仰有らなけりやなりませんの。聞かないでも可い事なら貴女、最つとお氣の輕い時になすつたら可いぢやありませんか。那樣事で氣をお遣ひなさるのは詰りませんわ。それよりか外のお談話をして、最つとお馴染を深くしましやうよ。」

光子は微笑みながら、

「那樣に好い子にして戴いても、汚れた身體が奇麗になるのぢやありません。罪滅ぼしにも言つて了つた方が可いのです。第一それからお話して行かなければ、此方へ來た譯も解りません、何うせ言難い事は申しませんから、まア聞いて下さいまし。おや房は？」

「房は今彼方へ參りましたよ。餘り立入つたお談話を伺ふのをお氣の毒に思つたのでしやう。」

「まア。」

とばかり思ありげに、

「這麼になつても未だ勦つてくれる人があるのですかねえ。私然うなると尚私の我儘な事を思ひますわ？」

「貴女、那樣に優しい氣がお有りなさるぢやありませんか。それで最う澤山ですわ。貴女の好い事なら何ですけれど、些少でも惡い事は、私も伺ひたくありませんの。又にしましやうよねえ。そして此些少の間を何も私に任せて置いて下さいましな。阿母樣や良人の方は、私何うにもしましやうから。」

「はい。けれどもそれぢや、餘り蟲が好過ぎますから……。」

「あれ、それこそ御遠慮ですわ。先刻も申したじやありませんか。私他人ぢやありませんもの。」

「惡うございました。それぢや最う何も言はないで願ひましやう。本當に私這麼に易々と、此處へ座れやうとは思ひも掛けないで居ました。何とか道を立てないで、歸れる身體でもなし、歸す家でもないのですものを。」

「いゝえ私も、貴女が他所へ出て居らつしやるのが、始終氣になつてばかり居ましたが、然うなりや甚麼に嬉しいでしやう。貴女、最う何があつても他所へ居らしつちや厭ですよ。」

まア貴女は何うして那樣にして下さるのでしやう。」

「でも性分ですものを。」

「貴女。」

「光子さん。」

と眼を見合したが、聲を淸く、其眼をひたと、

「仲を好くしましやうねえ。」

光子は言ふ事も知らず頭を下げたのであつた。

（十四）葭戸

一

「や、何うした。」

と二階の降口から、上と下とで思掛けず顏を見合せて、種彥は今、下へ降掛けた足を急に止めた。

「あら、降りて居らつしやるの？　ぢやァ下で。」

と歌子は身を開いて、脇の柱に添ふて立つ。種彥は見て足早に階子段を下へ、衝と降立つて傍へ寄ると、例のさくりとした調子で、

「いつ來た。些少も知らんかつたよ。」

「たつた今。」

「然うか。暫く來んかつたぢやないか。」

「はァ、丁ど一月の餘になりますのね。餘り御無沙汰をした罰で、折角來ると御兩親共お留守。でも未だ兄樣が居らしつたんで助りましたわ。」

「ふむ、まア涼しい處へ行かう。何か今日は大分艶飾して來たな。」

「あら、厭な。何を仰有るんですねえ。」

「はゝゝ、矢張女だなア。」

と奥の六疊の、庭に向つた方へ來て、開放した葭戸に近く、頓て寛ろいだ座を取つた。種彥は先頃から、室賀の家の面白からぬ噂は度々聞いて居るので、流石骨肉の心遣も多く、來たのを幸ひに力を付けて遣る氣で、いつよりは尙親しげに進んで何彼と欵待しながら、

「何うだ其後の、家の方の樣子は？」

と談話の序にそれとなく聞く。歌子は案外に、萎れた色も、爵いだやうな影も見せぬ。見上げた眼にも、力のある涼しげな光を返して、

「それには種々お談話が有りますの。」

と待受けたやうに膝を進めて、

「兄樣、私も此頃は中々働き手よ。」

種彥は打笑つて、

「何だ。自分で名乗つて出る奴に碌な者はない。何を遣つたのか知らんが、其鹽梅ぢや大した事ぢやなさゝうだな。併し元氣の可いのは何よりだ。俺は又くよ〳〵して居るんぢやないかと思つて居たが、其調子なら兎も角も安心だ。」

「おほゝゝ、矢張暢氣なんでしやうよ。だつて萎縮けて了つて居ても仕様がありませんもの。」

「ふむ、ぢや自棄なのか。」

「あれ然うぢやありませんよ。私だつて考なしぢやありませんわ。」

「然うか。そりや尚可い。で其談話が有るといふのは？」

と顔を見る。歌子は眼を漂はすやうにして、

「然う。何から申しましやうね。兄様、貴方彼の光子さんを御存じ？」

「光子？　知らんよ。何だい。」

「そら、室賀の妹の、」

「むゝ、彼の淫奔娘か。」

歌子は手を擧げて急がはしく、

「あれ、最う淫奔娘ぢやありませんよ。以前は以前ですわ。すつかり後悔して歸つて來た人を、兄さんでもない。世間ぢや然ういふ風で、折角改心した人を又惡くして了ふんですわ。止して下さいよ。私にも妹ですわ。」

と熱心に言ふ。種彥は微笑みながら、

「ふむ、面白い事を言ふな。然うか、歸つて來たのかい、何時？」

とばかり顏を打目戍つた。

二

問はれるまゝに、歌子は光子に初めて、逢つた曩の夜の光景を話した。自分の見た事、思つた事、取敢へず一人で處置した事などを話して、重ねて聲を追つて、

「でも好い鹽梅にね、皆都合よく行きましたの。私出過ぎたかも知れません、順當ぢやなかつたかも知れませんけれど、でも私然うしたかつたんですもの。人の事は却つて言易いもんですね、阿母樣にも室賀にも、私光子さんに成代つて、隨分思切つた詫樣をしましたわ。私光子さんの此先を、一人で何も彼も引

受けて了ひましたの。種々まァ悶着はありましたけれど、結局私に任してくれる事になつたんで、私も甚麼にか好い氣持でしやう。那樣近い家の人が、餘所に離れて居るなんて厭な事はありやしませんからねえ。」

種彦は聞きさして興ありげに、

「ふむ、お前も少し役が上つたやうだ。そりや能くして遣つた。だが其光子といふ人は甚麼風だい。家を出た迄の事は大凡聞いて居るが、出てから今迄何をして居て、今何ういふ者になつて居るのだい。」

「最う眞人間よ全く。」

と歌子は調子を強く聲を切つて、

「前の事なんぞは可いぢやありませんか。最う心を入替へて了つた人の、那樣前の事なんぞ聞くのは罪ですわ。」

「だがそれじや全で解らんぢやないか。」

「いゝえお逢ひになりや解りますよ。私可いと思つて居るのは、光子さんがね、困つて仕樣がなくなつて、據なく舞戻つて來たのぢやないからです。つく

づく後悔して、心から歸る氣になつて、歸つて來たんですの。そりや跡で自分でもいろ〳〵言ひましたよ。隨分甚い處まで落ちて行つたやうですが、那樣事一々人に聞かせるのは厭ですわ。最う大丈夫よ。今ぢや反對に男嫌ひのやうになつて居るんですもの。最う甚麼人でも、男といふ男は皆厭だと言つて居るの。」

「はゝ、そりや解らんよ。一時興奮した餘りに言つて居るのぢやないのかな。だが何ういふ動機で然ういふ事になつたんだい。」

「それも餘ッ程前から心には責められて、何うかして足を洗ひたいといふ氣が出て居たんですとさ。其處へね、或男に付纏はれて、餘り夢中になられたんで、却つて顚倒つて、其男を拋出すと一處に何も彼も捨てゝ、それッきり浮いた心を弗つり最う入替へて了つたんですとさ。」

「で、今家に居るのかい。」

「はア。」

「お前一處に居て甚麼だい。然ういふ女を小姑にしてお前の心持を損じず

に居られるかね。」

と意味ありげにぢッと見る。　歌子は躊躇ふ色もなく、

「居られます。又居やうと思ひますわ。　兄様、如彼いふ種々な事をして来た人の方が、却つて解りが早うございますよ。　彼方ぢや私の心を能く察してくれて居ますわ。　まア今こそ那様事を仰有るけれど、見て居らつしやい、私今に光子さんを誰にも全で見違へられるやうに、屹度して見せますから。」

「ふむ、えらい思込みやうだな。」

と種彦は信ぜぬやうな顔で、半は笑ひながら言つた。

三

「兄様。私それよりも最つと嬉しい事がありますの。」

と歌子は同じ差向ひにも、心の置けぬ兄の前だけ、裏から打解けた物言に、聲も自づと調子付いて、只假初に出て来た言葉も、兄妹同志の親しい影を忍ばせる。

種彦は何を言ふかと、人妻ながら、家へ来れば慣れた昔の子供あしらひに、

「何だ。又下らん事を太騒ぎ遣つて居るのだらう。」

「あら那樣串戯じやありませんよ。最つと眞面目な事なんですよ。私彼方の阿姑樣にね、思切つて些少言ひましたの。」

「むゝ、何を。」

「御異見を。」

「え？」

と流石耳に止めて一寸振直ると、

「然うか、到頭遣つたか。むゝ、そりやお前からは言難かつたらう。何うしたい。お前の事だから又眞面目くさつて正面から斬込んだんぢやないか。」

「いゝえ。まさか。だつて彼方は阿姑樣ぢやありませんか。私が嫁の身で、那樣人には話せないやうな事をつけ〳〵と言はれるもんですか。私言出すまでにも餘ッ程考へましたわ。ですから私にしちや出來るだけ巧く言廻した心算で、お氣をお付けなすつて、最少し控へ目にして下さるやうにと、それとなく言ふまでには大骨折でしたわ。でも私吃驚して了つたの。」

「むゝ、何う？」

「餘り能く解過ぎて居らつしやるんで。」

と美しい眼を擧げる。 種彥は稍ゝ意外らしく、

「ふむ、甚麼風に？」

歌子は直に聲を取つて、

「いゝえ阿姑樣は最う、私の言出さない前からちやんと知つて居らつしやるの。阿姑樣と私の取組ぢや、そりや其筈ですけれどね、それにしても私、跡が心配なんで、言ふには言つてもびく〳〵もんで、何う仰有るかと顏色ばかりを見て居ますとね、阿姑樣は莞爾々々として、おゝ能く言つておくれだ、可哀相に、飛んだ心配をさせたね、なに私も、嫁が來たらば最う、全で止めて了ふ心算で居たのが、おほゝゝゝ、未だ此しだらで、濟まなかつたね本當に。 堪忍おし、最う餘計な氣は揉ませないから。と譯もなく輕く仰有つて了ひましたの。 おいそれと人の言ふ事なんぞ直ぐ聞く人ぢやない、と平素室賀も言つて居ましたし、まさかに這麼出方をなさらうとは、私も思掛けずに居ましたから、有りやうの處本氣で仰有るとは思ませんでしたわ。 處が兄樣、噓ぢやないのですよ。 阿姑

樣は私を立てゝ下すつて、本當に思切りよく、全で今迄のお身持を變へてお了ひなすつたの。そりや本當に薩張してお出でなさるのよ。私の方が却つてお氣の毒のやうになつた位ですの。若い時には働き手で、今の家を興したのも、半分は阿姑樣の力だつたといふ事を聞いて居ましたが、それだけ私なんぞの、未だ能く世間も知らない者にや能く解らない處がありますのね。」

と言葉を切つて、一寸息を繼いだ。

四

種彦は膝の前の團扇を拾ふと、緩く合せた襟先から薄すり見える胸毛を返して、無骨な手付に風を入れながら、

「然うか、そりやお前に取つちや好い談話だが、彼の阿姑樣、却々一筋繩で行くのぢやないからな、何だか返事が餘り樂で、お前は然う言ふけれど、俺には一寸受取れんな。從頭相手にして居ないのぢやないかね。」

歌子は押返して、

「いゝえ私も、最初は然うとばかり思つて居ましたが、後の御樣子を見ると全

く然うぢやないんですよ。止すと言出すと、最うぱツたり止してお了ひなすつて、全で、其方の事は見向きもなさらないの。可笑しいんですよ兄様、那樣事とは知らないで、先の遊仲間の方がね、いゝ氣で矢張お出なさるとね、びし〳〵斷つて歸してお了ひなさるんでしやう。皆吃驚して了つて、こそ〳〵歸つて行く樣子と言つたら本當に無いんですよ。今愆う言つて遣つたつて、跡で笑つてお話なさるのを聞くと、そりやァ隨分思切つた言樣をなすつたんですわ。阿姑樣然うなると何うして豪いのよ。」

「ふむ、面白い人だな。」

と種彥は團扇の手を止めて、

「全體見た處から只の人ぢやないやうだが。」

歌子は何時か取出した手巾で、脂に曇つた指環の脇を拭ひながら、

「なに一つにはね、私の言出した機も可かつたんですよ。そら今お談をした光子さんが、一方にや歸つて來て居ましやう。一方にや室賀が那麼風なんでしやう。阿姑樣でなくたつて、これぢや可けない位の氣は付きますわね。ま

して彼の方ですもの。私が言出す迄もなかつたのかも知れませんよ。」
「む丶、或は然うかも知れん。何方にしても然うなつてくれりや可いぢやないか。おや此頃は始終家かい。」
「はア。出るにも私や光子さんを伴れてお出なさるの。兄様私の方も、何だか急に家らしくなつて來ましたわ。」
と少しは手柄顏に言ふ。種彦は聞く身に首肯いて、
「む丶好い事だ。それは可いが。」と一寸調子をかへて、何は何うした。室賀君の方は？」
歌子は前に似ず、聞かれて少し行詰つたが、心ともなく笑顏を作つて、
「矢張よ。此頃は些少烈しいの。私にや隱して居るけれど、何うしたつて知れますわね。私も初めは好い心持がしませんでしたが、此頃ぢや最う慣れて來ましたわ。」
「で、お前にや別段冷淡な事もないのか。」
歌子は態とらしく、

「だつてそれを言つたつて仕樣が無いぢやありませんか。」
「無いと言つて拋つて置くのか。」
「あら然うぢやありませんよ。」
「むゝ、ぢや何ういふんだ。お前の考を些少聞かせるが可い。」
「おほゝゝ、だつて私未だ兄樣に何も御相談しやしないわ。」
「相談しないまでも安心させるが可いぢやないか。」
「ぢや可ござんすから默つて安心して居らつしやいよ。」
「馬鹿ッ。人の氣も知らんで。」
「おほゝゝ、あれ然うぢやないのですよ。」
と胸裏に期する處でもあるのか、濁りのない、華やかな聲で言つた。

（十五）思出

一

歌子は不圖立つた。

談話半ばに親友の、例の近衛の士官が見えたのでそれなり中座して種彦の立つて行つた跡、相手のなさに、昔馴染の八重を捉まへて、罪のない談話を少時。持つて來た土産物の包を解いて、想はぬ其身へまでの又の遺物に、驚き喜ぶ顔を心地よげに見たりなどして居たが、頓て客室の用で、八重にも亦行かれて了つたので、一人つい取殘されて居た後であつた。

歌子は今、昔住馴れた自分の居室へ入つて行つた。

室は不用なので何時か納戸のやうになつて、ごた〱と用簞笥やら支那鞄やら、使はぬ椅子やら卓子などを置いてある。琴や造花や蒔繪の手箱などの、目慣れた嬌めかしい俤は何處にも殘つて居ない。葭戸を越して直ぐ先の花壇の疾くに取拂はれたも、知つては居ながら今更に眼に付いて、何かは知らず總

てが、自分の身と離れて了つたやうな心が浮んだ。

あゝ最う此家は、自分の家ではないのだ。と思ふと、人には言はぬ胸裏の思の、流石に穂に現はれて、歌子の顔色は不意に曇り出した。見るともなしに、ぢッと見て居る中に、竊と眼に當てた手巾を離すと、忍んだ涙の痕が人知れず拭はれて居る。

途端に、

「歌子さん。」

と茶の室に近く、有らぬ聲が聞えた。續いて縁を近寄る足音。

歌子は急がはしく色を繕つて、聲のする方へ振向いた。

來たのは思寄らぬ謙吉であつた。

「あら。」

と驚いた顔を合せると、

「や思掛けずお目に掛りました。伯父樣生憎お留守で何でしたが、貴女にお目に掛れたのは幸でした。」

歌子は少からず慌てたが、急に笑顔に紛らして、

「まア何時入らつしたのか、些少も知らずに居りましたよ。其後は相變らず御繁昌で居らつしやるさうで、始終お噂に伺つて居ります。」

と一通りに只挨拶しながら、それとなく樣子に眼を付けた。謙吉は何も最う忘れて居るやうに、

「いやなに、未だ碌な仕事もしませんよ。併し身體は幸に達者になりましたから、思切つて一つ働いて見る心算で。」

「結構でございます事。あの、彼方に兄が居りますが……。」

と一寸逸らして見た。謙吉は首肯いて、

「はア、今八重に聞きました。お客が見えて居るさうですから、其中貴女にと思つて此方へ參りました。實は少しお談話もありますので。」

「は、私に？」

「はい、貴女に。」

「では此處でも何ですから、」

と歌子は取敢へず、嚢に兄と談話した一室へ導いたが、座は安からず、胸は轟いて、據無く其處へ打直つた。

二

謙吉は珍らしく今日は和服で居た。黑の羽織に結城の單衣、白の扱帶に黃金鎖を緩く、指環にダイヤモンドの光を見せて居た。薦められた白麻の座蒲團に、膝を折つて四角に座ると、ぢろりと歌子の氣詰りらしい樣子を見たが、急に眉を開いて、故意とも見えぬ碎けた調子で

「はゝゝ、いやお氣遣ひなさるな。最う貴女を苦しめるやうな事はしませんよ。それよりも私は貴女に禮を言ひたいと思つて居る。」

「え、禮とは何の？」

と歌子は未だ落付かぬ色。謙吉は尙打解けた物言ひで、

「いや、なにね、私の今日あるのは、と言ふと大層豪くなつたやうですが、兎も角も私にしては大出來で、これから先の發展も、何うか思ふやうになつて來た地步を得たのも、實は全く貴女のお蔭なので、貴女が無かつた日には、矢張御承知

の以前のやうな事で、未だぐづ〳〵して居たのでしやう。私は貴女の爲に勵まされたばかりで、賢うなつたのです。禮を言ふのに不思議は無いぢやありませんか。」

「でもそれを私が……。」

と言ふをも待たず、

「そりや變でしやう。取りやうに依つちや又、皮肉な言草のやうにも聞えましやうが、若然う聞えたら私の言ひやうが惡いのだ。私には最う那樣心持は少しも有りません。一時は併し、そりや門違といふ事は知つて居ても、非常に貴女を恨みましたよ。私は貴女の爲に、殆んど一生を無茶にされたやうにも思つた。實際其當時には、殺しても飽足らん位にまでに思詰めたもんでした。人間の淺猿しい根性で、報復といふ事よりしか考へなかつたのですが、詰りそれが素因ですな、可し、見返して遣らう、後悔さして遣らうといふ反撥心から、今のやうな方へ踏込んで來たのですが、や、一時とは言ひましたが實は、つい此近くまでも未だ忘れられんで、見ろ今にといふ氣は深く殘つて居たのですがね、

解らんもんですな、妙な事からがらりと氣が變つて、夢の覺めたやうな事になつたのです。」

と言つて少し改まつて、

「それに付いて、貴女に詫をせんければならんのは、兎も角も貴女に厭な思をさせた事で、貴女も嘸心持を惡くなさつたでしやうが、それは幾重にも貴女にお詫をしなければならん。あの當時は全く、貴女の御迷惑などを察するやうな餘地はなかつたのです。」

歌子は明らさまの挨拶に困つたが答へぬ譯には行かぬので、躊躇ひながら、

「何の、お詫などゝ、那樣お心遣には及びませんが、私も彼の事では相應に心配しましてね、兄にもつい相談までしたのですが……。」

「はア、いや其御好意も、實は全で無にして居たのですが。」

と言つて不意と、

「貴女は併し此變りやうを何うお思ひなさる。」

と微笑みながら顏を打見遣つた。

三

歌子は先刻からの謙吉の言葉で、自分は最う前のやうな的に立つて居ないと思ふと、流石に稍氣を安く、其儘涼しげな眼を返して、

「けれども何故那樣事をお聞きなさるの？」

と少し言葉を解して掛つた。謙吉は躊躇ふ色もなく、

「いや、今になつて不意に這麼事を言出すと、一方には貴女を馬鹿にしたやうでもあり、一方には私が如何にも輕卒な男になる。餘りに取止まらんやうに思はれるのも可いものでないから、貴女のお考次第で、少しお談話をしたいと思つて居るのです。」

歌子は人を好げに、

「いゝえ私が何で那樣事を思ひましやう。前から貴女を存じないで居たら、そりや何う思つたか知りませんけれど、それだけの譯がなくつて、心をお變へなさる貴方でない事は能く存じて居ります。貴方が然うなつて下されば、及ばずながら私の蔭の心配も無くなつたやうなもので、私も甚麼にか嬉しく思

ひましやう。而うして以前のやうな、氣の置けないお交際が出來れば何より
だと思ひますわ。」

と譯もなく氣を取るやうに言つた。謙吉はぢッと見て、
「貴女はそれぢや、何も最う水に流して下さるのですか。」
「はア、それは最う、私の心は前から同じ事なのですから。」

と容易く答へたが、顏を見合せて不意と、
「けれども何ですのね。貴方も能く〳〵お氣に入つたのと見えますのね。」

と俄かに微笑みながら言ふ。謙吉は怪訝らしく、
「え、何が？」
「あれ、私最う兄から聞きましたよ。」
「何を。」

歌子は輕く流して、
「お家に居らつしやる方の事ですよ。」
「や。」

と謙吉は行詰つたが、急に取直つて、

「それだ、恁ういふ結果になつて了ふと、然う思はれても仕様はないのですがそれにや種彦君も大分思違ひをして居るのです。ありあ全體恁ういふので……。」

「おほゝゝ、言譯？　貴方今更それは御卑怯ですわ。何うだつても最う可いぢやありませんか。」

「いや、然うは行きませんよ。」

「あれ、行くも行かないもありやしませんわ。那樣事を仰有れば私言つて上げる事があります。」

「むゝ、何ういふ事を。」

歌子は眼を擧げてひたと見たが、直に笑出して、

「おほゝゝ、何ですね那樣眞面目な顏をなすつて。」

「いや、それよりは今の事を。」

歌子は未だ笑ひながら、少し聲を低く

「はア、申しますよ。貴方、私が若し、以前貴方のお望みの通りになつても、今頃は屹度捨てゝお了ひなさるのね。

「えッ。」

と謙吉は思掛けず、聞くと急に色を變た。

四

歌子は冠せるやうに、態と華やかな聲で、

「おほゝゝ、でも然うでしやう。現に又、然うぢやありませんか。」

と笑つて顏を打目戍つた。謙吉は僅かに色を取直して、苦しさうに、

「はゝゝ、今度は貴女に虐められるやうになつたか。」

と逸して逃げに掛つた。歌子はそれには答へず、其儘眼を落して、

「でも不思議は有りませんよ。貴方ばかりぢやなく、男の大抵な方は皆然うなんでしやう。戀だの何のつて、人の言ふやうなものぢやありませんのねえ。私なんぞ馬鹿正直で、貴方の爲にも好い心配しましたけれど、今から思ふと、何の事だつたらう位にしかなりませんわ。」

と思ありげに言ふ。謙吉は不意と眼を擧げたが、頓て冷やかに、
「併し私が若し以前の通りでも、貴女も矢張以前の通りでしやうか。」
歌子は心付いて早口に、
「あれ御免なさいまし。私貴方の事を申したのぢやありませんの。これはね、私一人の愚痴なんですよ。種々な外の事が混交になつて了つたのですよ。」
「えツ、それぢや何か貴女に……？」
と謙吉は聞咎めた。歌子は空々しく、
「おほゝゝ、然うすると私の事になりますのね。まア厭な、何うしたら可いでしやう。浮りした事は言はれませんね。」
「解らんな。それぢや何ういふのです。」
「いゝえね、誰にも思はれて居たいといふ、自分勝手から大方何か言つたのでしやうよ。」
「むゝ、そして人は何うなつても構はんのですか。」
「おほゝゝ、ですから何うせ思ふ通りにはなりやしませんわ。自分一人の世

間ぢやありませんからね。」

「や、今日の貴方は餘程妙だ。何うも傍から意外な事ばかり聞く、」

「そりや貴方が又昔の謙さんになつて下すつたから。」

「それで。」

「それて可いのぢやありませんか。おほゝほゝ」

と打笑ふ。途端に客を歸して此處へ入つて來た種彦が、近寄りながら聲を掛けて、

「や、比企君、何時來たんだ。」

「おゝ」

と謙吉は急がはしく振返つて、急に調子を輕く、

「なに今留守に來て歌子さんに捉まつて居た處さ。」

「あれ、好い加減な事を。私が捉まつて居たのぢやありませんか。」

と歌子は直に聲を返した。種彦は双方を見較べながら、

「何だか知らんが無暗に笑つて居たぢやないか。」

いや今烟に捲かれて居たんだ。」

「まア、大袈裟な。知らないものは本當にしますよ

と兄に座を讓つて、歌子は外して次へ立つた。

(十六) 雲の色

一

裏の野杏に鵙が啼いて、庭の紅葉がそろ〳〵色を掛出して來た。光子が繻珍の煙草入を捨てゝ、此後何か獨立する道をと、眞面目に先を考へた結果、かねて多少の地のあつた畫の方へ入つてから、三月を早く袴腰の跡にした。歌子の縁から、學校以外に小宮山夫婦の紹介で、脇屋の門へ入つたのは此頃の事で、一つに寄せて、變つた獨身同士に、思寄らぬ師弟の縁を結ばせた。今日も半日を其塾に送つて、續いた秋日和の、澄切つた夕空の下を、稍急がはしげな、細かな靴音を立てゝ歸つて來たが、いつもの中の口から、居室へも行かず衝と奧へ通ると、出合頭に急がはしく手を支いて挨拶したお房に、

「嫂樣は？」

と口早に聞く。何かは知らず樣子の慌たゞしいのに、お房は思はず振仰いで顔を見詰めたまゝ、

「今お庭の方へ行らつしつたやうでございますが――」
「然う。」
と光子は譯も言はず、持つて居た包を投出すやうに下に置くと、袴も解かず身を返して、緣を小走りに下へ、有合ふ庭下駄を靴下に引掛けて、穿惡さうに曳鳴らしながら捜しに出た。
「あら。」
と彼方に並んだ、菊の花壇の脇に立つて、其足音に振返つた、歌子は秋にけざやかな、花に押されぬ花の色、瘦せても褪せぬ姿を返して、見ると其儘二足三足、迎へるやうに前へ出たが、嫣然して、
「まア、今お歸り？」
「はア今歸つたばかり。」
言ひ〳〵傍へ近寄つて、急いだ跡の、息を少し喘ませながら、
「庭へお出だと聞きましたからね、直に駈出して來ましたの。」
「おや、それぢや私に何か……。」

「はア、お談話がありますの。」

「然う。それぢや室へ行きましやう。」

と直に身を引向けた。光子は近くの紅葉の根方に寄せた腰掛の方を振返つて、

「あれ、其處が可いぢやありませんか。誰も聞いて居るものが無いから却つて。」

「え、何か内所のお談話？」

と歌子は言はれる儘に、頓て伴立つて、其處の腰掛に膝を並べると、待ちかねたやうに問を返して、

「まア、何なの貴女？」

「兄の事よ。」

歌子は聞くと同時にはッと色を動かしたが、急がはしく瞬きしながら、態と輕く、

「おや甚麼？」

光子は聲を受けて、

「いえ呆れた事なんですよ。私今日先生に聞きましたの。」

「あれ脇屋さんが那様事を知つてお出なの？」

と歌子は早口に聞く、光子は首肯いて直ぐ、

「はァ、今日のお談話で見ると、最う前から御存知なんですよ。今日ね、歸らうとしますとね、少し談話があるからと言つて、別に居室の方へ私をお呼びなすつたとお思ひなさいよ。」

と跡を話出さうとして一寸聲を切つた。

「はあ、それで。」

と歌子は身を押向けてひたと打目戍る。

二

日は早く西隣の屋の棟に落ちて、夕燒立つた雲の文色に、四邊は一時大篝の火影を受けたやうに急にぱッとした。枝を翳した紅葉を小楯に、色を集めて押並んだ二人の姿は繪のやうに見えたが、歌子は素より光子も談話に氣を取ら

れて額を近く差寄せた儘、脇へは眼を移さうともせず、光子は直に跡を繼いで、

「行つて見ると私一人なんでしやう。私何だらうと思つたの。先生の方でも然ういふ事なんだもんですから、何だか矢張言出し難いと見えて、初めは少し妙でしたがね、如彼いふ方ですから構はず其中に碎けて了つて、實は今恁ういふ事を聞いたから、とそれからのお談話なの。私兄は只一通りの道樂だと思て居たのに、本當に仕様がない、今飛んだ者に掛つて居るんですよ。」

歌子は胸を轟かしたが、流石色には見せず、さあらぬ態に、

「まア、何ですえ。」

と言ひながらもぢッと見る。光子は眼を返して、

「貴女素人なんですよ。」

「えッ、素人、まア。」

光子は直に言足して、

「なに素人と言つてもね、黑人よりも却つて惡んですよ。兄には何う言つてあるか知りませんけれどね、元は荒物屋か何かして居たんですが、母子て馴合

つて客を取出たのは、最う久しい前からの事で、近所の何とかいふ、那樣者ばかりの出入りする待合がありますがね、其處を根城のやうにして方々へ手を擴げて、一時は橫濱へ行つたり、神戶へ行つたりして外國人までを相手にして來た強か者なんですの。巾着お君と言つてね、其方の仲間ぢや知らない者はない位なの。見掛は蟲も殺さないやうな、罪のない白々しい樣子をして居て、それて甚い事をするもんだから、掛り合つたものはそれこそ災難なの。だつて何なんですもの。相手を見るのが上手だから餘り餘所へは知れないんですがね、客を取るのよりは強請をする方が商賣なんですもの。」

歌子は眼を瞬つて、

「まア、何うして又那樣者に……。」

光子は微笑みながら、折々不意と出る冷やかな調子で、

「矢張意地が汚ないんですよ。如彼でもない、恁うでもないッて、到頭那樣方へ喰込んで行つたのでしやう。男ッてものは本當に厭ね。這麼事を聞くに付けても私つく〴〵然う思ひますよ。」

歌子は併しそれ處ぢやない談話を追つて調子早に、

「そして今甚麼事になつて居ますの？」

とばかり急込んで聞く。光子は一寸眉を寄せて、

「それがね、少し面白くないんですよ。然う言つちや何ですけれど、兄も馬鹿ですわね。」

「え？」

「おほゝゝ、貴女の前で然う言つちや何でしたのね。」

「あら。まアそれよりは其のお談話の方は？」

と氣遣はしげに跡を促がした。

三

歌子の急込んだ様子を見ると、光子も押して又串戯も言はず、眞顔に返つて直に談話を戻した。

「いえ面白くないと言ふのはね、いつもの先の行方なら、少しまア深くなつた處で、いゝ加減な汐合を見て阿母さんが乘込んで來るのですがね……。」

と言つて、不圖心付いたやうに、

「まあ、貴女の前で這麼事を言ふのは餘りですのね。貴女、さぞ聞きづらいでしやう。」

と顔を見る。歌子は氣も坐ろに、

「いゝえ、それよりも私室賀の事が心配になりますの。そして、其阿母さんが乘込んで來て何うしますの？」

「なにそりや手切の掛合に來るのですよ。其又阿母さんといふのがね、只で行けるお婆さんぢやないのですからね、是迄其手に掛つて頰を焼いた人が幾個あるか知れやしないのですよ。でもね、未だそれだけの事なら、そりや何うせ外聞の可い事はありやしませんけれど、お金で濟む事ですから始末も面倒ぢやありませんがね、何うも今度はそればかりぢやなさゝうなんですよ。飛んだ見込まれたんですね、先ぢや此の家へ入込まうとして居るさうですよ。兄とは最うすッかり談話が出來て居るのだと言ひますよ、本當に、呆れるぢやありませんか。」

「…………………」

光子は更に言葉を繼いで、

「先生もそれを言つてね、何とか今の中にして了はなければなるまい、私が室賀君を最少し能く知つて居れば、直接に言つても可いけれど、と貴女の爲に心配してお出なんですよ。あの方那麼風で大變又思遣があるんですね。」

言ひながら衝と寄つて、少し躊躇ひながら、

「貴女、それにしても私、先の何の素性を餘り能く知過ぎて居るとお思ひでしやう。今のはね、殘らず先生のお談話ぢやないのですよ。私綽名を聞いた時吃驚しましたの。其女なら實は知つて居るのですよ。

「えッ。」

と歌子も流石に驚いた。光子も一時妙な顔をしたが、言つて了つた跡は最う氣を据たやうに、

「いつかもお談話しましたらう、一時は那麼暴れた生活方をしましたから、種種な人の中も潜つて來ましたの。今の女の事は、ほんの概略だけを言つたの

ですけれど、未だ〱詳しい内所の事も能く知つて居ます、災も三年とか言ひますがね、今度の事には、飛んだそれが何かのお役に立つかと思ひますよ。」

「そして室賀は甚麼で居るんでしやう。」

歌子は不意と言つた。調子が餘り氣遣はしげなのに、光子は思はず眼を返したが、

「貴女那樣にお氣遣ひなさる事はありませんよ。それには阿母樣もお出なさるぢやありませんか。先方の儘になんぞ爲せて置く阿母樣ぢやありやしませんよ。」

「はア、そりや然うですけれど。」

と跡を言殘してぢッと考込んで居る。光子は急に四邊を見て、

「おや、最う暗くなつて來ましたね。まア彼方へ行つて又能く御相談しましやうよ。」

と腰掛を離れて立つた。途端に母屋の方で手が鳴つたので、と見ると、庭に臨んだ緣に立て、母の松江が此方を招いて居る。

（十七）松江

一

室には最う電燈が點いて居た、障子の外の柱を横に二尺ばかり、未だ暮切らぬ縁先に、松江は其押出しの好い、歳より十も若い姿を、眞向きに二人を待掛けて居たが、

「お前達は何して居たの。先刻から那麼に呼んだのに。」

「あら、然うでしたの。まア。只つた今氣が付いたばかりよ。二人揃つて何を浮りして居たのでしやう。」

と前に立つた光子が先に、見上げて笑ひながら、言ひ〳〵縁を上つて來た。歌子も流石姑の手前を、心ならぬ笑顔を見せて、

「お歸り遊ばせ。つい談話に氣を取られて居たもんですから何も知らないで……。」

と言譯らしく續いて上つた。松江は目慧く、様子ありげな歌子の顔色を見咎

めて、其儘二人を見較べて居たが、

「おや何か變つた談話でもあつたの？」

とばかり、又眼を止めた。光子は輕く、

「はア少しばかり。」

「何。何だえ？」

「まア彼方へ行つて話しましやうよ。此處で立話も何ですから。」

と誘つて中へ入りかけて、

「お呼びなすつたのは何か御用でしたの？」

「なに今ね、二人にお土産を持つて來たから。」

「おやそれぢや最つと早く來るんでしたね。ねえ嫂樣。」

と歌子の沈んだ態を笑止がつて、故意と元氣らしく言つた。歌子は無據く、

「おほゝゝ、然うでしたのね。」

松江は寄らず觸らず、

「まア、光子の相變らず現金な事。」

と笑つて一處に中へ入つたが、奥の何時もの室に頓て座を取ると、氣に掛けて又歌子を見ながら、
「まア何うしたの、本當に。何だか色も好くないが……。」
光子は脇から引取つて、
「なに兄樣の事ですよ。私脇で聞いて來たもんですからね、今嫂樣に話して居た處なの。」
「え、金彌の……。」
と一寸眼を動かしたが、振返つて早口に、
「光子、お前又詰らない餘計な事を言つて、歌子を心配さしたのぢやないか。」
歌子は急がはしく、
「いゝえ、那樣事は些少も有りません。光子さんは種々と深切に言つて下すつたのですよ。私心配よりも皆樣に面目ないのが先で……。」
と尚打沈む。松江は調子をかへて、
「全體まア何ういふ談話なの？」

「いゝえ係うなんですよ。」

と光子は改めて、今日聞いて來た事から、自分の知つて居る事を、前より詳しく打明けて話した。松江は一通り始終を聞くと。急に氣色を直して、いつもの活々とした眼色に、

「おほゝゝゝ。それだけの事かい。まア、お前達はそれを何う思つたの?」

とばかり交る〳〵二人を打目戍つた。

二

それなり言冠せるやうに、大まかな何時もの調子で、

「詰らないぢやないか。高が物置で鼠が騷いだ位の事を、座敷で何を言つて居るんだね。鼠取は緣日にだつて賣つて居るよ。打捨つてお置き。なに、いくら荒びたつて、猫でも始末が付くのぢやないか。那樣氣の小さな事ぢや仕樣がない。おほゝゝゝ。私や又何かと思つたよ。」

光子は聞敢へず身を前に、

「あれ阿母樣、鼠ぢやありませんよ。」

と氣を苛つ、松江は見て微笑みながら、

「ぢや何だえ。」

と輕く抑へるやうに言ふ。光子は尚急上げた調子で、

「阿母樣盜賊ですよ。性質の惡い盜賊ですよ。物置だつて油斷をして居ると、それこそ火を放けますよ。」

「おほゝゝ、まア、那樣事まで心配して居るのかえ。なにお前盜賊だからと言つて、追散らして了へばそれ迄ぢやないか、誰が默つて火なんぞ放けさせるものかね。」

「だつて肝心の兄樣が、傍から鉋屑を宛がつて居るですもの。」

「おほゝゝ、お前も種々な事を言ふね。そしたら金彌を叱るばかりさ。」

と事もなげに言つて、頓て歌子に、

「歌子、お前も心持を惡くおしだらうけれど、何うせ一時の事だから些少の間まア我慢しておくれ。私も居る事だから惡いやうにはしないからね。」

と流石物優しく言ふ。歌子は俯向いて居た顔を少し上に、伏目ながら、

「はい、有難うございます。いゝえ、これも、私の至らないからで、貴女にも光子さんにも、本當に申譯がありません。室賀の過失は矢張私の過失で、私が何處までも罪を着なければならないのでございます。」

光子は氣短かの脇から聞いて居られないやうに、

「あれ、嫂樣、貴女に何の罪がありましやう。兄が良くないのですよ。貴女、那樣氣で居らつしやると、兄が尚高を括つて仕樣がありやしませんわ。貴女は何處迄も兄に謝罪らせなけりやなりませんよ。本當に、癖になりますわ。私男の我儘な仕打を見ると、人事ぢやなく腹が立て仕樣が無い事。全く。それだけは兄とは思ひませんわ。貴女が仰有らなけりや、私貴女になり代つて存分に言つて上げますわ。」

と勢込んで言放つ。歌子は急がはしく、

「あれ私の爲に那樣……。」

光子は聞入れぬ態に、

「まア。何ですね。貴女は私に、那樣御遠慮をなさる筈ぢやない譯ですのに。

貴女それぢやお約束が違ひますよ。」

「え、約束？」

「あら最うお忘れなすつたの？　貴女と私とは本當の姉妹になつた筈ぢやありませんか。」

松江は其中を興ありげに、

「まア、お前達は大層仲が好いのね。私那樣だとは知らなかつたよ。道理で内が面白く行くと思つた。」

と言ひながら不意と、

「そして何は、金彌は今日歸つて來ると言つて出たかえ。」

とばかり、歌子の方へ振返つた。

三

「はい。歸るとは言つて行らつしやいましたが……。」

と歌子は跡を言淀む　松江は首肯いて其儘、

「然うかえ。それぢや歸つたら隱居所へ來て貰つて、久し振で昔話でもして

見やうよ。彼も懷育ちて、全で苦勞は知らずに居るのだから、いゝ氣になつて飛廻つて居るけれど、未だ〳〵那樣暢氣な眞似をして居られる時ぢやない。會社の方も、武田さんが確かりして居てくれるから、今の中は未だ可いやうなもんの、何時までそれで可い譯のものぢやない。裸で飛出して居る人の事を考へたら、世間の恐ろしいのも解るだらう。付ける時に確かりした尾鰭を付けて置いてくれなければ、いざとなつて、腕の要る仕事に掛つた時に狼狽ついて了はなけりやならない。私の前から考へて居る、洋行の事も序に言出して見やう。なに、金彌も氣の付かない事はあるまい。付かなけりや付かないで又何うともするわね。心配おしでないよ。何のお前、地道に取上げて、兎や角う言ふ程の事ぢやありやしない。光子は先を大變な者のやうにお言ひだけれど、何にしたつて私達が、向ふへ廻して相手にするには餘り人間が安過ぎるぢやないかね。可いから最つと威嚴を取つてお出よ。私が承知して居りや決して惡いやうにはしないからね。」

「はい。」

と歌子は言葉少なに頭を下げて感謝の色を見せたが、流石に言はれぬ胸の中を、綾に疊んで火影に眼を背けて居た。光子は未だ腑に落ちぬ姿で、傍から注意するやうに、

「そりや阿母樣から御覽なされば然うでしやうけれど、先も全く一通りぢやないのですから、餘り見蔑つてお出なさると……。」

松江は皆まで聞かず、

「おほゝゝゝ、又それを言出すのかえ。先刻も最う言つたぢやないか。お前でもない。那樣に恐けりや藏へでも隱れてお出な。」

「あら私、何も恐がつて言ふのぢやありませんわ。」

「それぢや何を氣を揉んで居るのだえ。」

「だつて私、嫂樣がお可哀相ですもの。」

「だから私が承知して居ると言つたぢやないか。そりや決着を見ない中はね、いくらか氣掛りの事も有るだらうけれど、こればかりの事に何も騷ぐ事は些少も有りやしない。串戲ぢやない。お前達が那樣で居るもんだから、折角

お前達にと思つて購つて來たお土産の出端が無くなつて了つたぢやないか。」と打笑ふ。言はれて光子も思出し顏に、

「おゝ、然うでしたね。」

「何だね、那樣氣のない樣子ぢや、出す張合がありやしないよ。おほゝゝゝ。」

途端に刻足で、何か用ありげに人の近寄る足音がしたが、隔ての襖の開いたのに振返ると、先代からの執事役の、藥罐で通つた安井老人、押物の額の黑子いつもの猫脊に古羽織、折目ばかり正しげなのを目に立たせて、怪訝な顏で敷居越しに、

「はッ、只今淸藏が戻つて參りまして、旦那樣から私へ御書面でござりましたが。」

「おゝ、何と言つて?」

と松江は膝を押向けた。老人は仔細らしく、

「旦那樣には何か急御用で、お出先から福島の方へお發ちになりましたさうで。」

「えッ。」

と座の三人は思はず顔を見合せた。

四

流石に松江も眉を顰めたが、押返して老人に、

「そして何の用向とも別に言つてないのかえ。」

「はッ、別に詳しい事はお認めになりませんで、只二三のお方と、或お目論見の爲とござりました。」

と何時もの鹿爪らしく言つて、憚かるやうな上目遣ひに、

「で、お奥へは何のお談話も？」

と訝かる氣勢に問返した。松江は場を繕ふばかりに、

「いゝえ、那樣談話もないぢやなかつたがね、」と濁して其儘「そして其外に何か言つて遣した事はないのかえ。」

「は、外に會社の方の事が一寸書添へてござりました。その方の萬事は最う武田樣にお頼置きになりましたさうでござります。」

松江はちらと險しい眼遣ひを見せたが、それなり落付いて、

「然う。それだけかえ。」

老人は急に心付いたやうに、

「おゝ、未だ申殘して居りました。日數は彼此、一月ばかりのお見込みとござりましたが。」

「えゝ、一月？」

と光子は思はず聲に出したが、何も知らぬ老人の所思をかねたか、跡は言はず只眼を輝かした。歌子は更に胸を騷がしたが、ぢッと押へて、努めて色を隱して居た。松江はそれと見ると、跡を切上げるやうに直ぐ、

「解りました。御苦勞だつたね。それぢや何れ詳しい手紙が此方へ來るだらうから、お前には何分留守中の事を賴みます。」

と何氣なく、一先づ老人を退らせた。老人も前後の樣子に、何か譯のある事とは思つたが、松江を初め歌子も光子も、いづれも口に出すのを好まぬ態を見ると、押して聞くにも躊躇はれて、心を殘して軈て引退つた。跡に三人は暫く言

葉もなかつたが、襖の彼方に老人の足音の消えると同時に光子は眞先に口を開いた。

「何うしたのでしやう。阿母樣、變だとはお思ひなさらないの？」

「然うさ。少し變だねえ。」

「あれ、少し處ぢやありませんよ。内へ默りで、突然に那樣一月も掛る旅行をするといふ事があるもんですか。全體内を何と思つて居るんでしやう。第一安井の方へ那樣事を言つて遣して。此方へは何とも言はないなんて、那樣解らない事が有るもんですか。跡の事は武田さんにも言置いたと言へば、前から其事は知れて居たんですよ。私邪推かも知れませんけれど、屹度阿母樣や嫂樣に、隱して行かなけりやならない事があつたんだと思ひますわ。」

と急上げるやうに言ふ。松江は輕く押へて、

「まァお待ち。なに樣子は直に知れるよ。此處で騷いだ處が何にもなるもんぢやない。樣子次第で何うにもしやうぢやないか。何も然う慌てる事はないわね。」

「でも打捨つて置いちや……。」
と言掛けるのを又押へるやうに、
「なに打捨つて置きはしない。打捨つて置いちや歌子が堪るまいぢやないかね。」
と笑つて脇の歌子を見返つた。

(十八) 敵手

一

良人の心を疑つたのは、今に始まつた事ではないか、夫婦の間から言つて、世間の例から言つて、勿論好いとは思つて居ないが、今の世にそれほどの事を、大目に見て置く雅量を自分も持たねばならぬと思つた。女心の、嫉妬に燃える時も、仂ない那様下等な者に、とばかり幾度か思返して、静かに時を待つて居たが、今度のやうな出し拔き方をしやうと迄は思つて居なかつたので、今更ながら金彌の無考なのに驚きもし呆れもした。續いて松江の手から聞いた處によると、表面何か、鑛山に關係した、新事業の計畫の爲に出た事になつて居るが、歌子は其間の裏面の消息を逸早く解いて居た。松江は初めから、胸に何か成算があるやうで、歌子を只力付けるばかり、別に騒ぐ色も見せずに居たが、當の歌子の身になつて、それで濟して居る譯には行かぬ。光子は其中に一人、自分の事のやうに氣を揉んで、今日も出掛けに、待つて居らしつやいよ、私、今日は思切つ

て一つ探つて見る先がありますから、と言置いてそこ〳〵に出て行つたが、待設けた時間より早く、車を飛して歸つて來ると、未だ血の氣の立つた顏を其儘、歌子の室へ駈込むやうに來て、いきなり、

「解つてよ。 解つてよ嫂樣。」

と未だ座にも着かぬ先から言ふ。 歌子は急がはしく眼を走らせたが、

「まア大層早く歸つて入らしつた事。 解つたツて何？」

とそれとは悟りながら然りげなく聞く。 光子は聞敢へず急込んで、

「あれ貴女、私出る時に然う言つたぢやありませんか。」

「まア貴女、それぢや彼の事ばかりで行らしつたの？」

「厭よ。 外に何で行きましやう。」

「あら何うしましやうね。 私の爲ばかりに那樣……。」

光子は急に押止めて、

「まア那樣事は何うでも可うござんすよ。 それよりか貴女何よ。 兄ねえ。矢張私の察した通りよ。 鑛山なんて嘘の皮ですわ。 そりや少しは言譯位の

形はあるかも知れませんけれど、有つたつて眞箇の附けたりに違ひはありませんわ。矢張伴れて行つて居るんですもの。」

「えッ。まア。」

それとは思ひながらも、聞けば流石に又氣色ばむ。光子は更に斂色立つて、

「貴女、油斷はならない事よ。私すッかり聞いて來ましたわ。」

「まア、何處？」

「先の何を、能く知つて居る所へ打付つて見ましたの。眞面目な者ぢや勿論有りませんよ。なに、此方の素性を知つて居ないのを幸ひにね、好い加減に胡魔化して行つて見ましたの。だから御覽なさいな、いつも逹つて這麼扮裝をして居るぢやありませんか。いゝえ私も今になつて、那樣處へ足を入れやうとは思つて居ませんでしたけれどね、貴女の爲だと思つて、構はないで行つて來ましたの。」

「まア、濟みません事、本當に。貴女には何うしてお禮をしたら可いでしやうね。」

と僞りならず、しみ〲と言ふ。

二

「あれ、お聞きなさいよ、まア。」

と光子は口早に遮つて、持つて來た談話を先へ、

「貴女、恁ふなの。そら、お談話したお君といふのね。此頃ぢや最う何ですとさ。長い間方々から捲上げたお金でね、其處等の地面だの家作だのッてものを買込んでね、それから收得つて來る物で、相應の事が出來るやうになつたもんですから、一旦泥足を洗つて了つて、以前の事は口を拭いて、今度は身を固める方へ掛つて來たんですとさ。全體見掛に寄らない確かり者でね、髓が緊つて居る方ですから、損得には眼が早くつてね、轉んでも只は起きない性質なんですから、浮氣よりは何時だつてお金の方が先だつたんですが、身の廻りが自由になつて來ると、那麼女の事ですから屹度考へたんでしやう。いつまで是で通せるもんぢやなし、些少でも關れて來りや、引掛かる相手は無くなつて了ふ。今の中に何とかしなくつちやと言つたやうな事なんでしやうがね、それ

には阿母の確かお牧とか言ひましたよ、前から名代でね、慾に掛けちや大變な人が附いて居るし、自分も其方ぢや引けを取らないんですから、地道に行つて分相應の相手を見付けたんぢや、蟲が納まらないんでしやう。誰かこれならといふのを搜して居る矢先へ丁ど打付たのが兄なんですとさ。」

「まア。」

光子は更に言葉を繼いで、

「初めて逢つたのは何でも芝居からですとさ。隣りの升か何かに來て居たのが、兄の伴が知つて居たのから口が解れて、それから事が初まつたのだと言ひますがね、なに馴染になる段にや、先は那樣事にや最う慣切つて居るんですし、兄は又彼の通りの物好なんですから、談話の運ぶのは造作ありやしません。先で目星を付けた日にや尚譯はありませんからね。歸りに一處になつて、皆で何處かへ寄つたのが緣で、何でも兄は、好いやうに手玉に取られたやうなんですよ、いゝえね、一體人を綾なす事は其中にも巧いんで、先を了込んで氣を取る骨子が、一寸外には無いんですとさ。兄だつてナニ、貴女だから構はず言ひ

ますけれどね、那樣事に全々初心の人ぢやないのですけれど、何處を何う持つて行つたか、巧く煽つて何時の間にか到頭引付けて了つたんですね。兄も薄薄、先の來歷を承知しながら掛けられたんですから尚更ぢやァありませんか。けれども今度は、先でも以前のやうな手口にはしない心算ですから、すッかり堅氣になつた風を見せて、却々言ふ事を聞かないで、傍から又逃がさないやうに、種々にしちや焦燥したんですとさ。一つには其で猶意地にもなつたんでしやう。今度伴れて行つたのもそれが因なんで、此間發つて行く時まで、二人の間には未だ何の關係も無かつたんだと言ひますよ。只で那樣勿體ぶつた事なんぞするもんですか。私何うしても譯がなくつちやならないと思ひますわ。」

とばかり聲を切つて、歌子を打目戍つた。

三

歌子は隔てのない光子の前にも、妙な顏を見られる心地で、眼を返すにも氣が差したが、

「貴女はそれで何うお考へなさるの？」

とばかり紛らすやうに不意と言ふ。光子は直に受けて、

「私何分にも兄が心元ないと思ひますわ。全體氣紛れの癖に、思付くとそればかりに夢中になつて了ふ事ですからねえ。先が先だけに、甚麼離れ業をするか知れませんもの。今度のやうに何も抛出して出るのからして隨分ぢァありませんか。」

「でもまさか、自分も何も忘れて了ふやうな事もないだらうと思ひますが：：。」

「解りませんよ。それでなくつても男つてものは、」と急に冷やかに、「根が性惡な、本當に愛想の盡きるやうな意地汚なばかりなんですからねえ。兄だつて其數には洩れやしませんわ。」

「まア酷い事を。貴女は御自分だけで那樣事を仰有るけれど……。」

光子はちらと眉に幽かな影を見せたが、顏を見て微笑みながら、

「はア、貴女は然うぢやありませんのね、ですから私も其氣で貴女に盡さうと

思つて居ますの。なに私なら這麼時に、容赦も何もしやしません。胸のすくやうに、思切つて男を酷い目に遇はせて、それつきり二度とは見向きもしやしませんけれど、貴女には那樣事は出來やしませんわね。」

「だつて私は室賀の妻ですもの。私は今、良人を何うして救はうと思ふより外には何もありませんわ。」

と流石に稍〻眞顏に言ふ。光子は首肯いて、

「はアそりや私だつて知つて居ますよ。ですから私、事に依つたら行つて來やうと思つて居ますの。」

「え、何處へ？」

「兄の行つて居る先へ。」

「あら、解つたのそれも？」

「はア、今東山の溫泉へ行つて居るんですよ。些少お轉婆ですけれど私、行けば行つたゞけの事は屹度して來ますわ。」

歌子は躊躇ひ顏に、稍〻口を重く、

「でも貴女が行らつしやるといふのは穏かぢやありませんわ。それに御自分も閑暇のない身體で……。」

光子は聞敢へず打消すばかりに、

「あれ構やしませんよ那樣事は。私も室賀の家には隨分好い迷惑を掛けましたから、偶には家の爲に働きたいと思ひますわ。なに私だつて見越した事がなくつて、わざ〳〵行かうとは言やしませんわ。」

言ふ時次の室から小間使のお秋が、襖を開けて敷居越に、

「奥樣、御隱居樣が一寸と仰有います。」

歌子は振返りさま、

「おや、お客樣は最うお歸になつたの」

「はい只今。」

光子は聞きさして脇から、

「まア丁ど可い。私今阿母樣の方へ行かうと思つて居ましたの。嫂樣、それぢや御一所に。」

「はア、それぢや。」

と談話を切つて、二人同時に立つた。

(十九) 昔

一

通ひの廊下を三間餘り、母屋の丁ど乾になつて、平家作りの隱居所が、木深い裏庭の中に手の掛つた普請の跡を見せて居る。曇つた空に、苔附いた前の庭はしツとりとして、燈籠際の、銀杏の諸葉を黄に返したのが、近くの常磐樹を拔いて鮮やかに目に立つた。南の八疊に、松江は今客を歸した跡、呼びに遣つた歌子を靜かに待掛けて居たが、光子の一所に入つて來たのを見ると、例の落付きながらも、一寸思掛けない顏で、

「おやお前もお出かえ。」

とそれなり笑つて座を開く、光子は歌子を先に立てゝ、母に近く向合つて座を取ると、

「私今兄樣の事で一寸行つて來ましたの。それに付いて阿母樣に少しお願ひがあるのよ。」

「え、何ういふ？」
と松江は何時もの鷹揚に聞く。光子は取敢へず今歌子に言つた事を話して、進んで尚當つて見やうと思ふ自分の考をも言つて、兎も角もと母の許容を乞うた。松江は一通り聞くだけを聞いたが、色も移さず、其儘身を寛がせて、
「おや、然うかえ。私も今、金彌の其事を歌子に一寸言はうと思つて呼びに遣つたの。でもお前の方が餘ッ程詳しいのね。金彌も今度は頭が上るまいよ。這麼手數を掛けさせるやうな事をするなんて、目先の見えないにも程があつたもんぢやないか。」
「あれ阿母様は何處からお聞きなすつたの？」
と光子は驚き顔に言ふ。松江は微笑みながら、
「おほゝゝ、そりやぢッとして居ても働いて居るもの。なに最う粗碎は付けて了つたから、わざ〳〵お前が行くには及ばない。金彌は多分歸つて來るだらうよ。」
と二人の顔を見る。歌子も光子も、同時に眼を瞬つて、

「えッ本當に？」
「まア、何うして？」
とばかり齊しく、問寄せるやうに乘出した。松江は事もなげに、
「なに些少驚かして遣つたからさ。金彌も餘り早く知れたのに驚いたらうし、それよりも私が急に手を付けたのに驚いたに違ひないよ。少し長い電報でね、見れば些少應へるやうな事を言つて遣つたの。此地に居る阿母のお牧とか言ふ、成程噂の通りの大變者だねけれども、其方も些少先潜りだつたけれど、手を廻して最う談話を付けて了つたの。だから何方へ轉んだつて驚きはしないよ。」
「まア何時の間に那樣……。」
と歌子は更に眼を瞠る。松江は莞爾々々として、
「おほゝゝ、不思議に見えるかえ。今來たお客も實はそれで來たのだよ。光子は知つて居るだらうが、あれは根岸の地面の差配をして居る村井の兄貴でね、仕樣のない道樂者なんだが、這麼時には好い道具さ。今度なんぞも大層役

に立つてくれたよ。」

と言つて重ねて、

「私も隱居にしちや些少出過ぎたけれど、皆が若いもんだから仕方がない。歌子や、お前は併し今度の事に付いちや甚麼氣持で居るえ。」

と眼を優しく靜かに問掛けた。

二

歌子は恁ういふ母の前で、何も隱す事もないと思つたが、流石に衣着せぬ程にも言はれず、色を作つて、

「飛んだ御心配を掛けて本當に濟みません。今度の事ぢや、有體に言へばそりや好い氣持はしませんけれど、それでも私には良人ですものを。私は只、室賀が自分の身をも思はないで、這麼事をしてくれたのを共々恥かしい事だと思つて居ます。」

光子は聞きも敢へず例の量高に、

「あれ、嫂様は那樣溫柔しい事ばかり言つて居るから仕樣がありやしません

わ。いゝ機ですよ貴女、此處で充分に油を取つて、二度と這麼事のないやうにして了はなくつちや、貴女の氣が安まる時はないぢやありませんか。手緩い事で彼のおグレさんが、本當に何とも思ふもんですか。私貴女が最つと眞氣になつて腹を立つてくれゝば可いと思つて居ますわ。」

「おほゝゝ、だつて室賀だつて、全で何も承知して居ない人ぢやありませんもの。」

「だから尚惡うござんすわ。私歯痒くつて仕樣がありませんわ。優しいばかりを能にして居たのは貴女昔の人の事よ。」

歌子は笑つて避けるやうに、

「あれ貴女は、那樣人を嗾けるやうな……。」

光子は皆まで聞かず、

「でもそれでなければ、兄には通じませんもの。」

「私然うは思ひませんわ。」

「あれ、それだから可けないんですよ。」

松江は取支へ顔に、跡を遮つて其儘、

「まアお前のやうに言つたつて何うなるものかね。無暗に荒立てた處が詰りは、双方で傷を付けるのが落だらうぢやないか。褒めた事ぢやありやしないよ。外に仕方はいくらでもあるわね。歌子が金彌を立てゝくれるのは、私は何處までも嬉しいと思つて居る。今のやうに言つてくれると、金彌が這麼不始末をしてくれたに付いては、私もお前に謝罪らなければならない。這麼時のお前の立場は、私も本當に察して居ますよ。まア〳〵先が長いのだから、これで地が固まれば、と思つて、夫婦といふのに免じて貰はうよ。いえね、世間は種々でね、手近い談話が私なんぞにも、一度は這麼事があつたよ。」

と穏やかな笑顔を見せて、頓て調子をかへて、

「光子も此事は未だ知らないがね、私が花嫁の、おほゝゝ、自分を花嫁といふのも可笑しいがね、兎も角嫁付いて來た當座といふものは、それは最う談話にもならないほど、光子のお父様の、彼の忠雄には酷く嫌はれたものでね、彼是一年近くの間、全で傍へも寄付けずに居たのだつたよ。私は知らなかつたのだけ

れど、亡くなつた忠雄は初めから、飽くまで不承知の縁組だつたのを、双方の兩親が無理に押付けて了つたのだね。嫌はれるのは當前で何も知らずに輿入をした私こそ、實を言へば好い面の皮だつたのだわね。今こそ這麼横着者になつて了つたけれど、其時分は未だ全くの生娘だつたんだからね。」

と跡を繼がうとして一寸言葉を切つた。

三

「忘れもしない婚禮の晩。」

と松江は次いで言出すと共に、眼色に見せて、流石に當時の思出を深く、

「私は未だ十七だつたよ。今時の子達と違つて、本當の箱入だつたんだからね、一口に言ふ世間見ずの、其まアお手本のやうなものだつたんだね。那樣羽目に立たせるには、餘り荷が勝過ぎて、自分ながら可哀相のやうに未だ子供だつたよ。其日さ、式は一通り無事に濟んで、これで媒人の肩もいよ〳〵拔けるといふ時になつてね、肝心のお聟樣が、何處へ行つたか見えなくなつて了つたぢやないか。

今も言つたやうに私は何にも知らなかつたし、それよりもまア耻かしいのが一杯で全で上氣して了つて居たんだから、何だか家で取込んで居たのも上の空で、恁ういふものかと一人で思つて居たんだがね、忠雄は到頭翌る日になるまで姿を見せなかつたんだよ。酷いぢやないか、跡で聞くと、忠雄は其晩態と面當らしく私を置去りにして遊蕩に行つて了つたんだとさ。夫婦の不和といふ事も、隨分餘所にない談話ぢやないけれど、私のやうに初めから、那樣皮肉な眞似をされたものは、餘り無いだらうと思ふよ。」

けれども忠雄の方ぢや、もとが無理押付にされたのを根に持つて何處までも意地になつて居るのだから、私にや尚の事辛く當つて來る。私はそれからといふもの全で泣かされ通して、一日樂な思をした事もない。怨めしい、情けない日を送つて來た。丁ど其間が一年近く。今で思つても、能くまア辛抱が出來たと思つて居るよ。自分でも堪へ切れず、逃げて歸らうとも思つたし、生家でも仕舞にや見かねてね、歸つて來いと幾度も言て來たけれど、一旦死場所と思つて來たものをと思返しちやぢッと堪へて、忠雄の氣の折れるのを待つて

居た。

兩方まァ根競べだね。

其時分の私にしちや能く出來たんだが、それでも氣を盡した甲斐があつて、其中にひよッくりと、まァ思出すと夢のやうだがね丁ど冬になり口の、恐ろしい雨風の晩だつたよ。

いゝ加減最う更けたけれど、忠雄は何日の通り返つて來ない。平素でさへ泊勝ちなんだから、這麼甚い嵐の晩に歸つて來やうとは思やしないわね。外の者も其心算で、其中に皆寢て了つたけれど、私は何時も忠雄の歸るまでは寢なかつたのだから、よしや歸つて來ない迄もと思つて、帶も解かずに一人起きて待つて居た。

嵐は其中に尚甚くなつて、更けるに伴れて人通りも無くなつて了ふ。一時二時となると、若しと思ふ氣も盡きて、兎ても歸りはしないと最う諦めて居た。

それでも私は、これも蔭の心盡しだと思つて、未だ起きて待つて居た。」

四

「炭を加直してから、一旦起きた火が又灰になつて、湯の沸騰も何時か落ちて來る。外はざんざ降、雨戸へ打付かつて來る風の音は凄いやうで、ぢッと聞いて居ると、何だか最う言はれない心持になる。平素の辛い事も、一所に恁う搦まつて來てね、よしや歸つて來たからと言つて、待つて居る張合も何もないのにと、重い沈んだ氣になつて了つて居るとね、不意に表を叩かれたんだよ。はッと思つて、直に駈出して出迎へに行つたの。忠雄もよもや這麼晩に、私が起きて待つて居やうとは思つて居なかつたやうで、ぢろりと私の、未だ晝のままの扮裝で居るのを見たつけが、私は其時分には、忠雄にや全で腫物に觸つて居るやうな氣で居たんだから、只はら／＼として小さくなつて居るとね、奥へ入つて、何だか突如な、それでも何日もとは違つた調子で、「お前起きて居たのか。」と不意に聞かれたんだね。

「はい。お歸りがございませんでしたから。」と返事をするとね、「這麼晩に俺が歸つて來ると思つて居たのかい。」と又聞くのさ。

私は思つた通りを、「それでも女の務めでございますものを。」と言ふとね、「ふー

む。」と言つたッきり、急に默り込んで、腕を組んで俯向いて了つたぢやないか。平素と樣子が違ふから、内々妙に思つて居ると、不意に立つて來て、私の手を捉まへて、「俺が惡かつた。今夜の一事で萬事が解る。怨みこそあれ、優しい聲一つ掛けなかつた俺に、然うまで爲てくれやうとは思はなかつた。嘸辛い事だつたらう。免してくれ。」と初めてお言ひだつた。盃をしてから此方、二人近く寄つたのは此時が初めてゞ、私は然う言はれた時は嬉しいやら悲しいやらで、本當に物も何も言はれなかつた。此一年の種々な事が一時に込上げて來て、何だか夢中で、いきなり忠雄の膝へ縋付くと、わッと言つて顏を押付けて泣いて了つた。

それから後といふものは、忠雄も全で人が違つたやうになつてくれたし、私も漸つとの事、一年振で初めて嫁に來たやうな心持になつた。生家でも跡つて來なかつたのを喜んでくれゝば、忠雄の兩親も初めて安心して、前の事があつたゞけに尚更大事にしてくれた。歌子や、私にも恁ういふ事があつたのだよ。」と談話を終つて、それとなくぢッと見る。較べて諭されて居るやうに、歌子は

言ふまでもなく松江の心を解いた。聲を受けて、其儘振仰ぐと、

「まア、那樣事がお有りでしたの。本當に其一年は甚麼で居らしつたでしやう。私なんぞの事は、何でもありはしませんのね。」

「いえさ。それとは事が違ふけれどね、人の心に鬼は居ないのだからねえ、何でも氣を大きく持つて居るが可いよ。」

「はい。」

とばかり歌子は俯向いて、何か考へて居る。

五

光子は暫く口交ぜもせず、見るともなしに自分の手の、指環の彫に眼を注いで二人の談話を聞きさして居たが、其時不意と顏を上げて、

「阿母樣、それはまア何ですけれど、私未だ兄樣の方の事で、少し伺つて置きたい事がありますの。」

「何だえ?」

と松江は靜かに振向いた。光子は聲を追つて直ぐ、

「阿母様はそれで、詰り何うなさるお心算なの？」

とぢッと見る。松江は例の、事もなげに微笑みながら、

「なに何うも、恁うもあるものかね。此方へ金彌を引戻すまでぢやないか。」

「でも若し兄様が肯かなかつたから……。」

「おほゝゝ、お前は苦勞性だね。私の方にやいくらでも責道具はあるよ。餘計な心配はおしてない。私も今話した十七時分とは人が違つて居るからね、これでも火水の中も潜つて來て居るんだもの、何うせ始末を付けるのに、生煮で手を退くやうな事をするものかね。まア默つて少し見てお出よ。」

「はア、然うまで仰有れば、其上言ふ事はありませんけれど、私にや何うも阿母様が、兄様初め先の何を餘り呑過ぎて居らつしやるのが氣に掛りますわ。それでなくつても恁ういふ事は、理窟ぢや押せない成行に随分ならないとも言へないんですから。」

松江は一寸歌子の方へ眼を遣つたが、それなり振直つて、輕く、

「可いよ。可いからまア見てお出よ。」

光子は未だ落付かぬ色を、其儘、歌子の方へ押向けて、

「嫂様、貴女はそれで安心して居らつしやるの？」

歌子は少し躊躇ひながら、

「私もそりや、先の様子を些少も知らないのですから、安心して居るッて譯には行きませんけれど、阿母様が這麽に言つて下されば、甚麽に力にして居るか知りやしませんわ。」

「それにしても貴女、早く片が付くに越した事はありやしますまい？」

「そりや仰有るまでもありませんわ。」

「それぢや矢張、私が行つた方が可いぢやありませんか。阿母様は阿母様、私は私で手を分けて爲たら、それだけ尚早く運ぶだらうと思ひますわ。ねえ、阿母様。」

と又其事を言出した。松江は聞入れやうともせず、

「何だね、未だ那樣事を言つて居るの。お前は最う如彼いふ者と取合ふやうな身柄ぢやありません。行くやうだつたら行く人はちやんと拵へてありま

す。お前はそれよりも、歌子の氣の紛れる事でも考へて遣るやうにおし。」

「でも……。」

「何がでもなんだよ。それぢや私が音頭を取つて何か面白さうな事でもしやうよ。歌子や、お前も進まなからうけれどお付合ひよ。さア氣をかへて兎も角母屋へ行かうよ。」

と元氣よく、何も押付けて衝と立上つた。

（二十）電報

一

一日過ぎる。二日過ぎる。金彌は未だ歸つて來ない。光子の氣遣つた事は、次第に當つて來たやうな姿になつた。松江は其前に、金彌の甚だ穩やかでない返事を受取ると同時に、かねて此事で使つて居た某といふのに旨を含めて、金彌の行つて居る先へ向けて急行させたが、其男が手を空しくして歸つて來ると共に、金彌の實際惑溺して居る有樣が殘らず知れ渡つた。

「それ御覧なさいな阿母樣、私が言つた通りぢやありませんか。私屹度此位の事はあるだらうと思つて居ましたわ。だから餘り手輕にお思ひでないやうにと言つて上げたのに。」

と光子は今更のやうに言ふ。松江も流石に少し意外ではあつたが、色にも見せず、

「然うさね、大分熱が嵩じて居るやうだね、なに、それならそれとして又手順が

あるよ。驚く事はないけれど金彌もまア好い加減向不見だね。跡ぢや本當に一つ談話だよ。」

と打笑ふ。光子は齒痒さうに、

「あれ、お阿母樣は未だ那樣暢氣な事を言つて居らつしやる。」

「おほゝゝ、お前は直にそれだ。私が慌てる時は最う出る道が無くなつて了つた時だよ。斯うして笑つて居る間は安心してお出で。歌子や、お前も心配おしでない。假令甚麼事があらうとも、私が居る内はお前に退けは取らせないからね。」

「はい。」

と歌子は別に言ふ事はあつたが、折角又斯う言つてくれる言葉を返すのもと思つて態と言はなかつた、松江は追掛けて直ぐ、

「なにお前、これに限らず、いつまでもこそ〳〵と隱れて惡い事をされて居るよりは、跡を奇麗にするにや、事が少し大きくなつた方が却つて爲かも知れないよ。お互に確かりして、これで這麼方の手を洗つて了はうぢやないかね。」

「はい、然うなりや私も甚麽に晴々とするでしやう。」
「そりや可い事ね。」と光子も口を揃へて、「阿母様が其氣でして下されば、私も甚麽にか嬉しいでしやう。」
松江は思出し顔に、歌子を見て微笑みながら、
「然う言へば歌子、昨日生家の阿母様が見えた時、お前は今度の金彌の事を全て隱してお出だつたね。」
「あれ、何うしてそれを御存じですの。」
と歌子は急がはしく眼を上げた。
「私、初枝さんの歸りがけの樣子で、屹度然うだらうと思つたよ。」
「でも私知らさないで濟む事ならと思ひましたから。」
松江は首肯くやうにして輕く、
「私も然うだらうと思つたよ。お前の志は受けて居るよ。なに、いつまで這麽時が續くもんぢやない。我慢をおし。私を初め光子だつてこれぢや居られないからね。」

けれども其眉を開く日は急に來なかつた　事が暴露たと思つてから、金彌は最早憚る處なく、相手を作れて銚子の別莊へ來た。それはお新の親戚の者が上京序にお新を訪ねて來ての談話から知れた。

「金彌はそれぢや私に栖を突く心算で居るのだね。可し、それなら最う容赦なくびし〳〵遣つて遣る。小供ぢやないと思ふから、立てる處は立てるやうにして遣れば、いゝ氣になつて付上つて來る。誰が那樣勝手な事をさせるものか。」

と腹立たしげに松江は口を衝いて言つたが、それなり眉を顰めて、

「それにしても、此間又掛合に遣つた彼の阿母の方から何とか言つて遣らなけりやならない筈だが……。」

と小首を傾けた儘、ぢッと下を見詰めて、頓て屹として口早に、

「私銚子へ行つて來やうよ。」

「あれ阿母樣。」

と歌子は常に見ぬ松江の氣色に驚きながら、

「貴女に楯突くなんて、那樣心が何で室賀にありましやう。皆心易立からですよ。貴女が行らつしやるよりは私、這麼中で室賀の談話の爲好い人は外に有るだらうと思ひますが……。」

「なに、それは最う一通り前にして有るぢやないか。それが解らないから解らせやうといふのだわね。」

と言つたが、歌子の顏を見て急に色を收めて、

「なにね、そりや私の事だから可いやうにするよ。何の道那樣考のない事はしないから氣に掛けないでお出で。」と微笑みながら、「お前は併し恁ういふ時にも、金彌を庇ふ氣があるのは感心だと思ふよ。」

言はれて歌子は體裁を惡さうに、

「あら私那樣心算で言つだのぢやありませんけれど……。」

「おほゝゝ、可いぢやないか。私は何も知て居るよ。其癖お前は、昨夜宅で一人泣いてお出だつたぢやないか。」

「えツ。」

と歌子は何時見られたかと思はず色を變へた。松江は慰め顏に、

「まアね、今の處仕樣がない。言ふ時にや言はれるから堪へる時にや堪てお出よ。お〻然う言へば最う何時だね。」

「今四時を打ちましたつけが。」

「然うかえ。それぢや今日の事には行けないね。明日の朝發たうよ。別に準備も要らないが、お前一寸手傳つておくれな。」

光子は其日丁ど出て居たので何も知らず、暫く經つてから歸つて來たが、松江の行く事を聞くと、又出直したやうに、

「阿母樣、行らつしやるなら私も伴れて行つて戴きましやうか。此間も然うでしたが、私此事ぢや少し考へて居る事があるのですから。」

松江は併し肯かなかつた。

「いや〳〵お前の手にや負へまいよ。まアお前は這麼中へ餘り立交らないが可い。」

光子は氣を落して、

「阿母様が然う仰有れば仕様がありません。」と言つて思出し顔に不圖「おゝ銚子と言へば、昨日先生も彼方へ行らしつたけれど、彼方で兄様と若し逢ふやうな事があつたら厭なものね。」

「然う。脇屋さんが。」と歌子は眼を返して「矢張書の方の御用で？」

「はア、然うですよ。」

と光子は何心なく答へて、又金彌の方へ談話を移した。

三

其處へ突如に金彌から、歌子へ當てゝ思掛けぬ電報が届いた。事の異樣なのに、受取つた歌子を初め、松江も光子も思はず眼を瞬つて、歌子の慌たゞしく封を切つた電文を、共々急がはしく差窺くと、

アス、イチバンデ、テウシベツサウヘコイ、ムロガ

三人暫く言葉もなかつた。

「まア、何うしたんでしやう。」

と光子が眞先に口を切る。

「然う。私にも解りませんわ。」

と歌子も訝かしげに、再び電報を手に取つて見たが、

「阿母樣、貴女何うお思ひなすつて？」

「さア。」と松江も解きかねたやうに、「お前に來いといふのだね。平素ならそりや何でも有りやしないが、這麼場合に來いといふのは少し變だね。」

「若し急に病氣でも……。」

と歌子は不意に氣がさして言つた。松江は頭を掉つて、

「なに、それなら然うと言つて來るよ。今お前が邪魔になる中へ、只の病氣で呼ぶ譯はなし、重患いなら又、直ぐとか至急とか何とか外の文句もあらうし、それでなくとも病氣なら病氣と誰でも書くわね。」

「私も然うは思ひますけれど、それでも餘り何だか突如のやうですから。」

「然うさ。それにや私も一寸見當が付かないがね。」

と暫く言葉が途切れる。三人其儘に、思ひ〳〵の姿で居たが、光子が不意に、

「嫂樣、貴女行らつしやるお心算？」

と顔を見る。歌子は何か思定めた樣子で、

「はア、行きましやうよ。」

「あれお出なさるの。まア。何だか譯の解らない中へ。」

「でも恁うしてわざ〲呼びに遣したのですもの。」

「だつて貴女、行らつしやる事はありませんわ。態と行かないで、此方の怒つて居る事を些少見せ付けてお遣りなさいよ。人を、這麼電報なんぞ遣された義理でしやうか。お止しなさいよ。這麼あやかしが憑いて居るやうな時にや、兄樣は何をするか知れやしませんよ。」

松江は其時。二人に押向ふやうに一寸膝を寄せて、

「それぢや恁うしやうぢやないか。何うせ私が行くのだから、寧そ皆の氣の濟むやうに、揃つて三人で別莊へ遊びに行くとしたら何うだらう。先刻は光子を止めたけれど、今別に考付いた事もあるから、先へ行つた樣子次第で、私が何うともすると、して出掛けて見やうよ。ねえ光子、それなら可いだらう。」

「はア、それなら未だ、危ッ氣が少うござんすから。」

「ぢや兎も角然うとしようよ。歌子や、お前はそれぢや、跡の家の方の事を能く房にでも吩咐けてね。」

と眼顔で指圖する。歌子は眉を下に、

「はい。まア妙な事になりましたのね。」

と式ばかりの笑顔を見せた。

（二十一）秋の日

一

車は高神の村居を右に、畑地を越した端山の影を眼近に迎へて、秋日和の澄切つた空を、左に劃つた松林の中へ入つた。松江を先に歌子光子と續いて三臺濱手に近く、次第に砂の深くなつて行く路を、搖られて彼方を望んだ時、歌子は逸早く奥の別莊の影を眼に入れて、咄嗟と今更のやうに胸を躍らした。途端に門を走出して二人、例の高神から手傳ひに來て居ると見える、寮番の太平の娘、お新の姉のお瀧といふのと、其嫂のお仙といふのが、いづれも髪を結直して、質素ながらも着更へた扮裝で、急がはしく出迎へに來た。

「おゝ又手傳ひに來て居るのかえ。御苦勞だね。

と先に降立つた松江は、交る〳〵挨拶する二人に輕く默禮していふ。歌子は過ぎた日の懷かしさと、今の心元なさを綯交ぜに、言はれぬ心地で跡に續いた。光子は奥に眼を付けて、坐ろ心で同じく押續いた。

「はア今度は旦那樣前觸なしに來さしつたで、それに太平が、御存知かは知りましねえが、餘儀ねえ事で此間から、佐原の方へ行つて居ますで、何にもはア屆かねえ事ばかりでごぜえますよ。」

とお仙は其日に燒けた圓い顏に繕はぬ愛嬌を見せて、

「私等奧樣ばッかり來さつしやるッて聞いて居ましたに、皆樣揃つて來さしつたで泡ア喰ひましたゞアよ。」

「なに、不意と思立つたもんだからね。」

と松江は手輕に言紛らして、

「お新を伴れて來るのだつたが、生憎少し風邪を引込んで寐て居たもんだから、つい置いて來て了つた。逢はせるのだつたに惜しかつたね。」

「何はアお新は此間も宿下りに來ましたゞアから、餘り自由さして戴いちやア勿體なうごぜえますだア。」

「それは然うと彼の、」と松江は態と何氣ない顏で、「金彌の伴れて來た何は今家に居るかえ。」

「何でごぜえますか、彼の女のお方でごぜえますかね。彼のお方は最う、昨日お歸りになりましたゞアよ。」

光子は聞きも敢へず、脇から衝と寄つて、

「えッ、歸つて。本當に？」

「はア昨日、一人で先へ歸らしつたゞアよ。」

「まア！」

と呆れて其處へ立つて了つたが、俄かに振返つて、

「嫂樣！」

とばかり顏を見合せる。歌子も全で譯が解らず、

「まア、何うしたといふのでしやう。」

お仙は樣子を不思議さうに、顏を見較べて只眼を動かして居たが、

「だが彼の男の方のお客樣は未だ居さつしやりますだア。」

「えッ、男の？」

と光子は更に眼を瞬つて、

「誰？何といふ名？」

と急がはしく聞く。お仙は面なげに、

「さア、何て言はつしやるだか知りましねえが。」と振返つて妹に、「お瀧よう、お前知つてるだアかね。」

「何、俺も知んねえだアよ。」

誰だらう。と此方の三人は、思付かず皆訝かしげの色を見せた。

二

「まア、兎も角上つてからにしやう。」

と松江は談話を切上げて先に玄關へ掛つた。不審は霽れぬが、此處で考へて居るよりはと光子も歌子も直に押續く。お仙とお瀧は、傘や手荷物を分けて取敢へず供に立つた。松に狹まれた路を十間ばかり、何時か聞え出した浪の音を彼方に、敷臺近く都姿の文を見せた時、不意に奥の座敷の方から、強い、華やかな、高笑の聲が起つた。

「あら、先生よ。」

と光子は吃驚して思はず足を止めた。

「えッ、先生ッて、脇屋様？」

と歌子は重ねて驚き顔に振返る。光子は疑ふ方もないやうに、

「屹度然うよ。でも彼のお聲は外にはありませんもの。然うよ、そら一昨日から、此銚子へ來て居らしやるんですもの。」

「まアそれにしても、何うして別莊へ來て居らつしやるんでしやう？」と背後へ振返つて、「お仙や今居るお客樣は、其處等の旅館からでも一寸遊びに入らつしたの？」

「いんね、昨日かち泊つて居さつしやるだアよ。」

光子は聞きさして、

「さア尚解らなくなつて來たわ。それぢや先生が何か今度の事に……？」

と不思議さうに首を傾ける。松江は其間に上へ昇つた。歌子も光子も、夢見るやうな思で跡に續いた。其時、奧からのし／＼と近づく足音が聞えて隔ての襖が颯と開くと、光子の耳は確かだつた、襖を離れて、笑つて其處へ立迎へる

やうに、脇屋の例の達磨髯の、黒い、愛嬌のある顏が前に現はれた。
「まア、先生！」
と光子は見ると走寄つて、
「貴方何うして此處に居らしやいますの？」
「はゝ、いや私が居やうとはお思ひぢやなかつたでしよう。此方も實は、恁う皆さんが一處に居らしつたのは少し意外で、有りやう奧さんのお出も少し危んで居たのでした。や、阿母樣には私未だ初めてだ。貴女一寸御紹介を願ひましやうか。」
と何日もの更に氣を置かぬ態で言ふ。松江は異樣には思ひながらも、進出て事慣れた挨拶して、光子の世話を燒かれて居る禮などを述べながら、裏から問掛けるやうに、
「貴方は彼の、以前から金彌とは御懇意で居らつしやいましたので？」
脇屋は心を解いて直ぐ、
「いやお相識になつたのは此頃の事ですがな。些少妙な關係から此中へ立

交るやうな事になりましたので、や、何も突然でお解りになりますまい。彼方で一通りお話申しませう。室賀君にも實は今それを賴まれたのですから。」

松江は不意と調子をかへて、

「して金彌は那方に居ります。」

脇屋は顏を見て微笑みながら、

「いや室賀君は今、貴女の姿を見ると急に消えて了ひましたよ。」

三

座敷には二人今の先まで話して居た跡を其儘に見せて、主のない座蒲團に近く、未だ冷めきらぬ珈琲茶碗、半ば減つた葉卷入などが埓なく並んで居る。

「まァ本當に居ないんだわ。私嘘だとばかり思つて居ましたよ。」

と光子は呆れ顏に言ふ。脇屋は態と剽輕な聲で、

「はゝゝ、だが此逃げる處に可愛氣があるぢやありませんか。なァ阿母樣。室賀君大分貴女を恐れて居ますよ。何分今度は餘程御機嫌を損じるやうな事をしたのですからな。一應お詫をした跡でなければ、お目に掛かられんと

いふ那様事から外したのでしやう。」
光子は母を待たず又脇から、
「でも卑怯ぢやありませんか、今更此處を先生に取繕ろはせて、自分は好い兒になつて外して居るなんて。」
「なに然うぢやない。」と脇屋は押宥めて「詰り阿母樣に其薙刀を伏せて戴くのさ。」
松江は可否を言はず、前の同じ落付いた調子で、
「そして貴方に何と言つて出ましたえ？」
脇屋は尚も微笑ましげに、
「なに今、此方で話して居ますとね、不意に貴女方の聲が聞えたので、そこの窓から室賀君一寸透見をしましたがね、急に慌て出して、や、武裝して來た。こりやァ可かん。殊に母を伴れて來られたのには驚く。僕は一寸戰線を退いて居るから、一通り此事件の成行を話して、そこの處を何分宜しく。と言つて急になゝ。はゝゝ。」

「まア。」
と歌子は光子と顏を見合せた。松江は靜かに、
「ほう、それぢや貴方は、押付けに仲裁役をお賴まれなすつたので？」
「いや飛んだ、仲裁人で、貴女のお出が不意でしたから、恁ういふ不意の者が現はれたとお思ひ下さい。」
「まア御迷惑な。」
「いや、迷惑處ぢやありません。私は此事で實は東京から來たのですから。」
「えツ。」
と松江も流石に意外だつたか、顏を見た儘で、
「そりや又何うした譯で？」
「それもお話申しますが差當つて先づ室賀君の事から申上げて、一つお心を解いて戴きましやう。」
「は、其事では私は未だ何とも申す事は出來ません。お談話次第で、私にも考があります し、歌子にも亦それに應じた覺悟もある事でしやうから、兎も角も

能く伺つてからに致しましやう。私も今度の金彌の處置に付いては、只では事を濟まされませんから。」

と根強くきつぱりと言切つた。脇屋は期して居たやうに、

「や勿論貴女からは然うでしやう。室賀君も實はそれを恐れて居るのです。併しまア傍かららお談話しますから、お聞下さい。」

とやをら居住を直して、前に押向つた。

四

「や、室賀君も今度は、大分變つた手で遣られたやうですが、何分相手が尋常の者ぢやなかつたので、つい出來心が出來心に付かないやうになつて了つたのですな。」

と脇屋は話しながらも、それとなく歌子の方へ眼を注いで、言葉を餘程加減しながら、

「彼女の來歴は最う、略御存知の事と思ひますから別に言ひますまいが、何でも室賀君は最初から、今迄這麼女に逢つた事はないと思つたさうで、それから

僅かの間に、全く急處を抑へられて、何うにも足掻が取れなくなつて了つた。と自分でも言つて居ましたよ。餘程上手に其處を遣つたものと見えますな。驚くのは彼の貞操の價値も何も無茶にして居る女が、那樣で居て到頭身を任せなかつたと言ふ事で、それだけ先方の企みが深かつたのですが、室賀君の方は尚意地になつて掛つて來る。先方は思ふ坪で尚巧く焦らして來る。一時は室賀君も、全で眼が眩んだ形で、阿母樣の剛意見さへ、耳に入れやうともしなかつたのですな。

處へ先方の阿母から、娘へ當てゝ來た手紙が屆いたのです。然う、此別莊へ來た翌日といふ事でした。それで阿母樣の御立腹の容易でない事から、談話を付けて先方の手を最う切つてお了ひなすつた事も知れたのです。彼女はそれを見ると、然ういふ女だけに又、先を見越して直に見切を付けて了つて、笑つて室賀君に、貴方を最う引付けて置いても仕樣がないと言つて、隱さず何も彼も話して了つて、

「ほゝゝ、貴方も私も、飛んだ徒骨をしましたのね。氣の利かない幕ぢやあり

ませんか。」

と言つて別れて了つたさうですよ。

事は恁ういふ風で兎も角も濟みましたが、併しこりやァ全く阿母樣のお骨折の結果です、貴女の手強い出方が先方へ充分に利いたので、先方でもナニ、室賀君の最う親掛りでもなく、自由に何でも出來る身體なのを知つて居るのですから、恁う容易に手を退のぢやないのですけれど、貴女に太刀打の出來ないのを早く看て取つたからでしやう。　室賀君も實際、平素家の事に何もお構ひなさらなかつた貴女が、今度急に手をお出しなすつたのには驚いて居ますよ。や、それはそれとして、室賀君も最う目が覺めて居るのですから、無論御當人からも、改めてお詫はしましやうが、今迄の事はこれぎりに餘り責めて下さらんやうに願ひたいので、私も實は、まだ〳〵面倒な事になりはせんかと思つて居ましたが、幸ひ此位で濟んだのは何よりで、尚又これで跡が固まつてくれたら、貴女方もお喜びの事だらうと思ひますから、何も無い昔にして、笑つて下すつたら何うだらうかと思ひますが。」

と重に松江に、一通りを掻摘んで言つて代つて詫びた。

五

松江は聞いて微笑みながら、底に未だ物のあるやうに、

「ほゝゝ、其お談話には餘程お修飾が入つて居るやうですね。」

「や、然う聞えますかな。」と脇屋は笑つて頬を押撫でながら、「そりや私の話しやうが惡かつたのでしやう。兎もあれまア濟んだ事は餘り仰有らんで、貴女としては室賀君に、一時はそりや御不快の事もあつたでしやうが、外ならん御親子の間ですから、快く水に流して戴かうぢやありませんか。」

松江は首肯きさま、明瞭した、齒切のいゝ聲で、

「はい、それは最う、恁うなつた上で強ひては言ひますまい。だが此後は能く確めて置きませんとね、歌子が全く可哀相ですから、これを機に釘を挿して置かうと思つて居ますよ。ねえ歌子、お前も然うだらうが。」

と顏を振向けた。歌子は稍口を重く、

「はい。それにしても室賀は何處に居ましやう。私も少し言ふ事がありま

すから、こゝへ歸つて來ない前に一寸逢ひたいと思ひますが。」
脇屋は引取つて其儘、
「いや貴女には室賀君からも別にお談話がありますので、實はそれで態々お呼申したやうな譯なんですが、つい阿母樣が見えたので事が跡先になつて了つたのです。」
と言つて不圖思付いたやうに、松江の方へ振返つて、
「や、然うしやうぢやありませんか。これから歌子さんに迎へに行つて戴かうぢやありませんか。」
「ほう、金彌をですか。」
「はア、其方が室賀君も來易いでしやうし、かた〳〵お談話もある事でしやうから。」
松江も笑ひながら、
「左樣さ。それは却つて可いでしやう。何うだえ歌子。」
「參りましやう。直に。」と歌子は進立つて、「そして何方へ行きましたの？」

「海鹿島へと言つて行きましたから、彼方の濱ですよ。」

「は、それぢや一寸。」

と衝と立上つた。光子は脇から、見送つて急に聲を掛けて、

「嫂樣、確かりなさいましよ。なんなら私お手傳ひに行つても可いわ。」

「おほゝゝ。それぢや喧嘩に行くやうぢやありませんか。」

「喧嘩よ矢張。未だ仲直りをしたのぢやありませんもの。あら、貴女は最う濟んだ氣で居らつしやるの？　先生のお談話だつて未だ半分しか伺はないぢやありませんか？　兄は甚麼で居るか、本當に知れはしませんよ。」

脇屋は取支へて急がはしく、

「いや、那樣事はない。室賀君は最う人が變つて居ますよ。それには私も、眞面目で少し室賀君に話した事もあるのです。まア兎も角も行つて御覽なさい。」

「はい。では兎も角も。」

と歌子は會釋しながら、胸に急がれて足早に座を離れた。

（二十二）松の濱

一

海は秋日和の空に映えて、波は遠く美しげな深碧の色を輝やかして居る。岬を拔いて上に高く燈明臺の白壁は、晝近い日を眞向に浴びて、打寄る波を迎へ顔に磯に衝立つて居る。風の強い君が濱の一角も、一しきり松に深く聲を收めて、砂地に曳いた鮮やかな影の、葉末も亂さず寂りとして居る。燈臺道を横に切つて、過ぎた昔の思出を深く、歌子は今、足早に松を出離れて濱へ降りて行く砂山の上に立つた。

下は一目に彼方伊勢地が浦を隔てゝ居る出崎の端まで、濱の布置は悉く眼に集つて來る。林の中で、倒れた樹を挽いて居る大鋸の音を餘所に聞いて、夏を過ぎては人の稀な汀を掛けて其處此處と、立つなり逸早く眼を走らしたが、

「おゝ。」

と不意に、裾を蹴開いて衝と下へ駈降りた。離れて居るので、顔は明瞭とは解

らぬが、姿は外に紛れもない。濱に寄つた彼方の松原に、海に向つて、蟠屈つて二股に開いた松の幹に脊を持たせて、金彌は一人腕組して立つて居た。

近寄るまゝに、姿は頓て鮮やかに眼に入つて來たが、金彌は更に身動きもせず、帽子を深く下を見据ゑたまゝで、石のやうになつて立つて居る。

歌子は小刻みに尙足を早めて、坐ろ心に近寄つたが、聲を先に、

「貴方。」

と呼掛けて衝と進寄つた。途端に上の梢に群れて居た四十雀が、影に驚いてばつと一時に飛立つた。金彌は急がはしく振向いたが、顏を見合せると、

「や。」

と思はず背後の松を離れて、ずつくと立直つたが、物をも言はず顏を見入つて足を止めて了つた。

あ、氣を置いて居る。と歌子は不圖思つたが、見るから惱ましげな顏色を眼に入れると、急に聲を輕く、

「貴方、私お迎ひに參りましたのよ。」

「え、迎ひに？」
と金彌は呟くやうに言つた。　歌子は態と何氣ない顏で、
「はア。入らつしやいよ。皆さんが待つてお出ですよ。」
金彌は疑がはしげに眼を動かしたが、氣の無さゝうな薄笑ひして、出遲れた調子を其儘、
「お前は俺の、今度の事を何とも思つて居ないのかい？」
歌子は口早に、
「思つて居ますとも、其は。思はないほどの性無しぢやありやしませんわ。」
と言つて俄かに笑掛けて、「貴方、それでも、私、恁うしてお迎へに來たぢやありませんか。おほゝゝ、這麼時でなくつちや恩に着せられませんのよ。さア參りましやう御一處に。」
「むゝ、お前其思つて居る事を腹藏なく言つてくれまいか。」
「はい、申しますけれど、」と顏を見て、「私其前に少し伺ひたい事がありますの。」
と耳に障らぬほどに聲を和げて言つた。

二

「むゝ、それは？」

と金彌は前に一足、何時にない眞顔を見せて、ぢッと打目戍つた。連れて歌子も語氣をかへて、

「いえ、外ぢやありません。私貴方の本當のお心持を先に伺つて置きたいと思ひますの。」

金彌は頭を重く首肯きながら、

「いや、それならば今私の言ふ事を能く聞いて貰へば可い。今日はお前に改めて私が懺悔したい事があるのだ。お前をわざ〳〵呼んだも、實はそれを言はう爲なので、私の今迄の事は是で何も彼も解るだらうと思ふから、一時の言譯などゝ思はんで聞解けて貰ひたいと思つて居る。」

「は、彼の今度の事に付いて？」

「いゝや、そればかりぢやない。私は爰でそも〳〵から身に着いた銹を殘らず落して了はうと思つて居る。歌、私は今になつて漸と眼が覺めたよ。」

歌子は聞くと共に、奥に隱して居た怨みも急に忘れたやうに、颯と色を動かして、思はず眼を輝やかしたが、

「まア、貴方本當に？」

「はゝゝ、いや體裁の惡い談話で、お前の手前にも實際氣が引けるのだ。私が併し全く後悔して言ふのなら、お前は其上を尚責めやうとはしまい。少し勝手だが宥して聞いてくれるだらうか。」

「あれ、宥すも宥さないも有るもんですか私は貴方の何だと思て居らつしやるの？」

「むゝ、お前が今日來てくれたので、お前の心持は解つて居るやうなもんの、私は斯うなつて妙にお前の氣をかねるやうでならんのだよ。」

歌子は慰めるやうに、

「おほゝゝ、貴方は御自分で罪を那樣に被つて居らつしやるの？」

「そりや併し當前だもの。」

「まア。それだけのお心があれば充分ですわ。私それぢや最う怨みらしい

事は何も申しますまい。」

金彌は俯向いた儘て、二足三足、無意識に前へ踏出したが、止るともなく不意に立止ると、

「惡かつたよ。實際惡かつた。いゝ氣で那麼眞似をして、能く今まで居られたもんだ。私の爲た事は皆間違つて居たよ。」

歌子は凝然と眼を止めて、

「貴方、今度の事が、那樣に貴方のお心を……。」

金彌は皆まで言はせず、急がはしく頭を掉つて、

「いや〳〵、それからぢやない。私の恁うなつたのは、彼の脇屋君に言はれてからだ。」

「え、脇屋さん！」

と歌子は聞咎めて不圖心付いたやうに、

「おゝ、然う言へば脇屋さんが、此事に立交つて居らつしやるのは全體何うした譯なので。貴方とは未だ此頃のお方だけに、先刻思寄らないお眼に掛り方

をして私何うしたのかと思ひましたわ。」
「ふむ、脇屋君は何も言はなかつたかい。」
と金彌は念を押すやうに、同時に顏を振向けた。

三

歌子は別に隱す事でもないから、脇屋に聞いた通りをザッと話して、
「那樣で御自分の事は未だ仰有らない中に私はお迎へに來て了つたんですから、跡ぢや其お談話もあつたでしやうが、私は未だ知らずに居るのです。」
「然うか」と金彌は首肯きながら、「いや、脇屋君には飛んだ厄介を掛けたよ。今の其、阿母樣に言つてくれた事も、私の爲に餘程能くばつを合せてある。今度の事は勿論阿母樣の骨折もあつたが、脇屋君の手傳ひが半分は利いたのだ。脇屋君は前に或友人の事で、彼の女を知つて居るといふ事だ。今度で立合ふのは二度目だと言つて笑つて居たよ。私も最初は、只偶然來合せて居た事とばかり思つて居たが、わざ／＼此爲に來たと言はれた時には少し驚いたよ。」
「はア其、わざ／＼來たといふ事は仰有いましたが、それにしても餘り物好ぢ

やありませんかね。」
金彌は笑掛けたが、思直して直に消して、
「いや、それはお前が知らないのだ。人は種々だよ。脇屋君はお前の爲に此處へ來てくれたのだ。」
「えッ、私の……」
と歌子は眼を睜つたが、驚く同時に、かねて聞いて居た事を思合せて、はッとして、思はず颯と顏を赧くした。金彌は見て取ると其儘、
「は、お前も氣が付いたか。脇屋君は隱さずに何も話したよ。私には出來ない事だ。脇屋君は何處までもお前の幸福を計らうといふ奇麗な行方で遣つて居る。實際彼の人でなかつたら、私も恁うはならなかつたかも知れんよ。お前も然うまでの人とはよもや思はなかつたらう。僅かの間に私がこれほど親密になつて了つたのでも、彼の人の肚の奇麗な事は解るだらうが。」
「まア。」
とばかり歌子は跡を言はず眼を逸らした。其時がやがやと背後の松の中を、

子供交りに五六人の村の女が、各自に草苅籠を肩に掛けて話しながら通つて行つた。金彌は急に心付いて、

「や、私はお前に話すと言つて何も未だ話さずに居る。ま、兎も角歸りながら話すとしやう。」

と伴立つて頓て踏出すと、不圖又出損つた樣子で、紛らすやうに微笑みながら、

「お前併し驚いちや可かんぜ。今度の事は恁う知れ渡つて了つたけれど、私は未だお前に隱して居る事で、隨分種々な不身持をして居るのだ、お前も薄々は知つて居るだらうと思ふが。」

歌子は聞くと急がはしく、

「あれ、那樣事を一々仰有らなくつても、然ういふお氣が出たなら最う澤山ですわ。」と嫣然して、「貴方も仰有り難いでしやうし、私も聞いてりや好い心持はしやしませんわ。寧そ何も聞かないで濟ます事にしましやう、ね、貴方、那樣事は無い昔にして皆忘れて了はうぢやありませんか。」

金彌は口を重く、

「いや、それぢや私の氣が濟まない。句切は句切で、確かりと付けて了はうぢやないか。まア兎も角も聞け。」

と尙も眞顏になつて言切つた。

四

波は直押しに汀に押寄せては、躍つて磯を打つて颯と引返して行く。二羽三羽、濡れた砂地へ續いて降立つた鷗が、並んで海に向つて居たが、一羽が衝と寄つて先に波の上へ浮くと、跡を追つて皆水へ入つて行つた。途端に彼方の、丘を隔てた燈臺の構内から、上に高く信號旗が上つた。沖に近く汽船が今、上總の海を指して波を蹴立てゝ行く。金彌は眼も遣らず、下を見詰めたまゝで、

「全く今迄といふもの、私は戲けて世を送つて居たのだ、私には生活の競走も要らなかつた。寐て居て不自由のないだけに、眞面目に世間を見もしなかつた。いゝ氣になつて只浮かれ、廻つて居たのだ上邊は何うだらうが、私には道樂が命だつた。」

「一寸。」と歌子は又押止めて、貴方は何うてもそれを仰有らなければお心が

濟みませんの？」

「濟まんよ。」と金彌は聲に力を入れて、

「私は二度と最う係ういふ事を言はうとは思はんのだから、此處で殘らず今迄の泥を吐いて、潔くお前に罪を問はれやうと思つて居る。お前を呼んだのも全く此爲なのを、言はんで了つて何うするんだ。」

「貴方、貴方、」と歌子は跡を抑へて、「それぢや貴方のお心さへ解つたら可いのぢやありませんか。それならば最う、仰有つただけで、私には充分です貴方、私が伺はなくつても可いと言つても、貴方は達て未だ聞かせやうと仰有るの？」

「むゝ、お前未だ私をそれほどに信じて居てくれるのかい。

「私正直に言へば、夏から掛けてそれや種々の思は爲ましたけれど、自分の良人といふ事を忘れた時はありません。」

「え？」

「貴方の懺悔を聞いて、私が何うしましやう。聞かないでも同じ事なら、貴方のお氣の減るやうなお談話を、私伺ひたくはありません。」

「だが何故聞かんでも同じ事だらう。」

「おほゝゝ、貴方、お解りになりませんの。私には同じ事だと言ふのですよ。然うでなくつて貴方私が恁うして居られましやうかよ。」

「むゝ、そんなら若し私が以前の儘であつたら、お前は何うする心算で居る？」

「そしたら私」と早口に、「何うにもして今のやうにして見せます。」

「然うか。だが若それで出來なかつたら？」

歌子は屹と眼を擧げたが、怨めしさうに聲を返して、

「あゝ貴方は、未だ私を疑つて居らつしやる。私何うしたら可いでしやう。」

と差俯向く。金彌は衝と寄つて、顏を見詰めて不意に立止つた、

「惡かつた。堪忍してくれ。私は何もお前を苦しめる心算で言つたのぢやない。」

「貴方、」

と跡を言敢へず歌子を聲を止めた。金彌は打付けに、

「可い。最う可い。何もお前に任せやう。お前の思ふ通りに私を處分して

くれるが可い。」

五

「あれ、處分なんて那樣……。」

と歌子は急がはしく遮つた。金彌は押返して、

「いゝや然うでない。私は初めから其覺悟で居たのだ。私はお前を侮辱したのぢやないか。お前は何處までも私を責めて可い理由を持つて居る。」

「けどれも貴方は、御自分で改めてお了ひなすつたではありませんか。」

「むゝ、それで。」

と金彌は促すやうに聞く。歌子は何時か、活々とした眼を直と、晴やかな笑顔を先に、

「あれ、其外に何を望みましやう、私も申上げやうと思つて、少しは用意して居た事もありますけれど、先刻からのお言葉で、それは最う徒になりましたから、言ふ事は何にも無くなつて了ひました。だつて這麼結果を、恁う早く見やうとは思つて居ませんでしたもの。」

金彌は最早、口數を掛けるものはないと思つた。人が居なかつたので、默つて手を把つて、並んで近く引添ひながら、

「可し、それぢや其事は最う言はんとしやう。お前は矢張最期までの道伴だ。今迄は今迄として、明日から氣を揃へて、私の入つて行く眞面目な新らしい生活に入つて行つてくれ。私も是からは、少くとも人らしくして行かうと思つて居る。」

「はい。最う申す事はありません。まア何うして這麼思通りの日が急に來たのでしやう。」

不意に近く荷車の聲が聞えた。談話の中に何時か燈臺道へ出て來たので、人目を避けて二人は、道を切れて衝と木隱れに林の小徑へ入つた。歌子は足も進立つやうに、空も海も、山も林も、四邊の眼に觸れて行く光景の、初めて明瞭と眼に入つて來た心地がした。

「貴方、私が初めて此土地へ來た時、貴方と二人で、幾度此路を通りましたらう。彼の時分に仰有つた事を、貴方は未だ覺えて居らしつて？」

「むゝ、彼の時分の事を思ふと、それほど時も離れて居ないのに、全で前の世のやうな心持がするよ。」

「ザッと見た處ぢや、然うも彼の時分と變つちや居ないやうですけれど、能く見ると矢張違つて居ますのね。私達も然うでしやうか。」

金彌は遠く、行手の方に眼を遣つたまゝで、

「此次に來た時は又何う變ると思ふ。」

歌子は坐ろに、

「今度來る時には私……。」

と言掛けて不圖心付いて、急に顏を赧くしながら、

「おほゝゝ、今言はなくつても可いのですから明日にでも申しましやうよ。」

「何だ。言掛けて、」と金彌は聞咎めた。

「あれ、可いのですよ。後に申しますよ。」

「何か今言つちや差支へる事なのかい。」

「あれ、然うぢやありませんけれども……。」

と體裁を惡さうに下を向く。金彌は尚訝かしく、
「然うでなけりや、言つて了ふが可いぢやないか。」
「は。」
と未だ躊躇つて居たが、頓て思切たやうに、
「では彼の……。」
と耳に口を寄せて、二言三言言難さうに囁いたと思ふと、急に衝と離れて先へ足早に出た。金彌は不意なので聞いて吃驚した。月は未だ僅かだけれど、歌子は最う只ならぬ身で居るといふ事である。

六

色に動いて、金彌は俄かに生氣立つた顏を振向けると、我にもあらず喜ばしげな眼を閃めかしたが、いきなり跡から追續いて、口を急しく、
「然うか。本當か。何だ、何が羞かしい。はゝ。や、えらい事になつたぞ。」
と言つたが、跡の其言葉が自分ながら可笑しかつたか、
「はゝゝゝ。」と重ねて聲高に笑つた。

歌子は尚羞かしげに顏を背けて、殆んど口の内に、
「私此處で言はうと思つたんぢやないのですけれど……」
「な、なに、那樣事があるものか」と金彌は打消して、何より先に知らせんで何うするんだ。」
「でも……。」
と歌子は更に若やいだ形で、笑つて下を向いて了つた。
「はゝゝ、いや併し好い時に好い事を聞いた。今入つて行かうといふ新生涯に、立派な意味を持たしてくれた。私の爲る事には、一層深く身が入つて來る。幸先が可いぢやないか。」
と言つて急がはしく跡を繼いで、
「何かい。母は最う其事を知つて居るのかい。」
「はい。阿母樣だけは御存知です。」
「然うか。母も此爲に尚強く出たのだな。それはまア何方でも可い。時も時だ。眞面目になれといふ私には是が天意のやうに思はれる。あゝ今から

最う先が望まれるやうだ。」

「まア、貴方は那様にも喜んで下さるの。」

「無論さ。喜ばんで何うしやう。や、兎も角歸つて、極りを付けてからにしやう。母は隱居してから、私の事に這麼口を出したのは初めてゞ、私の逆らつたのも初めてだが、彼の母だけに隨分思切つた註文もするだらう。それも可い。詫びる處は何處までも詫びて、仕置は存分に受やうぢやないか。最う何も惡びれんよ。」

「おほゝゝ、急に御樣子が違つて來ましたのね。あれ、那樣にお急ぎなさらないで……も。」

「なに實は、早く肩を拔いて今の何を祝ひたいのだ。や、那樣事を言つて居る中に最う家ぢないか。」

路が開いて、松が次第に疎らになると、海は迎へるやうに眼を惹いて、濱を此方へ、庭から續いて別莊は直ぐ其處に見えた。脇屋は座敷に端居して居たが、ゆくりなく眼を向けると、

「やアっ」

と立つて縁へ出て、頓て二人の、其儘裏手から入つて來るのを、眼顏に招いて莞爾莞爾して迎入れた。

伴れて座敷へ入ると、一時は流石に彼是はしたが、脇屋の舵に、談話は運んで、松江も言ふだけを言つて了ふと、解けるにむづかしい人ではなかつたから、跡には何も殘さなかつた。座は其中にさゞめいて、頓て心地よげな笑聲が起ると、氣勢に連つて、口も華やぐやうに、波は化粧した姿に崩れて、流れるやうに白帆が、暫く繪心に前を過ぎた。姑と義妹と、良人を一つに、歌子は初めて思通りの日が來たと思つた。

同胞

（一）

三間間口の押開いた店先の、向は北なので、流し場などは凍るやうだが、寒さにめげぬ若い者は、小僧を相手に向鉢巻で、眞紅の手をして勢よく盤臺を洗つて居る。魚は不漁で、今日は出前の數もなく、店の賣物もぱらりとして居る。ひゆう、と音して、颯と風が舞込むと、鼻ッ先の容赦のない吹曝しの中で、水を使つて居る手は捩斷れるやうなので、流石の若者も眼をぱちつかせて、

「ほうッ、馬鹿に吹付けやがるなア。」

言ひながらもごし／＼と洗つて居る。向つて左の、土間を入つて上框になつて居る隅の帳場には、お照といふ、未だ若い此家の女房、平素は何彼と忙がしいのに、身飾みもつい其儘にして居るのが、今日は少し念入りのお化粧に、不斷着

ながらも薩張した方のに着更へて、朝の手隙に結はせた髪を、若い毛艶の美しいのに引立たせながら、先刻から餘念なく、受持の帳合をして居たが、頓て濟んだか筆を擱いて急に振返つて背後の掛時計を見上げると、一寸眼を瞬つて、

「おや最う三時だよ。幸さんは遲い事。」

と帳面を片寄せて、立つて中仕切の障子を開けて奧へ入つて行つた。

其處は八疊の南へ向いて緣になつて、左は壁續きに一間の押入、壁に添うて茶簞笥用簞笥、横を劃つて欅の如輪杢の長火鉢が据ゑてある。主人の政吉は、昨日寄合でつい夜を更かしたのと、今朝の買出しの、いつより又早かつたのに、朝から始終寐不足の眼をして居たが、晝過一寸手の隙いたのを機に、店を外して、中へ入るといきなり、脇の火燵の中へ潛込んだ。お照の入つて來た時には、最う眼を覺まして居たが、其儘起きもせず、何か物思はしげに、眼をぱちくりさせて、背後向きに未だ横になつて居た。

お照は入りしなに直ぐ其方へ眼を遣つたが、政吉は振向きもせず、前面を向いたまゝ、默然で居るので、未だ寢て居るものと思つて、其儘長火鉢の前へ來て炭

を直して居ると、不意に、

「あゝ。」

と欠伸をして政吉が寢返りしたので、思はず加掛けた炭を下に、

「おや、起きてお出なの、餘り靜かだから私は未だ寢てお出かと思つたよ。」

政吉は氣のない顏で、

「ふむ。」

と言つたきり口を噤んで居る。お照は別に氣にも止めず、

「いゝ加減にお起きなさいよ。何も、幸さんも最うそちこち來るだらうから。」

聞くと政吉の顏は曇つた。投げたやうに、

「へん、來たつて始まらねえ。」

「え？」

とお照は聞咎めて、怪訝な眼で其顏を打目戍つたが、

「まア、お前さん何うおしなの？」

と言つて早口に、

「たつて可怪しいぢやないか。久し振で兄弟が、今顔を合せやうッてのに那樣……。」

政吉は叩消すやうに、

「默つてろい。那樣事ァ言はねえだつて解つてらァ。」

お照は政吉の此頃の不機嫌の本を知つて居る。去年の春から、引續いて思はぬ穴を明けた其手傷の飛沫なので、最初は近處に或料理店を開いた、それが全くの損失に終つて、今度は方面を變へて改良瓦の製造の事に關係した、これが又前よりも惡い結果で、一舉して少からぬ負債の渦の中へ捲込まれた。勿論其間も、親の代から引續いて來た魚屋は止めずに居たが、今の處これだけでは、前の大穴を容易に埋められない有樣で居るのだ。

お照は始終を知つて居るので、不愉快さうな良人の樣子にも、それと心に首肯いては居るが、併し其事は、今噂した此處へ來る人とは何の關係もないのだ。關係が無い處ぢやない、這麼時に心から相談相手にならうといふのは、此人を置いて外にありはしないのに、とお照は尚も不審がる。來るのは幸次といふ、

政吉の唯一人の弟で、今は伊勢の四日市で運送業を遣つて、近くめき〳〵と仕出して來た。兄弟顏を合はせるのは丁ど三年振なのだ。

お照は又も凝然と見て、

「お前さんが那樣風ぢやア、折角樂みにして來る幸さんに、私までが氣の毒になつ了ふぢやないか。」

政吉は耳にも掛けず、

「へん、何が氣の毒だ。畜生、此頃少しばかり鹽梅式が可いと思ふと、から最う夢中になつ了やがつて、お先眞暗でわざ〳〵見せびらかしに來やァがる。俺が驚くとでも思つて居やがるんだらう。氣の知れねえ頓痴氣だ。」

「まア。」

とお照は呆れ顏で、

「いくら幸さんが居ないからと言つて、お前さん餘り口が過ぎるぢやないかね。」

「はゝゝ。」と政吉は取つて付けたやうな勢ひのない笑ひ方をして、「なに、逢つ

て遣らねえと言ふんぢやなし、先方に文句があるもんかい。」
「まア、本當にお前さん何うかして居るよ。それぢや幸さんが餘り可哀相だわね。」
「ふん、お前は又、厭に彼奴の肩を持つぢやねえか。」
お照は聞敢へず聲を急しく、
「何をお言ひなの。串戯ぢやない。いゝ加減におしよ。私にも義理の人なら、お前さんにも血を分けた仲ぢやないか。肩を持つも何も有るもんかね。解らないのも大概にするが可いぢやないか。」
「な、何だと。」
と政吉はむくりと跳起きて屹と眼を据ゑた。
お照は強ひて言合ふ氣もないので、
「おほゝゝ、厭だよ、此人は。」
政吉も流石思直したか、調子を落して、
「ちよッ、馬鹿にするなえ。」

言ふ時表にそれらしい車の、不意と店先で止つたのに、お照は逸早く耳を欹てて、急がはしく身を返して、細目に背後の障子を開けて見たが、

「あら。」

と直にがらりと引開けて、笑顔を先に店へ駈出した。政吉は勿論それと知つたが、ぢろりと見たばかり、我にもあらず腹の中で、

「ちよツ、到頭來やがつた。」

と思つたが、親身と言つて、兄弟二人きりの、其弟がわざ〳〵訪ねて來たのに、と何處にか妙に疚しいやうで、厭な顔をして、人知れず溜息して此方に待構へて居た。

（二）

續いて店から、お照の華やかな聲と、耳に覺えのある、幸次の齒切のいゝ聲が聞える。小僧や若い衆の、簡單な併し情の籠つた挨拶に次いで、

「さア、まア奥へ。」

とお照の調子高な案内を先に、障子の中へ、脱捨てた二重廻を鞄に添へて持込んで莞爾々々して跡に續いた、三年前よりは又肥つた、幸次のがッしりした姿がお照の肩越しに見えた。

「おゝ、來たか。」

と政吉も顏を見ると、流石不機嫌の色も一時に消えて、血は血で我知らず懷しさうに迎入れた。

「や、兄さん、漸つとまァ出て來られたよ。」

と幸次は罪もなく、近く寄つて親しげに一別來の挨拶する。調子に誘はれて、政吉も暫くは惡い顏を見せず、頓てお照が座を設けた次の室へ移つて、其處で寛いで三人、幸次が心遣ひの土産物が前に並んだ頃には、用意の酒肴も其中に座へ運ばれた。

お照は立ちつ居つ、一人欵待振に忙しく、席の暖まる暇もなかつたが、漸くの事手を明けて下に落付くと、其儘談話を返して、

「幸さん、私共ぢや本當に甚麼に待つたか知れやしないよ。だつて去年も噂

ばかりて、到頭顔をお見せてなかつたのだもの。」
「いや、此方で待つてくれたよりも、私の來たい方が最つと甚かつたんだが、手紙で言つて遣した通りさ。何うにも手が拔けられないんで、氣ばかり焦躁つやちア日を送つて行くッていふ始末さ。今度だつて隙を狙つて漸つとこさと出て來たんて、それも最う五日とは緩くりして居られない用が出來てるんだ。恁う又忙しくつても遣切れないね。」
と少しは得意らしい面色、圓くふッくりした頰に血色のいゝ色を見せて、活々した眼を元氣らしく前に向ける。お照は調子よく、
「あらまア五日ッてそれんばかりしかお出ぢやないの。まア何ていふんだらう。折角來たのにせめて半月位はお出なね。」
「然う行きやア文句なしだが、儘にならない處が可いんだらう。なに私もね、こゝで最う少し儲込んだら、彼方も引上げて歸つて來るよ。何の道末始終永く居やうッて氣は無いんだからね。」
「だつてそりやア何日の事だか知れやしないんだらう。」

「まア然う言つ了やア然うだけれど、實は此地に些少見掛けた事もあるし、然うまア長い事ぢやない心算で居るのさ。生れた土地は忘られないよ。私にやそればかりぢやない。ならう事なら兄弟が、近間に居てお互に、力に成ッつ成られつして暮したいぢやないか。ねえ兄さん、お前にした處が然うだらう。」

「むゝ。」と政吉は煮切らない調子で言つて、跡を無愛想に、

「だが俺は、俺の事で人の力を借りやうとは思はねえ。」

お照は氣の毒さうに、

「あれお前さん兄弟だから可いやうなもんの、那様そッけのない挨拶ッてのが有りますかよ。」

幸次も一寸變な顔をしたが、直に笑つて、

「はゝゝ、なに兄貴はいつもの流義を出したんだ。私は何とも思つては居ないよ。兄さん、そりやお前は然うだらうがね、然う一概には言へないよ。誰しもお前、好い事ばかり有つてくれりや可いが、何う間違つて又、惡い日を喰合せないとは限らない。那様時にさ、他人ぢや然うは屆かない。親身の情愛は又

別だからね。」
「そりや情愛は然うさ。たが俺ァ性分でね、善かれ惡かれ自分の事で人に口出しをされるのが厭なんだ。」
「けれども兄弟は兄弟だらう。」
「そりや知れた事よ。恁うして來てくれりやァ、惡い心持はしないからな。」
「はゝゝ、矢張然うぢやないか。」
と譯もなく言捨てゝ、氣をかへて四邊を見廻しながら、
「あゝ、何と言つても古巢に越した事はない。恁う遣つて只居ても何となく好い心持だ。此家へ來ると矢張昔の子供の時分のやうな氣になるから妙だ。家に居た時位又氣樂の事はなかつたからね。時の經つのは早いもんだよ。今から思ふと全で夢のやうだね。」
「本當に早いもんだよ。」とお照は聲に連れて、「私だつて嫁付いてから最う六年になるからね。」
「然うかねえ。最う那様になるかねえ。然う言へば未だ若い中にも何處か、

何となく眞面目になつて來た處もあるね。」
「あれ若い處ぢやない。最ういゝ婆だよ。」
「何だ。今ッから那樣事言つちやァ仕樣がない。これからが花ぢやァないか。」
「まァ、いゝ加減におしよ。取つて最う三ぢやァないか。」
「だから是れからさ。」
「お戯けてないよ。」
「はゝゝ何も無理に婆さんにして了ふにも當らないぢやないか。だがねえ、未だ家へ來ない時分、綿屋の娘で居た頃はそりやァ全く若かつたよ。何しろ水の出端だつたからね、能く結綿に結つてたつけが、彼の時分の仇ッぽい樣子は未だに目に着いて居るよ。」
「お照は最う、全で世帶氣になつて居る身の、言はれて今更のやうに體裁を惡く、
「氣恥かしい。お止しよ最う。」

「重ねた盃の數も手傳つて、幸次は委細構はず、打笑みながら、

「兄貴も彼の時分は若かつたよ。今で言ふと可笑しいが、二人の爲にや、私なんざ幾度もだしに使はれて、有難い役を振られたもんだつたよ。いつの晩だつけか、阿父の使で神田まで行くから、一所に付合へッて兄貴に言はれて、何の氣もなしにひよこ／＼跟いて行くと、途中でひよッくり、ナニ實は待合はして居た嫂樣に逢つた。私は好いやうに胡麻化されて使の替玉になつて行つて、二人はこそ／＼何か話しながら繋がつて何處かへ行つた。何うだい兄さん、覺えて居るだらうね。」

政吉は苦笑ひして、

「今頃那樣事を覺えて居るものか。疾うの昔に忘れて了つたァ。」

「なに忘れた？　それぢや其跡を言つて見やうか。」

「止せ。言つたつて何になる、詰らねえぢやねえか。」

「はゝゝ、矢張覺えて居る中が可い。だが兄さんも、其時分とは全で變つたね。然ういふ當人も嘸變つた事だらうと思ふが、自分ぢやそれほどにも氣は付か

ない。嫂さん何うだね、私もこれで相應に變つたかね。」

「そりや變りは變つたがね、でも幸さんのは、何處も好い變りやうだから申分は有りやしないやね。」

「はゝゝ、油を掛けるもんだぜ。然う都合よく行つて堪るものか。だがね兄さん、お互にまア何う變らうとも、腹ん中は何處までも、昔の通りで行きたいぢやないか。」

「むゝ、そりやア然うとも。」

「兄弟だつて外にやア無いんだ。」

「むゝ。」

「離れて居たつて心ぢやア、手を取合つて渡らうぢやないか。」

と何時かしんみりとして言つた。政吉も非を言ふ處はなく、野郎もいゝ腹を持つて居る、とつい動かされて、持つて居た盃を献しながら、

「然うだ。それでなくちやならねえや。」

と我知らず聲を返したが、何處にか氣が濟まぬやうに、不意と口を結んで了つ

た。

（三）

翌一日は、人を訪ねるやら何やらで、幸次は落付いて兄と談話をする暇もなかつた。夜明前から降出した次の朝、いつものやうに政吉は暗い内に手ばしこく支度して買出しに出て行つた。續いて二人の若い者は車を引張つて威勢よく駈出して行つた。殘つた小僧を相手にお照は目盲縞の上ッ被で、かひがひしく立働いて居た。雨は小止みもなく風さへ交つて、其中に霙になつて來た。幸次は舌打して、

「ちよッ、仕樣がない天氣だな、今日は兄貴を誘つて何處かへ行かうと思つて居たのに。」

と忌々しさうに、外を眺めて居た障子を閉切つて、

「嫂さん何うだい一日降込められて居るのも智惠がないから、今日は一つ芝居でも奢らうか。兄貴が今に歸つて來たら、誘つて一處に出掛けやうぢやな

いか。途中が少し御難だけれども。」

「結構だね。芝居なら何時でも可いよ。」

とお照は今、一しきり用を片付けて、火鉢の前へ歸つて來た處、言はれて嫣然して振仰いだ。幸次は寒さに肩を竦ませながら、火の傍へ近寄つて、

「何うも馬鹿に寒じるね。商買とは言ひながら兄貴も嘸寒からうよ。」

「這麼時にや尙堪らないね。まだ〳〵來月一杯は、家に居ても隨分應へるからね。」

「尤も此奴も氣の持ちやうだがね。」

と抛出してあつた煙草入を引寄せて、

「時にね、私少し嫂樣に聞きたい事があるんだが、用は最う濟んだのかね。」

「はア、今手が明いて居るがね、何だえ聞きたい事ッて？」

と訝かしげに顏を見る。幸次は吸付けた煙草を拂いて、

「なにね。私の氣の所爲かも知れないがね、一昨日來てからの兄貴の樣子が私にあア何うも腑に落ちないのだ。」

お照ははッとして、思はず色を動かした。

「まア其事。」

「むゝ、何だか知らないが妙に恁う搦んで居るやうで、皮肉な、氣を惡くする事を言つて見たり、然うかと思ふと厭に餘所々々しく、現在弟の私を隔てるやうな事をするのは、ありや何だらうね。昨日なんざア朝ッから癪に障つたけれど、私も出掛けぢやあつたし、來早々顔を赤め合ふでもないと思つたから、蟲を殺してまア出て了つた。するとお前歸つて來ると又遣られたぢやないか。夜になると又客の居る前で遣られた。私は別に兄貴の氣に觸るやうな事をした覺えはないが、何だか譯の解らない障塊のやうなものがあつちや、お互に面白くなからうと思ふから、嫂さんお前、氣の付いた事があるんなら一つ知らして貰ひたいと思ふんだ。え、何か私が兄貴の心持でも惡くして居るやうな事があるのかね、有るならナニ、少々言難い事だらうが、構ふ事はない兄弟の間だから隱さずに言つて貰ひたいと思ふんで。全體まア何うしたんだね。」

お照は少し慌てた氣味で、

「然う、其事ぢや私も一寸お前さんに言はうと思つて居たんだけれど、つい機が無かつたもんだから言ひはぐれて居たの濟まないのね、お前さん那樣に氣をお遣ひだつたのかえ。」

「なに、私は恁ういふ男だから、何も別にそれを根に持つッて事もないけれど、這麼で居られちやア面白くなからうぢやないか。そりやア兄貴の妙な處へ一克なのは知つて居るけれど、何にもしない私に變な仕打をしてくれるには當るまいと思ふんだ。今日天氣だつたら、兄貴と何處かへ飲みに行かうと思つたのも、實は其事を打撒けて兄貴に話して、ぐッと解つて貰はうと思つて居たんだ。」

「然うかえ。まア。能く然うまでに思つておくれなのね。だがね、幸さん何うぞまア惡く思つておくれでないよ。ありやア皆、むしやくしや腹の八つ當りなんだよ。幸さんにや弟だけに、矢張心安立てゞ猶甚く打付かつて行くんだらうと思ふよ。」

「串戲ぢやない。那樣處へ心安立てをされて堪るものか。だが其八當りッ

てのは何なんだえ？」

お照は火を直して居た火箸を、灰に深く差込んで、顏を前に聲を落して、

「幸さん、お前さんは今此處の家が恁う遣つてまア體裁は作つて居るが、それは眞個の上ッ面の談話で、人には言はれないが、中は全くの火の車で居るのを知つてお出でかえ。」

「え。」

と幸次は意外らしい顏で、

「知らないそりやア。兄貴が全で話さないんだもの。知りやうがないぢやないか。だが家がいくら火の車だつて、私に何も當つて來る事もなからうと思ふが、そりやァまア跡廻しにして、何しろ其奴は初耳だ。一體何うして那樣事になつたんだね。家の身上は、相應にまア堅かつた筈ぢやないのかね。」

「それがねえ、今ぢや形無しのやうな事になつて了つたんだよ。去年そら、料理屋を出した彼からが手違の初めてね、跡から損を埋めやうとしちや、焦躁つて種々な事に手を出して揚句が、皆丸潰れて、殘つたのは借金ばかりぢやない

か。これで押して行つた日にや、こゝの店の方だつて最う立行かないやうな羽目になつて居るんだよ。詳しい事は私にも話さないがね、那樣這麼を胸に納めて、一人でやきもきして居る其屈托がつい八當りになるのだわね。惡い時に來合せたお前さんには本當にお氣の毒でね、私も甚麼に術ながらう。

幸次は煙管を下に落して、いつか腕を組合せて居たが、

「むゝ、だが然うだからッて掛構ひもない者に、下らなく當り散らすなんてのは、餘り氣が小さ過ぎるぢやないか。私は何うもそればかりぢやないと思ふが、それにしてもさ、那樣羽目に臨んで居るなら外ぢやァない私の事だ、何故然うと言つてくれないのだらう。何故相談をしてくれないのだらう、見蔑つて言はないのかも知らないが、然うしたもんぢやァあるまいぢやないか。ねえ、這麼時の兄弟だ。餘り人の氣も知らない。私にや何うも解せないね。隔てるにも先によりけりだ。如何にそれぢや氣まづいぢやないか。」

お照は繕ひ顏に、

「それがねえ、何によらず平素から、引け身を見せるのが嫌ひの人なんて、それ

こそ口までは出て居ても、思切つて言出す事が出來ないんだよ。」

幸次は聞敢へず、直に口を衝いて、

「其奴が自體解らないぢやないか兄貴でもない。私を何と思つて居るんだらうと。」言つて屹と「むゝ恁うしやう。兄貴の了簡はまア何うだらうとも、私は然う聞いて、可いわで默つて見ちや居られない。これで此方の腹が解つてくれりや猶更だ。私の方から切出さうぢやないか。勿論そりやア私が此處で手を貸すからと言つて、何も彼も殘らず奇麗にして直に元通りにするといふ譯には、然うちよッくらとは行かないかも知らないが、道は屹度、何とか法をかいて付けて見せる。自慢をするほども無いけれど、私の手元にも些少の餘裕は有るし、外に融通を付ける先は自由に持つて居る。こゝは私が差出て一つ働かうよ、這麼時に助合はなけりやア、親身に生れた甲斐は有りやアしない。そりやア丁ど好い時に來た、離れて彼地へ行つて居りやア、何にも知らずに過して居るのだからね。」

お照は言ふ事を知らぬやうに眼色に見せて思入を深く、

「あゝ能く言つておくれだ。幸さんなりやこそ然う言つておくれなんだよ。誰がお前這麼中へ飛込んで、何うしやうとも言つてくれる人があるものかね、親身の有難いのは全く別だね。本當に助かるよ。」

幸次は打笑つて、

「何だな、未だ何にもしやアしないのに、禮から先へ言はれちや狼狽いて了ふよ。何しろそれぢや、兄貴の歸り次第に早速其方へ取掛らうよ。私も落付いて長く此地にも居られないのだからね、能く談話を聞いて取る道だけは付けて置かなけりやならない。」

お照は折入つて、

「何うぞねえ。何分にも……何だか餘り厚顏しさうだけれど。」

「なにお前、私との間に那樣遠慮が要るものか。相身互さ。私だつて何う轉んで何時又甚麼世話にならないとも限らない、恩に着せる事も着る事もありやアしない。私も屆くだけの事をする。兄貴にも亦頼む事もある。凭りつ凭られつして行くのて立つたもんだよ。」

「有難う。本當に仇には聞かないよ。あゝ、私もこれて、急に安心したやうな心持になつたよ。」

「はゝゝ、餘りそりや氣が早いや。何う未だなるか知れやしないぢやないか。」

「でも幸さんが然う言つてくれりやァ、私やァ、最う安心して居るよ。」

「むゝ然う言はれると、役が甚くむづかしくなつて來るけれど。」

言ふ時がらりと中仕切が開いて、寒さに色のない、苦り切つた顔て政吉が入つて來た。

「おやお歸りなさい。」

とお照は振返つて急がはしく座を開く。

「兄さん、寒かつたらう。」

と幸次續いて聲を掛けた。

「むゝ。」

と氣のない返事をして、政吉はお照の今退いた跡へどッかと腰を下した。お照は茶簞笥の湯呑を取つて茶を注ぎながら、

「河岸は何うだッたえ。」

「からッ不漁だ。」

「遣切れないね毎日それぢや。」

「むゝ。」

「あのね幸さんがね、お前さんが若し可かつたら、今日は芝居を奢るとさ。」

「ふむ、錢のある奴はどしどし遣ふが可いや。」

「おほゝゝゝ、何だねえ。何とか言ひやうがありさうなもんぢやないか。」

「兄さん、其前に少し談話があるんだ。」

「然うか。後に聞かう。」

と半分茶を飲殘して、煙草を一服吸つたかと思ふと直ぐ、煙管と一處にいきなり煙草入を摑んで、ぷいと店の方へ行つて了つた。幸次は跡を見送つて、お照に呟くやうに、

「ね、何うも變だよ。」

（四）

芝居も那樣模樣でつい立消えになつて了つた。政吉は兎角に談話を避けて、始終店の方へ外して居たが、手隙に一寸、と二度三度お照に言はれて、澁々ながら奧へ入つて來た。が、

「何だ。何の用だい。」

「あれまアお坐りな。」とお照は幸次の手前を心苦しく、「それぢや談話が出來ないぢやないか。」

「だが俺ァ未だ、店に仕殘して來た事があるんだ。」

と言つてぢろりと幸次の方を見る。幸次は穩やかに、

「邪魔をしちや濟まないがね、急がない事ならば一寸話して行つてくれないか。實は今嫂樣に聞いた事が、急に氣になつたもんだから來て貰つたんだ。眞面目な談話なんだよ。」

「何だ。」と政吉は進まぬながら坐つて、疑はしげにお照を見ながら、「お前は又

何を饒舌くつたんだい。」

「だつて外の人ぢやない幸さんだもの。隠して置く事はないと思つたから、談話の序に内輪の今苦しい事を打明けて了つたのさ。」

「なにッ？」

と政吉は急に氣色を變へて、腹立たしげな、苛々した調子で、

「何で那樣勝手な事をする。お前が何を知つて居るい。いゝ加減な當推量で、何か大業に言立てやがつたんだらう。ちよッ、餘計な眞似をしやアがる。」

それなり幸次の方へ振向いて、

「幸次、お照なんぞの言つた事を殘らず本當にしてくれちやア困る。針を棒に騒立てるのが此婦の癖なんだ。なアに、言ふほどの事は何にも有りやアしねえだよ。」

「兄さんそりやア可けない。」と幸次は押切つて、「お前は何故然う私を隔てゝくれるんだ。」

「な、何だ隔てるたア？」

「隔てゝ居るぢやァないか現に。那様言拔のやうな事を、何も私の前で言つてくれなくつても可からうと思ふ。そりやァ私のやうなもんだから、役にやァ立たないかも知れないが、それにしても言つてくれたら何うなんだ。兄弟ん中に見得は要らない事た。ねえ、それぢやァ餘り水ッ臭いぢやないか。」

政吉は空嘯いて、

「知らねえや。一人で決めて居るんなら何うとも勝手にするが可い。此方の構つた事ぢやねえ。」

「兄さんお前は私を兄弟とは思つて居ないのかい。」

「何うだかな。」

「酷い。そりやァ酷い。だが何うも解らないよ。兄さん、ぢやァ談話をするから聞いてくれ。昨日も實は、お前の變な樣子に氣を惡くして、彼方の室へ行つて寐て了つてからも、厭な心持で寐付かれない。一人てまぢ〳〵して居ると、不意と彼の、天井の眞中に張つてある觀音樣の御符が眼に入つた。久しい前から張つてあるんだが、あゝ未だ昔の儘にあるのかと思つた時、それ何とか

いふ悪い熱を私が患つて、矢張彼の室に寐て居て、身體が利かないもんだから、眼ばかり動かしちやア、毎日能く彼の御符を見た事をふッと思出して。丁ど彼の時は阿母が亡くなつた跡で、家は男手ばかりだつたが、兄さんお前が、忙がしい中も厭はず身に引受けて、未だに忘れられない屆いた看病をしてくれた。醫者の骨折もあつたらうが私はお前の看病のお蔭で助かつたと思つて居る。あゝ此兄貴には、甚麼事をしても盡さうと癒つた時につく〴〵思込んだッけが、あれほど情の深かつた兄貴が、何うして恁うも變つたのだらう。と何う思つても解らなかつたよ。兄さん、これぢや何分にも氣が濟まない。私が何か、お前の心持でも惡くした事があるんなら、打明けて平ッたく言つてくれないか。私は昔の通りの私だが、今度來て逢つたお前は、何うも昔のやうに思はれないでならないよ。」

「…………………。」

「兄さん何うだい。私の言つた事は解つてくれたらうね。」

政吉はむづかしい顔で、何か心に鬪つて居るやうに、暫く口を開かずに居たが、

不意にむくりと首を上げると、鼻であしらつて、
「ふむ、飛んだお談義だァ。」
と言つたが聲は折れた。幸次は重ねて力を入れて、
「まアそりやア可い。つい外ッ方へ逸れ了つて未だ言はなかつたが、兄さん、隱しッこは廢止にして、ねえ、私も嫂さんの談話で概略は察したから、私の言條を一つ聞いて貰はう。何うだい兄さん、知つての通り私も彼地で些少ァ芽を出したら、家に遊んで居る金も若干かは持つて居る。其奴を費つて貰はうぢやないか。お前の爲なら私も付くだけの都合をする。割つて何も話合つて、及ばずながら相談に乘らうぢやないか。」
聞くと政吉は急に又屹となつた。
「いや斷らうよ。」
とすきりと言ふ。
「なに、斷る？」
と幸次は急込んで聞く。政吉は首肯きさま、

「むゝ平ッたく斷らうよ。志は有難いが、俺ア這麼事で、お前の手を借りやうとは思はねえ。俺のした事は、俺が一人で埒を明ける。打捨つといて貰はう。俺にやア俺の考もあるんだから、折角だが心配はしずに置いてくれ。」

お照は堪へず口を差入れて、

「まア、お前さん、何が當で那樣事をお言ひなの？　私アお前さんの今最う何うにもならなくなつて居るのを能く知つて居るよ。解らないッて那樣解らない事があるもんかね。第一まア幸さんの、係うまでにして言つておくれなのを、お前さんまア何と思つてお出なんだらう。」

政吉は振向きさまに眼を光らして、

「えゝ默つて居ろい。お前の知つた事ちやなえや。」

「いゝえ默つちや居られないよ。何ぽ何だつて私、那樣譯の解らない人ぢやないと思つて居た。假令幸さんから言出さないでも、此方から押付けても頼まなけりやならない中で、お前さん本當に何うおしなんだよ。氣でも違つて居るんぢやないの？」

「な、何を言やがるんでえ。」

言ふが早いか、いきなり拳を振上げて撲飛ばした。お照はあッと叫びながら身を退いて、

「まア、那麼亂暴な……。」

「何をッ、」

と又立掛る。幸次は急に立つて中を押隔てたが、何時か顏色は變つて居た。

「何だな。私の事で何も嫂さんを撲つには當らない。」

政吉は勢ひに驅られて、赫と逆上せで、我知らず呼吸を早く、眼を最う逆釣らせて居たが、言はれて荒々しく、

「なに生意氣な事を吐しやァがるからだ。むゝ幸次、お前の方も手取早く片を付け了はう。おい、お前最う歸つてくれ。え、おい。歸つて行つて貰はう。」

「なに歸れと。」

「むゝ、目障りだ。面ア見て居ると氣色が惡くなる。さつさと出て行つ了へ。物を言ふだけ癪に障らア。」

「儘にしやアがれ。」と幸次は憤然として、「今迄我慢に我慢したが、最う堪へちや居られない。此方にも蟲が有らア。大抵にするが可い。盡すだけは盡して遣らうと思ふから、種々にして言つて遣るのを、何も彼も無にしやがる。勝手にしろ。むゝ歸るとも。歸らなくつて。」

「行け〳〵ッ。へん、我慢もねえもんだ。我慢は此方がして居らア。折角來やがアつたからと思つて、胸を押へて居たんだ。些少ばかり景氣が好いからッて増長しやがつて、何でえ、胸ッ糞の惡い大きな面アしやがつて。」

「はゝゝゝ、僻んでるんだな。下らない。何の事たい。」

政吉は聞くと齊しく疊を蹴つて飛掛かつた。矢庭に肩を引摑んで、

「何を愚圖々々してやがるんでえ。減らず口を叩かねえで、とッとゝ消えて了やアがれ。」

と力任せに突飛ばした。幸次は僅かに踏止まつて、眼を怒らして睨返したが、流石に手は出さず、物も言はず鞄の置いてある次の室へ駈込んで行つた。

お照は見ると共に急がはしく立つて跡を追はうとした。

「これ、何處へ行く。」と政吉は直に取つて押へて、「見ッともねえ。動きやアがるな。」

「あれ這麼事にして了つちや……。」

「えゝ、餘計な口を利きやアがるねえ。」

「それでも私……。」

「ちよッ、默りやアがれ。」

又二つ三つ續けて打たれた。お照は力及ばず其處へ泣伏して了つた。途端に、

「親方、ど、何うなすつたんで。」

と小僧の多吉が、吃驚した顏で店から飛込んで來た。政吉は頭から怒鳴付けて、

「引込んでろッ。手前の知つた事ぢやねえ。」

「へえ。」

と多吉は勢ひに呑まれて引退つて、折節二人の若い者の、得意廻りに出拂つて

居るのを心細さうに、樣子を知らず店で只うろ〳〵して居た。
幸次は其間に支度して、頓て來た時の服裝で出て來ると、惡く改まつて、
「や、何うも御厄介で。」
「ふむ。」
と政吉は鼻で挨拶した。お照は隙を見て脇へ拔けて、壞れた髮を其儘に、涙に濡れた眼を上げて、
「幸さん腹も立つだらうけれど切つても切れない親身の事なんだから、何うぞね、惡く思はないやうに……。」
幸次は打つて變つて冷やかに、
「む丶、だが肝心の當人がこれぢやアね……。」
「本當に何うしたら可からうねえ。それにしてもお前、これから何方へお出なの? 直に家の方へ行つてお了ひぢやあるまい。」
「まア出た處勝負だ。」
「此まア吹降りの中をねえ。」

と氣の毒さうに言ふ。政吉は聞えよがしに、
「張子ぢやあるめえし。」
幸次は默つて店へ出て行つた。お照は追掛けて、
「お待ちな。多吉に今車を然う言はせるから。」
「なに出て乘るよ。」
お照は門口で、
「飛んだ事になつて了つたね。幸さん後生だから最う一度來ておくれよ。」
幸次は最う多く言ふのも厭さうて、
「兄貴次第さ。」
とばかりで出て了つた。お照はあられない心地を胸に、門に立盡して、霙の中へ出た寒さうな後姿を見送つた。
政吉は此方に一人跡を却つて惱ましさうに、言はれぬ面色で、凝然と眼を据ゑて居たが、矢庭に立つて、急がはしく身支度して、先も告げず、氣の狂つたやうに外へ飛出して行つたが、それから一時間ばかりして、或馴染の酒樓の奥に、酒を

罵り、肴を罵り、酌を罵り、座を罵り、眼に入るものを罵盡して、端から無茶苦茶の暴れ酒、醉つて大の字になつて寢て了つた。

魔道

其日會社から歸つたのは、いつより少し早く未だ四時前だつた。快く湯を遣つて、丁ど上つて來たばかりの處へ、何か知らぬが速見といふ友人から、妙に慌てた樣子で、逢つて是非に賴みたい事がある。直に行くから待つて居てくれといふ電話が掛つて來た。

此人は博言學者で或學校の教官の中でも古顏の方で、年も私よりずつと上の、最う不惑の關を五六年前に通越した紳士だ。慌てる人ぢやない。慌てるやうな事のある人でないのに、取急いで何を言ひに來るのかと、聊か不思議に思つて居ると、車で乘付けて、取るものも取敢へず來たといふ姿で、色を變へて遣つて來た。

速見の這麼樣子を見たのが其日が初めてだ。只事でないと思つて、取敢へず奧へ迎入れたが、何か氣の毒のやうにどぎまぎして、挨拶も上の空で、

「や、鳥尾君、よく居てくれた。實は今會社の方へ電話を掛けたんだがね、歸つたと聞いて慌てゝ此方へ掛けた。居ないかと思つて冷々したよ。」

「ふむ、何だい。全體何事が起つたんだい。」

速見は何時もの輕からぬ調子を尙重く、しかつめらしい顏を面なげに、

「いや近來の大失策。」

「え？ 失策？ 珍らしいな。君のやうな謹厚な人にも失策といふ事が有るかね。」

と言つて顏を見ると、それなり額を抑込んで、

「いや何うも謹厚などゝ言はれると、面目なくつて實に談話が出來んよ。」

「然うか。まア何か知らんが聞かうぢやないか。話したまへ。何ういふ事なんだい。」

「そ……それが何うも……。」

「はゝゝ、甚く言出し難さうだな。構はんぢやないか、君と僕との間だ。殊に僕を目指して來て置いて、今更尻込みをするのは少し聞えんぢやないか。何

しろ聞いた上でなければ譯が解らん。露骨に言つて了ふが可い。何だえ。」
「實は少し秘密の事なんだ。」
「秘密。宜しい。其心算で聞かう。で、事件は？」
よく〳〵言難かつたと見えて、速見は未だ口を切らぬ。
「いや實際何うも、恁う對合つて言ふ事も出來ん事だ。」
見ると額に汗をかいて居る。
「串戯ぢやない。那樣事を言つて居た日にや何時まで經つても埒が明かんぢやないか。」
と言はれて漸く、
「いや笑つてくれたまふな。恐らく君にも想像の付かない飛んでもない事を爲て了つたのだ。」
「ふむ、何ういふ事を。」
と言ふと途切れ〳〵に、
「あのなア、それ、君の方から世話してくれた、彼の、仲働のお光なア………。」

と跡の言葉は更に濁つた。お光といふのは、此近くの、私の所有地に住つて居る植木屋の娘で、此頃速見の家で仲働が缺けて困つて居た時、行儀見習の爲に何處かへ出したいといふのを聞いて、此方から世話して遣つたのだ。容色の好い、奇麗な女で、十七だが、相應に才發けて、家に居た頃から却々氣働きのある小娘であつた。

思寄らぬお光の名が唐突に沸いて來たので私は、意外な思をすると同時に、逸早く良からぬ想像を廻らして思はず微笑掛けたが、談話を折るまいとして色にも見せず、

「ふむ彼娘が？

と跡を促した。速見は此方を羞明しさうに伏目の儘に尙舌を重く、

「實は昨夜なんだ。妻は知つて居る通り此間から鄕里の方へ行つて居る留守で僕は例の竹岡の榮轉祝で非常に醉つて歸つて來た。いや實際今から思ふと何うして如彼いふ氣が出たか解らんがね、僕に似合はない不都合な事を遣つたんだ。所謂出來心といふのかね。何うも談話にもならんがね……。

丁ど其處等に誰も居なかつた折で、光に向つて、つい串戯を……。いや笑つてくれたまふな。」と言つて額の汗を押拭つた。

可哀相に、平素の速見は全で消えて失くなつて居る。見るも無殘といふのも餘り言過ない姿で居る。流石に笑止なので、

「いや笑やァせんよ。併し君にしては珍無類の出來事だな。むゝ、何うしたそれから。」

「醉つて居たのと、跡で驚いたので、前後は甚だ有也無也だがね、元來這麼事に全で不案內の僕の事だから、定めし突飛だつたんだらうが、非常に驚いたものと見えるんだ。飛んだ事をした。と初めて愕然としたが最う追付かない。詫を言はうと思つて行くと、光の方ぢや恐怖の念が先に立つて居るから、何をされるかと思つて夢中で駈出して家を出て了つた。追掛けたが最う及ばなかつた。」

「むゝ君が？　そりやァ恐らく觀物だつたな。」

「いや實に汗顏の至りだ。今更何うも何とも言ふ事が出來ない。」

「で、何うしたねそれから。」

「それツきり光は歸つて來ないのだ。僕の醉は一時に醒めて了つた。昨夜は其爲に寢る事も出來ないのだ。一旦の過失が、結果によつては實に拭ふ事の出來ぬ耻辱になつて了ふ。實際意識して遣つた事ぢやないけれど、恁うなつて了つた上は何とも言ふ事は出來ない。僕は何處までも罪に服さんければならんのだ。併しね、人といふものは弱いもので、僕は矢張持つて來た體面を飽までも維持して居たい。今迄の速見誠之助を捨てゝ了ふのに忍びんのだ。僕は實際寢られなかつたよ。自分の不覺に對して人知れず泣いたのだ。」

私は只首肯いた。

「それは可い。が、光の方は何うしたね。」

言はれて速見は我に返つた。

「むゝ、まア其僕の方の種々の事は抜いてね、光は其足で、自分の家へ逃げて行つたのだ。今日になると、君の知つて居の彼の親父が、改つて掛合に來た。」

「彼の重吉が來たか。ふむ、何と言つて。」

速見は眞顔に、

「いや嚴重な掛合なんだ。何うしてくれると言つて、正面から僕の不都合を鳴らして來たんだ。僕は平謝罪りに謝罪つた。有らゆる言葉を盡して謝罪つた。が、先方は却々承知しない。見せしめの爲に訴へるといふのだ。飽まで內分には出來んといふのだ。」

私は微笑んだ。私は重吉を知つて居る。實際又訴へる氣がある者なら、わざわざ手間を缺いて掛合などに來るものかと竊かに冷笑つたが、速見は併しそれ處ぢやない。

「僕は實際弱つたよ。出來るだけ陳辯したんだが、何うしても免してくれんのだらう。途方に暮れて了つたが、漸くの事で、兎も角も今日の中に、其方の氣の濟むやうな挨拶をするから、それまで何うか待つてくれといふまで漕付けて一旦は歸した。」

「むゝ、それで僕の處へ來たのか。」

「いや何ぼ親友の間でも、何うも面と向つて恁ういふ事を言ふ事は出來ない。

と言つて自分一人で衝に當つて、巧く處理して了ふといふのは甚だ覺束ない。言難いのは同じ事だが、内輪の叔父に一つ頼んで見やうと思つて、此言は覺悟の上で出掛けて行つたんだ。すると生憎のもので、叔父は行違ひに大阪へ發つて行つた跡だ。無據く君の處へ持込んで來たやうな始末なんだ。實に迷惑至極と思はれるだらうが、君を措いて外に打明けて恁ういふ事を頼む人はない。今迄の交誼に免じて、一肌脫いでくれる譯には行くまいか。頼む。平に頼む。こゝで假令訴へられん迄も、恁ういふ事が若しばッとして見たまへ、僕の名譽は忽ち地に墜ちて了ふ。次第によつては地位も失つて了ふ。僕のやうな一本道を只歩いて居る男は、再び世に立つ事が出來なくなつて了ふかも知れない。濟まないが君の力で、こゝを一つ救つてくれる譯には行くまいか。君ならば必ず何うかしてくれると僕は信じて居る。厚顏しいが何とか策を講じてくれんかね。」

這麼弱い音を吐く男ではなかつたが、正直な人といふものは恁ういふものか。と私は速見の其眼色を見るに忍びなかつた。大きく首肯いて、態と平氣

な顏を見せて言つた。
「宜しい。心配したまふな。僕が引受けた。那樣事は朝飯前だ。大丈夫だ。僕に任せて安心して居たまへ。尻尾を出すやうな事はせんよ。なアに何う轉んだッて驚きやアしない。君の名前に關るやうな事には必ずせんから、那樣事は最う忘れて了ふが可い。あゝ併し這麼事でまア可かつた。僕は君の血相が餘りに變つて居るんで、實は最つと容易ならん事かと思つたよ。有り内の事だ。なアに何うにだつてなるさ。」
逸見は併し落付かず、
「いや、僕は却々這麼事處で濟まされちや居られないのだから……。」
「はゝゝ、然う眞ッ正直に考へて居た日にや仕樣がない。默つて僕に任せて置きたまへ。惡いやうにはせんからね。」
と手近にあつたウヰスキーを、臺付の小さな洋盃に注いで薦めて、
「何しろ勇氣を付けるが可い。這麼事でへこたれて何うなるものか。遣られかまア氣付けに一杯。」

速見は手も付けなかつた。
「いや酒は御免蒙らう。事が落着するまでは、飲む氣などには兎てもなれん。」
弱い男だ。那樣で能く談話のやうな事が出來たと言ひたくなるな。
「全くだ。何うして僕は那麼事をしたかと今でも疑つて居た。」
「まア可いさ。遣つて了つた事は仕方がない。自分の爲た事は何でも是認するのさ。自分を非難するやうぢや、旣に一步を他に讓るんだからな。僕は那樣遣口は嫌ひだ。」
と言つたが、氣が付いて談話を轉じて、
「處で先へ當るんだが、僕の事だからそりやア叩付けるが、相手が相手だ――、此方の身分が身分だから、何處までも穩便にするに付いては、事によつたら少し金が要るかも知れんよ。」
「いやそりや無論承知して居る。」
と用意の包紙を直に出して、
「こゝに百圓ばかりあるか、此位な事で何うかなるだらうか。」

「や、そりや手廻しが可かつた。君も餘程氣を揉んだと見えるな。なに談話だけの事で那樣に要るものか。君の名前に對して口塞げだけに遣つて置かなけりやならない場合があるだらうと思ふんだが、それも先の樣子次第さ。まア額は僕が好い加減に見計ふとして兎も角預つて置かう。」

「萬事何うか宜しく賴むよ。」と言つたが未だ氣遣はしさうに、「だが君、金だけで濟むだらうかね。今日遣つて來た時にも其事を言つたんだが、全で受付けやうともしないんだ。」

「はゝゝ、大丈夫。那樣事は僕の方寸の中にある。安心して待つて居たまへ。君も僕のやうな友達を持つて恁ういふ時には幸福だね。」

笑つて言ふと眞面目に受けて、

「全くだ。君のお蔭で助かるよ。」

私は何とも知れず此時、氣の毒な男だと思つた。これだから嬶の尻に敷かれるのだと思つた。いや併し、其處が學者かも知れぬと思つた。然うだ。其處が有難い處だと思返した。實際今日の速見君は、這麼悄氣返つた姿で三文

の價値もないけれど、斯學の上では尋常人の企て及ぶべからざる人であるから、私はそれを買はねばならぬと思つた。

これで濟まして了へば可かつたのを、私に此時、ふら／＼と串戯氣が出た。此串戯氣は私の持病なんだ。

私は嫣然して、

「速見君、其方の用は最う事濟だがね、君は僕に未だ白狀しなけりやならん事がある。」

「え、何を？」と速見は怪訝な顏をした。

「光の事をさ。」

「光？　光の何を？」

「何をもないもんだ。最つと有體に言つて了ひたまへ。君は單に昨夜不意に起つた出來心のやうに言つたが、僕は然うでない事を斷言して遣る。」

と尙笑を含んで言つた。速見は甚く慌てゝ、

「そ……那樣……。此際然ういふ何うも……。」

「白狀したまへ。僕の方には明白な證據があつて言ふのだ。」

「ど……何いふ證據が？」

「はゝゝ、君、證據を數へられてから、屈服して初めて言ふやうな穢ない事をしたまふな。潔く白狀したまへ。僕の眼は外の事には節穴だが、然ういふ事に掛けては鷹の如く鋭いのだからな。」

「困つたな。何うも困つたな。」

「何も困る事はないさ。可し、君が然う隱し立てをして居るのなら、僕は今度の件で口を利くのは御免蒙るから。」

「待つてくれたまへ。待つてくれたまへ。困つたな。ぢや言ふから。」

と曩には手にしなかつたウヰスキーの洋盃を取ると一息に呷付けた。私は見ると聲を揚げて、

「はゝゝ、や僞君子、假面を剝いだな。」

「僞君子は酷い。」

「なに僕等の一部ぢや、自分を欺いて居るものに其位の事は遠慮なく言ふ。」

「併し僕に僞君子は少し可哀相だ。」

「可哀相なものか。現に今度のやうな事を仕出かしたぢやないか。」

「何うも然ういふ弱點を突かれちやア……。」

「はゝゝ、まア可い。最う一盞遣りたまへ。」と又盃を滿たして、

「さア白狀だ。何うしたんだい其方の方は？」

「言ふよ。そりや何だ。昨夜の事は實際咄嗟に起つたんだが、實は其何だ、前から其、思つて居らんでもなかつたのだ。」

「何だ。甚だ汚なびれた白狀の仕樣だな。可し、言草は何うでも可い。處で何うだ。君が思を懸けて居たといふんなら、何も遠慮して小さくなつて居る事はない。進んで手に入れたら可いぢやないか。詰らなく內訌さして置くやうな愚劣な事を何故するんだ。然うなりや僕だつて又別に掛合の仕樣がある。なア君の周圍を氣遣ふなら、僕が何處までも引受けて衝に當らうぢやないか。びく〱したまふな。男が見込んだ事を果さずに引下るなんて、那樣意久地のない談話があるものか。遣りたまへ。進んで取るものを取るが可い

い。僕が肌を脱ぐ。矢でも鐵砲でも僕が代つて引受けるよ。」

速見は少からず辟易した姿だ。

「そ……那樣事を僕が……。」

私は笑つて斥けた。

「なア昔ッから時代の英雄は皆然うして來たのだ。何も言たまふな。僕は其心持で掛合ふから。」

「いや。ま……待つてくれたまへ。」

「はゝ、今更何を言ふのだ、乘りかけた船ぢやないか。」

と這麼事で到頭此人の持つて居た下地を煽付けて了つた。

一つには好奇心もあつたが、一つには兎に角速見に、醉興ながら或滿足を與へたかつたのだ。

重吉に向つての談判は、私の豫期して居た通り譯もなく落着した。私が重吉の心事を能く知つて居るのと、殊に重吉の首根ッ子を實は抑へて居る事があるので、談話は半時間ばかりで、運んで了つた。

帯を捲いて、小さき橄欖の徽章が黄金色に輝く麦藁帽を水平に冠つて居る。是と並んだ女の方は年頃二十恰好、艶やかな廂髪が甘薯の葉や路傍の夏草の裏を返して吹く風に輕く搖いて、二筋三筋白い頬にこぼれかゝつて居る、目鼻立の冴え〲しく、中形の浴衣に華美な夕禪模樣の帯を締めて居るが、翳した海老色緞子の洋傘は、男の細い眉のあたりに濃い蔭を落して居る。

この小徑の末は海氣館の中庭に通じて居るが、其處には低い小松の蔭に、涼しさうな家の小窓が幾個も見えて、その向ふには青い海が松の梢越しに望まれる。

男は眉を寄せて、

「然う幸枝さんのやうに言つたつて、今すぐ君子さんを一人歸すといふ譯にや行かんですもの。それこそ伯母さんが屹度承知しないから。」とやゝ不平らしい口吻である。

幸枝はこぼれかゝる鬢の毛を搔上げながら、

「あら、阿母樣は屹度承知する事よ。昨宵もね、晋さん、貴方がお湯へ行らしつ

た隙に私一人で本を讀んでたのよ。するとね阿母樣が然う仰有つてよ。」

と晉次の顏を見詰めて、

「阿母樣は恁う仰有つてよ。君子は矢張昔の許婚の時のやうに晉次を思つて居るのだから、彼女の身には可哀相だけれど、今から離して置かないと終には姉妹の仲が惡くなるッて。だから晉さんが其氣なら君さんを歸す事は出來ますわ。」

言ひつゝ幸枝は路傍の小石を蹴付けた。すると石はころ〱と轉がつて脇の細流の中に落ちたが、其處から黑い大紋蝶がひら〱と飛んで來て、やがて夏草の青い茂みの中に隱れた。見て居たが晉次は思出したかのやうに、

「然う貴女のやうに言つても、君子さんの身になつて見ると、亦同情すべき點があるです。早い談話が貴女と君子さんと境遇を轉じたと考へて御覽なさい。それに折角伯母樣に伴れられて避暑に來て居るものが、僕等二人の邪魔になるからつて譯もなく歸すのは可哀相です……。」

幸枝は晉次の言葉を遮つて、

「そりや君さんの非運といふものよ。そんな事を彼れ是れ言つた日にや仕末が付かないわ。要するに何よ。君さんは自分の運命に柔順でないからだわ。」

と言つたが、ぢつと晉次の顏を視ると、

「それとも何なの。晉さんは矢張昔の方が好いと思ふの？　え晉さん。」

と勝氣のある黑い瞳を見張つた。

「馬鹿な、そんな事を‥‥。」

譯もなく勢よく係う言切つたが、暑さうに袂からハンケチを取出し額の汗を拭去ると眼を反らして藷畑の果ての方を見て居る。藷畑の末は玉蜀黍の畑に連つて居るが處々刈去られた跡の、盛返された土の上に一人の老爺が眞赤になつて鍬を振つて居る。

幸枝も眩しさうに瞬きながら、

「そんなら晉さんは、私の意見に同意を表して下さる筈だわ。その方が二人の幸福よ。」

「貴女の意見といふのは甚麽のです。」

「あら、先刻から度々言つたのに、一口に言つて了へば君さんを歸すのよ。そりやアね、二人が勝手に歸すのなら同情が無い仕打と見られるけれど、阿母様も私と同意見よ、そりやア最う誰だつて然うだわ。だから阿母樣に連れて歸つて貰ふのよ。」

「併し君さんが歸らないと言つたら何うします。」

「那樣事はないわ。晋さんは昔から氣が弱いから那樣事まで兎や角心配なさるけれど、君さんは那麼內氣な性質だから阿母さんが一處にお歸りと言やア直に歸るわ。もし厭だなんて言やそりや我儘といふものよ。」

と素氣なくも幸枝は言切つて了つた。

晋次は暫く押默つて居たが、

「だけれどね、幸枝さん、貴女はそれで君子さんに濟むと思ひますか？」

と君子の賴りない身の上を思つて、そゞろに催來る悲愁の情に堪へないさまである。

幸枝は相も變らず、

「濟むの濟まないのッて、そりやア何よ。昔の事よ。」

「そりやア然うです。昔の事にや相違ないけれど、たつた二年昔の事だけれどね、君子さんの身になつて見ると……。」

「又なの。晋さんは……。」

憤然として顏を背けたが、聽てホッと太息をついて、

「そりやアね、何ぼ私だつて君さんの身になつて見ると、甚麽に悲しいか位の事は承知して居ますわ。」

「さア、そんなら今無理に君さんを歸さなくつても可いぢやありませんか。」

恁う言ひつゝ晋次は腰を屈めて、其處の靑い夏草の中にたゞ一本、咲いて居た夏花を根から折取つてそッと鼻の先へ押當てゝ、有りもしない香りを嗅出さうとして居る。

路の傍の細流の面をかすめるやうに鶺鴒が一羽飛去つた跡の水に小波を起した風は、夏草の裏を白く返して二人の袖を吹く。晴れた空は強い夏の光線に

冴返つて、悲しい夢を重ねたやうな日和である。

默つて歩いて居たが、幸枝は、

「それぢやね、晋さん、私最う君さんを歸さなくつても可い事よ。」

晋次は手に持つて居た花を又鼻に押當てながら、

「然う言つて下さりや僕も嬉しいです。這麼事を僕の口から言ふのも頗る變ですが今強ひて、君子さんを東京に歸したつて君子さんの身になつて見て可いと思ふ事があるだらうかとまア思ふのです。却つて、あらぬ方まで邪推を廻して病氣にでもね……。」

「病氣ツて言ふと、君子さんは今でも殆んど病氣よ。」

「然うでしやう。だから病人は可哀相な身の上だから同情を寄せなけりや無らないでしやう。」

恁ういふ折しも稻毛の停車場の方から駈けて來た一輛の人力車を避ける爲に二人は一足途の外に寄つた。この道は殆んど一の畔徑の廣いやうなもので、二臺の車は並行する事は出來ないのである。

勢よき車夫の掛聲と共にがら〳〵行過ぎやうとする車の幌の中を見ると、晉次は突如、

「やッ、佐藤！　伊藤ぢやないか。」

「やア及川か。」

と車上の青年は白い線の入つて居る制帽を一寸脱しかけたが、車は既衝と先へ行過ぎた。

晉次は車臺の背後に追縋るやうに、

「君は何處へ行くのか。君の宿は何處だね。」

「海氣館だ。」

すると晉次も背後から大きな聲で、

「僕も海氣館に居るのだから……。」

恁ういふ中にも車は既半町近くも離れて了つた。晉次は後れた幸枝を手招ぎして呼んだが、萎れかゝつた夏花が日に映えたやうな海老色緞子の洋傘をゆら〳〵搖つて駈けて來た時には、佐藤を乗せた車は海氣館の中庭に多き松

の小蔭に消えて居た。

(二)

幸枝は妹の君子と三つ違ひで、飯田町の重田家に呱々の聲を上げたのは今より二十年昔の春である。父は今尚某會社の重役をして、極めて溫和な質の人であるが、この姉妹は生れながらにして相容れざる性質を有して居て、姉の幸枝が其頃流行出した廂髮をリボンで飾りたてゝ巷の人の眼を欹てるを毫も意にしなかつたのに比して、妹の君子は見るから包ましやかな風で頭髮も古風な銀杏返しに結つて居る。いつも學校から疾風の勢に自轉車走らして歸つて來るのは幸枝で、引替へて、物靜かに道も片脇を一人の友と歸つて來るのは君子である。そして嚴肅な男勝りの性質を持つて居る母のお芳から見ると、內氣な靜淑な溫順しい君子の性質が齒痒くてならない代りに、快活な、大膽な、頓智がある幸枝は實に母其人の理想の少女であつた。同じ腹を痛めた我子ながら、愛は濃淡の二筋に知らず〳〵分れて行つて、姉の幸枝が面白く快活

に日を送るのにも、妹の君子は何方かと言へば憂欝に涙多き日を送つて居た。けれども君子の不幸は尙之のみに止まらなかつた。と言ふのは元來この重田家の鄕里には早くから、皆緣を定めて置く舊慣があつて、此同胞も幸ひ近い親族中に似合な二人の男子を持つて居たのがあつたので、談話が整つて兄を姉の幸枝に弟を妹の君子に、各〻許婚の約が成立したのは未だ物心も付かぬ幼い時の事である。

然しながら人の運命は計られぬもの、幸枝が十八の春を迎へて、いよ〳〵結婚の式をと言ふ間際になつて、許婚の男は急に黄泉の人となつた。元來勝氣な幸枝はさまで歎悲みはしなかつたが、君子の其片羽の歎き知らぬ身の上が何うやら羨ましく嫉ましくも思つた。まして姉の性質を此上なう愛して居る母のお芳の身になると、片腕を切落されたよりも氣脫けがするので、得手勝手にも君子が未だ世心付かぬを言立てにして終に良人を說落し親戚中を說勸め、君子の許婚の晉次を新たに幸枝の許婚に据ゑたのである。

其時の事を思ふと、君子は今も尙雙の眼に熱淚を湛へて、我と我身の弱かつた

のを悲んで居るので、何を言つても其時僅か十五であつた君子は、父や母や、さては親族の人達の前に出て、只恥かしい極りが惡い一點張で別に深い行先の事も考へずに、厭！　厭！　私許婚などは要らない。と一口に言つて了つたのを座にあつた母が、可し、可し、と早速了解んでさてこそ姉妹は自の運命を轉倒するやうになつた譯である。初めの中こそ厭！　厭！　で通つた君子も一つ二つと年を重ねるにつれて何となく寂寞を味ふやうになり、夕暮の窓や、行雲を眺めて意味ない空想に耽り、人知れず身の行先の事まで考へると、ある淋しい心細い感がむら／＼と湧出で、日頃の憂欝は一層の度を加へて、たゞ譯もなく人の居ない處に行つてはしく／＼泣いて見る。是に反して根が快活な姉は、新たに希望と歡喜を得たので一層快活の度を高め、母の愛はます／＼姉一人に傾いて行くやうになつたのである。

であるから今年の暑中休暇になつて、幸枝と其許婚の及川晋次とたゞ二人を伴れて、稻毛の海水浴に避暑しやうと言出したのは母のお芳で、それでは跡に一人殘された君子が可哀相だからと晋次の親御よりの申出もあり、かた／＼

良人への申譯に餘儀なく君子をも連れて來たのであるが、母の胸には君子を連れて來やうなどゝは、初から思つて居らなかつたのであつた。

君子に對する母の態度は此如く冷やかに情ないものであつたが、是に反して父の正道は幸枝の傲慢なのよりも君子の靜淑なのをいたく喜んで居た。夕暮時、門の柳の下がくれに思ふ事多く、悄然と佇立むで居るのを心優しい父が會社を了へて歸つて來ると、洋服姿のまゝ自ら涙含んで君子を劬つたのは幾度であつたらう。

また君子に取つては今度の避暑もたゞ彼の胸に新たなる愁を增したのみで、幸枝が面白く晉次と話して居る時でも君子は悄然と隅の方に沈んで居り、時たま何かの端に晉次と親しく話して居る事があつても幸枝が見ると、すぐ厭味の出放題を並べる。續いて母の小言、やがてそれが高じて泣く喚く、はては歸京すの歸京るのと騷が持上るのも度々であつたが、其都度君子に同情を寄せて母と幸枝を押靜めるのは晉次であつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「佐藤樣て何處かでお目に掛つたやうな氣がしますわ、」

と幸枝は今晉次が路傍の草の上に投捨てた赤い花を一寸拾取つて恁ういふ。

「然うでしやう。僕の處へ能く遊びに來て折々貴女の噂もして居ましたから。」

と兩手を小脇に抱込みぴか〳〵する眞晝の空を仰いで暑さうに太息をしたが、

「何うして稻毛へ來たのか知ら。」

「え。」

と幸枝は顏を上げる。すると何處から飛んで來たのか白い蝶が路傍の草の香を嗅ぎながら、ひら〳〵と低く前を行く。

晉次は重合つた薯も葉が銀鼠に光るのを眩しさうに見て、

「この夏は避暑をしないと言つて居たのに何うして稻毛へ來たのか知ら。」

と獨語ちたが又「あゝ逢つたが百年目、また例の長廣舌を聞かされる事か。」と苦笑する。

「え、何ですつて。」

と幸枝は聞咎めて首を一寸傾ける。晋次を見返つて、

「いゝえ、佐藤の事です。彼奴中々の議論家でしてね、人さへ見ると誰の前でも關はず滔々と自分の主義論を持出して、相手を閉口させなければ已まない性分ですからな、時によると此暑いのに聞かされるかも知れません。何うも避暑に來てる間は、甚麼崇高な議論だつて餘り有難くありません。はゝゝゝ。」

「佐藤さんは那樣お方。」と幸枝がいふ。

晋次は首肯きながら、

「然うです。學校がある時は、寄宿舍の食堂で何時も佐藤が長廣舌を吐くのが定りでしてね、僕なども能く聞かされたものです。」

「何を。」と幸枝は聞く。

「何ッて佐藤の主義論です。いつもバイロニズムのを滔々とやらかすのでしてね、それが奇妙に生徒間に歡迎――寧ろ低い意味で崇拜せられた方ですよ。正午の食事時間に生徒がぞろ〳〵食堂に集ると、佐藤が隅の卓の上に立

つて、帽子を恁う振りながら、諸君！　諸君！　なんて遣出すのです。中には食ひかけのパンを投捨てゝ佐藤の論を謹聽するのもありまして、其勢力は非常なものでしたよ。ですから正午になると食堂は恰で虚無黨の集合見たいに、不平の徒で充滿して、佐藤が滔々と論ずる教員排斥論や、校規破棄説を痛快な拍手で迎へたものです。僕なども……。」

と淋しく笑つたが、

「佐藤も那麼情熱的狂味を帶びた人間ですけれど、論ずる處は一々確實な論理の上に建てたものでしてね、時によると凡骨には解らぬやうな議論をしましてね――。」

と言ひかけたが、折柄海氣館に佐藤を乘せて行つた車が歸るのに出會つたので口を呟んだ。

何處かの樹立で蟬が頻りに啼き始めた。

（三）

庭から續く砂原の丘のやうになつた彼方にバニー(犬の名)の白い姿が、青い夏草の間がくれにちら〳〵遠ざかつて行つた。君子は先刻から離亭の縁先へ海氣館の母屋から借りて來た藤編の椅子を持出し、その上に美しい姿を持たせて居たが犬の姿が見えなくなると、退屈さうに起上り、足に餘る眞四角な庭下駄を穿いたまゝ、縁を離れて外へ出た。

「あれ、その方へ行くんぢや無くつてよ。バニー。」

と涼しい聲で呼びながら、急いで砂山の上に立つて見たが、犬の姿は最う見えなかつた。

一體此館の庭園は頗る廣いので、西の方は一連の磯山の崕で自然の垣をなし、東の方は庭から直ぐ芽をふきかけた大根畑に連り、二丁ばかり向ふの同じ磯山の麓まで續いて居る。前面には只申譯的の門と垣根とがあつて、庭の中には砂丘が此處彼處に自然に突起して、かなり大きな松が生えて居る。その小丘の間に海氣館の二階立の母屋と離れて、二間乃至三間の離亭が三つ四つ建つて居て、通例三人以上避暑客に貸すので。君子の家族はこの三間の離亭を

借りて居るのである。

「バニーは何處へ行つたのか知ら……。」

獨語ちながら犬の跡を追ふでもなく、君子はぶら〳〵と逍遙出した。砂山を下ると其處はやゝ廣い芝原で、草を踏みながら西手へ別の砂山の麓を廻り、簇生の磯松の蔭を拔けて數十歩行くと小さな池がある。池の畔りを折出つて、最う一つ砂山を越すと古木で拵へた海氣館の門に突當る。門の外は船橋の方から千葉へ通ずる幅五六間もある磯街道で、その向ふは最う砂濱だ。

君子は知らず〳〵逍遙出て、街道を横切りその砂濱の畔りに立つた。

沖の方からゆる〳〵汀に疊で來る磯波は靜かな夕雲の影を落して、凪いだ海原には千葉の岸さして歸行く白帆が三つ四つ白鳥のやうに浮んで居る。藻の香を傳へて流れる潮風がそよ〳〵と吹くと、晝中の暑さの汗を拭去るやうに、心ゆくばかりの涼しさ覺えて君子は我知らず、蒼き空の港に流るゝ如く走行く雲の影を望んで、礫邊に緩やかな足を運んだ。下駄に崩るゝ砂がざくざくと音がすると、朱い甲を持つて居る小蟹が逸早く己が穴に駈けて入る。弓

形に曲つた遙か向ふの磯邊で、水泳を遣つて居た三人の子供が何か言罵るやうであつたが、その中の一人が逸早く逃出すと、他の二人が眞裸で追うて行くのを、君子は遠く見送る中に、不圖眼に止つたのは、向ふに突出た岩端の上に身動きもせず立つて居る青年である。

「あら……佐藤さんか知ら……。」

と君子は呟きながら、心してぢッと見ると青年は死んだ人のやうに固まつて、深くも物に思煩ふさまである。君子は尙瞬きもせずに見詰めて居るので――。

佐藤文男が此海氣館に來てから約一週間ばかりになる。その間晉次とは訪ひつ訪はれつして重田の家族をも隔てない交りを結ぶなど、親密な間柄となつた。憂は同じ憂の友を呼ぶで、佐藤が沈鬱な、絶えず心に何か物を考へて居るらしい素振は、いたく君子の心を動かして、彼女は暇さへあれば佐藤を訪ねて、その沈痛な音色で解く幼稚な消極的の人生觀を聞くのを此上なく樂みにして居たのである。

「屹度然うだわ。佐藤さんだわ。」颯と背後から驚かして上げやう。」

磯邊に打上げられた花藻の中から、つと飛出た黑色の蝶の背後について君子は汀傳ひに歩んで行くと、其處に海水が入江のやうに入込んで、人の肩を沒するばかりの靑蘆が生えて居る處に來た。向ふの佐藤が立つて居る岩鼻へ行くには、再び街道へ出なければならないのだ。

で、急いで街道へ出ると、前面、廣々とした遠畑の末を綴つて居る樹立に日は傾いて、うすく梢を紅の色に染分けて、朦朧たる中に夕暮の淋しみを幽めかして居る。恍惚と見て居ると、近く田の中にある藁屋の軒からする〳〵と舞上つた薄煙は、消行く空を求めて陽炎の影のやうに、低く田の面を這つて、畔に積重ねた藁を薄く包んだ。と、背後の磯山から飛立つた鴉は一聲高く鳴いて頭上を行過ぎる。

はッと君子は我に返つて、今度は街道から磯に降りると、すぐ其處に、二三十間位向ふの岩鼻の上に、身動きもせぬ佐藤の姿は眠つて居るかと思はれるほど沈んで居る。

「そんなら男にも矢張心の愁憂ッて言ふものはあるのか知ら……。」

と佐藤の姿を見入つて居る君子は、我にもあらずほッと太息を洩らした。

自分も佐藤さんも――あゝ何故この世は這麼に苦しい、悲しい事ばッかり多いのであらう。生れながら死ぬるまで、一生涯、嘆き悲みそして苦しんで――思ふと人間ほど詰らないものは無い。その詰らない人間に自分は何故なつたのだらう。切ない苦しい此世に何うして生れて來たのであらう。自分も佐藤さんも――此世に生きて居るのを苦しいと思ふ人は多いが、樂しいと思ふ人は少ない。そんなら、ならば這麼世の中は無い方が遙かに増しだ。自分にも、佐藤樣にも――思ふと厭だ。考へると詰らない……。

這麼事を考へると、自然歩みが晩くなつて、洩るゝものは太息と涙とである。

やがて岩鼻を去る十間ばかりの處に來ると、今迄身動きもせず、夕暮の海を眺めて居た青年は衝と背後を振返つた。君子ははッと躊躇つたが能く見ると、佐藤と思つた男は、意外にも實に晋次であつたのだ。

「おやッ。」

と君子は思はず頬を紅めた。

「おう、君子さん、君子さん！」

晋次は見出したのか笑ひながら、岩を降りて此方へ駈けて來る。

君子はくるりと背後を向いて、そッと指先で涙を拂つた。

「君子さん、君子さん！」

續けさまに呼びながら駈けて追付いた晋次は、つと寄添つたが、

「何してたんだね、君子さん――眼の緣が赤いやうだが――泣いたんだね。」

と心配らしい眼色をして覗込む、すると君子は蒼蠅さうに、

「泣きやしなくつてよ。」

と鬢の毛を掻上げながら、眼を反らして夕榮の色が赤く流れた海の方を見遣つた。

君子の胸にはくさ〳〵の悲しい感情が湧出づるのである。昔のわが許婚なりし人、戀人なりし人、その人と思ふ存分語合ふのに誰に何の遠慮が要らうぞ――けれど然うは行かぬ。昔ならばいざ知らず、今は然うは行かぬのである。

姉に、母に、社會に、否それ處では無い、自分の良心に對しても晋さんを戀して居ると言ふ事を明かす事は出來ぬのである。この戀を捨てるのは悲しいけれど捨てなければならぬ。晋さんに明しては濟まぬ。今自分の泣いて居たのを見て優しう言つて下さる晋さんの、美しい、目見も、笑ひも姿も、永世自分の物ではないのである。他のものである。姉のものである。あゝ運命——何と言ふ儚ない運命だらう。

此やうな考は君子の纖弱い胸に絶えず洪水の如く渦巻くのである。

默つて一二丁も汀傳ひに二人並んで歩むで來ると、向ふの街道の松並木の影から小さな姉の幸枝の姿が現はれて此方を指して駈けて來る。

それを見ると、君子は急に晋次と離れて、すた〳〵今來し路を跡戻りする。知らぬか晋次は、

「何うしたんです。え、君子さん。」

君子は振返らうともせぬ。

「君子さん。君子さん。」

「…………。」

默つて只歩いて居る。

「君子さん、何うしたんです。え、何か落したんですか。」

恁う言ひながら晉次は君子の跡を追ふべく一歩踏み出さうとする途端、息を喘ましながら駈けて來た幸枝は、

「晉さん、貴方……。」

と悔しさうな眼にけんを見せて晉次の袂に縋つたのである。

「あゝ吃驚した。本當に吃驚しちやつた。貴女でしたか……。」

晉次は振返つて嫣然したが、幸枝は笑ひもせず、眼をきらめかして、

「私何れだけ探したか知りやしないわ。何してたの。這麼處で……え、晉さん、君子さんと……。」

と君子の逃去る背後姿を見送つて口惜しさうに言ふ。

「何もして居たんぢや無いです。」

「可くつてよ。晉さんは……。」

と言葉の末には涙が交つて、

「さ、早く歸つて頂戴、阿母樣が喚んで來いと仰有つたのだから……。」

と背後に振返つて一聲呼んだが、最う聞えさうにも無いので、その儘、幸枝と砂路を辿つて歸つて行く。

二人の歸去る背後姿を遠く見送つて、君子は我知らず熱い涙をほろりと落した。

(四)

歸つて見ると點燈頃で、母のお芳は湯に入りに行つて未だ母屋から歸つて來ぬ。君子は離亭の裏から入つて、縁先に下駄を脱いで、薄暗い八疊の間へ通つた。が次の間では晋次と幸枝とが灯に差向つて、何か笑ひながら話して居る。

すると、

「あの、御飯は未だ……？」

と表口の方で、母家の女中の聲がする。

「未だなのよ。阿母さんがお歸りになつてから一緒に食べる心算だから、お氣の毒だけれども最少し跡にして頂戴。えゝ最うぢきにお歸りになるだらうと思ふの。お湯へ行らしつたんだから……。」

と聲高に叫んだのは幸枝である。

其聲を聞くと君子は何か怖ろしいものにでも出會はしたのかのやうに、妙に氣がすくんで丁ど幼ない時、非常に惡い事をして隱して居たのを母に見出される時のやうな思がむら〳〵と湧いて來て、灯も點さず薄昏い中に横になつた。がぶん〳〵小さい音をしながら蚊が出て來るので、堪らず今度は靜かに緣先へ辷出て所在無さに蹲踞んだ。

見ると音なく引かれた薄墨の色は、水色の空に漂うて居る雲の纖維に次第に深く泌込んで、草の生えた廂からは黄昏の靄が湧出て庭の四隅の方からやがて薄く包んで行く。耳を澄ますと、ごーッ、ごーッと潮の遠鳴が高く聞える。その潮の音を聞くと、君子は又先刻の磯の事を思出して、姉に何か疑はれはしないかと胸に手を置いた。と

「馬鹿な、何で僕が那樣事を……。」
と高い聲がした。はッと思つて君子は胸をどきりとさしたが、それは次の間で晉次が何か幸枝の言ふた事を打消さうとして居るのであつた。續いて又姉の聲がする。
「ほゝゝゝ、何うだか解りやしないわ。それでなけりや何故私の姿を見ると君さんはずん／＼逃出したでしやう。」
「そりや僕あ知らん。君子さんに訊ねたら解るでしやう。僕にや那樣事まで忖度する事ア出來ませんから……。」
「だつて那麼離れた磯に二人が立つてるんですもの。誰だつて少しは變に思ふわ。」
「幸枝さん、貴女はさう猥りに邪推するから可かん。同情と愛とは違うッて此間も然う言つたでしやう。で、僕は君子さんには同情して居ます。愛しちや居ませんよ。那樣邪推なんか最う止めなさい。」
と高らかな晉次の聲。

聞いて居た君子は眼に一杯の涙を湛へて、見やるともなく庭の方を見て居たが、折から風につれて何處ともなく、客の中の子供達の手毬唄は低く哀れに聞えて來る。

此の家の裏のちゝさの木に、
雀が三羽とうまつた。
一羽の雀の言ふ事にや
昨夜呼んだ花嫁御
ほろり〳〵とお泣きやるが……

君子は堪へる暇もなくほろりと一雫、あゝ一度は如彼して無心に手毬唄を歌つた事もあつたが、——唄は尚悲しいやうに低く響いて來る。

何にも悲しかないけれど
わしが父樣何處やらに
なん〳〵長崎金堀に
金は堀らずと跡見れば

跡にや時雨の雨が降る。

こゝまで聞くと君子は覺えず緣に打伏したのであつた。

（五）

朧銀のやうな夕月の光は、蒼い靄に包まれた波の上にちらつき初めた。沖には漁り歌の聲が細く長く尾を引いて幕張の海岸の方へ消えてゆくと、千葉の町家の灯がちら／＼水煙の白き中に浮んで見ゆる。見わたす一望の白砂、寄せては返して行く白波の引いた跡を月明りに黒い漆を塗つたやう。また寄せて來た波頭はきら／＼白銀を延べて、流した如く輝いて光る。潮の音は落ちて磯の松風も一しきり聲を幽かに、靄こめた沖に見渡すかぎり渺々として其舟の行衞も知れぬ。

と、あるか無きかの影一つ、右手に小さな岩の蔭から現はれて、波の飛沫朦々と月明りに白くこめた中を、醉へるが如き足取で、ゆる／＼汀を辿つて居る。空はたゞ月の光に薄鼠の色遠く展べられて、羊毛の如く白き夜の雲がたゞ一

片、沖の彼方に消えんとして夢のやうに浮んで居る。
此時彼方の汀にも一人、誰も居るとは心付かず、先刻から其處に佇んで、四邊に浮かれて時に唱歌の脣を開きなどして居たが、
「あゝ這麼月夜の晩は氣が晴々するわ。」
と輕く呟きながら、其處等を見廻して不圖、自分が今辿つて來た汀の足跡の方を振返つた。
柔かい砂の上に隋圓形に凹んだ下駄の跡は、濡れた砂地の一際黒く通つた路なりに此處まで印いて居るが、一つ二つ三つ…………と十數歩まで數へて居る中に、突如其處に黒い人の影が浮ぶやうに現はれたので、悸として一足背後に退くと。
「君子さんでしやう？」
と呼はつたのは確かに聞覺えのある佐藤の聲、近付いて來る姿を月に透かし見ると果したそれだ。
「おや貴方でしたの。」

と君子はやゝ安心した體、

「然うです。良い月夜ですな。」

と涼しい眼に月をふり仰いだが、

「貴女、先刻お歌ひなすつたでしやう。」

「は、何をで御座いますの？」

「先刻此處で歌つて居らしたぢやありませんか。」

「は、お聞きなすつて？」

と君子は我知らず、月に見ゆるまで顔を赧めた。

佐藤は微笑みながら、

「聞きました。巧いですね。何だか恁う身體が引付けられるやうに思ひました。」

いつも佐藤の口吻は一種の情熱を帶びた口調であるが、今夜は殊に然うである。

「ほゝ、まア好い加減な事を。」

言ひつゝ、嫣然笑つた。夜風に解けたほつれ毛が輕く頬を掠めて、くつきりと月明りに白い顏、目鼻立冴え〳〵しう、夜氣を拔いて前に浮上つたやうな物越を、さし添ふ月の下に佐藤は穴の明くほど見詰めて立つた。

そよ〳〵と海面を吹いて來た夜風は、濕りを帶びて肌にやゝ寒く、君子は襟を搔合すと覺えず佐藤に近く差寄つて居た。沖には心優しき船子の月にそゞろな唄の一節が……

水の月手には取れぬと覺悟はしても
濡れて見たさの戀の意地。

ぞつとする程身に泌みて、君子は身を後へ月を振仰いだ。

月には少し薄雲が掛つて、磯の背後の磯山の松の影は薄暗く、夜啼の禽の音が幽かに聞取れる。

折から又、

お前正宗わしやさび刀
お前切れてもわしや切れぬ。

とゆるやかに響きて聽て消えて行く。
佐藤は我を忘れて君子の肩に手を掛けた。
君子の身内は眼に立つてぶる〳〵と震へて居た。
何も知らず、又起る沖の舟唄。

（十八）

君子は恐ろしい夢にはッと眼が覺めた。
蒲團の上に起直つて、大儀さうに髮のほつれを搔上げながら、半ば開けられた窓の障子一杯に射す朝日の光を眩しさうに眺めて居たが、和かい風に、ひらひら散込む合歡の花の美しさを、生中の夢心地に恍惚と見入つた。
折から窓の外で、チヽ、チ、ッと啼止んだ小鳥の音に、漸う氣が付いて急いで寢衣を着更へて出ると、皆は最う疾うに起きて何處へか出て行つた跡で、自分は一人其處に取殘されて居た。
驚きながら、昨夜の眠られなかつた結果を思侘びながら、慌てゝ母屋の方へ楊

子を遣ひに出て、そこ〳〵に顏を洗つて歸つて來ると、途中で遇つた婢の一人が姿を見ると用ありげに近寄つたが、見上げて微笑みながら、

「おや、まあ大そうお遲うございました事。」

「何だかね、朝から頭が重かつたもんだから。」

と言譯をしながら、

「最う何時頃か知ら。」

「然うでございますね、最う十時過ぎでもございますか知ら。」

「まア、十時過まで能く寢て居た事。」

と君子は我ながら呆れたやうに今更又眼を瞬つた。すると婢は、

「それならお孃樣は未だ彼の身投の何を御存じないのでございますね。」

「えツ、身投？　身投が何うしたの？」

と眼を据ゑる。

「いゝえね、今朝海岸で身投があつたのでございますよ。貴方の方の皆樣もそれを見に行らつしやいましたの。」

「あら然う。その身投をしたのは、男？　女？」
「女でございますの。年は十八位、別嬪なんですよ。ほゝゝ。」
と笑ひながら、「お嬢様も今から行つて御覧になれば可うございますに。」
「厭な事。」と君子は直に打消したが、「だけど可哀相だわね。そんな若い身で。」
とさも同情に堪へぬ面色で言つた。すると、
「それで何ですとさ。磯に脱いであつた其女の下駄の鼻緒に書置が結付けてあつたんですとさ。」
「まア、甚麼書置？」
「あのね、ほゝゝゝ、大事なお方に嫌はれたからつてね、ほゝゝゝ。」と聲高に笑つたが、
「だけど、そりやア嘘でございますよ。私は未だ見ないのでございますから。巡査さんが來て見せないさうでございますよ。」
君子は最う能くも聞かず、長く相手にせず行かうとした。
と婢は急に心付いて、

「あの一寸お孃樣。」と呼掛けて兩袖を振つて居たが、「何處へ行つたか知ら、失すと大變だが……。」と慌てゝ居る、
と見て君子は、
「何か失したの？」
「いえ、何でございますよ。お孃樣へ賴まれたものでございますよ。」
と言ひながらも、亦方々探して居たが、
「あ、ございました。」
と取出した一通の信書、君子は怪みながら受取つて見ると、例の佐藤からで、君子樣。文男より――
「まア。」
と君子は思はず胸をはツと躍らしたのであつた。
「あの、佐藤樣は今居らしつて？」
「え？　佐藤樣は今日の十一時の汽車で歸ると仰有つて、今しがたお出發になりましたが。」

「然う……。」

と暫くして答へた君子の顏は蒼白めて、持つて居た信書の先は風もないのに木の葉のやうに震へた。

朝餉を濟ますと、君子は急いで中庭から海氣館の裏門を出て、廣々とした畑の中を一筋細く通じて居る小徑の末を見詰めて、悲しい思に耽つた。

時候も最う殘暑といふ朝夕であるから、樹立には法師蟬が折々に泣いて、避暑客も半ば引上げた海氣館の庭の青葉の色も大分褪せた。畑の薯の葉莖には白い露がきら〳〵して、今見詰めて居る彼方には、白いペンキ塗の稻毛停車場が見える。

あゝあの停車場には、今佐藤が京へ歸らうとして千葉からの登り汽車を待つて居るのだ。あゝ今別れては何日か又逢瀨を期する事が出來やうか。否、この佐藤の手紙には、會へば悲みを增すばかりだから、都へ歸つても最う會はないと書いてあるではないか。この別れは自分の身に取つて見ると實に悲しい訣別ではあるが、いとせめて一言なりとも送別の言葉を交した上で別れた

のなら、こんな心殘りは無かつたらうに——と思ふと、過ぎし磯の月夜に佐藤の言ふた事があり〲と胸に浮んで來る。

あゝ彼の晩、自分は何故佐藤の愛を拒絶したのであらう。今、恁うまでも胸の苦みを覺ゆる程ならば、何故彼の晩、佐藤の愛を快く受けなかつたのか。けれども自分には晋さんといふ戀しい人がある。この戀は成就する事は出來ぬけれどさりとて諦める事は尚更出來ぬのである。——それに何うして佐藤の愛が受けられやうぞ。僞である。もし佐藤の愛を受けたとすれば「僞の愛」である——と恁う思ふと君子は堪へる隙もなく、熱い涙をはら〲と流した。それと共に、佐藤が自分を愛してくれる思の、せめて百分の一でも晋さんが持つて居て下さるならば、自分は甚麼に幸福であつたらう。晋さんに比べると佐藤は情の厚い、思遣りの深い、こんなにまで自分を思つてくれる人を斥けて、何日まで成就ぬ戀に思を惱ました處が、自分は今晋樣を思つて言知らぬ胸の惱みが物狂はしい程心を亂して來るが、佐藤樣の悲みが無理ならば、自分のこの悲みだつて矢張無理である。と思ふと、佐藤樣に對して濟まぬと君子は悔

恨の念に打たれた。

あゝ彼方に見ゆる停車場のシグナルは未だ下りて居ない。上り汽車には未だ間がある筈、せめて駈けて行つて一言お詫をしよう。若し何等かの因縁があるならば、自分は彼處で佐藤に會ふ事が出來るであらう。

と君子は畑中の一本徑を駈出した。

すると丁ど直ぐ其處の松林の中から、此方へ歩んで來る一人の男が眼に入つた。見ると晋次で、手に若竹を鞭のやうにして持つて居る、君子は思はずはッとして逃げるには逃げられず、仕方なしに横を向いたが、晋次は早くも見つけて、

「やア、君子さん。」と聲をかける。

「はい。」

と低い返事をしたが、その姿を見ると、怪しく又悲しい思が胸に湧いて來る。

「何をして居たんです。」

「……何にも……。」

と恁ういふ折しも、その松林の中から續いて、「晋さん」と呼ははつた聲、それは姉の幸枝である

君子ははッとして我ともなく二三歩飛退いた

丁ど其時、千葉からの上り汽車、溫かい空氣に汽笛の聲を響かして轟々として來た　取逆せた君子はそれを聞くと覺えずはら／＼と淚を迸せた

梅の寮

（上）

「お寄んなさいまし。　宅は其處でございますよ。」

「えッ、お宅へ、」

「可いぢやありませんか。　おほゝゝ、入らつしやいましな。」

言語道斷。兎もあれ見ず知らずの相手に向つて、馴れ〳〵しいのか仞ないのか、大膽なのか、輕率みか、僅かに汽車で、つい四谷から新宿までを乘合はして先から話掛けられたのでいゝ程の挨拶をして、偶然一つ停車場で降りてから同じ路を此處へ來たと迄の事。何も知らぬ名さへも知らぬ間で、餘りに打付けなのに流石怪しまぬ譯には行かぬ。

増見武之助といふ、さる處の次男株、分には過ぎた身の皮頗るりうとして今日、

此淀橋の片ほとりに知る人を訪ねて行く途で、不意と這麼事に出遇つて、怪訝な顏でぢつと見た。

掛流しの愛想にしても程がある。弄つて見やうの氣紛れ沙汰か、まさかに隱れた商賣のものとも見えぬ。必竟するに、此女は何者であらう。

年は二十二三、銀杏返しに操形の金蒔繪の櫛、寶石入透し彫の、金の平打を後插にして居た、細面の、拔けるやうに白い、眉の鮮やかな、鼻筋の通つた、細い切長の眼に人を惹付けるやうな光を嚢んだ、優れて艶なるものであつた。

見るほど更に合點が行かぬ、流石に答のないのを女は又打笑むやうに、ひたと眼を見合せて、

「取つて喰べやうと言ひはしませんよ。お氣遣ひなさるやうなものでは有りませんわ。」

「いやなに、然ういふ譯では、……」

と挨拶馴れず、武之助は却つてまごついた。

「何も御縁ですわね、お茶の一つ位喫つて入しつたつて可ではありませんか。」

「はい、然し……、」
「おほゝゝ、何ですねえ。まア入らつしやいな。」
變は變であるが、武之助も若さは若し、目の毒といふ相手は美人、これから何うなつて何う終るのか、兎角に好奇心が先に立つて、儘よ行つて見ろ。厚顏しいのは先の方が上手と、若氣に乘つたもので、
「參上りましやう、折角然う仰有るのですから。」
「入らつして下さるの。本當に、」
「御冗談ですか。」
「何うして貴郎。さア、では此方から。」
角の藏の、壁に添うて三臺ばかり荷車が置いてある。其處を入つて少し行くと、既麥畑に雜木林疎らに見える茅の軒、田の面、畦路、處々の冬木立などを前にあしらつて、ぐるりと練塀掛りの目に立つ一構、中は梅林の奧へ深く、南へ向いた門の柱に、前島ふさといふ女名前の陶札が掛つて、左へ寄つて梅の奧に、さも物數寄な二階作。

「此處でございますの。」

と女は先に立つ。武之助は夢を見るやう、何うやら烟に卷かれた姿で、見事に結上げた髮の形、其三つ折の管根掛、長い美しい衿足から、黑の斜綾の吾妻コートに、華車な風采を包んだ背容に只目を取られて、梅と梅との間を一廻りすると、前は態と格子戸作、土間は漆食叩に、物々しい沓脫の石。

入ると出迎へたのは、丸顏の愛らしげな小間使。

「お歸り遊ばせ。」

「あい、」

とばかり、振返つて武之助に、

「さア、何うぞ此方へ。」

座敷は巽に突出して、其處にも梅の軒端、南へかけて廻り緣になつて、障子の內には、春に先立つて、長閑に鶯の聲がする。鉢前、袖垣、木にも石にも少からぬ贅澤の影が見えて、さながら手を盡した庭の風情。

通された武之助は、四邊を見廻すほど更に腑に落ちぬ。前島ふさ、聞いた事も

ない。何者で、何で俺を、と全く化された氣で居ると、

「貴郎、よく入らして下すつた事。本當にお氣の置けるやうな處ぢやありませんから、何うぞまァお樂になすつて、」

と挨拶振。褥を薦める、火を薦める、親しげな客あしらひの外に、別に底意がある樣にも見えぬ。會釋しながら武之助は、

「付かん事をお聞申すやうですが、貴女は此家の御主人で、」

「はい。」

「では御門のお名前は貴女のですね。」

「はい。おほゝ、」

と笑黐れる。途端に小間使が茶を運ぶ、婦人は取次いで、續いて運んで來た菓子器を前へ出して、

「貴郎、いきなりでしたから變にお思ひでしやうが、恁うして入らつしつたのですから、遊んで行つて下さるでしやうね。私ぞんざい者で、何も構ひませんのですから、何うぞ其おつもりで、」

「はい。實は何だか未だ譯が解らないので。然し首を取られるやうな事もあるまいと思つて居ますから。」

「おほゝゝ、貴郎私を何と思つて居らつしやるの、」

武之助は機を得たやうに、

「先刻からそれを考へて居るのですがね、一向何うも當りが付かんのです。這麼事をいふのも何ですけれども、別にお差支へが無いなら仰有つて下さいませんか。全體恁うして、のこ〳〵遣つて來た私も私ですが、實の處狐にでも魅まれたやうな心持で居るのです。」

明日になると、通りすがりの百姓に、不意に脊中を撲される、正氣が付くと一面の原、自分は石地藏の前に座つて居ると、那樣架空の事をまさかに信じもしないが冗談らしく言掛けて不圖見ると、主婦のお房は、さも面白さうに笑傾けて聞いて居たが、眼を上げると同じ笑顏に、

「それぢや然うしてお置きなさいましな。御安心がならなければ、寧その事、おほゝゝ松葉燻しでもなさいまし。」

「いや冗談は冗談ですが……」
と言ふを冠せて、
「可いぢやありませんか。私も貴郎の事は何にも存じないのですわ。お互に行當りばつたりで恁うしてお談話が出來る處が面白いぢやありませんか。」
と投げて言ふ。此方は眞顏で、
「然しそれは餘りでしやう。兎も角御婦人の身で。」
「あれ、那樣しかつめらしい事は止して下さいまし、私はこれッきりの者で、跡も先も無いのですよ。餘計な事考へると、それこそ壽命が縮まつて了ひますわ。翌日は翌日の風ですわね、好きに暮らして好きに笑つて、勝手な事を言つて恁うして居るのです。あれ何故那樣に御覽なさるの。」
と火鉢に手を掛けたまゝ、顏を振向けて清しい眼に打目戍る。武之助は稍度を失つた氣味、
「なに餘り妙な仰有りやうだから、」
と言つて、重ねて、

「然し何うして那樣、荒れた暮し方をなさるんです。」
「まア性分なら仕樣がないと思召せね、それで可いでしやう。何だつて貴郎、私は一人ぼつち、叱言の言ひ手も頭の押へ手も何も今ぢやアないのですもの、根がやくざなら、羽は伸し放題、今にお呆れなすつちやア可けませんよ。」
と調子が上つて、妙に蓮葉な節廻。
「お一人？」
「はア、一人。甚麼に淋しいでしやう。」
いつの間にか言付けたと見えて、襖がすいと開くと、前の小間使に、今一人仲働らしいのが、捧げて來た會席膳に、脇から取寄せた料理の品を、其儘武之助の前へ押直す。
「やッ、これは。」
と武之助は目を瞬つて、
「私這麼御丁寧な事にあづかる譯がない。」
「あれ、何ですねえ。何も致しはしませんわね。まアお一つ。」

と今小間使が、脇に置いて行つた銚子を取る。
「困りますなア這麼事になつては、」
「でも流義なら可いでしやう。」
「可かアありません。可かアありません。」
「まア那樣事仰有らないで、折角上げやうと思つて出しましたものを、御斟酌はお恨ですわ。」
重ねて強ひて無理に受けさした。武之助は持てあつかひて見えたか、心ならず、後に柱前に如菩薩、何うなる事と控へて居ると、
「貴郎、何うなさいましたの。」
「なに、別に……。」
「可けませんねえ。何だかまだ氣を置いてお出のやうですわ。最う大抵にしてお置きなさいまし。」
「然し未だ殊勝にして居る中が可いでしやう。」
「いゝえ、それぢや未だ氣に入りませんわ、思切つて羽目を外して下さらなく

ちや。」

「なに、お望みなら、」

いふ時颯と一吹、軒を吹入れて來る風に、さら〳〵と障子へ、

「やッ雪ですか。」

と慌たゞしい聲。

「降出しましたね。」

とお房は身を返して、障子を引開けると、ちら〳〵、梅の梢、垣の上、燈籠の笠、木蔭を除けて庭は既薄りと白くなつて居る。

澄したもので、

「貴郎、とてもお歸りになれはしませんよ。」

(中)

霏々として其雪は、漸く迫る夕暮を未だ其儘に降殘して、門とも言はず、軒とも言はず、森も林も田の畔も、大路へ通ふ前の路の、二の字の跡も轍の名殘も、見る

間に白妙の色に隠して、風を卷いては颯と亂れ亂れて音もせず降積つて、其後人通りもはたと絶えた。
前島の家は宵から早く戸を閉して、火影も外へ見せなかつたが、思ひの外に武之助は未だ歸らなかつた。
假令へば止められたからと言つて、ゆる〳〵落附いて居られる先でもないに、今は歸らうとする風情もなく、席も移して、雪に靜かな奥の一室、屏風を開いて北に圍つて、火鉢を中に對座て二人。
「あゝ、全で夢のやうだ、」
と呟くやうに、未だ醒めやらぬ醉心地の火影に顏をほのめかして、武之助は何となし四邊のさまを目に入れた。
「夢なら何うなさるの。」
と火鉢に身を凭たせるやうにして、お房は微笑むばかり思ありげの眼を上げた。
「何うして可いのか、先の見當は全で附かないのですよ。」

「それぢや言ふなりになつて居らしやいな。」

「然うすりや何時までも安心が出來ない。」

「まア、面倒ねえ。」

と頭の櫛を取つて、鬢のほつれを掻上げながら、

「貴郎、矢張未だ可けないのね。高が婦人に向つて、殿方の癖に何うしたものですね。貴郎が何でしやうとも、先刻仰有つた事は最う冗談にはしませんよ。」

「なに冗談なら恁うして落付いて此處に居るものですか。決して冗談ぢやないけれど、未だ一つ氣になつてならない事がある。」

「何が、まア。」

武之助はぢッと見て、

「私何うしても腑に落ちない。賴むからね、貴女の身の上を知らして下さい、」

「身の上、」

「はア。」

「可笑しいわ。那樣事何うだつて可いぢやありませんか。私御覽の通りで

すわ。

「それぢや聞いた甲斐がありやアしない。貴女、知らせられないの。」

「何うしましやう。むづかしいのねえ。可ございます、それぢや知らして上げましやう。房と云ふのは、世を忍ぶ假の名で、」

「え、」

「まことは平親王、おほゝゝゝ、將門の遺腹。」

武之助は苦笑ひ、

「いや冗談ぢやない。本當の事を言つてくれなくつちや。」

「たつて貴郎、氣の利かない身の上話なんぞした處で何になりましやう。厭な愚痴を、聞いて貰はうと思つた那樣時は最う過ぎて了ひましたよ。お止しなさい。那樣物好きな事、何も改まつて、もと私はでもないぢやありませんか。折角恁うして、いゝ氣になつて笑つて居るものを、又泣かせるには及びませんわね。」

「それぢや泣いた事があつたのですね。」

「那樣事もありましたつけ。これでも人並にね、矢張正直に泣いたもんですわ。」

と言つたが直に、投出すやうに、

「今ぢや芥子の三斗も飲まなくつちや。」

自分で嘲つて、顔を振上げると、

「あゝ何だか理に落ちさうになつて來ましたね。貴郎が厭に眞面目になるから惡いんですよ。さあ氣を變へてもつと陽氣な談話をしやうぢやありませんか。」

武之助は突として、

「前島さん。」

「あら厭、」

「何故、」

「だつて貴郎、人の苗字なんぞを、」

「お待なさい。那樣事はまア何うでも可い。私は本氣になつて聞くのだか

ら、今言つた貴女の事を一通り話して下さい。」

「貴郎這麼者の事を那樣にもお聞きなさりたいの。そりや何も隱す譯ぢやないのですから、お話申したつて構やしませんがね、」

と少し考へて居る。武之助は思込んだやうに、

「先が先なら、這麼事を改まつて何聞くものですか。私が何うでも聞かうといふのは、何故だか貴女にも解つて居るでしやう。」

「那樣に仰有らなくつても可うござんすよ。貴郎だからお話申しましやう。おや炭が流れましたね。」

と脇の烏府を寄せて、火を直して火箸を置くと、

「お笑ひなすつちや可けませんよ。今ぢや這麼ですけれど、これでも可愛らしいんでしたわ。それこそ生娘でね。何も事細かに言ふほどの事もありませんから、ざつと成行だけを申しましやうがね。兎も角其時分には、汚ない心と言つたら、全くこれんばかりも無かつたもんですよ。

處がね貴郎、這麽阿多福ですけれどね、何うかした拍子で、人に見染められたとお思ひなさい。

野州の大地主で年の半分は東京で暮して居るのです。名前を言つたつて仕樣がありませんから、態と申しませんがね、此方にばかり別莊の三個處も持つて年中贅澤の爲放題。其人なんです。

家を見くびつて、初めは人を遣して私を妾にと言込んで來たのです。親父は一克でしたから、けんもほろゝで跳付けて了ひますとね。今度は人をかへて打つて變つて丁寧に、逹て本妻にと言つて、それは最う五月蠅やうに毎日來るのです。それでも親父は先が釣合はないし、初めから氣に喰はないと言つて、平つたく謝絶つて了ひましたが、すると親父が退引ならない義理合になつて居る方、其方を中に立てゝ、何うでも謝絶れないやうして、種々話合のあつた揚句、親父も我を折つて、私はとう／＼嫁附いて行く事になつたのです。

滯りなく祝言も濟みましてね、當座は氣の毒なほど大事にされたもんですが、貴郎、何うでしやう。それが皆狂言だらうぢやありませんか。言ふまでもな

く出處は一つですが、何の事はない大勢で寄つて集つて、私や親父を全で欺して居たんです。

前から歴々とした本妻があつて、近くの溫泉場にある別莊へ、病氣で出養生をして居ると言ふ事。

私は矢張、一時の慰みものにされたんです。居廻りの者にも、前から言含めて伏せてあつたんですが、それと知つた時の、私はまア何うでしたらう。

すつた揉んだで、それから東京へ歸つて來るまでに、種々な目にも遇ひましたが、とゞの詰り、小供欺しのやうな、後の手當と此寮と那樣物を貰つたつて何になる、と言つて肯かなかつたのですけれども、無理に押附けられて手を切つたといふ始末。

甚麼いゝ事をされたからと言つて、最う身體の取つて返しは附きはしません。それからまア恁うして居るのですがね。」

と言つて、不意に冴え／＼しい調子で、

「なアにそれも、笑つて了へば其迄ですわ。最う何も彼も封じて了つたら、却

つて氣樂で馬鹿々々しいほど浮いて居るんですよ。」

武之助は默然として、折々お房の様子に只目を止めて居たが、小首を傾けて

「然ういふ貴女が何うして又……。」

とばかりに何をか考込む。お房は笑つて、

「いゝ加減色消しでしやう。貴郎が又、野暮な身の上話なんぞを持出して來るんですもの。最う過ぎた事は止しにしましやう。さアこれで何も彼も言つて了ひました。これから先は貴郎の出やう一つですわ。」

「いや私最う一つ貴女に聞く事がある。」

「あれ又ですか。きりがないのね。私最う知りませんよ。何とでもお心任せにお思ひなさいな。」

「それぢや何う思はれても可いのですか。」

「可かアないけれど、ぢれつたい事。貴郎も解つて居ながら、那麼に持つてお廻しなさる事はないぢやありませんか。それとも談話を聞いて急に厭におなりなの。」

武之助は引きかへて稍重く、

「貴女は人の氣も知らないで……、」

「あれ、それは此方で言ふ事ですわ。そりやア仕方が仕方ですから私の心が通じないのは、何も無理とは思やしませんけれど、貴郎これだけぢや何うでも可けませんの。」

「なにも可けないといふ事はない。然し私の身になつたら、先刻の今の事で、何だか未だ夢を見て居るやうな、本當の處が突止められないやうなのは、貴女にもよく解るてしやう。なアにそりやア此場だけの事で、これつきり忘れて了はれるもんなら、何うだらうとも構やしないが、」

「それぢや貴郎には、矢張種々と手數を掛けた上でなくちや正味が解らないんですね。何もむづかしい事はありません。百年馴染んだからつて目が屆かなけりやアそれまでゞすわね。好いたものは好いたので、何うしやうと言つて何うなりませう。」

ぢつと見て武之助は、暫く聲はなかつたが、首肯きさまに、

「よし、私は決めた。」

「あれ、何を」

「なにさ、成る處まで成りませうよ。」

色は解けて、眼はそれともなしに輝いて見えて、脇の銀屛風を照返す空氣洋燈の、はつとした光の下に、若い、艶々しい顏が其儘の心に出ると、お房の婀娜な姿は笑顏と等しく照榮えて眼と眼を見合せた。

（下）

二日過ぎて、武之助の影は再び此梅の門に見えた。曩に來た時とは打つて變つて、意氣込立つて衝と中へ入ると、障子の內に歌の主の其鶯の聲より先に、

「あら、」

お房は端近く東の緣に出て立つて居た。梅を隔てゝ枝折戶越し內と外とに顏を見合はせると、

「まア入らつしたの。」

と妙な調子で、其儘身を返して中へ入つて、次の間から玄關へ廻つて、出迎へた。武之助の年にも似ぬ初心な、何かわく／＼として居る態は、平氣で濟したものであるお房に何ういふ見ものであつたか、帽子を取つて、着て居た外套を脱捨ると、扮裝にも殘る處のない心盡、男を作立つた其姿にお房の眼は冷笑ふやうに動いた。

武之助は氣も着かず、今日は茶の間に通されて磨立てた長火鉢の向前、お房はいつもの座にとんと居住居を崩して座込むと、

「貴郎。何故入らしつたの。」

「えッ、何故とは？」

「入らしつちやア何にもなりはしませんわね。おほゝゝ、貴郎の御器量が下るぢやアありませんか。」

意外の挨拶に、毒氣を拔かれて武之助は目を睜つた。實際それ處ではない。此二日といふもの、武之助は物も手に付かず、眞面目に眞正直に唯其事ばかり、

然うだ、妻に、斷じて妻に、とまで登詰めて來たのであるから、物を物ともせぬお房の冷やかな言葉を劈頭に浴せられて、全く云ふ事を知らなかつた。はッと思ふと、さながら毒矢にでも中つた心地で、それなり二の句を繼げなかつたが、暫くして、

「驚いて了ふ。貴女冗談なら可いが……。」

お房は笑つて、

「まア可うござんすわね。兎も角も入らつしつたものを、仕樣がありやしません。まアお話しなさいまし。」

とまる〳〵他人あしらひ。茶を淹れて汲んで出して、

「粗茶ですよ。」

と前の猫板の上。愛嬌ぶりに、

「雪から此方へ、めッきり暖かになりましたね。今日なんぞは最う冷える處ぢやありやしません。火の傍は逆上せるやうねえ。」

武之助は煙管を出す處の沙汰ではない。見るから氣色ばんで、取つて附かぬ

調子に、
「貴女、まさかに此間の事をお忘れなさりはしますまい。」
お房は事もなげに、
「忘れますものか。それが何うしたのです。」
「うむ、で來ては何にもならんとは何ういふのです。」
「おほゝゝゝ、貴郎も解らないのねえ。」
と顏を見て莞爾やかに、
「私ア最う貴郎はあれッきりお出なさるまいかと思つて居ましたよ。」
「何を言ふ、那樣事が……。」
「まアさ、お聞きなさいよ。入らつしやらなければ思出しもする、ね、懷かしい氣にもなりましやう。處を恁うして、お目に掛つて了へば、實も蓋もなくなつて了ふとまア言つたもんでしやう。」
「貴女は人を冷嘲して居るのかね。」
「あれ誰が冷嘲しましやう。思ふ通りを言ふのですわね。正の處、あとを殘

すとね、出さなくつても可い襤褸を出したり見せなくつても可いあらを見せたりしてね、それは最う碌な事はありやアしませんよ。五月蠅いでしやう。詳しく知らない中が花ですわね。花を持つて居たらそれで可いぢやありませんか。平つたいお談話ですよ。其上何とお思ひなさらうと、それは貴郎の御勝手ですわ。」

「それぢや最う來てくれるなといふのですね。」

「それも御勝手ですわ。梅なら見に入らつしやい、座敷なら休んで入らつしやいですが、貴郎は貴郎、私は私、此間の事は、あれでお了ひだと思つて下さい。」

武之助は突如に笑出した。

「はゝゝ、冗談もいゝ加減になさい。馬鹿な、貴女も身分の身を、然う無茶苦茶に投げて掛つて何うするのです。」

まア、

「私は最うすつかり思込んで了つた。今更何うなるものですか。今日歸つたら、親父にも何も彼も打明けて言つて了ふつもりで居るのです。」

「そして何うなさるの。」
「私は近々の中、別に家を持つ譯になつて居る。勿論貴女に來て貰ふのさ。」
「おほゝゝ、いゝお茶番ですねえ。然しお氣をお付けなさい。うツかりして居らつしやると、貴郎飛んだ目に遇ひますよ。」
「誰に、貴女にかね。」
「はア、」
「よろしい、貴女になら、甚麽目に遇つたつても後悔するのぢやない。」
お房は注置きの湯吞の茶を一口味つて、思ありげの眼を向けたが、
「ですが、貴郎何うしふお氣なの。」
「何うとは、」
「貴郎は私が甚麽やくざな女だか、全で御存じないぢやありませんか。思つて下さるのは、有難いけれど、詰らない馬鹿な日を御覧なさるのが、何だかお氣の毒のやうでね、」
「可いさ。甚麽馬鹿な目でも見やうぢやないか。それは私だつて、全で考へ

ないのぢやないのさ。けれどもいくら考へたからつて、自分の思込んだ事を何うする事が出來るもんぢやない。貴女と私とは、最う他人ぢやないぢやないか。」

「何故、」

「何故といふ挨拶があるものか。那樣事を最う貴女には言はせない。」

「おほゝゝ言はせなくつても言つたら何うなさるの。仕樣がない、私の心持を言つて上げましやう。貴郎は冗談にしてお了ひなさるけれど、可うござんすか、本當の事を言ふのですからお聞きなさいよ。私はね今ぢやァ最う、貴郎を何とも思つては居ませんよ。」

とすつきり言つて、聲切つた。武之助は思はず屹と見て、

「なにッ、」

お房は色をも動かさず、

「何ですねえ、其お顏は。お止しなさい、男が下りますよ。最う少し落附いて居らつしやいよ。貴郎は何うお思ひなすつたか知りませんけれどね、此間貴

郎がお歸りなすつてね、此家の敷居をお跨ぎなすつたら最う、お目に掛らない前の貴郎と同じ事になつて了つたの。それをまア何の彼のッて、無益な口をおきゝなさるのだもの、此方の身になりや遣切れませんやね。貴郎思切りを惡くなさると、お人柄が安くなりますよ。」

武之助は呆返つたやうに、

「貴女は自分の身體を何う思つて居るんです。」

「何うも恁うもあるものですか。那樣事を私にお聞きなさる貴郎のお氣が知れませんよ。出來心で持つて居るのです。思切り暴れて遣るのですわ。先が貴郎だから未だ這麼調子で居るのです。誰が男にばかり勝手な事をさせて置くものですか。あゝ詰らない、今日は這麼事をして暮すのではなかつたつけ。貴郎も最う那樣事ばかり言つて居るのならお歸りなさい。」

と言つて不意と顏を見て、

「おほゝゝ、貴郎、これでも愛想が盡きないの。」

武之助、武之助は言葉も出なかつた。

一夜天下

裏手物置の場

(古火鉢) 何うでえ、今夜は馬鹿に寒いぢやアねえか。欅の胴も冷切つて、これ見ねえ、灰も氷らねえばかりだ。いくら物置の中だからッて、團炭の一つ位は入れて置くがいゝや。氣の通らねえ主人ぢやねえか。

(古藥罐) 直箇によ、思遣りのねえ代物だ、今でこそ此樣に凹んで居るけれど、己の働きで何んなに重寶したか、考へて見りやア罰が當らア。あゝ情けねえ、腹も何も干乾しになつて、最うチウの音も出ねえ。

(井戸繩) 己なんざア水の中で馴れた身體だから、此位な事で寒いたア思はねえが、薄穢ねえ此樣な處へ擲き込まれて、とぐろを巻いて固まつて居るのが口惜しくつてならねえ、今更ごたくを並べるおやアねえけれど、元日の旭日を

注連飾の横から睨んで、一番がけに若水を遣つた時から、年が年中奇麗清淨で、下女が凍裂の膏藥を付けやがつた外にやア、汚れッ氣はけちりんも無え兄さんだ。人をつけ今おやア尻ッ端に黴が生えて、腦天には草鞋蟲が巣をくつてらア。いつまで此樣な處に燻ぶつて居られるものか。一思に腹を搔切つて苆になつて、荒木田の中へ身を投げた方が餘ッ程ましだ。喃、釣公。

(釣瓶) それを言やアお互だ。己なんぞを見ねえ、此處へ來てから鼠の定宿だ。いま〳〵しい身中は糞と小便で埋つて、あたり近所は鼻持ちもならねえ。餘り業腹だから一番箍をはぢかさして、そこらの物を手當り次第に打碎して遣らうかと思ふ。えゝ、糞、遣付けやうか。

(古膳) オイ〳〵、無暗に短氣な事をして吳れちやア困る。何も傍に居るものに罪はないわな。己は足が折れて居るから逃げる事も出來ない。

(釣瓶) お前も可愛さうに生れもつかねえ不具になつたな。最う療治をしても癒らねえのか。

(古膳) ナーニこれでも塗屋の處へ行つて少し養生すりやア、半年や一年は、

持たなくつてさ、それを亂暴に拋り出すたア、餘り分らない主人ぢやないか。
えへん〳〵あゝ塵埃に咽せてならない。
（井戸繩）全體お前は何うして其樣な身體になつたのだ。
（古膳）それもこれも主人のお蔭よ。夫婦喧嘩の飛ばッちりを食つて、罪もないものを踏倒されたのさ。さうして置いて安物は仕方がねえもないものぢやないか。
（古火鉢）膳公濟まねえとも言はなかつたか。勘忍しなの膳公寺とでも、洒落れてくれゝば未だしも我慢がならア。
（古膳）そんな事ぢやア中々うまらない。
（缺德利）うまらなくッたつて始まらねえや。斯う言つちやア無躾だけれど、頭も大分禿てこてんで見渡した處名所古跡が漆かりだ。縁の離れた先から一遍廻つて、後に五杯あがられましましやうぢやア、晩かれ早かれお暇ものだ。
（古藥罐）えゝ默つてろ。膳公は人が宜いと思つて馬鹿にしやがる。何てえ、

玉轉がしの店から轉がり込んで來やがつて、氣の強え事を言ふなえ。手前は何故さう口が惡いんだ。

（缺德利）其口故にこそ此しだらさ。これが未だ滿足なら、お前の沸かした湯の中へ飛込んで、いゝ心持に暖まれるのだ。へゝ、これでも可愛がられた事がござりやす。

（古藥罐）えゝ喧ましいやい。惡く酒ッ氣を吹きやアがると、棚から下へ蹴落すぞ。

（缺德利）お前は直に熱くなるから困る、勘忍しねえ、何も惡氣で言つた譯ぢやアねえやな。

（行燈）まあ〳〵了簡して遣んなさい、一つ塵埃を浴びてる中だ。こゝで詰らない內輪喧嘩を始めると、座敷の奴等に笑はれるわな。

（古藥罐）己ア何も捻くりたかアねえが。此奴が餘りはしやぐからよ。

（行燈）全體德樣お前が惡い。其處へ手をついて謝罪んなさい。

（缺德利）己ア口ばかりで手は無えや。まあ何しろ己が惡かつた。御免な

せえ。
(行燈) うむ、それでいゝ。かういふ處に居ればお互に助合つて、早く世に出るやうにしなくッちやならない。
(古火鉢) さういへば最う一遍何うかして、娑婆が見てえもんだなア。
(釣瓶) 己も見てえ。
(古膳) 己も見てえ。
(井戸繩) 己も見てえ。
(折鋸) あゝお前達は羨ましい。己は最う目が無くなつて、見やうにも見る事が出來ねえ。
(古箒) まあ左樣こぼしなさんな。己なんぞを見なさい。足も腰も擦切られて仕舞つて、一生最う動く事も出來ないわな。これが散々いゝ事をした揚句とでもいふ譯ならば未だしもだが、年が年中塵埃掃除で、面白い日には毛ほども遇はずさ。犬の糞を掻いたり、痰を嘗めたり、反吐を片付けたり、そんな事に爲盡した果が、こゝへ左遷の身とは實に埋らない話ぢやないか。癪に障る

のは座敷の道具だ、疊の上で横柄な面をしやがつて、毎日己の骨折仕事を見て居ながら、たつた一言御苦勞と聲を懸けた奴もない。腹の立つほど胸糞な奴等だ。

（石臼）尤だ／＼。座敷の奴等ア自體己の氣にくはねえ。何か最ういやに裝飾し込みやがつて、おつう主人に胡麻を摺りやアがる。いつか一度は取捉へて、うんと言ふほど撲挫いて遣らうと思ふ。

（天秤棒）己も其氣は始終あるんだ。此方等にばかり汗水を流させやがつて、己等は高みで好い兒になつてやがる。眞箇によ、腕の折れるほど打ちのめさなけりやア、己ア何うしても合點しねえ。

（鉈）何うだ一番、今夜これから座敷へ暴れ込のは。打捨つて置くと癖にならア。皆どうだ。此處で吐言を言つてるばかりぢや始まらねえ。遣付けやうぢやねえか。

（一同）面白い。遣らう／＼。

（鉋）もし隅ッこの先生、お前さんも此樣な處へ蟄居して居るのは口惜しか

らう。氣を揃へて私等の仲間入をなせえな。

〔木太刀〕いふにや及ぶ。身共進んでも遣つて見たいのだ。赤樫木太刀之介峯敦とも言はれるものが、かやうな處に尾羽打枯らして、煤掃の手傳を致すばかりに使はれるのは如何にも殘念だ。目に物見せて吳やう。犬一打たう流の手並をあらはすは此時と心得る。

〔鍬〕こりやあハァ面白え事になり申した。力づくなら私イ負けねえだ。うんと大え事をしてくれべい。

〔石臼〕とてもの事に斯うしやうぢやねえか。座敷をすツかり橫領して仕舞つて、彼處の奴等アさん〳〵こづいた揚句、今までの見せしめに此物置の中へ擲込んで遣らうぢやねえか。

〔天秤棒〕左樣だ〳〵。左樣しなくつちやア蟲が納らねえ。

〔井戸繩〕うむ、腹の癒る處まで遣らざあならねえ。

〔石臼〕皆支度はよしか。ぬかるめえぜ。

〔鉈〕サア遣付けろ。

（井戸蠅）遣付けろ〳〵。
（異口同音）遣付けろ。〳〵。〳〵。
（缺德利）ヤア、ぢん〳〵。ヤア、ぢん〳〵。

座敷狼藉の場

(鉈)ヤイぢたばた騒いでも最う駄目だぞ。かうなつちやア百年目だ。齒に立つ奴は覺悟をしやアがれ。腦天素ッ首どてッ腹註文次第に打割いてくれらア。

(石臼)高が此方の了簡通りにするのだ。今更謝罪つたつて仕樣があるもんかえ。べらぼうめ。己が其樣な事で折れると思ふかえ。臼の目から涙は出ねえぞ。えゝ此奴等ア惡戲けやがるなえ。

(木太刀)己れ奸物めら承まはれ。我々共を何と心得る。天に代つて己等が首を、片ッ端から撫斬に參つたのだ。觀念ひろげッ。

(鍬)こヲれ、がいに土臭えッて餘りハア馬鹿にしねえものだア。こんな時がハア來ねえもんでもねえだア。かくごをしろ、おッ死ぬやうなめに遇はしてくれべい。

(釣瓶)最う餘計な文句はいらねえ。片ッ端から疊んぢまへ。

（古火鉢）左樣だ〳〵。口をきくだけ手ぬるいや。手當り次第に撲しつけろ。

（井戸繩）サア己等何うするか見やがれ。

（古藥罐）用捨はしねえぞ。

（甲）撲倒すぞ。

（乙）打挫くぞ。

（丙）なぐり飛ばすぞ。

（丁）ひしぎ潰すぞ。

（戊）踏殺すぞ

（己）遣れ。〳〵。〳〵。

（缺德利）ちやん〳〵ばら〳〵。ヤア、ぢん〳〵。ちやん〳〵ばら〳〵。ヤア、ぢん〳〵。

（屛風）御免なさいまし。御免なさいまし。私は何も惡い事は致しません。此通り始終腰を折つて、誰にもヘイ〳〵致して居ります。私ばかりはお見の

がしなすつて。
（井戸繩）野痴言をつきやアがるな。お紅をつけて化粧しやアがつて。惡く金地を光らしやアがつて、主人に取入りやアがる仕打が悄くつてならねえ。己手前のやうな奴ア面の皮引剝いて、骨と紙ばかりにしにやア合點しねえ。己逃げやうツたつて逃がすものか。
（屛風）アレ――。誰か助けて下さいよう。アレ――。屛風殺しィ。屛風殺しィ。
（釣瓶）繩公、構う事アねえふん縛つちまへ。
（井戸繩）合點だ。己覺えたか。腰の番も蝶番も、ばら／＼になるほど締上げるぞ。覺えたか。覺えたか何でえ。道具並に泣きやアがつて。
（古銅花瓶）あ痛／＼。あ痛／＼／＼。頭が割れる。割れます／＼。痛い痛い／＼。
（天秤棒）當前よ。痛くなくつて何うするものか。生意氣に花臺なんぞへ上り込みやアがつて、よくも己達を三下に見やアがつたな。何うだ一番、痛え

か痛くねえか。曳やッ。曳やッ。
(古銅花瓶)あ痛〳〵。あッ。あッ。痛、た、た、た。
(折鋸)誰だ〳〵。ヒユー〳〵泣いてばかり居るのは 何だ手前は笛だな。
(笛)ヒユー〳〵。ヒユー〳〵〳〵。
(折鋸)泣いてばかり居やがる。弱い奴だ。此奴め〳〵。
(笛)ヒユー〳〵〳〵〳〵。
(厨子)と何うぞ命ばかりはお助けなすつて下さい。私は眷屬が大勢でございます。私一人の難義てはございません。これ、硯箱硯屏文鎮筆立香爐香箸銀盤短冊色紙文箱奉書杉原双紙共、皆手をついてお願申せ。何うぞ御免なすつて下さいまし。
(鍬)そんだにハア叩頭べい打つちやア私いおッ困るわ。私は一體涙脆いだア。そんだら一番相談打たう。詫の印に濁酒を一升遣さつしやるか。諾と言ふだら手を引くべい。
(鉈)ヤイ鍬ん兵衛、何を言つてやがるんでえ。間抜めえ。馬鹿な眞似しや

がると撲倒すぞ。こん畜生め。
(鍬)こをれ私を打つとは何ちう事だ。私はハァ仲間だァ。
(鉈)仲間も墓場もいるものかえ。べらぼうめ。悪戯けた事をしやがるからよ。これ能く見ろ。斯うするんだ。
(厨子)あッ。あッ。御免なさい。ガラ〳〵〳〵。
(鍬)ハアレヤレ情けねえ。皆打落して仕舞つたァ。
(木太刀)己れ雅樂を亂す魔物め。其儘に差置く事は相成らんぞ。息の根を止めて呉れる。其處へ直れッ。
(琴)私は何も存じません。それは餘り胴慾な。
(木太刀)えゝ默り居らうヤッ。
(琴)あゝッ。コロリンシャン。コロリンシャン。コロリンシャ、ジャ〳〵ジャパチッ。
(石臼)オイ〳〵皆、此位で澤山だ。未だ彼方の室にどしこと殘つてるぜ。ヲヤ火鉢公に藥罐公抜目なく最つと遣れ〳〵。それから一所にふん縛つて

ナ、物置へ擲込むんだア。遣れ〳〵左樣左樣だ。えゝコウ、道具の珠數繋ぎだア餘程珍らしいぜ。あの態を見や。白痴が洪水の逃支度をしたやうだ。あは、ゝ、ゝ、ゝ。

(鉈)あゝいゝ心持だな。今夜ッから此處は己等の天下だ。黴臭え中に重なり合つて、煤の交つた雨垂を飮んで居た昨日に比べちやア、此青疊の上の居心は何とも言へねえ。おッとどつこい歩きつけねえで辷る奴さ。

(石臼)時節は待つもんだぜ。ナア、己ア此樣な運にありつかうとア實に思ひ掛けなかつた。處で何處へお輿を据ゑやうな。此違棚の上にしやうか。オオ冷てえ、己ア冷性だから此處は可けねえ。よし〳〵此座蒲團を斯う敷きの、やどつこいと胡坐をかきは何うだ。何だか判じ物のやうだな。オイ〳〵鍬公、疊の上へ痰を吐いちや可けねえ。餘り物を知らねえぢやアねえか。

(鍬)はアてね、惡いかね。そんだら嘗めて仕舞はう。

(石臼)えゝ穢ねえ。何かで拭取りねえな。オイ〳〵火鉢公お前ごそ〳〵何をして居るんだ。

古火鉢 ナーニ久し振で暖まらうと思つて、今炭を加いでる處よ。皆も寄つてあたりねえ。あゝ堪へられねえほどいゝ心持だぞ。一俵殘らず打入けて仕舞はう。オヤはねるなら、最つと威勢よくはねやな。炭から炭までお賴申しやすだ。

（古藥罐）ヤー／＼馬鹿に火を燻したな。冗談ぢやねえ緣が焦らア。おッと危ねえ、惡くはねるぜ。

（行燈）危ない／＼。何だつて其樣に山盛にしたのだ。行儀の惡い奴は上から轉がり落ちるぜ。先刻洋燈の野郎を打殺して、此にやア石油がこぼれてるから、落ちられた日には其こそ事だ。それと、いふ口の下から落こつた。それ火がついた。言はない事か。撲消せ／＼。熱つゝ熱つゝ／＼／＼／＼。

（鈎瓶）ヤー／＼大變だ。それ障子へ燃移つた。それ天井へ燃付いた。火事だ／＼。

（鉈）大變々々。ヤイ臼公、何だつてぐる／＼廻つてるんだ。オイ木太刀先生、シャに構へて居るばかりぢやア困るぢやねえか。何うしやう／＼。ヤッ

燃抜けた。最う叶はねえ〳〵。あッ火が付いた。熱つゝ熱つゝ助けてくれ助けてくれ。

(大勢)わーッ。助けてくれー。わーッ〳〵〳〵。

(主人)ヤレ〳〵飛んだ事になつた。家は最う燒けてしまつたか。オヤ物置が殘つて居る。オヤ〳〵道具がすッかり詰つてる。此奴は有難いッ。誰が何時の間に出して呉れたのだらう。ヤイ皆來い。道具は何も彼も殘つた。祝へ〳〵。目出度い〳〵。目出度い〳〵〳〵。

寶の山

發端

むかし都を遠く離れて、草深く水清き里に信夫堅三といふものありけり。家は極めて貧しかりければ、送る月日のいと詫びしくて、あるに甲斐なき身をかこちけるが、一年の冬かとよ、昨日今日のならひとて、朝まだきより降る雪に、枯木は忘られし花を散らし、野山は玉敷く庭となりて、日も暮方に近づく程に、いよいよ止むべき氣色もなければ、堅三は早くより戸を鎖して、圍爐裏近く籠り居たるに稍初更を過ぐる頃、しきりに門を叩くものあり。何事にやと立出れば二十四節の深編笠を戴き、鼠無地の衣着たる虚無僧一人佇めり。主人を見るより聲をかけて、「これは行暮らしたる旅の修行者なるが、この大雪に道踏迷

ひて、いづこを里と尋ね詫びしに、遙に此家の燈を見付けてやう〳〵辿り來りたり。近頃申兼ねたれども、一夜の宿りを許し給へ」といふに主人は心あるものなれども、我家の見苦しきに當惑して、眉をひそめて答ふるやう、「それこそ安き御事なれども、見らるゝ如き貧家にて、夜の設も無き仕義なり。御いたはしくは候へど宿の義は叶ひ難し。これより半里ほど行き給はゞ、宿ある里に出らるべければ、それへ參りて泊り給へ」と、いと便なげに言放てば、虚無僧は押返して、「縱令ば土間の隅にてもあれ、雪を凌がん程ならば、雲水の身の何厭ふべき。枉げて宿を貸し給へ」と、割なく賴めば、主人は點頭き「埴生の小屋のいぶせさに、主人の我さへ堪へ難ければ、客人の身のさぞかしと、御斷は申せしが、それさへ厭ひ給はずとなら、幾年なりとも御心に任すべしといふに、彼方は大に喜びて、「そは忝けなき御事なり」と、身に降りかゝる雪を拂ひて、許し給へとにぢり上れば、主人は甲斐々々しく火の邊に導き、「夜に入りては寒さも一しほなり。これに暫く御身を寄せて雪の思を忘れ給へ」と、しきりに榾を差加べつゝ、上に吊せし鍋を下ろし、中の芋粥を器に盛りて、外に參らすべきものなし、心ばかりの饗

應草、いざとばかりに押進むれば、客は喜びて箸を取りぬ。食事もやがて終りければ四方山の物語に暫く時を移しけるに、榾は殘りなく燃盡して、火は次第に消え行くに主人は突と立上りて、有合ふ鉈をおッ取つて調度の箱を打破るにぞ、虚無僧は打驚き「こは何し給ふ」と訝れば、主人は少しく打笑みて、「いやとよ、焚火にせんとてなり。先程も申せし如く壁の骨もあらはの身代、偶來ませし客人を喜ばすべき仕種も無ければ、せめて夜寒の凌ばかりに、心のまゝ暖め參らせんと思ひしが、榾も盡きて詮方なし。むかし佐野の源左衛門は秘藏の鉢の木を切りて、最明寺殿をもてなせしとか、それは生木を割く思ひ、これは春知らぬ破箱を、割るとも何の譽れなるべき」と、圍爐裏の中に投入るれば、虚無僧はいたく感じて、「情深き御心入れ、身に餘りていふべき言葉なし。我もし最明寺殿ならば三箇の庄は愚の事、六十餘州も惜むまじ」といへば、堅三は打笑ひて、「斯く果敢なき暮しはすれど、今にもあれ時節來りなば、痩せたりとも此腕を振ひ、破れたりとも此手拭を鉢巻として、天晴事を成さんず覺悟なり。其時見參に入る事あらば、三箇の庄は我方より、引出物に參らすべし」と戯るゝに、客も大に打

興じて「常世と時頼の二役を、兼ね給ふとは天晴なり」と、あとは笑となりけるが、それより又新らしく、雑談數刻に及びければ、夜は漸く深くなりたり。主人は夜の調度を出して「客の用意とてあらざれば、無躾ながら一ツの床に、二人の夢を見合はすべし」とて、古綿堅き夜具の中に、枕を並べて伏したりけり

昨夕の道にや疲れたりけむ、客は思ひしより寢過して、朝遲く目を覺せしに、傍に主人はあらざりけり。手水にや立ちけんと、稍く暫く待ちたれども、絶えて姿の見えざれば、如何しけんと獨言つ所へ、表の雪を踏分けて、主人は急がはしく歸來れり。竹を撓めたる弓の先に、肥えたる山兎を括付け肩に擔ぎて門口より「客人目を覺し給ひしか。朝餉に少しの饗應せんとて夜の明ぬ中より雪間をあさりて、やう／＼獲物に有付たれば、急ぎ返り來りたり」と、彼の兎を指示せば、客は頻に感歎して「昨夜といひ今といひ、世にうれしき志の人かな。御情に報うべきものなけれど聊か御禮のしるしとして、御知らせ申すべき事あり。近う寄つて能く聞き給へ」とて、堅三を招き寄せて、徐ろにいひ出すやう「これより南方千里を隔てゝ、清華山といふ仙境あり。萬寶山に滿ちて、人の心の望む

限りは、如何なるものも備はらぬはなし。野分を知らず、木枯を知らず、春風いつも、長閑にして、花は匂ひを爭ひ、鳥は歌を競ひて、誠に此世の樂園なり。山中には、金殿甍を並べ、玉人袖をつらねて、そこに來らん人を待つ。人もしこゝに身を置かば、百年の苦を脱して、歡樂の一生を樂むを得べし。されど行手の道筋に、さま〳〵なる難所あり。よく其難を押通して、折れず撓まず來るものには、山を擧げて與ふべきなれど、大方の人は道に恐れて、空しくもとに引返すか、さなくば半途の地に止まり、敢て近づくものもなし。御身もし此難を冒して奮進まん心あらば、早くその山に入りて、一代の榮華を極め給へ。我は余の人にもあらず、その清華山のあるじなる、時期仙といふものなり」といふかと思へば、有りし姿は掻消すやうに失せにけり。堅三は打驚き、稍暫く惘然として、夢の覺めたる心地せしが、やがて拱きたる腕を解きて、心の中に思ふやう、我日頃貧に苦み、これより長き春秋を、かゝる鄙の詫住居に空しく埋木と成し果んとを、いと口惜しく思ひつゝ、蟄龍の時を待ちて、あはれ一度雲雨を得ば、縱横無盡に身を働かし、昇天の望を達せんものと、腕を扼して居たりしに、彼の時期仙は

これを知りて、我を誘ひしと覺えたり。これぞ我出世の門口、俺まで心を剛くして、彼の山奥に分登るべし。如何なる危難もあらばあれ、命を捧げて志を貫かんに、やはか成就せぬ事あらんやと、それより些ばかりの家財を賣り、僅の路銀を懐にして、頃は師走の末つかた、北山颪を後に受け、野も寒がへる雪空に、清華山へと志して、千里の道にのぼりけり、

（二）

去る程に堅三は、山を越え谷を渉り、先へと急ぎ行水の、一夜とまりの薄氷、むすぶ草鞋を踏しめつゝ、或時は岩を攀ぢて、藤蔓に命をからみ、又或時は野中に行暮れて、宿とても無き草枕、吹來る風に夢を取られ、兎角して行くほどに二十日目の晝になりて、大なる河の邊りに出でたり、河幅いと廣くして、向の河原は見る目も及ばず、水流殊に矢よりも早く、逆卷く水の物凄ければ、驚きながら見廻はすに渡るべき橋もなく、舟の影さへ見えざるにぞ、如何はせんと打案ぜしが、傍に年經たる松ありければ、外に行くべき道やあると、小高き枝に攀登り、小手

をかざして遙に望むに、水はつれなく土を分ち、河を滔々として涯限なし、左の方を見るに、烟賑はしき村ありければ、兎に角其處の人を尋ねて、此地の樣子を能く聞くべしと、下りんとして下を見るに、覆面したる武士一人、黑羽二重の古小袖に、白博多の帶を結んで、朱鞘の大小落し指にしたるが、蟠りたる木の根のもとに人待ち顏に腰掛け居たり。姿いかにも荒くれて目付いと憎さげなれば、その善惡を測りかねて、暫く上に猶豫ふ所に、忽ち此方の岸傳ひに、二ッの酒樽を車に載せて、長柄を押來る若者あり。武士は遠くより手招きすれば、彼は逸早く急ぎ來りぬ。武士は先口を開きて、「骨助、先程より待兼たり。首尾は如何に」と小聲にいへば、骨助といふ若者は、車を道にさし置きて、武士の傍に近く寄り、同じく聲を打潛めて、「今宵は誠に上首尾なり。猿松めは和子の供して、夕暮より隣村へ行くべければ、翌日にならでは歸り來ず。杢造は病氣にて、昨日より籠り居れば、物の役には立つべからず。あとは婦女ばかりなれば、此圖を外さば又機會なし。これを告申さんとて、此まで御身を呼びしなり」と、語れば此方は笑み傾け、「よくこそ早く知らせ呉れたれ。事成りし曉には、謝物は望む

ほど取らすべし。これは當坐の褒美なり」と、懐に手を入れて黄金若干を取出し骨助に與ふれば、數多度頭を下げて、かゝるものを受け申しては、甚だ本意に反くべけれど、折角の御志ゆゑ、先御預り申して置くべし」と、口と心の表裏うちより取出す財布の中へ、押戴いて納めけり。武士は又聲を低くして、「爾がいふ如くならば、家に入りなば手の内なれど、もし忍び入る迄に、餘所目にかゝらばいと便なし。これにはよき手段は無きか。日頃聰慧き爾の事、謀はいくらも有るべし。智慧を貸せよ」と云も果ぬに、骨助は差出で、「誇るに足らねどそこは骨助御頼みの出ぬ前に、早くも謀を廻らしたり。今日主人の言付にて、市に行きて斯の如く、二樽の酒を求めしが、僕かねての企計あれば、一ツは酒ある樽を求め、一ツは空樽を購ひたり。そは御身を此中に忍ばし、竊に家に持行て、夜深けて人知れず出さんとなり」と、いへば、武士は横手を打つて天晴至極の妙計なり。さらば人目にかゝらぬ内、早くその中に隠るべし」と、あたりをよく／＼見廻はせば、骨助は心得て、空樽の鏡を拔き、「此窮屈なるべけれど望の爲に忍び給へ。夜に入りなば饑ゑ給はんかと、食物も用意して、かねて此中に入れ置き

たりと、いへば武士は打喜び、「何から何までの心遣ひ、恭なしといふの外なし。恨重なる木村佐内を、今宵のうちに斬つて捨て、日頃の恨を晴らすのも、全く和主の賜なり」と、いひつゝ樽のうちに入れば、骨助は手早く蓋をし、もとの如くに莚を着せて、素知らぬ振して引行きたり。 堅三は木の上に、一部一什を聞終りて、對話の様子を察するに、彼等は腹黒き輩にて、劍を惡念の犧牲として、左内といふ人を殺さんと計りけるか。 氣の毒なるは主人なり。 家の鼠に身を嚙まれて、今宵を限りの露の身とは、夢にも現にも知らざるべし。 これを聞流すは心よからず。 早く其人に遇ふて、事の仔細を告知らせんと、木のもとに下立つて、かの車の影を望むに、未だ遠くはあらざりけり。 仕たりと密かに跡を跟けて、車の行くに從へば、先程見たりし村のうちの、大なる搆の家に、危き酒樽を引入れたり。 堅三は其處に至りて、それと無く案内を乞ひ、主人に遇ひたき由をいひ入れしに、事もなく座敷に通されぬ。 主人といふは五十ばかり、小鬢の上に霜を置きて、顏立まことに情深き人なり。 先初對面の口義濟みて、「何用ありての御入來ぞ」と主人の問に堅三は萬の事を差置きて、今松の上にて聞し事を、

一も洩らさず物語りつ「かゝれば御身は誠に危うし。早く手段を廻らして、詭計の穽を破り給へ」といへば、主人は大に驚きて「その武士は馬淵傳八と呼び、もとは此地に住みし浪人なり。よからぬ行爲度々にて、村の歎きの種なりしが、我は此所の鄕士にて、國の守の仰を受け、此土地の制裁すれば、遂に彼を村より逐出しけるに、其後再び來りしを、嚴しく懲らして放ちしかば、それに意恨の根をふくみて、我を害せんと企てしならむ。夜半に嵐の花の命、御身もし無かりせば、明日を賴まず土に任す身なり」と、其實意を喜び聞え「彼等の企計を聞く上は、手を空くして待つは愚なり。よろしく手はずの裏を行くべし。骨助は素早き奴なれば、取逃しては惡しかりなん。我如此々々すべければ、御手を貸し玉はれ」と、堅三によく賴みて、何氣なく骨助を呼び寄せ、さらぬ用事を言付て、家の外に出し遣り、直に堅三を引連れて、樽ある方に導きつゝ「何方が空樽」と尋ぬれば、堅三は先程に、見覺えたりし樽の方を、それぞと指もて敎ゆれば、主人は只點頭きて、太き釘を取出し、忽ち上に打付けたり。それよりもとの座敷にかへり、猿松といふ下僕を呼寄せ、何事をか囁けば「承はりぬ」と承領きぬ。斯とも知

らず骨助は、暫くして歸り來たれば、主人は頻に勞りて、「骨助誠に大儀なりし。骨休めも爲せずして、度々遣ふは心なげなれど、今一ツ頼む事あり」といへば、骨助は慇懃に、「こは變はりたる仰かな。主人が下僕を使ひ立つるに、用捨し給ふことあるべからず。何なりとも命じ給へ。仰を背くまじ」といふ。主人は笑を粧ひて「そはまことに滿足なり。頼みといふは外ならず。爰に在ます客人は、甚く角力を好み給へば、その御管待として猿松と汝と二人、此所に力を比べて、一ト勝負お目に掛けよ。角力は汝も好の道。日頃閑暇ある折々は、裏の庭にて猿松と、度々取組むとあれば、それを爰にて見せよ」といへば、堅三も其尾につきて、「和主はいと迷惑ならんが、猿松殿も承知したれば、枉げて一ト手見せ給へ。いづれにせよ勝ちたらん方へ、小判一枚參らすべし。いざ〳〵」と言葉を添ゆるに、計なりと夢にも知らねば、主命も默止し難く、二ツには慾に引かれて、喜びながら「承はりぬ」と、早くも庭に下立つて、衣服を脱ぎて赤裸となり、土を踏鳴らして「いざ」と云へば、猿松も支度して同じく庭に下立ちぬ。主人は行司の眼を配りて、團扇がはりの煙管を擧ぐれば、猿松は突と入りて、下手に聢と組付

きつ、下帶を堅く摑めば、主人はそれと見るよりも直に寄つて骨助が、足を引いて引倒せば、「こは何事」と驚くを起しも立てず兩腕を、逆手に取つて捻上げたり。堅三は走寄り手早く骨助が帶を取つて、ひし／＼と縛上げぬ。猿松は逸早く納戸の方に走行きて、彼の釘付の空樽と、別に一ツの空樽を轉ばしながら爰に運び、罵り噪ぐ骨助を其中に推入れぬ。主人は一通の罪惡狀を認め、樽のうちに投入れて、上より蓋を確とし、これも釘付に爲たりけり。其時主人は聲を上げて、「爾等我を害せんとするも、天道いかでか惡を助けむ。上に思はぬ耳ありて、先に松のもとの密談を、洩さず聞きし人ありと知らずや。爾が罪爾を責め、今樽牢の境遇は、自ら求めし刑なり」といへば、二ツの樽のうちよりして、「許し給へ」と云ふ聲の、心には似ず微かに洩れたり、主人は「言付し通りにせよ」と、猿松が方を見返れば、早くも裏手に走行きて、大八車を持來り、二樽を積載せて、嚢の河邊に引いて行き、梶を下ろして樽に向ひ、「生死は天に任すほどに、觀念せよ」と呼はりつゝ、兩の樽を一つ／＼、水の中に投込めば、急流直に彼等を載せて、渦きながら押流し、瞬くうちに見えずなりぬ。それより先、主人は堅三を座敷に請じ

て、改めて再生の恩を謝し、心の限り饗應しけり。　堅三は主人に向ひて、先づ我身の上を語り、彼の河の樣子を問ひ、「渡るべき所ありや」と云ふに、主人は眉根を打顰めて、「そは眞に便なき事なり。　此河は昔より、かたの如き激流にて石も流るゝばかりなれば、橋も掛からず、舟も通はず。　往時大膽なる冒險者ありて、向の岸に至らんとて、種々の手段を用ひしかど、殘らず水の泡となりて、其身をも遂に失ひしかば、それより手出しをするもの無し」と、いふに堅三は失望して、「さらば其源に遡り、流の出る山を越えん。　其山は何處」と問へば、主人は首を打掉りて、「それとても叶はぬ事なり。　流は千里の遠きより來りて、人の足の及ぶ所にあらず。　これを極めんと企てし人もありしが、一度家を立出でしまゝ、遂に歸りしを聞かず」といふに、堅三いよ／＼力を落して、翼を取られし鳥自物、空を仰いで歎息せり。　其夜は主人にとゞめられて、設の床に身を伏せしが、兎やせん角と思ひ亂れて、目は少しも塞がらず。　やう／＼東雲を告ぐる頃、一ツの手段を案せしかば、明くるを待つて主人に遇ひ、靜に語り出すやう、「昨日御身の物語にて、河は渡れずと聞きしより、甚く望を失ひしが、中折するは本意ならずと、さ

まざま思ひを廻らせしに、こゝに一ッの危計あり。そは大凧に打乘りて稍中空に登りし頃、此方の糸を切つて放たば、容易く向岸に落着くべし。此義は如何に」と、云へば主人は打驚き「それはよけれど眞に危うし。もし落所惡しければ、命を失ふも計り難し。危きに近寄らずとの敎もあるを、其義は思止り玉へ。殊更向は如何なる所か、むかしより聞も傳へず。若し人も無き所ならば、立歸らんにも道無ければ、孤身天涯に取殘されて、果は其處に空しくならん、其時歎くとも甲斐なき事なり。それよりは我家に長く足を止め玉へ。再生の恩報じに、我力の及ぶ限りは、御身を樂まし申すべし」といへば、堅三は打消して、「龍の顎を探らずは、希世の玉は得難かり。危きを侵してこそ、人に勝れし業も成るならめ。我思ひ定めし上は、命を捨てゝ爲終すべし。是非に一臂をかし給へ」といふ。主人は猶も思止れと、切に說勸めしかど、堅三は聞入れねば遂にいふが如くにして、それより大なる凧を作り、彼方に吹行く風を待ちしに、程なく梢の鳴る日ありければ、堅三は主人に向ひ、いざ打立たんと暇を乞へば、左内は餞別によき衣を送り、夥多の路銀を持たせ、落ちたる時怪我なきやうにと、氈に包

まれて、嶮崕を下りし、昔の人を思ひ寄せて、綿厚き蒲團のうちに、堅三を包み入れ、萬一の用意にと、食料までも取添へつゝ、大勢の人を頼みて、河原に出でゝ空を仰げば、風は頻に荒勝りて、此方の手を下すを待つやうなり。時分はよしと力を合はせて、用意の凧を打揚ぐれば、忽ち雲井にのし上りぬ。やう〱糸を繰出すほどに、河より先に高くなれば、先綱の手を緩めて、凧を地に近く下げんとしたるに、如何しけん、糸目のもとより弗と斷れて、凧は飄々として落つると見えしが、やがて遙に隔りて、行衛も知れずなりにけり。

（二）

雲に乘り風に御するは、昔語に聞きしばかり、翼なき身の空を行に、末はいかにと心元なくて、覺悟せし身も坐ろに恐ろしく、谷の狹間に轉入るか、峯の頂に落ち殘るか、命を賭けての業なれば、心も空、體も空、今か〱と待つうちに、忽ち撞と落ちたりけり。幸にして身を傷めぬを、喜びながら又思へば、如何なる處と氣遣はしく、蒲團のうちより出て見れば、こは怎麽に、深さ三丈ほどの穴の底な

り。上は青空を遠く眺めて僅に見ゆる雜草の風に點頭くばかりなれば、驚きながら耳をすますに、時々叫ぶ鳥の外は、絕えて物の響もなし。さては住家もなき所か、若し通りかゝる人もやと、聲を張上げて助を呼べど、人の來る氣色もなし。かくて三刻も續けたれども、たま〳〵來るは木の葉のみ。かたばかりの音信もなければ、聲も枯れて心細きに、つれなく日は暮れて行きぬ。其夜は贈られし糧に饑を凌ぎ、蒲團の上に惡な夢見て、明くる日より又新らしく、聲の限り呼びたれども、少しの甲斐も無かりけり。いよ〳〵人跡絕えたる所か。食料にも限あれば、こゝに埋もる魂とやなるべきと、そゞろ涙に暮れけるか、此儘死ぬとの天命にはあらざるべし。我命の續く限りは、如何にもしてこゝを出つべしと、又思ひ返へす時、轟然たる物音しければ、何事ならんと見廻はすに、天なる哉こは地震なり。蹈む足下の震ふと共に、上の土の落かゝれば、嗚呼所詮無き命か。此上は自然に任すべしとて、目を塞いで覺悟を極めしに、大地は猶も震動して、靜まるべき氣色も無きに、忽ち地盤の碎くる音して、上の土一時に落ち覆重なる土石の下に、埋られしと思ふ途端我居る所どつと壞れて、奈落

の底かとも云ふべき下に、投ぐるが如く落されたり、堅三は惘として、人心地も無かりしが暫くして我に返れば、四面はあやなき闇の中にて、たゞ苔臭きばかりなるにぞ、手を延ばして探見るにこゝも又穴のうちなり、されどさし來る光もなければ通路絶えたる土の中かと、心元なく思ふ時何所よりと知らず冷たき風顔を掠めて吹去れり。さては口ありと心嬉しく、手探りして進むほどに更に行手を遮るものなし。又々颯と風の來ればこゝは山の洞穴なるべしと、一町ばかり辿り行くに、微かに光の洩るゝ所あり。それを目當に猶進むに、琴と落つる瀧の音、程遠からず聞えたり。これに氣を引立てゝ、いよ〳〵足を勵まし行けば、うれしや洞の口に出でゝ、再び浮世の人となれり。堅三は又新らしく生れ出でたる心地して、思はず天を伏拜み、こゝは何處と見廻はすに、山と山との谷間にて、先に聞きたる瀧の音は向の山より落來るなり。前は淺き谷河にて下流はさまで低からぬが、水音靜かに流れ行けり。土地の案内も知らざれば、左に行かんか右に行かんか、いづれと定め難たれど、兎にも角にも里に出でゝ行先を定めんには若かず。それには河下を行く方に、便宜なる事多

かるべしと流に添うて下り行きしに、右手の小高き岩陰より、一聲高く吼ゆるものあり。見れば恐ろしき大虎一匹此方を睨んで突立ちたり。堅三は大に驚き、一目散に逃出せば、虎は矢庭に岩を飛下り、谷河の流を蹴つて、此方の岸に着くより早く、牙を鳴らして猛り來れば、胸も裂けなん思ひして、心を飛ばして走りけるに、忽ち山谷鳴動して、向の丘より飛ぶが如く、此方を指して來るものあり早くも行手の道に塞がり、大口を闊と開いて、頭の上より襲ひかゝるを見れば凄まじき巨蟒なり。太さは千年の松の如く頭は千曳の岩の如く、眼は鏡の如く、舌は火の如く、吐く息霧を結んで、四面は忽ち朦朧となりにけり。後は虎、前は巨蟒、嚙裂かれんか、呑殺されんか、命は一つ二つの劍に、とてもかくても無き身なり。望みの綱も玉の緒も、一時に絶ゆる事かと思ふに、虎は早くも近けば巨蟒も目の前に進んだり、彼方は摑んで裂かんとす、此方は一呑に呑まんとす、一ッ獲物を爭ひて、互に睨み合つたる中に、堅三が命脈は、風に搖めく燈の今一息の一刹那、虎は岩をも擘く聲して、爪を逆立て摑みかゝれば、巨蟒も一時に飛びかゝる、其時一天俄に搔曇りて、颯と落す風と共に、一羽の大鳥舞下り、足

に堅三を引摑み、雲井遙に飛去つたり。一つ免がれて又一つ、堅三は摑まれながら、雲を衝いて翔るほどに、果は地上を遙に離れて山も忽ち見えずなりけり。響くは空吹く風の聲、四面渺茫たる中空の、雲を出で雲に入り、矢よりも早く飛んで行くに、幾十里を走りしやらむ、何處へ來しやら更に分らず。此鳥形は鷲に似て、翼は垂天の雲の如く、羽の色は墨よりも黒く、胸は黄金色の細き毛生ひたり。眼は血盆の如くにして、底に凄まじき光あり、嘴は利鎌の如く、足は黒鐵の如く、爪は鋭き鉤の如し。堅三は見るに恐ろしく、今にも下におり立ちなば、彼の翼に搏れんか、此の嘴に突かれんか、穴を出でゝ虎に遇ひ、巨蟒を免がれて此鳥に取らる、此度は死を免がれじと、苦しき内に嘆ずるうち、鳥は漸く羽搏をゆるめて、下へ〳〵と舞下りぬ。こゝは漫々たる海原に、打續きたる濱邊にして、東の方の波打際に、直立百丈の巖ありけり。鳥は一文字に其處を指して、波の上を横ぎりつゝ、三町ほどを隔てし時、突然凄まじき聲を上げて、堅三を振放し、驀地に飛行きたり。此巖の頂に、彼はかねてより巣を作りて、二羽の雛を育てしに、親鳥の留守を覗ひて、いつしか

忍び入りにけむ、身の丈一丈ばかりなる狒々一匹、巣のうちに入込みて、一羽の雛を喰盡し、あとの一羽を取つて押へ、諸手に裂かんとして居たり。今しも親鳥の聲を聞きて、佶と彼方を睨みしが、此方に向つて來るを見るより手に押へし雛を捨てゝ、直さま巖を馳下り、磯邊に並ぶ岩を拔取り、寄らば投んと身構へたり。大鳥は早くも翔り來り、我子の敵といはぬばかりに、一聲叫んで迅風の如く狒々の上に舞下り、翼を擧げて競ひかゝれば、隙さず岩を投付るに、彼方はひらりと身をかはし翼を揮つて一搏うてば、狒々は撞と倒るゝを起しも立てず鋭き觜もて、胸のほとりを突んとするに、狒々は早くも首を摑んで、咽元深く嚙付けば、彼方も怒つて觜を鳴らし敵の脇腹を突破る、死物狂の奮擊突戰、砂を蹴散らし風を撲つて、雙方痛手に唸る聲は、天地も壞るゝばかりなり。それはさておき堅三は、計らずも振離され、驚く隙も波の上に、ざんぶとばかり落込みつ、水底深く沈み行けば、こは事なりと力を奮つて手早く着物を脫放し、腕の限りに泳出して、漸く水面に浮び出れば、磯邊に叫ぶ諸聲は、身の毛もいよ立つばかりなるに、又驚いて振向けば、彼の狒々と大鳥は韓紅の中に亂れて、雙方息も

絶え〳〵に、程なく屍を並べたり。堅三は理由を知らねど、先我難は免がれたりと、心竊に喜びて、岸を指して泳行くに、近き後の方に當りて、不思議なる物音したり。何ぞと泳ぎながら振返れば、こは怎麽に、大なる鮫一尾、此方を指して追來れり。堅三は慄として、近づかれなば一大事と、必死となつて泳げども、水は陸より自在ならず、心はあせれども身は進まず。鮫はいよ〳〵間近くなるに、岸は隔てたり、舟は見えず、免がれん術もなかりけり。かゝる所に又後より山の如き濤寄せて、身の丈非凡の大鯨、海も彼には淺きにや、波より高く背をあらはして、雜魚鰯を追掛け來れり。鮫はこれに恐れてか、何處ともなく逃行きぬ。鯨は猶も此方に進むに、波はその力に推され、磯邊の岩を打越して、遙に遠く推し行くにぞ、ほとりに立つたる松の幹も、半水に埋りぬ。堅三も諸共に、その波に押流され、松蔭近く來りけるに、鯨は鰯を飽まで吸つて、やがて遙に退けば、波はそれと共に引いて、堅三がありし邊は、忽ちもとの洲となりて、取殘されし雜魚鰯はあなた此方に數を亂して、砂の上に狂ひけり。堅三は又再び、陸の上に身を置きて、ホッと溜息を洩らしつゝ、稍蘇生へる心地したれど、身は何ひとつ

なき丸裸、行かんにも詮方なければ、先人里は何れの方ぞと、小高き處に登り行きてつく〴〵四方を見渡せども、連山峨々たるばかりにて、其影さへ見えざりけり。饑は次第に迫り來れば、彼の鰯を拾取りて、腸を去り潮に揉み、生身ながら仕てやつて、辛うじて腹は滿たせしが、かくてあるべきにあらざれば、猶も行くべく方を探るに、南の山の木の間を洩れて、僅に草を押分けたる、名ばかりの道ありけり。やう〳〵其處に辿着きて、行けども〳〵人に逢はず、況して家もなかりければ、如何はせんと打案ぜしが、道あるならば通ふ人あるべし。此道を只管行かば、いつかは里に出でなんと、心自ら勵まして、木の根岩角を踏鳴らし、勇を鼓して進みけるに、九里ばかりの山道を登りて、頂近く來りし頃、遙に家の棟の見えけるに、喜び勇んで走行けば、何の、これは人の住家にあらで、荒れ勝りたる古社なりけり、堅三は失望して、朽たる床に腰打掛け、暫く道の疲を休めて、猶行先を考ふるに、時は既に春ながら、山風裸身にいと寒ければ、身を暖めんと思ふにも、火のなき事を恨みけるに、足本に程近き處に、木樵か狩人の落し行きけん、古き燧袋のありければ、不思議の助と大に喜び、枯木やあると尋ねしに、

山はこれに自由にして、嵐に落ちし枝夥多あれば、忽ちこれを積重ね、燧袋を手に取つて、火を打出して燃しつゝ、これに身を暖めて、暫く憂を忘れ居たるに、此火の下の土の中は、地蜂の巣なりけん傍にありし小穴より、その數幾萬となき熊蜂、狂ひながら現はれ出で、此方に向つて飛來るにぞ、堅三は大に驚き、焚さしの枝を振つて、彼方此方に追拂へど、彼等は數萬の大軍なれば、打てども拂へども物ともせず、隙間を潜りてしたゝか螫すに、其痛さ骨に徹りて、身も魂も切斷るゝばかりなれば、かくてはとても叶はじと、逸足出して逃げんとするに、彼等は早くも追すがりて顏ともいはず手ともいはす、所嫌はず螫立つるに、丸裸の蔽ふ所なければ、全身針を免がるゝ方なく、見る〳〵體は腫上りて、紫色に血走りたるが、心の苦艱は如何なりけん、地に立つ力もなくなりて、忽ち其處に悶絶せり。松吹く風の音訪の外は、慰むるものなかりけるが、暫くして彼方の森蔭に笛の音響きて、牛に乗りたる童子一人、身の脇に柴を積重ね、上に挿したる梅一枝、匂ひを路にこぼしつゝ、此方を指して來りしが、此體を見て打驚き、直に上より飛んで下り、助起せど正體なければ、やう〳〵牛の脊に擔載せて、麓を指し

て急ぎ行きぬ。牛の歩みのはかどらず、日も入相に程近き頃漸く麓路に來りしが、それより左の道を折れて行くと未だ十町ならず、一きは繁き林原の中に、竹を編んで扉としたる、家の前に着きにけり。童子は扉を押開き、牛を内に引入れしに筧の水の音する方に、六十路あまりの老翁一人、胸迄垂れし白髯を握りて、童子の方を見返りしが、堅三が姿を見て打驚き「そは何者」と急がしく問ふに、童子は輕く一禮して、有りし次第を物語れば「よくこそ連て來りたれ」と、翁は童子を稱へながら、手早く堅三を抱下ろして、座敷の中に擔入れぬ。こゝは醫師の家と見えて、此方には白味簞笥、彼方には藥袋を隙間もなく置並べたり。翁は堅三をよく〳〵見て、先氣付を與へけるに、忽ち息を吹返しぬ。翁は事の由來を聞けば、堅三は苦しげに、蜂の事を物語るに、翁は又も藥を取出し、全身によく塗りて、次に一服の藥を飲ませ、童子を呼んで床を取らせ、堅三を休ませて、しきりに介抱したりけり。かくて翌日になりけるに、藥の効驗著しく、疼痛は早く身を去りて、もとの堅三となりしかば、翁に向ひて夥多度、再生の恩を謝しけるに、翁はそれを打消して、委しく堅三が身の上を聞くに、堅三は事の初より、

落もなく物語れば、翁は聞くごとに驚きて、耳をすまして居たりしが、やがて言葉の終るを待ち、徐ろにいひ出すやう、「御身清華山へ行くはよけれど、これより先の道筋は、怎麼なる危難あらんも知れず。清華山の事はしも、知る人世に少からねど、途中の難を聞くが故に、恐て行くものいと稀なり。御身これまでの危を侵して殆ど死を免かれず。猶此上の難を凌がんよりは、此下村に止まり給へ。この麓の中里村は、天然の沃土にて、五穀耕さずして四季に熟り、其上一箇の金泉ありて、絶えず黄金を吹出せば、家毎に貧しきを知らず。暖に着、安らかに眠りて、家根に野飼の猫までも、皆飽まで肥太れり。されば命がけの旅を行きて、憂日を重ぬるは御身の損なり。上の望を思捨てゝ、此樂村に止まりて、平和の一生を樂しみ給へ」といふに、堅三はやゝ暫し、腕を拱き首を垂れて、とつおいつ考へたりしが、やがて俯向きたる顔を上げて、「御心添は世にうれしけれど、盤根錯節に遇はざれば、利器を得ることは難かるべし。一尺の屏風は、直ちに躍つて越ゆべからず。清華山ほどの處へ行かんに、平坦の路を踏んで着くべきにあらず。途中の難はあるべき事なり。我命の續く限りは、飽まで素志

を貫きて、斃れて後に終るべし。望みし事を思ひ止まるは、男兒の本意とする處にあらず。懲りずまの此身ひとつの、命を賭物として道中雙六、賽の日の運に任して行くべし」と、思ひ定めて答ふれば翁は強てとも推し勸めず、「金魚は丸鉢の中に眠り、鯨は荒浪の山を蹴立つ、物各其性あり、石菖の下蔭は、御身の鰭を容れざれば、とゞめても詮なき事なり。たゞ此上は滯りなく、道中の無異を願ふなり。先暫くは此處に居て、英氣を養ひ給へ」といへば、堅三は喜びて、其日はここに足をとゞめ、明くる日の東雲に翁に向つて暇を乞へば、猶四五日逗留し給へ」としきりに推して勸めしかど、一日も早く先に着かんと、あながちに辭退すれば、さらばとて其意に任せ、「これは我寸志なり」とて、よき衣と路銀を贈れば、堅三はあまたゝび禮を述べて受納め、それより遂に袂を分ちて、又も道芝を分け行きぬ。

（三）

又しても見る旅の空、曉告ぐる山烏に、人より先に起別れ、夕を送る鐘の聲に、先

のとまりを急ぎつゝ、二日三日と經るほどに、早く數十里の道を步みぬ。それより廣き沙漠を越えて、心一筋に進みけるに、行手に聳えたる山ありけり。木立いと深くして、晝もほの暗き處なるに、足につれなき石高道なれば、辛うじて登り行くに、やう〳〵山腹に來りし頃は、玉の汗沸き流れて、吐く息もいと苦し。足も思ふに任せねば、暫く疲勞を休めんとて、只ある松蔭に休らひ居たるに、突然後の方に當りて、阿と驚く聲のしければ、急がしく振向くに、年の頃は十六七、容貌玉の如き美少年、綾の袂を風に亂して、此方に向つて駈來りしが、近づくより口早に、「御身何として此處に來つる」と、聲打上げて問ひければ、堅三は何か知らねど、心の中は穩かならず。「我は漂泊の旅人なるが、南の方へと志して、今しも此山を越えんとせしが、道のいとも難儀なれば、こゝに暫く休ひたるなり」と、ありの儘を答ふれば、美少年は聲せはしく、「事の由來を知り給はねば、驚かれぬも尤もなり。此山は鳴神太郎と呼べる、强賊の棲家にして、常の人の來べき處にあらず。殊更山塞に程近き、此處に居るにいと危し。其上彼の掟として、手下の心を固めん爲、毎月一人人を殺し、其血を綴つて誓約をなす。明日は恰も

誓約の日なれば、御身彼等に見咎められなば、忽ち命を失ふべし。早くこゝを免れ給へ」と、急がし立つれば、堅三は仰天して、御好意謝するに餘りあり。これより此山を立越えんに、外に行くべき道あるべくや。」「御身の無事を計るならば、引返へさんには若く事なし。されど萬一を免かれて、先へ行かん心ならば、彼處に見ゆる森を過ぐれば、荊蕀に亂れたる徑路あり。それを便り、何處までも行かば、やがて麓に至り着くべし。今日鳴神は外に出でたれば、其道より歸らんも知れず。十分用意して行き給へ」といふ。堅三は厚く禮して、早くも彼方に走行き、敎へられし森を廻り、葎に荒れたる道を求めて、それより林をくゞり森を穿ち、足を空に走りしが、今にも賊に逢はんかと安き心もなかりけるに、向の方に砂烟立登りて、人馬の駈來る物音あり、木葉越しにすかして見れば、究强の男三十人ばかり、各々得物を携へて、馬に鞭あて來りけり。眞先に進んだる人は、熊の皮の羽織に、緞子の野袴を穿き、大段平の欛長く、手に太き鐵棒を提げたり。いづれもおどろ〳〵しき樣、一目賊群と見てければ、堅三は打驚き、暫く物蔭に身をひそめて、遣り過さんと傍を見れば、繁りあひたる篠原あり。こ

れ、幸と身を翻へして、忽ちそのうちに隱れ居たり。彼の一群は早くも近づき、此處を走り拔けんとせしが、眞先に立つたる馬、如何なしけん礑と止まりて、打てども蹴れども些も進まず、馬上の人は怪しみて四方を佶と睨廻はし、「稻妻(馬の名)が進まざるは故こそあらめ。者共四方を改め見よ」と、大音上げて下知すれば、阿と應へて跡の者は、ばつと左右に引分れ、草を拂ひ竹を分くれば、堅三は難なく見あらはされ、先に聲かけし人の前に、兩手を取つて引据ゑられたり。

其時彼は聲鋭く、「爾彼處に隱れ居たるは、深き仔細のあるならん。眞直に白狀せよ。若し僞を構へなば、忽ち此鐵棒をもて頭を微塵に打碎かん」と、持つたる鐵棒を振上ぐれば、堅三は押へられながら、「某は烏散のものならず、北の方より旅路を急ぎ、只今此所に來かゝりたるが、遙に方々を望見たるに、皆々武器を携へらるゝに、心大に恐ろしく、身の安きを計らんとて、此笹原に忍びたるなり。外に仔細も候はず」と、いへば彼方は冷笑ひ、「言葉を設けて免がれんとするも、それに乘るべき我ならず。縱令野心なきにもせよ、免して歸へす事はなりがたし、明日は誓文の當日なれば、血のなき事を患ひしに、此所に爾を捕へしは、稻妻

よく我意を悟りて、爾を我に授けしなるべし。これより山寨に連行きて、土牢の中に投込み、明日は爾の息の根を、盃の中に注ぐべし。爾輩が賤しき血を、我等が口に吸はるゝは、天晴果報の至なり」と、いひつゝ馬より飛んで下り、堅三を引攫み、小脇にしつかと抱込みつゝ、其まゝ鞍に跨りて、山塞指して急行けば、あとの者も馬を立て直し、鞭を早めて從ひ行きけり。馬の足搔の早くして、曩に美少年に遇ひたりし所も、瞬くうちに過行きぬ、猶も蹄を飛ばすほどに、黑木の柵を結廻らしたる、館めきたる處に來れり。正面に門ありて、守衞らしき大男二人、鎗を持ちて立つたるが、今一群の來るを見て、鎗を伏せて拜すれば、鳴神は威を正して門よりうちに進入るに、あとの一人走り拔けて、「御歸館なり」と呼ばゝれば、上手に見ゆる玄關の、隔ての襖颯と開いて、美目よき小性十人ばかり、出迎へて手を支へぬ。先程の美少年も、其中に交り居たりしが、堅三を見て驚ける樣なり。鳴神はうちに入らず、直に左手の山脇なる、土牢の前に行き、中に堅三を投込みて、前なる鐵の格子戸を閉し、確と錠を打下ろして、もとの處へ退きぬ。堅三は禍災の、又ふりかゝるを歎息して、牢のうちを見廻はすに、これは山の崖

を穿ちたる、堅固なる土牢にして、前は鐵の格子戸なれば人の力の及ぶべきにあらず、所詮免るゝ術はなきか、かくて死を待つべきかと、胸は有也無也亂れ居たるに程たちて、此方に來る人の足音あり、格子のうちよりすかし見れば、曩に松蔭に憩ひし時逃げよと敎へたる美少年なり。彼の人此所に來るは、つれなき事にはあらざるべし。もし我を助けんとてかと、心の中に喜びて、近づくを待ちたりしに、忽ち左の方よりして、山刀に身を固めたる、髭男あらはれ出で、「知世殿、何とて其處へ行き給ふ」と、聲打上げて呼止むれば、美少年は振返り其方を見て完爾と笑ひ、「さいふは豺次殿か、今頭領の物語にて、囚人の事を聞きつるが、怎麼なる奴かと見に行くなり。和殿も共に行かずや」といへば、髭男は點頭きて、「桝にかゝりし瘠鼠が、死知期を歎く面色を眺めんも一興なり」と、打笑みながら連立つて、牢の前に來りけり、豺次は先さし覗き、堅三を見て冷笑ひ、「最早いかに悶ゆるとも、斯うなりてはお陀佛なり、知世殿彼の泣出しさうな面を見玉へ、猿か熊の膽を甜めしやうなり」と、大聲上げて笑ひしが、又堅三に打向ひ、「爾がみすぼらしき樣を見んとて、知世殿が參られたれば、せめて饗應草として、團子ほ

どの涙をば、ぽた〳〵垂らして見せよとわめけば、堅三は佶と睨んで、「世に情を知らぬ奴かな。人の災を心よしとするや。我は手出しを爲さゞれど、天道そのまゝに差置んや。今に思ひ知らすべし」といへば、財次は呵々と打笑ひて、「しやう事なしの減らず口、我爾を笑ふとて、天道の罰を蒙るものなら、飽まで大に笑ふべし。白痴よ、阿房よ、侫倜よ」と、いひつゝどつと打笑ひ、「それ見よ天道何とも爲ず」と堅三を嘲りて、知世の方に打向ひ、「和殿も共に笑はずや」といへば、知世はそれを打消して、「笑ふのみにては興薄し。彼を辱めて怒らせん」とて、袂より紙を取出し、齒の中に押丸めて、堅三が顏に打付くれば、頰のあたりに當りたり。財次は大に打笑ひ、「爾これを無念と思はゞ、早く天道を呼來れ、されば紙礫は頽る手緩し、我はこれを與へん」と、傍の土塊を投付れば、堅三は怒に堪へねど、詮方なければ爭はず。財次は猶も土塊を、續けて打付んとするに、知世はそれを押止めて、「水に大太刀、綿に鎹、齒答なければ其甲斐なし。いつまでするとも同じ事なり。最早酒宴の時刻なれば、いでや廣間に行かん」といへば、財次はしきりに打點頭き、「明日は命を取るものなれば、あまりに泣かせて身を瘦せさせ、血を

減らしてはよしなし」と、又高やかに打笑ひ、打連立ちて行きかゝりしが、知世は堅三に目交して、「二見の浦、〳〵」と、獨言のやうに繰返へし、やがて彼方に急ぎ行きけり。あとに堅三は小首を傾け、今知世がいひしことは、深き心あるに似たり。二見の浦とは何の意ならんと、やゝ暫し考へたりしが、やがて膝を礑と打つて、思當る事こそあれ。藤原の兼輔が歌に、夕月夜おぼつかなきを玉くしげ、二見の浦はあけてこそ見めと、いふ言葉の心を取り、あけて見よとの謎ならんと、最前投げられし紙を取りて、押廣げてよく見れば、中に數行の文字あり。何事と讀下すに、「世は末法に及ぶと雖、日月光を失ひ給はず。天の上覽ある上は、いつか浮ぶ瀬の無からんや。我こゝに有らん限りは、心安く覺され候へ。誓つて援出し申すべし。時の來らんを賴みにして、今の身を歎かせ給ふな」と、筆の運のいと優しく、賴もしげに書付けたり。堅三は爼の魚の、水を得たる心地して、さては彼の人此事を、我に告げんとて來りしを、はしなく豺次に見咎められ、疑を晴らさせんとて、打連立つて此處に來つ、我をなぶるに事寄せて、紙を投げしと覺えたり。有難き志の人かな。たのむの雁の秋を待つなりと、物憂き

思を晴らし、救の手を待ち居たりしが、それにつけても、如何なる手段を廻らして、我を援出すやらん。知世はもとより孱弱き腕なり。彼等は逞ましき強者なれば、萬一事仕損じなば彼の人も命を失はん。嗚呼我故に彼の人にも、幾多の苦をかくる事よと、胸は流石に安からず。さる程に日も暮れしに、小性一人忍來りて紙に包みし食物を齎らし、知世殿の仰なりとて、密に堅三に手渡しゝ、外に一言も交へずして、早く彼方に立去つたり。夜も次第に深くなれば、もし彼等の眠るを窺ひ、密に鍵を取出し、こゝを明けて援出すかと、心の中に待ちたれども、絶えて音信はあらざりけり。空は東雲を告けたれども、何事もなし。日はやう〳〵登り行けども、未だ姿も見えざれば、若し仕損じて殺されけんと、心さま〴〵に亂れたるに、辰の刻近くなりて、此方に來る人ありけり。うれしやそれかと急がはしく見れば、それにはあらで、彼の豺次と今一人、眼の光凄まじき男、鍵を手にして前に來り、錠明放して內に入り、忽ち堅三が諸手を握んで、「此方へ立て」と引立てたり。豺次は呵々と打笑ひ、「昨日爾がいひし如く、天道其まゝに差置かず。されど我には報はずして、忽ち爾が身に報いたり。これよ

り廣庭に引連れ行きて、其素首を落すべければ、地獄の焔魔の前に行きて、思ふさま愚痴を並ぶべし。」いざ急げ」と力に任して引立つれば、堅三は心の中に、知世は如何成行きけんと、覺束なく引かれ行くに、早くも廣庭の前に出れば、二人は忽ち堅三を、荒らかに引据ゑたり。 堅三は向を見れば、大廣間の正面に、虎の皮を敷物として、彼の鳴神は座を占めつ、左右には、昨日見たりし馬上の面々、肩を怒らし肱を張りて、等しく二側に居流れたり。 知世は後の方に、鳴神が刀を持ちて侍り、其の外の小性共は、その後に並び居たり。 堅三はそれとなく、知世の方を打見やれば、彼は少しも身を動かさず、目もまじろかず默然たれば、たのみも仇かと歎じ居たり、其時一人の小性來りて、白木の三寶の上に、大盃を打載せて、堅三が前に据ゑれば、鳴神は傍を見て、「疾く〳〵」と命ずるにぞ、左に居たりし大男、阿と應へて立上り、直に庭へ下り立つて、腰なる大太刀を拔放し、堅三が後に廻るにぞ、堅三は又顏を上げて、知世の方を密に見るに、猶も泰然として動かざれば、今は詮方なしと心を定め、首さし延べて控ゆれば、堅三を押へたる兩人は少し身を退きて手を左右に引延ばしたり 後の男は太刀を振上げ、相圖の

聲を待居たり。鳴神は一聲高く「斬れ」と言葉をかけんとして、唇少し動く途端、後の知世は俄に立上り、持つたる刀を拔く手も見せず、髭首丁と打落す、それと同時に木蔭より、染羽の征矢飛來つて、堅三が後の男の、胸板篦深く刺通せば、二言といはず倒れたり、かくて見るより一人の小性、忽ち廣庭に躍出でゝ、懷の短銃出すより早く、空を目がけて打放すに、それを合圖か四方に當つて、鯨波天地を動かせば、驚き騷ぐ賊人等を、知世は睨んで大音上げ、「我は此國の領主、若槻左衛門義國が子に、多門之助義智といふものなり。爾等、此處に山寨を構へ、民を惱まし、財を奪ひ、强惡至らざる所なければ、我其根を絶さんとて、身をやつして入込みしが今日只今謀熟して忽ち賊主の首を刎ねたり、爾等縱令免れんとするも、四方は寄手の天の網、一人たりとも洩らさんや」と、空も裂けよと呼ばゝれば、あとの九人の小性等も、同じく聲を張上けて、「我等は若殿が譜代の家の子なり。鍋の中なる鰌め等、下に焚く火はこれなり」と懷の中よりして、隱し持つたる短銃を、賊人等に向けたる樣は、振の袂に品つくる、小性に似合はず凛然たり。かゝる所に四方より、小具足に身を固めたる、武士凡そ百人ばかり、犇々と寄せ

來りて、逃げんとあせる賊人等を、追掛け追詰め追廻はし、四方八方に斬立つるにぞ、小性等も力を合はして、手剛き奴を片はしより、玉籠め〱打放せば、咄喊の聲廣庭に溢れて、血は草の葉を漂はせり。犲次は素早くも、堅三を振捨てゝ、獨り遙に逃行くを堅三は追かけて、「昨日の恨み覺えよ」と、弱腰丁と蹶上ぐれば、地上に撞と倒るゝを、捕手一人駈來りて、忽ち首を刎にけり。修羅の巷も時移りて、互に鎬を削りしが、寄手の烈しき太刀先に、漂ふ處を斬伏せられ一人も殘らず滅びければ、多門之助は士卒に下知して、塞に火をかけさせたるに、折から風の烈しかりければ、炎々たる猛火の中に、忽ち灰燼となりにけり。堅三は逸早く、多門之助が前に出でゝ、身を救はれし喜びを申せば、彼はよきに應しつ、それより衆を召連れて、我館へと引上ぐるに、堅三は先を急げばと、其處より辭し別れて南を指して辿り行きぬ。

（四）

此度は浦傳ひして、波の音に日を暮らし十日ばかりの道を經たるに、漸う〳〵海原の眺めを離れて、峨々たる山にさしかゝり、雲を踏分け行くほどに、其山も打越えて茫々たる野原に出でたり。それより荊蕀の露を分けて、日蔭とてなき草の中を、行けども〳〵人家なし。里に出でずばいと便なし。日のあるうちに至り着かんと、只管足を早めけるに、咽渇きて堪難ければ、水やあると見渡すに、左の方に、清き小川のありければ、急ぎ其處に走行きて、水を掬んで咽を濕し、只ある石の上に腰かけて、暫く足を休め居たるに彼方の川上よりして美しき小手毬一つ、水に添うて流來れり。堅三は早くも見付けて、手毬が流れくるからは、必定此川添に住む人あるべし。急ぎ其處に至るべしと、思ふより直に立上り、水際に添ふて辿り行くに、遙に行手の方に當りて、琴の調の洩來るにぞ、それに愈力を得て、響を便りに猶進むに、夭桃しきりに咲亂れて日もあやなる處に出でたり。琴は此奥より音を傳ふれば、聲する方へと行見るに、一際すぐ

れて花滿ちたる、大なる桃の樹の下に、見もなれぬ衣着たる、艶色たぐひなき美人一人、傍の青石に腰打掛けて、銀の糸をかけ渡したる、小さき琴を調べ居たり。今堅三の近くを見るより、直樣琴の手を止めて、此方を見て微笑みつ、玉を轉ばす如き聲して、「信夫堅三よくこそ來つれ。先程より待ち居たり」と、思寄らず我名を呼ばれて、堅三は目を見張り、甚く驚きたる樣なれば、美人は又も莞爾として、「構へて驚く事なかれ、曩の日虛無僧に身をやつして、和殿が宿に一夜を頼みし、時期仙が宿の妻に、待宵といふは我事なり、和殿さま〴〵の苦を忍んで、其志を飜へさゞれば喜びぬ、これより淸華山の麓まで、最早十里の道程を出ず。されど今ひとつの難所あり。これを和殿に告げんとて、先には毬を流して和殿が目を寄せ、次に琴を調べてその耳を引き、遂に此處へ呼寄せたるなり。よく聞きね。此處と淸華山との中程に、混厄魔といふ妖魔住めり。彼は我等が仇敵なれば、よろず我等が願を妨げ、淸華山へ行くものあれば、忽ちそれを遮り止めて、さま〴〵の憂目を見せ、望を斷つて歸さんとす、されば心を剛くして、飽まで志を貫くべし」と、いひながら懷中より、金襴の袋に入れたる、一箇の護符を取

出して「これは護身の護符なり。彼和殿を窘むるに、和殿堅く執つて動かざれば、遂には最期の害を與ふべし。其の時これを身に添へ持てば、其危さを免れなん。末を待霄が志を、心に頼んで忘るゝなかれ」と、護符を堅三に與へつゝ、「我はこれより清華山に歸り、和殿が早く來らんを待つべし。さらば」といふ聲と共に、紫の雲舞下れば、女仙はそれに打乘つて、南を指して飛去りけり。堅三はあとを伏拜みて、彼の護符を首にかけ、かゝる仙助ある上は、妖魔も何か恐ろしからんと、それより道を急ぎけるに、先の野原も跡に見て、大なる岳の前に出でたり。茅草いと生茂りて、いつれが道か見え分かぬを、推分け〳〵行きけるに、忽ち左の方よりして、いと妙なる笛の音の、瀏亮として響渡れば、思はず耳を引立つるに、音色はあやに巧にして、鶯花笠を縫ひ行くかと思へば、岩間に咽ぶ水の如く、千草にすだく蟲の音變じて、尾上に通ふ松風となり、忽ち絹を裂くが如く、忽ち玉を碎くが如く、手を盡して奏でつゝ、此方に近づくが如くなれば、堅三は我にもあらず、醉へるが如く聞惚れて、惘然として立つたる所に、黄金色の小鳥一羽、羽音を盜みて舞下り、密と堅三が後に寄つて、首にかけたる護符の紐を咬へ

るよと見えけるが、忽ちそれを拔取りて、梢を指して飛去りけり。堅三は心付き、南無三おぞくも仕てやられたり。彼の巧なる笛の音も、妖魔の術にてありけるか、かの護符を取られては、我身の上安からじと、飛行くかたを追掛けたるに鳥は只ある枝にとまりて、此方を見て嘲り顏なり。堅三は小石を拾ひ、覘ひ定めて投うてば、鳥は早くも餘の枝に遷り、護符を振つてほのめかす。取らんとすれば枝を飛びかへ、翼の自由を誇り示して、ぢらしては飛び、ぢらしては飛ぶに、堅三は追ひ〳〵て、しきりに取らんとあせりけり。鳥は猶も侮りて此度は目の前の枝にとまりて此方を向くにぞ、憎さも憎しと飛上れば、羽を廣げて逃げんとせしが、如何しけん、護符の紐枝にからみ付きたるに、得たりと堅三は一つかみに、忽ち我手に取返へせば、鳥は叶はじとや思ひけん、虛空遙に飛去りけり。今度は敵にしてやられじと、護符を內懷に聢と入れて、足を勵まし進行くに、誰とは知らず空中より、「此處へ一寸も進むべからず。立歸れ」と大喝一聲、耳を貫きて聞ゆるに、堅三は打驚きしが、これも妖魔の仕業ならんと、振向もせず猶進むに、一町ばかり來る頃、又一聲「立歸れ」と、鐘をも劈く聲して呼ぶ。それに

も構はず進み行くに、又も百雷の落かゝる如く、「止まれ」といふ聲骨を挫ぐばかりなるを、それをも推て通りしに、忽ち左右の方よりして、大地を鳴らす足音しげく、百人ばかりの聲々に、「これより直ぐに引返せ。若し一歩を進めなば、立どころに引裂き呉れんと呼はり〱寄せ來る如し。堅三は護符を力として、一目散に馳進むに、物音は礑と止りて、忽焉として目の前に、罌粟坊主の童子あらはれ、行手の道に立塞がり、堅三を遮止めて、「これより進まば危うし〱。御身命を惜しと思はゞ、早く踵を返し給へ」と、呼ばゝりながら押戻すにぞ、堅三は心の中に、これも妖魔の變化なるべしと、思へば敢て應答もせず、振離して行かんとするに、童子は又も遮りて、「命しらずの白徒かな。此上は詮方なし、無理にも援けて跡すべし」と、堅三が手を捕へて、元の道に引戻す、其力凡庸ならず。思はずたぢ〱と引かれしが、堅三は爰なりと、有る限りの金剛力を出して、握まれし手を捩離し、跡をも見ずして馳進むに、又も行手の道に當りて仁王の如き荒男、百斤ばかりの鐵杖を振上げ寄らば打たんと身構へたるが、堅三を見るより早く、百錬の鏡の如き、兩眼くわつと押開いて、怒れる獅子の吼ゆるが如き、大音聲

を振上げて「爾飽まで我意を通さば、此鐵杖の一打に、骨を粉にして土を肥すべし」と、地を踏鳴らして寄來るにぞ、堅三は驚きて、暫く足を蹈躪ひしが、我に護符の助あれば、いつかは望を達すべし。いかで此まゝ歸るべき。難を侵して進むに若かじと、思定むるより一散に、荒男の脇を潜りて、足を限りに馳出せば、荒男は追はんともせず、姿は消えて失せにけり。堅三は心安しと、いよ〳〵先を辿行くに、轟然として前の土裂け、進まん方もなくなりて、裂けたる處忽ちに、深さ萬仞の谷となれば、驚きながら見下すに、藍の如き水漲り流れて、岩を嚙む音のいと凄まじ。かゝる所に、時ならず日は落ちて、黑雲頭上に覆重なり、おどろ〳〵と鳴神は、四方に響渡りしが、忽ち近くに寄せ來りて、一時に上より落かゝれば、堅三は我にもあらず、後に身をすさりしが、佶と心を取直し、地上にどつかと身を据ゑつゝ、落ちなば落ちよと心を亂さず、腕を組み目を塞ぎて、泰然として坐し居たるに、雷はいつかな離れず、猶も烈しく鳴轟きて、忽ち瓦落離と落ちたるにぞ、あはや焦死と思の外、身に恙もあらざれば、不思議と目を開き見るに、黑雲は形もなくなりて、ありしながらの蒼空に、日の影もとに返りけり。彼の

裂けし處を見れば、道はもとの姿に返りて、土塊の覆りたる跡だもなし。堅三は喜び勇むで、これも護符の德ならん、妖魔も身を引きしと覺えたり。淸華山は程近ければ、我望も手のうちなりと、足の踏所も覺えずして、一里ほど辿りけるに、向よりして嬋娟たる乙女一人、蓮步を動かして來りけり。堅三は望み見て變化又執念くも、我を妨げんとて來りしか、我何ぞ從ふべきと、油斷せず進行くに、乙女はやうやく近きつ、堅三を見て微笑みながら、殿は信夫と呼ばせ給ふか」といへば、堅三は只一言、知らずとばかり言放ちて、すげなく通過んとするに、乙女は其袖を捉へて、「氣遣ひ給ふな。妾は敵意を持つものならず、殿を迎へんとて來り待べる。妾はこれより少し先なる、露木と名に呼ぶ家に、年頃召遣はるゝ腰元なり。妾が主婦實井殿は、そのむかし淸華山の、待宵殿に仕へしものなり。其後暇を賜はりて、此處に住家を定め給ひしが、今もよりよく伺候して、つれづれの御伽をなす。さるに先程待宵殿、主婦の方に來り給ひて、御身今日こゝに來べければ、來らば厚く勞はれよと、いひ置きて歸り給ひぬ。されば主婦は仰を守りて、しきりに御身を待ち給ひしかど、今になるまで來給はぬは、

若し混厄が手に落ちて、行手を塞がれ給ふならずやと、心元なく思されければ、妾を迎にとて出されたるなり。幸ひ御身に異常なく、かく此處に遇ひ參らさば、妾も迎の甲斐ありて、此上の喜も侍らず。御身先程通り給ひし、森より此方の道筋は、清華山の威德にて、妖魔も手を出すと叶はねば、禍は最早免れ給へり。心を安くし給ひね」と云ひて、忽ち心付きし如く、「主婦もさぞや待兼給はん、いざ給へ急ぎ侍らん」と、先に立ちて誘引へば、堅三は心落居て、心添を喜び聞え、後方に跟いて行くほどに柴垣を結廻らしたる、いと風雅なる家に來れば、乙女は內に入りて、主婦にかくと告知らすれば、主婦は直に出で來れり。年の頃は三十あまり、人柄卑しからず、顏ばせ閑雅なる女性なり。靜かに堅三に打向ひ、「客人よくこそ、來給ひたれ。先程より甚く待ちしに、いつまでも見え給はねば、しきりに心を苦しめ居たり」と、直に堅三を案內して奧の一間に通しけり。主婦は旅の事件を聞き、その危きに驚きつ、その無難を喜びつ、又堅三の心強く、此處まで來りしを賞稱へて、さま〴〵勞はり傅くうち、日は全く暮れ果てたり。主婦は堅三に打向ひ、「此處より清華山へは三里ばかり、道もさして嶮しからねど、夜

道を行かんは心元なし。今霄は我家にとまり給ひて、旅の疲勞を休ませし上、明日は今迄の苦を忘れ、思を新にして勇ましく、淸華山へ乘込み給へ」と、眞實立ちて勸むれば、堅三は喜びて、「御厚志の程忝なし。さらば今霄は御言葉にあまえて、御下蔭を賴まん」といふ時、以前の侍女入來りて、珍酒佳肴を持運び、堅三が前に押並ぶれば、主婦は直に盃をすゝめ、「打寛いで酌み給へ」と、しきりに強ひて止まざるにぞ、堅三も否み難くて、先一杯を味ひたるに、その味殊に美にして舌をとらかすばかりなれば、思はず數獻を重ねたるに、酒氣忽ち頭上に上り身はゆら／＼と搖きて、席にも堪へずなりにければ、「最早醉うて堪へ難し。身の勝手には似たれども、臥床に入るを許し給へ」といふに、主婦は心よくその意に任せて、他の一間に臥床を設け、侍女と諸共に堅三を援け入れて、靜に枕につかせたるに、身を横になるより早く、いと荒き鼾をあげて、前後も知らず熟睡したり。疲勞に眠を貪りて、夜の明けて行くをも知らず、夢をも忘れて臥したりしが、鳥の聲耳に入りて、不圖目を覺せば、こは怎麼に、ありし家は影もなくて、身はほの暗き岩窟の中に、腰は鐵鎖に繋がれ居たり。さては昨日の女性等は、混厄魔の

手管なりしか。欺かれし事の口惜しさよ。それにつけても護符はと、懐中を探り見るに、いつしか取られて無かりけり。

（五）

傷はしや堅三は、鐵の鎖に繋がれて、岩窟の中に取籠められ、頼みし護符にも離れたれば、末の成行の覺束なく、今にも妖魔來らんかと、身を危ぶみ居たりしに、彼は絶えて姿を見せず。心細く一日と過ぎ二日三日と暮行くに、飢は次第に身を責めて、心地堪難う苦しくて、今日は昨日より衰へ行くに、さては此處に推籠置きて、饑渇に命を失はせんとするか、清華山も早や目の前なる、此處まで來りて空しくならんと、世に口惜しさの限りなり。もし無念の一念力に、この鐵を斷切る事もやと身を悶ゆれども力及ばず。飢はいよ〳〵迫り來て、吐く息も苦しくなりぬ、かくて空しく日を返すに、混厄魔忽然として目の前にあらはれ來れり。繪にかける惡鬼よりも恐ろしき姿なるが、爛々たる眼の中より、稲妻の如き光を放ちて、佶と堅三を睨まへつゝ、「爾飽まで我を張りて、我言に從は

ざる報のほどを思知れ。されど今若し心を改めて、もとの道に立歸らば、直ちに縲絏を解遣らん、もし猶も從はずば此まゝ見殺しに爲し果つべし。怎麼にぞや」といふに、堅三は苦しきうちより、我望かなはずば命はあつて甲斐なきなり。此儘こゝに終るとも何とてもとに歸るべき。此息の根の續かんかぎりは、斷じて行くことを思止らじ」といへば、泥厄はせゝら笑ひ「その囈語の聲音さへ、瞬くうちに出ずなるべし。思知れよ」といひ捨てゝ、外面をさして出行きぬ。次の日も亦來りて、同じ事を繰返すに、堅三は聞入れず。又次の日も同じく說くに、堅三は首を掉りて、一言の應答もせねば、泥厄は大に怒り、よし〳〵さらば爲べき事あり。目に物見せんと猛りつゝ、木の根の如き腕を伸ばして、矢庭に領髮を引掴み、容易く鎖を引放し、堅三を宙に釣して、表の方に走出で、とある松原の前に來り大なる石の上に荒々しく引据ゑたり。此の石の小脇には鐵の鞭、革の笞、木太刀など連ねてあり。妖魔は先革の笞を取上げ、覺えたか」といふより早く、堅三が背を目がけて續けさまに打下ろせば、打たるゝ毎に背にひゞきて、五體も碎くるばかりなり。妖魔は猶も打續けて、いざ我言に從ふや、と責

かけ〳〵答を待てど、堅三は齒を喰しばりて、首を左右に掉るばかりなれば、妖魔は木太刀をおつ取つて、空にりう〳〵と振廻はし、恐ろしき力をこめて、躍上つて丁と打ち、「かくても歸らずや」と罵るに、應答なければ又も打つ、三度四度、十二十に及べども堅三は口を開かねば、今度は鐵鞭を振かざして、力任せに打据ゆれば、皮破れ肉裂けて、血は石の上に錦を流せり。妖魔は鞭の手を止めて、「未だ行くとを思ひ止まらずや。殺すも生かすも今一時、いかに」と云へば、堅三は睨みつけて、「早く殺せ」と云放つに、「しぶとき奴め」と喚きながら微塵になれと打下ろせば、アッと叫ぶ聲と共に、堅三は二つに裂れて、紅の中に息絶えたり、妖魔は堅三を引起して、活々と唱ふれば、不思議や堅三はもとに復して、傷のあともなかりけり。其時妖魔は堅三に向ひ、「爾今の苦艱に懲りずや。これにても猶歸らずや」といふ。堅三は夢の如く、暫く我を忘れて居たりしが、心はいつかな翻へさず。「我一念は山の如し。いかに心を盡すとも、堅く執つて動かじ」と、いへば妖魔は聲荒らげ、「とても我手に落つる上は、こゝを免れて行く事はなりがたし。爾が心を狂ぐる迄は、苛責の手は止まらず。明日は一層の憂目を見せ

んに、覺悟せよ」と呼はりながら又堅三を引摑み、前の岩窟に投入れつ、鎖を元の如くにして、何所ともなく立去つたり。明くる日混厄は早く來りて、「爾今より立歸れば、此先きの苦を宥しくれん。心よく歸るや」といふに、堅三は前の如く、「我は歸らじ、如何にともせよ」と云へば、又も堅三を引立てゝ、とある瀧の前に行きぬ。此瀧幅は十間にあまり、萬丈の頂上より凄まじく落下るに、あたりはいつも水烟立ちて、狹霧四方を立籠めたり。瀧壺は泡に溢れて、水の色も見え分かず、浪は狂つて躍りながら、あたりの奇岩怪石に、碎けて迸り流るゝ樣は、身毛も慄つばかりなり。妖魔は堅三を引提げて、瀧のもとに下立ちつ、傍の藤蔓を引むしり、堅三を八重に縛りて、瀧壺に投込めば、忽ち瀧に打挫がれ、逆巻く中に浮きつ沈みつ、風に揉まるゝ木の葉の如く、暫く壺に漂ひしが、どつと流に突出され、岩に當り石に打たれて、其度ごとに身を傷るに、血は奔流を染なして、水に紅葉を亂しけり。妖魔はうれしげに見て居たりしが、やがて水より引揚ぐれば堅三は息絶えて、身内は突傷打傷に、顏は亂れて世の樣なし。妖魔は一聲活といへば、忽ち我に返りしが、身を起すこともならず、聲も得立てず蠢めき居たり。

妖魔は大なる口を開いて、「爾今の思はいかに、我意に反かば斯の如し。歸るや否や」と詰寄るに、堅三は苦しみながら、露從ふ氣色を見せねば、妖魔は又も荒々しく、瀧壺のうちに投入れて、絕入れば引揚げ、引揚げては又投込み、折檻の手を盡せども堅三は命を捨てゝ、前の言葉を少しも替へねば、此日も妖魔は功なくして怒の中に堅三を引提げ、もとの岩窟に押籠めたり。次の日は早くより引出して、大なる爐の前に据ゑたり。爐のうちには、火炎々と燃え上りて、金もとけなん焰あり。傍に鐵の梯ありしが、それに堅三を括付けて、火の上に掛渡せば、生ながらにして見る火葬の烟、猛火のうちに聲を燒いて、命を黑焦となしけるが、妖魔が活々の聲の下に、もとの我に復ると思へば、又岩窟に投込まれぬ。その次の日は、大なる釜の中に、數石の油を沸立たして、堅三を押沈め、湯玉のうちに心をひしがんとし、その次の日に至れば、今日は最期ぞと叫びながら、年經たる松の幹に、きびしく堅三を縛めたり。頭上には、百節の荒繩もて、大磐石を釣し上げ、それに劍を隙間も植ゑたり。妖魔は事新らしく堅三に向ひ、「今迄爾を殺さゞりしが、今日も我意に逆らはゞ、此度は最早許さじ。此世の息の音を

止めて、二度と日影を見せはせじ。此磐石の荒繩は、僅に殘る爾の命を繫止むる玉の緒なり。我今より此繩を、一つ〳〵に切放てば、其數百に滿つる迄を、命の極めと覺悟せよ。もし其間に歸ると云はねば、磐石立どころに落來つて、劒の錆と成果つべし」と、いひつゝ腰の長刀を、目の前に拔かざして、先一筋の繩を切り「歸るや否や」と呼ばゝれば、堅三はこれ迄と、胸を据ゑて敢て騷がず、聲張上げて「否」といふ。二筋の繩を切りて、「歸るか。」「否。」三筋の繩を切りて、「立歸るや。」「厭なり。」四筋五筋十二十、五十六十と數へ行きて、八十も過ぎ、九十となれば死は近し、又「歸るか」と叫ぶ。堅三は屹として、「問答は無益なり。とても歸るべき我ならず。殘る繩を一度に切れ」と、勢ひ込んでいひ放てば、妖魔は忽ち勃然として、續けさまに切放し〳〵早くも九十九の數を過して、「こゝ一時、いざ百なり觀念せよ」と、いひつゝ刀を眞向に冠り、ヤッと掛聲危き途端、割るゝが如き大音上げて、待てと彼方に叫ぶものあり。堅三は急がはしく、聲する方を振向けば、一むら茂き松の蔭より、此方を指して來る人は、思もかけず、雪の日我宿に來りたる時期仙なり。今日は虛無僧の姿にかはりて、精巧の金冠を戴き、白の練衣

をゆかたに着下し、手に小さき鐵如意を提げて、足を早めて近づきたり、妖魔は此體に氣を焦燥だち、妨げされては安からじと、早くも繩を切放せば、時期仙は阿と叫んで、飛ぶが如くに來るよと見えしが、持つたる如意を振上げて横に磐石を丁と拂へば、恰も、小石を投ぐる如く、遙か彼方にけし飛んだり。混厄は大に怒つて、「いらざる所へ邪魔立する奴、目に物見せて呉んず」と、刀を舞はして斬つてかゝれば、時期仙は佶となつて、「邪魔立とは汝が事なり。世路の行手の一大障礙、此鐵如意の手にかけて、魔命に暇を取らせんづ」と、いひつゝ、如意を取直し、上段下段に切結ぶ、太刀は奔龍如意は飛鳥、秘術を盡して戰ひしが、妖魔は焦燥つて身をかはせば忽ち百面千手と變じ、手に／＼得物を振上げて、隙間もなく打つてかゝるに、時期仙は少しも騷がず、空に如意を擲上ぐれば、忽ち百千の鐵棒となり、妖魔の上に落かゝつて、千手の得物に渡合ひ又戰ふこと數十合、雲を薙き風を起して、暫く雌雄を分たざりしが、妖魔の力は漸く衰へ、得物は次第に打落さるれば、叶はじとや思ひけん、後に身を飛退つて、片足を上ぐるより早く、前の土を撞し踏めば、其處二つに裂けて、一條の烟立登りしが、中より凄まじ

き夜叉あらはれ、牙を鳴らし火焔を吐いて、此方に向つて飛掛かる。時期仙は天を仰いで、口に咒文を唱ふれば、一簇雲の中よりして、降魔の利劍を提げたる、金剛力士馳來つて、時期仙の前に塞がり、夜叉に向つて斬つてかゝる、夜叉は腰なる大斧を、水車の如くに廻はして、おめき叫んで渡合ひ、火花を散らして戰ひしが、烈しき金剛が太刀先に、暫時も怺へず腕亂れて、身を飜へして逃げんとするに、此方は隙さずつけ入りて、空にひらめく劍の下に、売竹割に斬捨てたり、妖魔は斯くと見るよりも、忽ちに身を變じて、八頭九尾の獅子となり、垂れたる髮を逆立てゝ、躍狂つて飛掛かるに、時期仙は一足下がつて、口より唾を吐かくれば其唾四方に飛散して、十六筋の征矢となり、矢鳴はげしく一文字に、獅子が眼を一つ〳〵、羽ぶくらせめて突立つれば、一聲嘷と高吼して、撞と地上に倒れしが、姿は忽ち消失せたり、時期仙は懷より、一箇の鏡を取出し隈なく四方を照しかくれば、隱形の術忽ち破れて、西日を覆ふ雲の上に妖魔の姿あらはれたり、黑鐵の弓を握つて、三十五束の矢を番ひ、金磁頭に火を燃して、滿月の如く引絞り、今しも此方に差向け居たり、時期仙は物ともせず、鏡を左手に取直し、右手に胸

板丁と叩いて嘲笑つて突立てば、妖魔は少しも猶豫はず、狙ひかためて兵と放す、矢は額の只中を目がけて、電光の如く飛來るを、時期仙は體をかはして、カチリと鏡に受とめたり、妖魔は二の矢を番へんとするに、時期仙は時を假さず、直さま雲に飛乘つて瞬くうちに妖魔に近づき、耳に下げたる金鐶をはづして、十八間の大身槍とし、りうとしごいて突かくれば、妖魔は弓を取直して、長さ一丈の鎖鎌とし、丁々發矢と打合ひしが、蔽ひ重なる雲のうちに、二人は見えずなりにけり。堅三は此樣に、目を驚かして居たりしが、今しも姿の見えずなるに、末如何ならんと氣遣ふ途端、時期仙と混厄と引組んだるまゝ下り來り、押合ひ捻合揉合しに、妖魔は遂に打負けて、膝の下に組敷かれしが、少し力やゆるみけん、すつと身をすり拔けて、忽ち一匹の狼となり、疾風の如く逃げ行けば、時期仙は熊となつて、逸早早く追すがり、耳を摑んで、裂かんとするに、狼は早くも鶻となり、空中高く飛上れば、熊は忽ち鷲と變じて、風を切つて追かけ行き、逃る隙なく飛掛かつて暫く挑み戰ひしが、鶻は突くづされて、地上に撞と落つると見えしが早くも土龍と身を變じて、地の下に潜入りたり。鷲は直さま猪となつて、凄

まじき鼻息に、土を飛ばし石は反ねて、逃行く先を堀返へせば、土龍は免がるゝ術なく、又も一箇の石と變じて、轉々と轉びながら、傍にありし岩のうちへ、泥に隱るゝ田螺の如く、跡方もなく逃入りたり。猪はそれと見て本の時期仙の姿に返り髮の毛を一筋拔いて、弗と空に吹飛ばせば、五百餘斤の鐵槌となり、彼の岩を微塵に碎くに、飛散る缺片と諸共に、數萬の蚊あらはれ出で、八方に飛行けば、逃がして成らじと時期仙は、蚊食鳥と身を變じ、左右四面に翔り廻はつて、素早く蚊を喰盡すに、最期の蚊ひとつ目を免がれて、竊に彼方へ飛行きしを、暫く知らで過せしが、やがてそれと心付いて、「打洩らせしか」と叫びもあへず口より一條の紫氣を吐いて、遙か向に吹かくれば、忽ち千筋の蜘の圍となり、天を蔽ふて廣がりつゝ、蚊を其中に引包み、次第々々に縮まりて、遂に銀糸の金網となり、目を細かくして通り行くに、蚊は妖魔の本體をあらはし、手に白欛の劍を振つて、切破らんとあせれども、如何なる不思議の力ありてか、突けども拂へども網は破れず、妖魔はいよ〱苦みて、口より怪しき火を吐きしが、一天忽ち晦暝となつて晝夜を分たず、疾風迅雨凄まじく荒れ、山河一時に震動して、物の打合ふ

聲と共に、鏑矢四方に鳴響き、震動暫くも止まざりしが、突然山の碎くる音して、闇は破れ雨晴れて、地上に妖魔は打倒れ、胸に刀を貫かれ居たり。時期仙は其脇に、一箇の壺を持つて立つたりしが、傍の笹を折取つて、彼の壺のうちに入れ、中の水を葉に浸して、妖魔の上に注ぎかくれば、猛火下より燃出で〻、妖魔は灰となりにけり。時期仙は心靜かに灰を壺の中に入れ、上を堅く封じつけて、土に深く埋めたり。かくて堅三が縛を解き、塵を拂つて勞はりつゝ、「和殿が不拔の志、感ずるに猶餘りあり。よくこそ妖魔に從はず、望に命を捧げたり。混厄今は誅に伏して、最早和殿を支ふるものなし。和殿に約せし清華山は、足を勞する迄もなし。いざ來れよ」と手を取れば、堅三は又再び天日を見る心地して、心の限り喜びを述べ、勇みながら從行くに、未だ一町ならずして、玉を刻んで作り成したる、香車一輛を牛に引かして、烏帽子白丁の品よき舍人、前後を擁して來りしを、時期仙は指招き、堅三を引連れて、車の上に乘移れば、舍人は車を引返へし南を指して進みけり。

團圓

本望でゝに成就して、清華山の麓に着きぬ。山口に莊麗の大門あり。柱は花鳥を刻みなして、紅紫の色彩を極めたる樣、これを見盡すに日も暮れぬべし。玉の扉は深く鎖したるが、今車の近づく途端に、忽ち左右に颯と開いて、衣冠正しき人數多、兩側に平伏したり。此處に車を乘捨てゝ、門より内に進入るに、異香忽ち鼻を撲つて、迦陵頻伽の囀づる中に、落花自ら繽紛たり。玉の甃を踏んで行くと未だ數百歩ならず、奏樂の音近く響きて、一群の人來りたり。眞先に進んだるは、先の日桃のもとにて、護符を呉れたりし待宵なり。次に薄衣深く被ぎて、しとやかに來る乙女あり。これは時期仙と待宵との中に設けし最愛の姫、名を穗希と呼做して、世に並ぶかたなき美人なり。あとに從ふ女ばらは、召仕の腰元なり。其數大凡五十人ばかり、花の如き顏して樂を奏して近づきつ時期仙と堅三とを其中に冊きて、雲に高く聳えたる玉殿のうちに入りたり、此殿作は周圍百里、階も欄干も、床も柱も皆水晶なり。正面の欄間には氷精宮と

大書したる額を打つて、左右の兩面には、黄金の大鷲を飾据ゑたり。堅三は導かれて奥殿深く從行きしに、數の玉廊を渡過ぎて、千疊敷もあらん程の、華麗なる廣間に出でたり。南に向つて時期仙の席あり。左右に待宵と穗希の席あり。金銀珠玉の結構を盡して、華嚴莊麗いはん方なし。時期仙は堅三を東の方の客位に請じて、自らの座を占むれば、待宵穗希の兩人は等しく左右の席に着き、腰元どもは前後左右に、容儀を正して侍りたり。席上には、美酒珍膳の數を盡して、珠盃玉盤の美を極めたり。酒宴數刻に及んで、興稍闌なる時、次の間に管絃の聲沸いて、羽衣着たる童女二十人、等しく花の枝をかざして、手振を揃へて出來り、袖を連ねて打舞ふ樣、怪しきまでにいと妙なり。それより酒を替へ肴を新たにして、此度は待宵自ら、三十五絃の瑤琴を彈ずれば、時期仙は十八孔の玉笛を鳴らして、雲井の塵を動かす中に、穗希は孔雀の裳裾を曳いて、錦の袖を打返へし、雨を潛る乙鳥の如く、花に戯むるゝ蝴蝶の如く、手を盡して舞ひ出すに、其美しさ言はん方なし。夜もやう〳〵更け行けば、樂は盡きざれども、定めの時刻とて腰元に導かれ九華の帳深き處に入りて、錦襴の床のうちに、金猊

の香烟をこめて、ゆたかに夢を結びけり。

明くる日時期仙は堅三を呼んで、金銀銅の三箇の鍵を、前に取揃へていひ出すやう、「此殿の後に當りて三つの寶宮あり。それを御身に與ふるなり、第一の寶宮には、大なる銅門あり。銅の錠もて鎖したれば、此銅の鍵をもて開くべし、第二の寶宮には銀門あり。此銀の鍵を以て開くべし。第三の寶宮には金門あり。此金の鍵を加へよ」と、三つの鍵を與へけるに、堅三は喜び受けて、先第一の門に至り、錠を放して中に入るに、うちは數十里に亘る廣庭なり。左右には、周圍半里ほどの湖ありて、白銀を溶かしたる水、滾々として流れたり。中央の中島に、八頭の黄金の獅子ありて、絶えず水を吐出せり。四面には百花妍を鬪はして、梅のにほひ櫻の姿、海棠杏李藤山吹、牡丹躑躅萩椿など、四季の花等しく咲亂れて、千紅萬紫の雲を織るうちに、さま〳〵の形したる色鳥、心のまゝに歌ふ有様、言葉に盡さんやうもなし。東の方には、珠玉を積重ねたる山、巍々として雲に聳えたり。南の方には、方五里の珊瑚の林あり。北には瑤錢樹の一森あり。黄金の葉黄金の花、隙間もなく茂合ひて、日に照添うて粲然たり。西には、

金剛石を疊上げたる、百丈の高塔あり。堅三は其中に入りて、上に登りて見渡すに庭は盡く眼の下に、見るほど眺めは盡きざりけり。いざや第二の寶宮に至るべしとて、もとの銅門の前に來り、以前の如くに鎖して、それより第二の門に至り、門を開きて内に入るに、七十の庫ありけり。庫は、盡く銀作りにして、各々一里の大さあり。第一の庫に入るに、こゝには精巧の卷絹を、いやが上に積重ねたり。金襴金紗綾錦、百年の工を凝らしたるほどの物、數ふるに遑なし、第二の庫には、丹青の玄妙を盡したる、繪卷物のかず〳〵を目に餘るほど藏めてあり、第三の庫には數萬の黄金の壺ありて、八千種の名香を詰めたり。第四の庫には、森羅萬象を彫刻せる、玳瑇瑠璃瑪瑙琥珀などあり。中にも一際優れしは、閻浮檀金の龍と、白珊瑚の鳳凰なり。第五第六第七と、見るほどいよ〳〵奇を增して、たゞ目を驚かすばかりなり。やう〳〵盡く見終りて、それより金門に進入るに、こゝには、奥深き金殿ありて世になき寶を藏めたり。かくれ簑かくれ笠、不老の金丹打出の小槌など、皆此中に藏めたり。鬼を走らす金の鈴、風に乘る羽衣など、ひとつ〳〵書つくれば、卷を重ぬるとも盡ざるべし。かくて見

る眼も疲れ果てたれば、餘は大方に見殘して、氷精宮に立歸れば、時期仙は、前の如く、宴を開きて饗應つゝ、堅三に打向ひ、「我今より日ならずして和殿が爲に宮殿を作り、長く和殿を住ましむべし。つきては我娘穗希をば、和殿が妻としたく思ふが、和殿これを承引くや」と云ふに、堅三は拜謝して、「今日三寶宮の賜をも、身に餘りて覺ゆるに、其上住家を作り給はり、數ならぬ我身に、最愛の姫を下されんと、冥加の程も恐ろしく覺ゆ。もし穗希殿に於て不肖の我を捨て給はずば長く偕老のよしみを結びて、片時も厚恩を忘るまじ」と云へば、時期仙は大に喜び、それより工事を取急ぎ、氷精宮の左の方に、莊麗華美を盡したる玉樓殿を築上げぬ。堅三は此中に、穗希を宿の妻として、百年の樂を盡し榮華の世を送りしとなん、いひもて語り傳へける。

千紅萬紫

こゝによしなき眉掃を事として思はぬ粉膩の香を染めむとするを、色めきたりと見るは姿をのみ追ふ人々なるべく、眉を顰むるは垢染持たぬ折詰の君なるべく、目を怒らすは自己を知らぬ火燵の上の大將なるべし。よし花に隱れ月に戯れて、しかも其美しさに酔はむずるほどのものが、何とて此ものいふ蝶の心をも叩き、この生きたる露のあはれをも寄せざる。いで彼の松風にこの袂を飜へし、この小櫛にかの流れを梳らばや。とばかり思出づるもあやしき此心の粧や。

夕風青桐の上に落ちて間近き小簾の少し煽られたるに、鳩羽鼠のやうの媚びたる裾のほの見えたる、いかに。又は金殿の春静かに、小雨に堪へぬ一重櫻のさりとも風情を盡せる折しも、襖を隔てゝ消ゆるばかり優しき聲を聞きたるいかに。

國家問題、時事問題、主義、目的といかめしき一座の中へ、傾國こゝに目覺ましき艶女の酒を捧げて現れて出でたるに、鳴りは一時は靜まりて言合はさねど衆目ひとしく其姿に見入りたる、いかに。 又は思はぬ山路に行暮れて、尾上にほのめく星の影に行方のいよ〳〵覺束なきを、折しも草刈果てたる里娘の、あけの襷を手馴れの小鎌を、夏野の香を盛る籃に添へて、馬を追ひつゝ來合はせたるが、乞はるゝまゝに鞍をも貸し、小歌の節面白く手綱を取りたる、いかに。

身は地下の卑きに生れて心に足る裝ひもならず、ひめは飽までも麗はしけれどあはれそゝげ髮に櫛さへもなくて、羅綾の袂を驕る女と途に行違たるに、流石に振返りしが、其まゝ俯向きて歩み行きたる、いかに。 又はさる裝ひを物の數とも思はず、身は高殿の錦に包まれて手を鳴らせば物の足るべき際の姫君の、夜すがら月に對して人知れず涙を落したる、いかに。

良人は國事に身を委ねて家に在る事稀れに、たま〳〵相對して坐する時も、眉は打寄りて目は沈みて、時にはたゞ額を押へて打惱めるを、慰めんとすれど接ぐべき穗もなく、云へば其まゝ女の知る事にあらずと斥けらるゝのみ、獨り空

闇に物思ふも苦しく、忘れぐさにと琴の塵を打拂ひて、僅かに掻鳴らせばいよいよ昔の思出てらるゝ、いかに。又は某の後室と聞えたるが、夫亡き後は嚴しくも艶めきたるものを遠ざけて、よろづに心強く紀念の子息を護立てたるが、長き夜すがら燈火の影淋しく、有りし寫眞帖取出して亡き人の姿を打目守りたる、いかに。色を黄金にかへられて百里の外に身を賣らむとする少女の親のもとを去るに忍びずひた泣きに泣伏したるを、其の親の背をかい撫でゝ兎に角と慰めたる、いかに。又はさる切火打つ格子の中、世はたゞ其日の出來心に任せて、白き齒と笑靨の中に人を迎へてよしとせる、いかに。

良人を思ふ事の殊にすぐれたれば、いかなる事をも其意に背かじとはすれど、それにつけこれにつけて心の合はぬ折のみ多きを、強ひてこゝろよく打從ひつゝ、喜ぶ良人の顏を見て傷けられながら喜べども、竊かにいよ〳〵樂まざる、いかに。又は憂身よ斯かるものと涙の下にも安んずべき道を求めて有りし願はゆめ〳〵ならぬものに打ちなし、人の笑ふ事に同じて淋しく打笑みたる、いかに。思ふ中の思はぬ言葉爭ひより、たがひの意地を張りて心ならずも睨

合ひたるが、相執つて下らぬまゝ、遂にはかれ〳〵になりたるを、うちには深く悔みながら只打謝ぶる事の口惜しく、折待つ中に再び取去られぬ隔ての出で來てあとはたゞ泣通したる、いかに。又はさる人を世に深く思染めたれど包ゝましき性の言ひも出でず、物思ふ袖に時ならぬ露を碎きてのみ居たるを、身の定めも人任せの心弱くも背きかねて、あらぬ人に稼ぎ心ならぬ子をも擧げ、かくても猶胸に刻める人の絕えず忘れかねたるを、押隱す大息の中に髮は霜を置きて果は其心を抱きたるまゝ亡き人の數に入りたる、いかに。

* * * * * * * * *

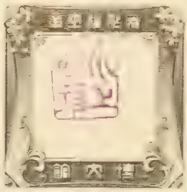
世に姿あり風情あり、たゞ其心を知るものぞなき。荻の上葉に風の渡れば、人はたゞ袷を思ひ、菫が岡に雉子の鳴けば、人はたゞ銃を思へり。憐むべき女人よ。爾の美は或人には罪せられ、或人には無視せられ、或人には唯弄ばされむが爲にのみ生れたるか。あゝ、天使去つていづこに行かむかな。

眉山全集第四卷終

明治四十二年九月二十日印刷
明治四十二年九月廿三日發行

（定價金壹圓八拾錢）

眉山全集
第四卷



著者　川上亮

東京市日本橋區本町三丁目八番地
發行者　大橋新太郎

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　飯田三千太郎

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場

東京市日本橋區本町三丁目
振替貯金口座東京二四〇番
發兌元　博文館

幽艶にして淸迴なる眉山氏の筆は、眞に明治の華文なり。況んや其想、おのつから當代の重きをなして、而も遒爾として迫らざる處、我文壇の重鎭たり。今や斯人亡くして其著作單り金聲玉振の響を傳ふ。

本書に收めたる諸篇は、孰れも當世文壇をして、眉山氏が絶倫の盛名を擅にせしめたるもの、實に之れ我讀書界に於ける珍璧にして、而してまた明治文壇に異彩ある大作家が面影なり。

明治の世新文學ありてより僅に未だ三十餘星霜を閲せしに過ぎずと雖も其間思想の起伏文運の變遷一にして足らず大家相踵て出て雄篇傑作又少しとせず或は艶麗に或は崇高に或は平淡に或は怪奇に皆競ふて其特色を發揮し春花の爛爍秋草の温雅人情の機微を寫し心裡の複雜を描き文章思想共に美を豐にし粹を極むまことに聖代の偉觀と稱すべき也されど珠は聯珠の美しきに如かず雄篇傑作又時ありて散逸す本館玆に思ふ處あり名家小說文庫を發刊し毎卷千頁の大册子となし諸大家の集中荷も錄すべきものは悉く是れを輯め裝釘を美にし價を廉にし逐次刊行して以て讀書社會の渇を醫さん事を期す



名家小說文庫

第壹編 露伴叢書 前編

洋裝上製總クロース金文字入特製美本
表紙意匠高雅紙質精良九百七十二頁
正價金貳圓　小包料金拾六錢

露伴先生は當代の大家、崇高なるその思想と、奇峭なるその文章とは、既に久しく文壇の誇りとする處、その内容に就いては編者又何をか言はん、今左に其目次を錄す

［内容］

▼＝二日物語▼＝夜の雪＝▼僥倖＝▼緣の糸＝▼休暇傳＝▼毒朱唇＝▼ひげ男＝▼新學士＝▼迷霧＝醉鄉記＝▼和合樂＝▼川舟＝▼大珍話＝▼緣外緣＝▼夢がたり＝▼是は／＼＝▼珍饌會＝▼獅子庵＝▼伊能忠敬＝▼まき筆日記＝▼客舍雜筆＝▼地獄溪日記＝▼元祿時代の雜劇＝▼折々草＝▼將棋雜考

第貳編 露伴叢書 後編

洋裝菊判總クロース金文字入特製美本
表紙意匠高雅紙質精良
正價金貳圓　小包料金拾六錢

［内容］

▼椀久物語＝▼春の山＝▼當世外道の面＝▼封じ文＝▼鐵三鍛＝白繩白縛＝▼蹄鐵＝▼冷干氷＝▼箱根草＝▼銃獵孝行＝▼夢日記＝▼ひとよ草＝▼新浦島＝▼鄭成功＝▼日蓮聖人＝▼二宮尊德＝▼突貫紀行＝▼醉興記▼＝文明の庫

發行元　東京本町　博文館

◎新版紀行書類◎

文學博士 姉崎嘲風君著

花つみ日記

南イタリアの美國、北スコットの山地、野邊には草花を摘み、古寺に美術の花を賞でし日記一篇、その中には湖畔の佛誕會に異國の友を會して、佛教を語り、ローマの寺院に聖教會の生命活動を觀察し南歐に北歐にあらゆる種類の交友に接したる跡を傳ふ、天然美術の記錄、宗教、文明の評論として、江湖の一讀を薦む

全一冊洋裝四六判上製圖入
紙數五百五十頁三色版口繪數葉入
正價金壹圓卅錢　小包料金拾貳錢

陸軍步兵少佐 日野强君著

伊犂紀行

伊犂は在昔、西域の地班超の名によりて邦人に記憶せらるゝも、其地僻遠、人の之を探るを許さゞるを以て、今尚世界に於ける一闇黒面たるなり、陸軍步兵少佐日野强氏、曩に其筋の命を帶びて此の地に入り、道を歷る一萬六千哩、日を費す四百七十四、廣く探り、深く窮め、人情、風俗、通商、物產、地理、歷史、行政、司法、教育、宗教よりして、交通、經濟、兵制に至るまで、凡そ目に觸れ耳に入るもの、秘を闡き微を穿ち世界に向て其眞相を曝露せしものを此伊犂紀行と爲す、記事奇に富み、行文妙を極む、出版界稀に見るの珍籍たりと云ふも誣言にあらざるなり

全一冊　洋裝菊判總布　特製上本紙附入
正價金貳圓六拾錢　小包料金拾六錢

▲地圖 旅行線路圖、喀喇崑崙山道圖、新疆省全圖　▲口繪 伊犂將軍、新疆巡撫、其他眞蹟　▲插圖 伊犂地方人情風俗其他寫眞插入

發兌元　東京本町　博文館

驚天動地の大旅行記

押川春浪君編述　渡邊審也君畫

中村春吉 自轉車 世界無錢旅行

全壹冊

洋裝四六判頗美本紙數三百餘頁
正價金參拾八錢　郵稅金六錢

長髮鐵身の怪漢中村春吉君、數年以前自轉車に跨り、或は毛脛を飛ばし無錢にて五大洲を橫行し來り、春浪猛士の快筆を煩はして此快書が現はれた、自轉車に日章旗を翻し、リン〳〵とベルの音勇ましく、印度の怪獸、歐米のヘロ〳〵男女を尻眼にかけて車輪を飛ばすは痛快の絕頂。此男腕力天下無敵と稱し、加ふるに多藝多能、腕押しは御座れ、演說は御座れ、舞踏は御座れ、猛獸を手取りにした迹で浪花節などを唸る、讀去り讀來れば、險山あり、溪流あり妖女あり俠士あり、忽ちにして蠻境の悽月、忽ちにして大汽船甲板の競技、千變萬化の蠻勇旅行は何人も痛快を叫ばずに居られまい

押川春浪君
中村直吉君　共編

五大洲探檢記　第一編

亞細亞大陸橫行

洋裝中判美本紙數三百十二頁
十九萬哩旅程地圖及寫眞版挿入
正價金四拾五錢　郵稅金六錢

押川春浪君
中村直吉君　共編

五大洲探檢記　第二編

南洋印度奇觀

洋裝中判美本紙數二百九十八頁
各地風景風俗寫眞版八葉挿入
正價金四拾五錢　郵稅金六錢

發兌元　東京本町　博文館

文學博士 萩野由之君
落合直文君
池邊義象君 共編

日本文學全書

全部二十四冊
洋裝四六判並裝美本
紙數一冊四百二十頁以上

【書目】

定價
一册金貳拾五錢
五册金壹圓貳拾五錢
十册金貳圓貳拾錢
廿四册金五圓拾錢

郵税一册參錢
遞信省認可

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 振替貯金口座東京二〇四〇番 博文館

(8,000